広域営農団地農道建設工事に伴う発掘調査
高森町埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡

1994．3

長野県下伊那地方事務所　耕地課
長野県下伊那郡高森町教育委員会

広域営農団地農道建設工事に伴う発掘調査
高森町埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡

1994．3

長野県下伊那地方事務所　耕地課
長野県下伊那郡高森町教育委員会

序　　文

経済の発展と社会構造の変化により自然環境の破壊、埋蔵文化財や歴史的構造物の破壊、民俗芸能の消滅などの問題が全国的に深刻化しているなか、わが高森町においても、町づくり計画により生活環境の整備、道路網の整備事業等がめじろおしで、ここ数年来町の姿が急激に変化してきております。中でも本年度をもって完了した上段横断道路整備事業はこれを象徴するものではないかとおもわれます。この事業では多くの埋蔵文化財包蔵地が路線にかかり、貴重な成果を残し記録保存の発掘調査がなされました。

時同じくして、県営事業である広域営農団地農道整備事業、通称広域農道の整備が山吹地区を皮切に出原・吉田地区と整備が進み、また先線についても上市田・下市田・牛牧地区を通り、やがて飯田市方面へつながる計画です。計画路線図をみますとわが町の中段地区をほぼ一直線に横断することがわかり、埋蔵文化財包蔵地地図に照らしあわせますと、高森町の重要遺跡を貫くことがわかります。

広域農道は平成５・６年度において吉田地区内４遺跡が調査対象にあげられ、それぞれ事前の試掘調査を行い、ほぼ全線にわたり遺構・遺物が確認されそれぞれ本調査がおこなわれました。膨大な調査結果の詳細につきましては本文を参照願いたいとおもいますが、特に縄文時代早期の遺構群・縄文時代晩期の土器棺墓群が２遺跡において発見され、県下においても第１級の遺跡として研究者に注目されています。また中世の遺構群の発見は吉田城山城を中心とした、中世の吉田地域像をうかがわせるものとして注目されています。

文化財は広く私達共有の重要な財産であります。先人が築いた文化遺産を損なわれることなく時代を越えて保護し学習することは、その時代の文化の創造の源になり現代に生きる私達の責務です。今回の調査で提示された多くの歴史的情報をどう生かしていくかは今後我々に与えられた大きな課題といえます。また、この調査報告書が学習の資料として多くの方に利用されることを願います。

最後に今回の発掘調査・報告書刊行にあたりまして、今村団長以下、調査団の皆様には骨身を削るご努力をいただきました。また長期間にわたりご協力いただきました作業員の皆様、調査遂行にご配慮いただきました地権者・近隣の方々、地方事務所土地改良課、高森町建設課の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成６年３月

高森町教育委員会

教育長　原　次郎

例　　言

1．本報告書は、平成４・５年高森町教育委員会が実施した、高森町吉田地籍内広域営農団地農道建設工事に先立つ、高森町吉田地籍深山田・広庭・ヨシガタ大宿遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．この４遺跡の発掘調査は、下伊那地方事務所長と高森町長との委託契約に基づき、高森町教育委員会が委嘱した高森町発掘調査団が行っている。

3．それぞれの遺跡は、調査対象面積が広いので、前年度の試掘調査に基づき、重機による排土作業の後検出作業を進め、全体遺構測量は、ＫＫジャスティックに委託した空中測量を採用している。

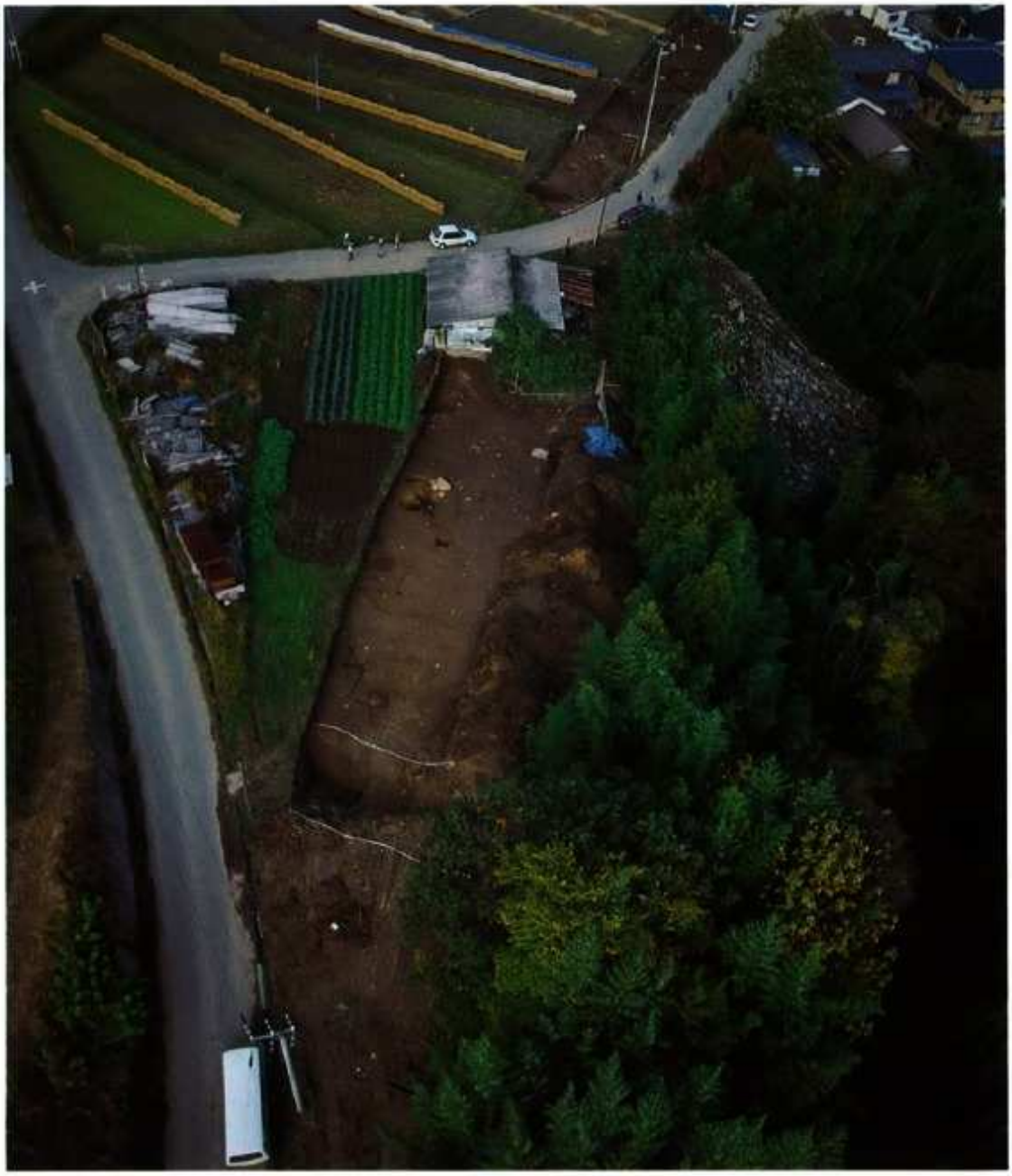
4．用地内の調査区設定に当たっては、原則的に北から南へＡ・Ｂ・Ｃの調査区を設け、50m単位で地区割をしている。遺跡によっては地形・土地利用状況により、短い距離により地区割をしたところもある。

5．本報告書の作成に当たっては、空中測量のほか、平板測量器による遺構計測は、主として今村・林・小林・原沢が担当し、土層記録は調査員全員が分担している。写真撮影は現場は今村が、遺物写真は松島が分担し、一部唐木孝治氏に委託している。

遺物整理・遺物実測・土器復元・拓本撮りは、土器実測は林が、石器実測は今村が、土器復元は主として細江が、拓本は縄文時代早期は今村・その他は福田・三石が分担している。

遺構整図・報告書編集・原稿執筆は今村・松島が担当している。

6．遺物・測量原図類・調査記録カード・写真等関係資料は、高森町教育委員会の管理する調査団本部に保管されている。



深山田遺跡全景

広庭遺跡全景

大宿遺跡全景

深山田遺跡合わせ口甕棺

2　　3の2　　3の1　　1の1

深山田遺跡土器棺の土器

12の1　　1の2　　2　　12の1

大宿遺跡土器棺の土器

深山田遺跡土器棺墓１の土器

深山田遺跡3号住居址出土土器

目　次

序　　文　　高森町教育委員会教育長

例　　言

口　　絵　　1．深山田遺跡全景
2．広庭遺跡全景
3．大宿遺跡全景
4．深山田遺跡合わせ口甕棺
5．深山田遺跡土器棺4個
6．大宿遺跡土器棺5個
7．深山田遺跡雷文施文の甕形土器
8．深山田遺跡3号住居址出土土器

Ⅰ．調査の経過 …… 1
1．広域営農団地農道の計画 …… 1
2．広域営農団地農道高森地籍の保護協議 …… 1
3．試掘調査と深山田遺跡発掘調査の経過 …… 2
（1）深山田遺跡発掘調査の経過 …… 2
（2）広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の試掘調査 …… 3
（3）深山田遺跡の補充調査 …… 4
4．広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の検出調査 …… 4
5．調査団組織 …… 5
Ⅱ．吉田上段地籍の環境 …… 7
1．高森町の自然環境 …… 7
（1）はじめに …… 7
（2）角田原扇状地 …… 8
（3）牛牧上段の変形扇状地 …… 11
（4）牛牧下段の扇状地 …… 11
（5）カナイ原扇状地 …… 12
（6）大島山・吉田地域 …… 12
（7）その他の侵食面 …… 13
2．吉田地籍周辺の歴史環境 …… 14
（1）高森町の遺跡 …… 14
（2）広域営農団地農道予定地の埋蔵文化財包蔵地 …… 23

（3）吉田上段地籍周辺の歴史環境 …… 26
Ⅲ．調査の結果 …… 31
1．深山田遺跡 …… 31
（1）縄文時代早期の遺構・遺物 …… 31
① 竪穴址（土壙１４） …… 32
② 早期土器片出土の土壙 …… 32
③ 土器片集中出土地 …… 32
（2）縄文時代前期の遺構・遺物 …… 32
（3）縄文時代中期の住居址と土壙 …… 33
① １号住居址 …… 33
② 縄文時代中期の土壙 …… 33
（4）縄文時代晩期の土器棺墓群 …… 33
① 土器棺墓１ …… 34
② 土器棺墓２ …… 34
③ 土器棺墓３ …… 34
④ 土器棺墓４ …… 35
⑤ 土器棺墓５ …… 35
⑥ その他の土壙群 …… 35
（5）弥生時代後期の遺構 …… 36
① ４号住居址 …… 36
② 土壙４ …… 36
（6）平安時代の遺構 …… 36
① ３号住居址 …… 37
② 建物址 …… 39
（7）その他の遺構・遺物 …… 39
① Ｂ地区の遺物 …… 39
② Ｅ地区の集石遺構 …… 39
③ Ｅ地区の溝址 …… 39
（8）深山田遺跡のまとめ …… 40
① 新登録の遺跡 …… 40
② 縄文時代早期の遺構・遺物の発見 …… 40
③ 縄文時代晩期の土器棺墓群の発見 …… 41
④ 豊富な灰釉陶器を伴出した住居址 …… 41

挿図目次「深山田遺跡」

第1図　大島川合成扇状地 …… 9.10
第2図　高森町埋文包蔵地地図 …… 15.16
第3図　高森町広域農道内遺跡位置図 …… 24
第4図　吉田地区広域農道内遺跡と調査区 …… 25
第5図　深山田遺跡調査区位置図 …… 43
第6図　深山田遺跡遺構全体図（1）C地区 …… 44
第7図　深山田遺跡遺構全体図（2）C・D・E地区 …… 45
第8図　深山田遺跡1号住居址、C・D地区の土壙 …… 46
第9図　深山田遺跡C・D地区土壙断面図 …… 47
第10図　深山田遺跡C地区土壙3・9・14、E地区出土土器 …… 48
第11図　深山田遺跡土壙、各・グリット出土石器・土器 …… 49
第12図　深山田遺跡C地区3号住居址周辺の土壙 …… 50
第13図　深山田遺跡1・4号住居址、C地区土壙出土石器 …… 51
第14図　深山田遺跡土器棺墓、B地区土壙出土石器 …… 52
第15図　深山田遺跡E地区土壙4、溝址1、グリット出土石器 …… 53
第16図　深山田遺跡土器棺墓群全体図 …… 54
第17図　深山田遺跡土器棺墓1・3・2・4土器出土状況 …… 55
第18図　深山田遺跡土器棺墓1・2・3・4出土土器 …… 59.60
第19図　深山田遺跡土器棺墓1の土器 …… 56
第20図　深山田遺跡土器棺墓2・4の土器 …… 57
第21図　深山田遺跡土器棺墓3の土器 …… 58
第22図　深山田遺跡土器棺墓等出土土器 …… 61
第23図　深山田遺跡E地区4号住居址、周溝、土壙 …… 62
第24図　深山田遺跡3号住居址（上層炭、下層全体） …… 63
第25図　深山田遺跡3号住居址出土土器（1） …… 64
第26図　深山田遺跡3号住居址・建物址出土土器（2） …… 65
第27図　深山田遺跡C地区建物址群 …… 66
第28図　深山田遺跡E地区溝址 …… 67

Ⅲ．調査の結果 …… 69
2．広庭遺跡 …… 69
（1）縄文時代中期・弥生時代の遺構 …… 70

① 1号住居址 …… 70
② 2号住居址 …… 70
③ B地区の土壙群 …… 71
・土壙 1 …… 71
・土壙26 …… 71
・土壙31 …… 72
・土壙 7 …… 72
・土壙 8 …… 72
④ C・D地区の土壙群 …… 75
・C地区土壙12 …… 75
・C地区土壙15 …… 75
・D地区土壙 6 …… 75
・D地区土壙20 …… 76
(2) 平安時代・中世の遺構 …… 76
① 工房址1 …… 76
② 工房址2 …… 77
③ 工房址3 …… 77
④ B地区の竪穴址 …… 77
・竪穴址4 …… 78
・竪穴址1・2 …… 78
⑤ C地区の竪穴址 …… 78
・竪穴址1 …… 78
・竪穴址2 …… 78
・竪穴址3 …… 79
・竪穴址4 …… 79
・竪穴址5 …… 79
・竪穴址6 …… 79
⑥ B地区の建物址 …… 80
・建物址1 …… 80
・建物址2 …… 80
・建物址3 …… 80
・建物址4 …… 80
⑦ C地区の掘立柱建物址 …… 81
・建物址5 …… 81
・建物址6 …… 81

・建物址７ …… 81
・建物址８ …… 81
⑧ Ｂ地区の水路址 …… 82
⑨ 近世または年代不詳の遺構 …… 82
（３）広庭遺跡のまとめ …… 82
① 縄文時代中期の土壙群 …… 82
② 中世遺構群の検出 …… 83

挿図目次「広庭遺跡」

第29図 広庭遺跡調査区位置図 …… 84
第30図 広庭遺跡Ｂ地区遺構全体図 …… 85.86
第31図 広庭遺跡Ｃ・Ｄ地区遺構全体図 …… 87.88
第32図 広庭遺跡Ｂ地区１号住居址、溝址４・５ …… 89
第33図 広庭遺跡Ｂ地区１号住居址出土土器 …… 90
第34図 広庭遺跡Ｂ地区土壙（１） …… 91
第35図 広庭遺跡Ｂ地区土壙（２） …… 92
第36図 広庭遺跡Ｂ地区土壙１・30・31出土土器 …… 93
第37図 広庭遺跡Ｂ地区１号住居址、土壙１・７・８・９出土土器 …… 94
第38図 広庭遺跡Ｂ地区土壙11～23出土土器 …… 95
第39図 広庭遺跡Ａ・Ｂ地区出土土器 …… 96
第40図 広庭遺跡Ａ・Ｂ地区１号住居址、土壙１～10出土石器 …… 97
第41図 広庭遺跡Ｂ地区土壙11～32出土石器 …… 98
第42図 広庭遺跡Ｂ地区グリット、工房址等出土石器 …… 99
第43図 広庭遺跡Ｃ・Ｄ地区土壙 …… 100
第44図 広庭遺跡Ｂ地区、Ｃ・Ｄ地区土壙出土土器 …… 101
第45図 広庭遺跡Ｄ地区土壙、竪穴址出土土器 …… 102
第46図 広庭遺跡Ｃ・Ｄ地区出土石器 …… 103
第47図 広庭遺跡Ｂ・Ｃ・Ｄ地区土壙、グリット出土石器と円板 …… 104
第48図 広庭遺跡Ｂ地区工房址１ …… 105
第49図 広庭遺跡Ｂ地区工房址周辺と工房址２・竪穴址４ …… 106
第50図 広庭遺跡Ｂ地区工房址１・２、竪穴址１・２、溝址２出土土器 …… 107
第51図 広庭遺跡Ｂ地区建物址１・２ …… 108
第52図 広庭遺跡Ｂ地区建物址３・４ …… 109
第53図 広庭遺跡Ｃ地区建物址５・６ …… 110

第54図　広庭遺跡Ｃ地区建物址７・８ …… 111
第55図　広庭遺跡Ｂ地区溝址１・２・３、竪穴址１～４ …… 112
第56図　広庭遺跡Ｂ地区溝址２（水路址） …… 113
第57図　広庭遺跡Ｂ地区溝址３・４、Ａ～Ｃ地区グリット出土土器 …… 114
第58図　広庭遺跡Ｃ地区竪穴址１・２・３ …… 115
第59図　広庭遺跡Ｃ地区竪穴址４・５・６ …… 116

Ⅲ．調査の結果 …… 117
３．ヨシガタ遺跡 …… 117
（１）弥生時代後期の周溝状遺構 …… 118
（２）中世・中世以降の礎石配列建物址 …… 118
（３）石垣遺構と溝址 …… 118
（４）溝址と格子状遺構 …… 119
（５）ヨシガタ遺跡のまとめ …… 119

挿図目次「ヨシガタ遺跡」

第60図　ヨシガタ遺跡調査区位置図 …… 120
第61図　ヨシガタ遺跡礎石配列建物址１～５ …… 121
第62図　ヨシガタ遺跡Ｂ地区出土遺物 …… 122
第63図　ヨシガタ遺跡Ｅ地区溝址、格子状遺構 …… 123

Ⅲ．調査の結果 …… 125
４．大宿遺跡 …… 125
（１）縄文時代早期・前期の遺構 …… 126
①　Ｂ地区５号住居址 …… 126
②　Ｂ地区土壙１９ …… 126
③　Ｂ地区土壙１２・３１・４８ …… 129
④　Ｃ地区の縄文時代早期の土壙 …… 129
⑤　Ｃ地区土壙２５ …… 129
⑥　Ｃ地区土壙４９（竪穴址） …… 129
⑦　Ｃ地区土壙６６・６７ …… 130
⑧　Ｃ地区土壙７８（竪穴址） …… 130
⑨　Ｃ地区土壙８２（竪穴址） …… 131
⑩　縄文時代早期・前期の土器片が５点以上出土した土壙 …… 132

・土壙　4 …… 132
・土壙２８ …… 132
・土壙３２ …… 132
・土壙３４ …… 132
・土壙４２ …… 132
・土壙４７ …… 133
⑪ Ｃ地区前期の遺物の多い土壙 …… 133
・土壙　１９ …… 133
・土壙　８５ …… 133
・土壙１０５ …… 133
⑫ 遺構外出土の縄文時代早期の土器 …… 133
⑬ 大宿遺跡の押型文土器の特徴 …… 134
（２）縄文時代中期の遺構 …… 134
（３）縄文時代晩期の遺構 …… 135
① 土器棺墓１の１ …… 135
② 土器棺墓１の２ …… 135
③ 土器棺墓１の３ …… 136
④ 土器棺墓１の４ …… 136
⑤ 土器棺墓　２ …… 136
⑥ 土器棺墓１１ …… 136
⑦ 土器棺墓１２ …… 137
⑧ 土器棺墓１３ …… 139
⑨ 竪穴址３ …… 139
⑩ 土器片集中地 …… 139
（４）弥生時代の遺構 …… 140
① ２号住居址 …… 140
② ４号住居址 …… 140
③ 弥生時代後期の土器片を伴う土壙 …… 141
（５）平安時代・中世の遺構 …… 141
① １号住居址 …… 141
② ３号住居址 …… 142
③ 竪穴址１ …… 143
④ 建物址１ …… 143
⑤ 建物址２ …… 143
⑥ 建物址３ …… 143

⑦ 建物址4 …… 144
（6）A地区の遺構・遺物 …… 144
（7）D地区の遺構・遺物 …… 144
（8）大宿遺跡のまとめ …… 144
① 縄文時代早期の遺構群 …… 145
② 縄文時代晩期土器棺墓群 …… 145
③ 平安時代または中世の住居址 …… 146

挿図目次「大宿遺跡」

第64図 大宿遺跡調査区とB・C地区主要遺構配置図 …… 148
第65図 大宿遺跡B地区遺構全体図 …… 149.150
第66図 大宿遺跡C地区主要土器出土分布図 …… 151.152
第67図 大宿遺跡C地区遺構全体図 …… 153.154
第68図 大宿遺跡B地区5号住居址と周辺土壙出土土器 …… 155
第69図 大宿遺跡B地区土壙1～56出土土器と石器 …… 156
第70図 大宿遺跡B地区5号住居址・土壙等出土石器 …… 157
第71図 大宿遺跡縄文時代早期の代表的な土器 …… 158
第72図 大宿遺跡C地区土壙49と周辺の土壙 …… 159
第73図 大宿遺跡C地区土壙25・49等出土土器 …… 160
第74図 大宿遺跡C地区土壙25・49出土石器 …… 161
第75図 大宿遺跡C地区土壙66・67出土石器 …… 162
第76図 大宿遺跡C地区土壙25・32・47・49・66・67出土石器 …… 163
第77図 大宿遺跡C地区土壙82と周辺の土壙 …… 164
第78図 大宿遺跡C地区土壙78・82出土土器 …… 165
第79図 大宿遺跡C地区土壙74・78出土石器 …… 166
第80図 大宿遺跡C地区土壙82ほか出土石器 …… 167
第81図 大宿遺跡C地区土壙78・82等出土石器 …… 168
第82図 大宿遺跡C地区土壙2～105出土土器 …… 169
第83図 大宿遺跡C地区グリット出土土器 …… 170
第84図 大宿遺跡C地区土壙15～105出土石器 …… 171
第85図 高森町主要遺跡の縄文時代早期土器 …… 172
第86図 大宿遺跡出土丸磨石（1） …… 173
第87図 大宿遺跡出土丸磨石（2） …… 174
第88図 大宿遺跡C地区土壙69・90、3～89出土土器 …… 175

第89図　大宿遺跡Ｃ地区土壙１～105出土土器 …… 176
第90図　大宿遺跡Ｃ地区土壙出土石器（１） …… 177
第91図　大宿遺跡Ｃ地区土壙出土石器（２）、グリット出土石器（１） …… 178
第92図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土石器（２） …… 179
第93図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土石器（３） …… 180
第94図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土石器（４） …… 181
第95図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土土器 …… 182
第96図　大宿遺跡土器棺墓１～９ …… 183
第97図　大宿遺跡土器棺墓１～12出土主要土器 …… 185.186
第98図　大宿遺跡土器棺墓１の２・２出土土器 …… 184
第99図　大宿遺跡土器棺墓１の１・１の３出土土器 …… 187
第100図　大宿遺跡土器棺墓１の３・12出土土器 …… 188
第101図　大宿遺跡土器棺墓１の１・１の２出土土器 …… 189
第102図　大宿遺跡土器棺墓１の４出土土器 …… 190
第103図　大宿遺跡土器棺墓１の１～１の４出土土器 …… 191
第104図　大宿遺跡土器棺墓１の４・12、竪穴３出土土器 …… 192
第105図　大宿遺跡土器棺墓11とその周辺、土器棺墓12・２・２の１の土器出土状況 … 193
第106図　大宿遺跡土器棺墓12・13ほか出土土器 …… 194
第107図　大宿遺跡土器棺墓11・３～７出土土器 …… 195
第108図　大宿遺跡土器棺墓11周辺出土土器 …… 196
第109図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土土器（１） …… 197
第110図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土土器（２） …… 198
第111図　大宿遺跡２・４号住居址 …… 199
第112図　大宿遺跡２・４号住居址ほか出土土器 …… 200
第113図　大宿遺跡１号住居址と出土鉄器 …… 201
第114図　大宿遺跡３号住居址、竪穴址１と出土遺物 …… 202
第115図　大宿遺跡竪穴址１、建物址１～４ …… 203
第116図　大宿遺跡Ａ地区の土壙と周溝 …… 204

写真図版目次

１．発掘調査前の深山田遺跡 …… 205
２．深山田遺跡縄文時代早期の土壙 …… 206
３．深山田遺跡Ｃ・Ｄ地区の土壙 …… 207
４．深山田遺跡Ｃ地区の土壙群 …… 208

5．深山田遺跡土器棺墓群（1） …… 209
6．深山田遺跡土器棺墓群（2） …… 210
7．深山田遺跡土器棺1・3出土状況 …… 211
8．深山田遺跡合わせ口甕棺の土器 …… 212
9．深山田遺跡合わせ甕棺の土器 …… 213
10．深山田遺跡E地区4号住居址・周溝状遺構 …… 214
11．深山田遺跡3号住居址 …… 215
12．深山田遺跡3号住居址出土土器（1） …… 216
13．深山田遺跡3号住居址出土土器（2） …… 217
14．深山田遺跡建物址 …… 218
15．深山田遺跡調査風景 …… 219
16．発掘調査前の広庭遺跡 …… 221
17．広庭遺跡B地区全景 …… 222
18．広庭遺跡C・D地区全景 …… 223
19．広庭遺跡1号住居址と溝址4・5 …… 224
20．広庭遺跡B・D地区土壙群 …… 225
21．広庭遺跡B地区土壙1 …… 226
22．広庭遺跡B地区土壙7 …… 227
23．広庭遺跡B地区土壙31 …… 228
24．広庭遺跡B地区土壙出土の土器 …… 229
25．広庭遺跡C地区土壙15 …… 230
26．広庭遺跡B地区工房址1 …… 231
27．広庭遺跡B地区工房址2 …… 232
28．広庭遺跡C地区建物址5・6 …… 233
29．広庭遺跡C地区竪穴址 …… 234
30．広庭遺跡B地区水路址（溝址2） …… 235
31．広庭遺跡現地見学会 …… 236
32．ヨシガタ遺跡礎石配列建物址 …… 237
33．浸水したヨシガタ遺跡 …… 238
34．発掘調査前の大宿遺跡 …… 239
35．大宿遺跡B地区遺構群 …… 240
36．大宿遺跡C地区遺構群 …… 241
37．大宿遺跡5号住居址 …… 242
38．大宿遺跡B地区5号住居址と早期土壙群 …… 243
39．大宿遺跡B地区土壙 …… 244

40. 大宿遺跡C地区早期の土壙 …… 245
41. 大宿遺跡C地区土壙49（竪穴址） …… 246
42. 大宿遺跡C地区土壙78（竪穴址） …… 247
43. 大宿遺跡C地区土壙66・82 …… 248
44. 大宿遺跡C地区土器棺墓群（1） …… 249
45. 大宿遺跡C地区土器棺墓群（2） …… 250
46. 大宿遺跡C地区土器棺墓2 …… 251
47. 大宿遺跡C地区土器棺墓12 …… 252
48. 大宿遺跡出土氷式甕形土器 …… 253
49. 大宿遺跡出土条痕文甕形土器 …… 254
50. 大宿遺跡2・4号住居址 …… 255
51. 大宿遺跡1号住居址 …… 256
52. 大宿遺跡1号住居址の炭化材 …… 257
53. 大宿遺跡3号住居址 …… 258
54. 大宿遺跡3号住居址のカマドと平鎌 …… 259
55. 大宿遺跡B地区竪穴址・建物址 …… 260
56. 大宿遺跡調査風景 …… 261

表目次

表1 高森町の遺跡 ― 高森町埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 17.18.19.20.21
表2 吉田地区の調査 ― 高森町大島山・吉田（上段）地区遺跡調査例 …… 27
表3 深山田3号住居址 ― 深山田遺跡3号住居址出土土器一覧 …… 38
表4 広庭B地区 ― 広庭遺跡B地区土壙一覧 …… 73.74
表5 大宿遺跡 ― 大宿遺跡（縄文早期・前期）土壙一覧表 …… 127.128
表6 深山田・大宿遺跡 ― 深山田・大宿遺跡土器棺一覧 …… 138

Ⅰ. 調 査 の 経 過

1．広域営農団地農道の計画

飯田・下伊那地方の北部竜東・竜西地域を循環する広域農道の建設計画は、昭和45年ころから立てられていた。この通過予定地には数多くの埋蔵文化財包蔵地の所在が予想されるので、南信土地改良事務所と県教育委員会によって保護協議が進められたのは昭和48年頃であった。この事業は竜東南部喬木村・飯田市下久堅地区を最初にして順次竜東地域を北上してきたが、あたかも竜東地域の畑潅水整備計画等と重なって、飯田市下久堅・喬木村・豊丘村では多くの埋蔵文化財包蔵地があり、各所で緊急発掘調査が行われている。計画当初から20年ほど経過した今現在、竜東地域でも開通していないところがある。

竜西地域は、松川町古町地籍の道路開通は早かったが、松川町中段地域の建設工事は昭和60年以降と思われる。高森町では路線計画は以前からあったが、設計協議・用地買収が進んだのは平成元年のことで、山吹地籍中島・山部位置遺跡の発掘調査が平成２年、共栄遺跡が平成３年に行われている。山吹地籍は建設省委託の町単事業で計画されているためにこの事業の進捗状況は遅れぎみであるが、平成５年頃から町単事業で進められている。

2．広域営農団地農道高森地籍の保護協議

高森町内広域営農団地農道整備事業の開始も迫った平成元年９月、県教育委員会文化課指導主事を迎えて、下伊那地方事務所・高森町建設課・高森町教育委員会の合同保護協議が行われている。高森町内では農道通過予定地には15～16遺跡の該当が予想され、年次ごとに保護協議を進めることが決められ、とくに山吹地籍中島・山部位置遺跡、出原共栄遺跡、吉田地籍広庭・ヨシガタ・大宿遺跡について発掘調査面積は概略5.900㎡が提示された。

平成２年６月から高森町内最初の広域農道予定地内、中島・山部位置遺跡の発掘調査が実施され、３年５月からは出原共栄遺跡・出原新墓地遺跡の発掘調査が行われ、それぞれの発掘調査報告書が刊行されている。

吉田地籍内の埋蔵文化財包蔵地は広庭・ヨシガタ・大宿遺跡が予想されるが、それぞれの遺跡範囲が広いこと、以前に土地改良事業が実施され包含層の破壊がどの程度進んでいるか不詳のために、平成３年10月、長野県教育委員会文化課市沢指導主事を迎えて、地方事務所耕地課・高森町建設課・高森町教育委員会の保護協議により、広庭遺跡Ａ地区の発掘調査、広庭遺跡Ｂ～Ｄ地区・ヨシガタ・大宿遺跡の試掘調査が決定した。深山田地籍については周知の包地に登録されていないが、地形的にみて包蔵地の可能性も高いことから、他遺跡に含めて試掘調

査を実施することにした。

発掘調査・試掘調査の結果は本文「調査の結果」にあるように、遺物包含範囲の広いことが判明したので、平成4年12月、県教育委員会文化課・下伊那地方事務所耕地課・高森町建設課・高森町教育委員会の保護協議が行われ、関連土地造成地域も含めて広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の内8.800㎡ほどの発掘調査が決められた。

3．試掘調査と深山田遺跡発掘調査の経過

(1) 深山田遺跡発掘調査の経過

平成4年9月14日、大島山上の平遺跡から深山田遺跡へ資材・テントを運搬して調査地C地区（ＳＴno117周辺）へ基地を設営する。試掘予定地はＳＴno115～ＳＴno124に及ぶ180mほどの広い範囲であるから、ＳＴno115付近の低地をＢ地区とし、それから北東をＡ地区にした。ＳＴno117周辺の既設道路カーブ地点から50m単位でＣ・Ｄ地区とし、南側カーブ（ＳＴno120周辺）には未撤去の小屋が残り、耕作中の水田があって調査不能のために、小屋の南側をＥ地区にした。

Ａ～Ｄ地区は重機による排土後の調査にして、Ｅ地区の草刈り・グリット掘りをする。5個のグリットの中央で縄文時代早期押型文土器片（楕円文）が出土し、弥生時代後期・平安時代の土器片が出土したので、重機による排土を先行させることにした。

9月18日から重機を導入して、Ｃ・Ｄ地区の排土を進める。Ｄ地区では縄文時代早期・前期の遺物が発見され、Ｃ地区北側のグリット掘りにより縄文時代晩期の甕形土器が発見されたのでテントを北側低地に移動して、Ｃ・Ｄ地区は重機により全面排土することにした。9月24日からＢ地区の深い包含層を確かめ、Ｃ・Ｄ地区の調査に入る。Ｃ地区ではＡ～Ｅあたりに縄文時代晩期の土壙群（土器棺墓群）、Ｈ～Ｋあたりに灰釉陶器・須恵器片の集中地、Ｃ地区からＤ地区にかけて縄文時代早期・前期の土器片集中がみられるので、縄文晩期の出土地を土器棺墓群、他の集中地を1・2・3号住居址として検出作業に入る。

9月30日から作業により、土壙群では土器棺墓と思われる土器が3か所確認され、細かい検出作業に入り、灰釉陶器片の出土の多い3号住居址は、既設道路下の部分を除いて掘り下げを始めた。11月1日からＥ地区を重機により排土して整地作業をしたところ、Ａ列あたりに弥生時代の4号住居址、弥生時代遺物集中地、縄文時代早期土器出土地、大形溝址の存在が確認されたので、10月6日からＣ地区の土器棺墓群・2～3号住居址、Ｅ地区の4号住居址・方形周溝と土壙・溝址・早期土器の出土位置等の作業を並行して進める。

Ｃ地区の土器棺墓群は、土器棺の所在は5か所になり、土器の出土は少ないが黒色土の多い土壙・ピットが周囲を取り巻くので、断面記録を詳細に撮りながら検出作業を進める。土器棺1は氷式甕形土器に半割の条痕文土器を合わせたタイプ、土器棺2は条痕文の土器を逆位に埋

めたもの、土器棺３は氷式土器と条痕文土器二個を合わせ口にしたもので、条痕文土器がかぶされている。そのほかに氷式土器を埋めたもの・形態不詳ながら土器片が多く出土するもの等が隣接した形で埋められ、黒色土の土壙も20基以上が検出されている。飯田・下伊那地方では初めての検出であり、晩期の土器棺墓群の検出は県下でも珍しいことから、木曾郡から神村透、松本から樋口昇一らが訪れた。11月初旬にはほぼ検出が終わり、現地説明会には飯田市教育委員会の一行を含めて約80人の見学者が訪れている。

３号住居址は９月30日頃から検出作業に入った。灰釉陶器の出土が多く、火災の遭っているために炭化材が多く、細かく記録しながらの検出であったので手間取り、10月22に検出作業を終了している。Ｅ地区の４号住居址・方形周溝状土壙・南側の大形溝址の検出は10月２日から28日頃までかかっている。Ｃ地区とＤ地区の一部には約40基ほどの土壙が確認され、10月８日から11月５日頃まで検出作業が続いている。とくに、Ｃ地区Ｕあたりからｄ地区にかけては縄文時代早期・前期の遺物を包含する土壙が検出され、土壙14では茅山系の土器一個体が出土し、その土壙を切る縄文時代中期の１号住居址が確認され、既設道路下を除いてその一部を検出している。

11月13日には土器棺墓の土器取り上げ作業をすませ、既設道路の下は工事の折に再調査することにして調査を終了している。

(2) 広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の試掘調査

平成４年11月16日、テントをヨシガタＥ地区の凹地へ移し、ヨシガタＥ地区のグリット掘りにかかる。溝址があり、中世・近世陶器が出土する。城山の台地北側の一帯をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄと区分してそれぞれグリット掘りをする。Ａでは旧流路があり、一部弥生式土器の出土する黒色土の層が検出された。Ｃ地区では弥生式土器を伴う集石・礫石状の配石を持つ大形建物址群が検出された。Ｄ地区は以前の土地改良事業により埋め土が深く、１m50cmほど下層から石垣遺構が確認され、中世陶器片が発見された。城山の台地に近いあたりは累石が多く包含層ははっきりしないが、城山に向かう傾斜面があり縄文時代の遺物・中世の遺物が確認されている。

12月２日から広庭遺跡Ａ地籍の整地で溝址・土壙群が確認され、Ｂ地区のグリット掘りでは各グリット共に縄文時代の遺物、平安時代・中世の陶器片も多く発見され、焼土・竪穴・土壙・ピット群が確認され、遺構の重複が予想された。

12月８日から大宿遺跡のＣ地区のグリット掘りで、縄文時代早期押型文土器が発見され、南側の低地（Ｃ・Ｄ地区）では中世陶器、弥生時代・縄文時代の遺物が発見され、土壙か住居址の所在が予想された。大島川右岸の台地は用地交渉が進まないために調査未了に終わっている。

12月17日県教委文化課市沢指導主事を迎えて試掘調査の結果を検討し、広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の本格的な発掘調査が決定した。

〔3〕 深山田遺跡の補充調査

東側の既設道路は生活道路のために調査が出来なかったが、工事の進行にともない迂回道路が作られたので、平成５年３月10日から３号住居址の東側と土器棺墓群の続きの補充調査が行われている。３号住居址のカマドが確認され、縄文時代晩期の土器片の出土があり、20基ほどの黒色土の土壙が検出されている。

４．広庭・ヨシガタ・大宿遺跡の検出調査

平成５年４月５日に広庭地籍の南側にテントを設営して、広庭遺跡Ｂ地区から調査を開始した。Ｂ地区は土地造成地を含んでいるので用地は広く、中世工房址・竪穴址・溝址・ピット群が多く、一部ではあったが弥生時代・縄文時代中期の住居址もあり、縄文時代中期の土壙群があったので、６月10日頃まで検出作業が続いた。南側上段のＣ・Ｄ地区は５月14日頃並行して調査に入る。ここでも中世の竪穴址・掘立柱建物址が検出され、縄文時代中期の土壙群があったので、６月半ばまで検出作業が続いている。ヨシガタＢ地区の低地の礫石群の検出作業は、６月16日から始め６月28日にほぼ終了した時、降雨が続き現場は貯水池のようになり、空中測量未了のまま作業を中止している。(写図33)

ヨシガタ地籍も水浸しのために後半に残し、７月６日テントをヨシガタＥ地区へ移動して、大宿遺跡の調査にかかる。大宿遺跡も東からＡ～Ｅ地区に区分して、台地上のＣ地区から重機による排土作業を進める。西側で土器棺墓の一郭が発見され、縄文時代晩期の土器集中地・縄文時代早期の土器出土が確認され、Ｂ・Ｃ地区は全面排土作業をした。Ｃ地区には土器棺墓のほかに弥生時代・平安時代の住居址、縄文時代早期の竪穴址・土壙、縄文時代中期の土壙等の重複がみられるので、７月末までに黒色土の土壙１～40、ピット群の検出をすませ、並行してＢ地区の検出をする。Ｂ地区でも縄文時代早期の竪穴址・土壙や弥生時代・中世の住居址・竪穴址が検出されたので、９月20日頃までＢ地区の検出作業に集中する。Ｃ地区の検出作業も一部並行していたが、９月10日頃からＣ地区の検出作業に集中した。土器棺墓は13基が４か所で検出され、縄文時代晩期の土器集中地もあり、縄文時代早期の竪穴址・土壙、縄文時代中期の土壙群、弥生時代後期の住居址、平安時代の住居址等が重複しているので、出土土器の出土地点を記録しながら検出作業を進める。10月10日頃から縄文時代早期の土器片が集中する竪穴址（ド49・78・82）があり、土器片が多い土壙もあるので、10月22日まで集中的に検出作業を進めた。

その間、漸くヨシガタＤ地区の水がひけたので溝址・格子状遺構の検出作業、大宿遺跡Ａ地区の検出作業も進めている。

大宿遺跡Ｅ地区（大島川右岸沿い）の重機による試掘調査は７月23日に行ったが、縄文時代中期の土器片２点が発見されただけなので調査を終了し、Ｄ地区の調査も土壙検出だけで終了している。なお、９月28日からＢ地区西側の排土作業により弥生時代の４号住居址が発見され

ているので、C地区の検出作業とへ並行しながら10月22日に全地区の調査を終了している。

その後、町内の各地の発掘調査が連続しているために、平成6年1月から報告書作成の準備作業が行われ、3月報告書の原稿が完成している。

5．調査団組織

(1) 調査団

調査団長	今村善興（飯田市文化財審議委員）		
調査主任	松島高根（高森町教育委員会社会教育係）		
調査員	林　貢	福田千八	細江　博
	小林　薫		
調査補助員	竹沢正穂	三石久雄	
学生補助員	原沢淳一郎	松島茂男	
協力作業員	石川美保子	伊奈川清美	岩田市夫
	勝又庄作	上沼朝穂	上沼耕一
	上沼　晃	木村はる子	熊谷きみ子
	佐々木八重	白河福美	棚田康治
	中塚くに	中塚薫則	中塚正司
	原　金司	古林幸男	松岡正次郎
	松下梅治	宮下五三男	宮島文子
	今村倶栄		

(2) 調査事務局

高森町教育委員会	教育長	原　次郎
	事務局長	林　一雄
	社会教育係長	佐々木　昌
	社会教育係	松島高根
高森町建設課	課長	寺沢正人
	課長補佐	北原　茂

Ⅱ. 吉田上段地籍の環境

1．高森町の自然環境

―― とくに扇状地の発達について ――

（この項は、「高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集」高森町の自然環境（松島信幸）を、ご了解のうえ引用した。）

（1）はじめに

高森町は、木曽山脈の山麓に広がった扇状地と、その扇状地が開析された段丘や沖積地の上に生活舞台がある。

市田地区についていえば、本高森山に源流を発する大島川が、山麓部に形成した扇状地の上に古くからの集落が発達している。この扇状地は別曽付近を扇頂として、放射状に開析が進んだ開析扇状地で、台地状に段丘となっている原面上には集落や畑が広がり、開析された低地部には水田が開けている。

本地域を主な地形区分に分けると、次のような３地形区分になる。

① 山地

木曽山脈の東麓斜面を形成し、起伏量が大きく、集落の発達はない。

② 上段地帯（中位段丘地帯）

大島川など、木曽山脈側の支流によって形成された扇状地で、開析が相当進んでおり、天龍川の西側に位置するため、竜西段丘と呼ばれている。扇状地の原面上や、古い開析面には、赤土と呼ばれている火山灰が厚くおおっている。

③ 下段地帯（低位段丘地帯）

天龍川に沿う沖積地帯で、本流の侵食作用によってできた段丘と、支流から押し出した新しい扇状地とが複合している。さらに、現在の天龍川氾濫原まで含まれている。段丘面の上に火山灰はほとんどのっていない。

※今回の緊急発掘調査地域は、②上段地帯（中位段丘地帯）第三原面に属する。

〔2〕 角田原扇状地

扇状地は木曽山脈の隆起によって、山地と平地の境界部に形成されていく。山地側から運搬されたレキや砂の堆積によってつくられていく。山地側の隆起が継続している間は、どんどん広がっていく。このため、平坦部は扇状地によって埋めたてられていく。

伊那谷では、天龍川の右岸、つまり竜西側に広く扇状地が発達している。これは、木曽山地の著しい上昇運動の反映である。

高森町市田地区についてみると、広く発達している扇状地は主として大島川の運搬・堆積作用によるものである。大島川扇状地の扇頂部は別曽付近にあり、扇端部は出砂原である。その間の水平距離は4km余である。北側の扇側は胡麻目川であり、南側の扇側は南大島川で境されているその間は3～3.5kmである。

伊那谷の複合扇状地は、どの地域の場合でも、新旧いくつもの扇状地が重なりあっている大規模な複合扇状地である。市田地区の場合も大島川複合扇状地となっている。

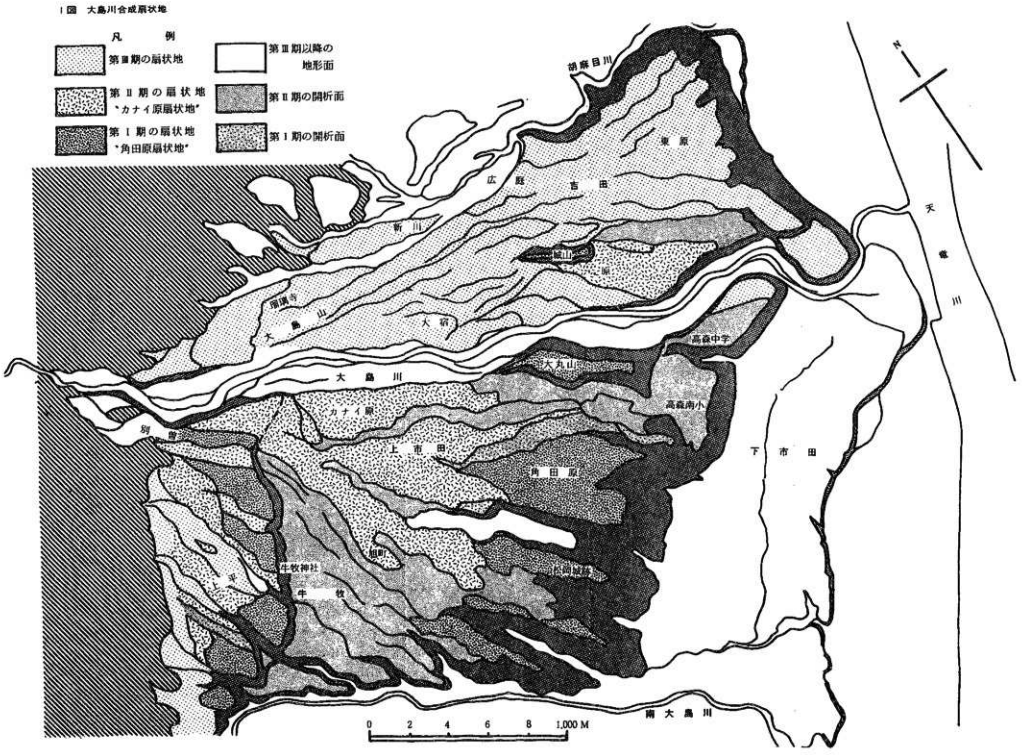
大島川複合扇状地において、一番古い扇状地、つまり、最初に形成された扇状地面を第一原面と呼ぶ。第一原面が一番広く残っている部分が角田原である。

第一原面は、現在では、侵食作用をうけて台地状の段丘になったり、平頂丘陵となって分断されている。模式地の角田原で最大の広がりをみせている。すなわち、原町から角田原一帯である角田原の南側では、松岡城跡・南城跡などの開析段丘となって台地状の尾根を形成している。角田原の北側では、大丸山や吉田の城山のように、まわりを完全に侵食され、新しい開析面や侵食谷にとりかこまれた残丘状の丘陵として残っている。城山では、わずかに原面の痕跡をとどめるていどである。

第一原面を代表する角田原の面上には、厚く火山灰層（ローム層・赤土層）が堆積している。一般に、古い扇状地ほど火山灰層が厚く堆積しているのが普通である。角田原では風成の火山灰層の全体の厚さが約3mで、中期ロームと新期ロームがほぼ完全にみられる。中期ロームの下部層は約10万年前のものであるから、第一原面を作った最初の扇状地は、約10万年前に、すっかりできあがっていたということになる。

角田原を観察すると気がつくが、扇状地面の天竜川へ向かって傾く勾配がゆるい。よく注意して観察すると、古い扇状地ほど傾きが少ない。また、古い扇状地ほど、山麓部から離れ、天竜川に面する最大の段丘崖を形成している。

角田原のように原面と呼ぶものは、形成された扇状地面がほぼ原形のまま残っている地形面をいう。ただし、原面上には火山灰層が被覆しているから、扇状地面の原形は火山灰層の下にあることになる。こうした原面は、自然水利に恵まれなく、また湧水もないから、おおくの場合、人工水利にたよらなくてはならない。その反面、原面上にはおおくの文化的遺産が埋蔵されていることになる。



第1図　大島川合成扇状地

(3) 牛牧上段の変形扇状地

木曽山地側の山麓部には、古い扇状地が断層運動を伴ってもちあがり、主扇状地面より一段と高い段丘状の地形をつくっているのが普通である。市田地区の場合、牛牧上段（共経・宮ノ上・上平）である。

牛牧上段をつくる扇状地の形成は、第一原面に引き続いておこなわれたものである。その堆積物であるレキは、亜角レキを比較的おおくふくんでおり、いくつかの小河川による複合扇状地として形成されたものである。牛牧上段の扇状地は直接山地側と接しており、地形的な境界線が一直線状に走っている。この地形条件から、山麓線を画する断層が有力である。これを牛牧山麓断層と呼ぶ。

牛牧上段と市田地区主扇状地面を画する断層が牛牧神社断層である。この断層運動によって断層線崖が比高10～20mに達し、あたかも、河岸段丘における段丘崖と同じような形状を示している。牛牧山麓断層と牛牧神社断層は平行して南へ続き、座光寺原を横切り、上黒田栃ケ洞付近で集束している。

牛牧上段と同じように、断層変位による台地状の開析扇状地があちこちに発達している。千早原・座光寺原・米原・柏原などである。これらの扇状地を原地形と呼び、これらの扇状地を切る断層崖を眉状断層崖と呼んでいる。

牛牧上段の場合、扇状地面の性質が、上記に原地形をつくる扇状地面と若干異なっている。原地形の場合、扇状地の周辺は完全に開析されており、平坦面は現河床から孤立した台地となっている。したがって、原地形の面上に自然水利は望めない。集落も発達しない。これに対して、牛牧上段は、米沢や小木曽洞などによる扇状地の形成が現在まで引き続いており、36年の災害には米沢・小木曽洞・上平などにおいて大きく氾濫している。また一方、段丘崖に沿っては、面上を流れる小河川の侵食作用も盛んである。院殿ケ沢や地獄洞川の侵食谷は、やがて牛牧上段面を分断するにちがいない。このように、牛牧上段は古い扇状地と新しい扇状地が複合しており、いくつかの小河川によって、波長の短い起伏がおおい、自然水利に恵まれているから、集落の発達はよい。段丘崖に面した突端部に小集落が点在するが、表土の流出のためか保存がよくない。

(4) 牛牧下段の扇状地

牛牧下段（旭町・宮里）は、第一原面より新しい扇状地で形成されている。この部分は、牛牧上段の隆起に伴って、その下側を埋めてつくられた扇状地である。第一原面より勾配があり、上半分は、第一原面より高いが、末端部では、第一原面をけずりこみ、第一原面の侵食面となっている。

牛牧下段の面上を被覆する火山灰層はあまり厚くない。その反面、黒土層の形成が場所によっ

ては良くみられる。このことは、牛牧上段と同じく、場所によっては新しい時代まで沖積作用が続いていたことを物語っている。原面の窪地に沿っては、沖積作用が継続し、原面の突出部には侵食作用が働いてきたものと思われる。その結果として、第一原面や牛牧上段面より平坦化作用が進み、さらに、火山灰層が流動しやすく、一見して、開析面のような形状を呈するに至ったものと推定される。このような状況のため、自然水利がよく、集落の発達は良いが、文化的遺物の保存は悪い。

(5) カナイ原扇状地

牛牧学校跡からカナイ原一帯には第二原面が発達している。第二原面は、カナイ原を模式地として、大島川の押し出しによる形態をよくとどめている。

第二原面を形成した扇状地は、別曽付近を扇頂としており、第一原面の上にオーバーラップしている。この面の形成時期は、牛牧神社断層の活動による牛牧上段面の形成以後である。このため、牛牧学校跡において、断層より上部では、牛牧上段面を侵食しており、断層を覆って、断層崖をかくし、牛牧下段面に広く広がっている。

カナイ原扇状地は上市田上部において第一原面におおいかぶさっているが、角田原をはさんで二股に分岐しており、南側への分岐は旭町・新井方面へのびている。北側の分岐は伊勢宮神社から牧ノ内方面へのびている。

第二原面は、大島川の左岸、大島山・吉田方面にも広がって形成したものと考えられるが、さらに後期の開析性扇状地によって消滅してしまったと推定される。わずかながら、城山の下流側に発達している原面が、その延長にあたると考えられる。

カナイ原扇状地の形成期に関連して、一番重要な資料は、面を被覆する火山灰層である。牛牧学校上方において大島川に面した崖がある。ここでの観察では、新期ロームの上半部が1m前後の厚さでのっている。この事実から考察すると、第二原面形成期の年代は約3万年前後となる。

(6) 大島山・吉田地域

大島山から吉田地区一帯は連続した扇状地面を形成している。唯一の例外として、前に記した城山と原において、先行する扇状地原面を残丘状にとりのこしている。吉田地域を模式地としてこの扇状地面を第三原面とする。

第三原面は、開析期における侵食面としての性格をもつ。その性格は次のとおりである。吉田地区の扇状地面の表面形態、特に微地形を細かく観察すると、幾すじかのチャンネル状の凹地やわずかの比高をもつ崖線が配列している。これらの崖線や微高地に面して集落が点在したり、畑が線状に並んだりしている。また、微高地に沿って水田が並んだりしている。これらの線状地形の配列は吉田扇状地の外形に調和して、放射状に近い並び方をしている。このような表面

形態は扇状地の形成時に、離水期の侵食作用を強く反映させている。これとは反対にカナイ原扇状地のように、砂レキの押し出しによる、なだらかな堆積地形がみられない。

吉田扇状地を被覆する火山灰層はあまり顕著ではない。吉田河原に面する末端部でみる限り、新期ロームの一部を被覆させているに過ぎない。

大島山地区の下段（神社より下側）から、大東・新川・大宿にかけては、第三原面の中でも後期にできあがった部分である。大島山の宮本付近から、大宿にかけては、地形的に一番の高まりを見せており、巨レキを含む、レキのおおい堆積物からできている。この部分は大島川に沿う自然堤防式の押し出しである。

大島山上段（神社より上側）は、第三原面を切る断層によって隆起したブロックで、牛牧上段と同じ成因の地形面である。これについては、牛牧神社断層の延長部にあたるかどうか未検討である。

(7) その他の侵食面

高森南小学校の面は、天龍川本流による侵食段丘と、第一原面を切る侵食谷とが合成したものである。レキ層の上に、中期ローム中の浮石層をはさんでおり、この面の形成は、3万年前後さかのぼる。第三原面より古い段丘である。

高森中学校の面は、第二原面とほぼ同時期のものである。大島川による末端部扇状地の断片であり、比較的厚いサレキ層を堆積させている。

大島川に沿う侵食面は、大島山・吉田側において大西や清東に広くみられるほか、大宿下段など、大島川に面して連続的に発達している。これらの面は、火山灰層をのせるかのせないかという境界期にあたり、約2万年前後のものである。堆積物中には著しい巨レキを含むのが特徴である。清東の崖に露出している。

大島川右岸には、天伯や、日影にみられるように、一番新しい侵食面が連続して発達しており末端部は、下市田下段の北原扇状地に連続している。連結部が塚越である。天伯・日影の面は、新旧の2段に分けられ、さらに、新しい侵食面がついてくる。その面が出砂原扇状地に続くものである。

2．吉田地籍周辺の歴史環境

（埋蔵文化財包蔵地を中心にして）

（1） 高森町の遺跡

第２図高森町埋文包蔵地図でみられるように、現在のところ高森町の埋蔵文化財包蔵地は168登録されている。一般の埋蔵文化財包蔵地は城館跡14を含めて122 、古墳の数は46の多きに及んでいる。（社寺跡は未検討）

旧石器時代の遺物は、山吹増野・増野川子石・正木原遺跡、市田千早原・鎗鋳原遺跡で発見されている。とくに正木原・千早原遺跡ではブレード・細石刃が出土している。

縄文時代草創・早期の遺物発見地も多く、とくに増野川子石遺跡では、中央自動車道用地内の発掘調査では相当量の土器片・石器が出土し、飯田・下伊那地方の主要遺跡のひとつになっている。早期の遺物多量出土地は、千早原・正木原・広庭遺跡が知られていたが、平成２年の千早原の上段道路敷地内で約100点余、 平成４年の上段道路敷地内牛牧上平・新田原遺跡（小木曾地籍）、大島山上の平ロマンの丘敷地内では、ほぼ 100点ほどの土器片・石器が発見され、今回の深山田・大宿遺跡でも相当量の遺物が発見されている。この報告にみられるように、大宿遺跡では約500点に及ぶ土器片・ 200点以上に及ぶ石器が発見されて主要遺跡のひとつに数えられる。現在のところ遺物出土遺跡は20の多きに及び、山吹増野、出原・吉田上段地域、牛牧上段地域に早期遺物出土地が集中している。草創期・早期の遺跡がこれだけ多いところは飯田・下伊那地方では高森町を除いてはほかにない。

縄文時代前期の遺跡も16遺跡が登録されているが、その実態は不詳のところが多い。現在のところ出土量の多いところは、大島山瑠璃寺前の中央自動車道用地内であるが、千早原遺跡・新田原遺跡・大宿遺跡等で早期土器と共に前期の土器も出土し、集石炉も発見されているので、今後の調査により多くなるものと思われる。

次の時代の縄文時代中期では、2000年ほどと年代が長いこともあって、下伊那地方全体でこの時代の遺跡が多く、高森町でもほとんどの遺跡から発見されている。現在のところ２～３軒から10軒程度の住居址が検出された遺跡が多いが、増野新切Ｉ遺跡の中央自動車道用地内では78軒の住居址が検出され、現在のところ豊丘村伴野原遺跡と共に、下伊那地方最大の住居址群とされている。広域農道・上段道路通過予定地等の発掘調査では 100基以上の土壙検出例が目立っている。

縄文時代後半・終末の後期・晩期の時期等は、従来は下伊那地方全体でも発見が少なかったが、近年発掘調査の進展に伴ってこの時期の遺跡が急激に増加している。高森町でも中央自動車道用地内の発掘調査、土地改良事業に伴う発掘調査、広域農道・上段道路用地内発掘調査等によって急速に遺跡数が増大している。後期・晩期の遺物多出土地としては遺跡一覧表中に●印の遺跡が増加している。特筆されるものは、大島山瑠璃寺前遺跡・吉田広庭遺跡・出原千早

第2図　高森町埋文包蔵地図

表1　高森町埋蔵文化財包蔵地一覧　NO.1

町番号	登録番号	遺跡名	所在地 大字 小字	旧石	縄文時代 草	早	前	中	後	晩	弥生時代 前	中	後	古墳時代 前	中	後	奈良平安時代 土	須	灰釉	中世	近世	備考 遺構・調査
1	2823	増野遺跡	山吹　増野		○			●	○				○									
2	2833	芝宮	〃　〃					○														竪穴住7　昭26
3	2834	後瀬	〃　〃					○														竪穴住3　昭26
4	8456	増野川子石	〃　〃	○	●	○		●														竪穴住4生活址　昭47
5	7319	増野新切Ⅰ	〃　〃	○				●	○													竪穴住78・七稜　昭47
6	8455	増野新切Ⅱ	〃　〃					○														
7	8457	増野二軒屋	〃　〃					○														
8		吉原	〃田沢山の寺					○												○	○	
9	2855	小机原	〃　小机原					○	○			○	○									試掘昭63
10	2854	田沢	〃　田沢					○											○	○		試掘昭63
11	8418	登久保	〃　〃													○						(竪穴住2位置再確認必要)
12	8453	新田西裏	〃　新田					○	○											○		昭47
13	8451	新田南	〃　〃					○	○									○				
14	8451	神田裏	〃　越田			○		○														焼石炉　昭47
15	2840	平林	〃　新田					○					○			○						
16	2836	新田原	〃　〃			○	○	○					○			○	○	○				
17	2843	子安山	〃　〃					○														
18	2842	神田原	〃　上平					○					○									
19	2844	駒場	〃　駒場			○		○					○									
20	2839	上平	〃　上平					○					●									
21	2841	天伯	〃　〃					○					○									
22	2838	原城	〃　原城					○												○		城跡
23		小沼	〃　小沼										○			○	○					
24		竜の口	〃　竜の口										○			○	○		○			
25	2857	足餅	〃　〃					○														
26	2858	千早原	出原　千早原	○		●	○	○	●	○			○				○	○	○	○		竪穴住6・集石　平2
27	2853	正木原Ⅰ	山吹　正木	○		●		○	○					○								
28	8450	正木原Ⅱ	〃　〃					●													○	竪穴住5　昭46
29	8448	出早神社付近	出原	○				○		●			●									竪穴住21　昭46
30	8474	出原西部	〃		○			○	●				○	○								集石炉・竪穴住　昭46
31	2859	赤羽根	〃			○			○								○	○		○		竪穴住3　昭46
32	2856	追分(辻義東裏)	山吹					○	●	●			●				○					注口土器・竪穴住4　平5
33	8417	出原東部	出原					○	●	○		○	○			○						
34	2871	出原(御館)	〃			○		○	○				○									
35	2849	北林	山吹　北林					○					○									竪穴住1　昭57
36	2837	上中島(中島)	〃　〃					○	●				●							○	○	鍛冶工房址
37	2846	丸山	〃　丸山					○	●		○		○							○		平4・5
38	2845	八日市場	〃　下平					○					○									
39	2850	山部位置	〃　北林				○	○	○				●									竪穴住4　平2
40	2824	垣外	〃　垣外					○					○									
41		舘	〃　和泉洞					○					●			○						竪穴住4　昭37
42		月夜平B	吉出						●							○			○			昭44
43	2872	月夜平A	〃						●				●				○	○		○		竪穴住12　昭44・45
44	2876	堂所	大鳥山					○								○			○			瑠璃寺跡
45	2882	役人平	牛牧					○														

高森町埋蔵文化財包蔵地一覧　NO. 2

町番号	登録番号	遺跡名	所在地 大字 小字	旧石	縄文時代 草	早	前	中	後	晩	弥生時代 前	中	後	古墳時代 前	中	後	奈良平安時代 土	須	灰釉	中世	近世	備考 遺構・銅表
46		役人平入口遺跡	牛牧				○	○	○	○			○						○			昭54
47		堂垣外(田)	大島山					○	○				○									
48	2875	弥宜垣外	〃			○	○	●	○			●	○					○	○	○		竪穴住6　昭56・平3
49	2873	瑞璃寺付近	〃				○					◐			○	○	○	○	◐			竪穴住16　昭56・57
50	8446	大島山東部	〃						◐				○			○	○	●	○	○		竪穴住6　昭46・55
51	8445	瑞璃寺前	〃　中島青木			○	●	○	◐	○			●				○	○	○	◐	●	竪穴住8・方周墓1 昭46・55
52	2860	広　庭	吉田		○	●	○	◐	○	○		○	◐			○	○	○	○	○		竪穴住14・方周墓2 昭54・55・平5
53	2869	ヨシガタ	〃					○					○			●	○		○	○		竪穴住4　昭27・53・平5
54		井上上清	〃					○												○		竪穴住1・水路　昭54
55	2861	光専寺前	〃					○					○							○		
56		城　山　城跡	〃					○					○							○	○	虎口・土塁　平1
57	2864	原　遺跡	〃					○					○				○					
58	2863	大　門	〃					○				○	○							○		
59		吉田古城　城跡	〃																			
60		吉切本城	〃																			
61	2862	東　原　遺跡	〃					○					○							○		三つの城跡
62	2870	宮の下	〃					○				○	○							○		
63	2865	南　原	〃					○					○			○				○		試掘平4
64	2866	正真名	〃					○					○									
65	2867	清東原	〃				○	○					○									
66	2878	鎧鉾原B	牛牧				○	○	○				○							○		竪穴住12昭54・平2試・4・5
67	8414	鎧鉾原A	〃	○		○	○	●	●	○			○	○				○		◐		竪穴住3　昭46・54
68	2879	天伯堂	上市田			○		○	◐				○			○						
69	8415	伊勢宮神社付近	〃					○					○			○					○	
70	8444	神堂垣外	牛牧					○					○									溝址　昭47
71	8443	無縁堂	〃					○	○				○							○	◐	溝址　昭46
72	2877	共　経	〃			○		○	●				○						○	○		土壙群　昭54・平4・5
73		赤　坂	〃					○					○							○		竪穴住1　昭54
74	2874	上　平	〃			◐		○									○			○		昭54・平4
75	8413	イナバ	〃					○				○	○				○		○			
76	2881	牛牧新田原	〃		○	●	○					○			○		○		○			
77		中　平(竹の下)	〃										○			○						
78	8442	弓　矢	〃					○								○						昭47
79		間屋林	上市田					○					○			○				○	○	
80	2885	護摩堂	〃					○					○			○		○		○		
81	2886	上市田原裏	〃				○	○					○							○		
82	2887	大丸山	下市田					○					○							○		狼煙場
83	2849	日　影	〃						○	○												
84	2888	角田原	〃				○	●	○				◐				○			○		竪穴住7・方周墓2　昭47
85	2889	宮坂願	〃					○					○									
86	2890	御射山原	〃				○	●					○				○					竪穴住14　昭56
87	2891	松源寺平	〃					●					○						○	○	○	古城・松岡城跡　平2
88		古　城　城跡	〃																			
89		松　岡　城跡	〃																	○		堀・虎口・建物址　平2
90		新　井　遺跡	牛牧					○					○							○		昭52

高森町埋蔵文化財包蔵地一覧　NO. 3

町番号	登録番号	遺跡名	所在地 大字 小字	旧石	縄文時代 草	早	前	中	後	晩	弥生時代 前	中	後	古墳時代 前	中	後	奈良平安時代 土	須	灰釉	中世	近世	備考 遺構・調査
91		松岡南 城跡	下市田																	○		
92		宮沢 遺跡	牛牧					○					○							○		
93		大下 〃	〃					○														
94		大下 岩跡	〃																			縄張り調査平5
95	2829	唐沢原 遺跡	下市田					○	○			○	●			○						戦前調査
96	2893	小原 〃	〃					●	○			○	●			○						竪穴住11 昭45・47・平5
97	2883	清東 〃	吉田					○	○													
98		古御屋 城跡	下市田																			
99	2895	北原 遺跡	〃					○	○			●	○			○	○	○	●	○	○	竪穴住10 昭45・47・平4
100	2884	トヤコ 〃	〃										○			○						
101	2898	北城 〃	〃					○					○			○	○	○	●	●	○	住・工房址 昭27
102	2896	若宮 〃	〃					○				○	○			○	○	○	○	○	○	
103	2897	金部 〃	〃					●				○	●			○	○	○	●	○	○	竪穴住21 平3・4・5
104	2902	堂垣外 〃	〃										○			○						
105		南田 〃	〃					○					○			○			○			
106		道寿 〃	〃					○					○									
107	2903	荒神裏 〃	〃					○					○			○			○			
108		堀田 〃	〃					○				○	○			○		○	○	○		
109		市場 〃	〃										○			○			○			
110		武陵池 〃	〃													○		○	○			
111	2905	中谷 〃	〃					●	○			●	○		○	●	●	●	●	○	○	竪穴住10以上 昭45
112	2907	新井原 〃	〃					○				○	○			●	●	●	●	○		竪穴住6 平5
113		坂牧 城跡	〃																			
114		黒城 〃	山吹 原城																			
115		山吹 〃	〃 丸山																			
116		共栄 遺跡	出原					○					○						○	○		竪穴住1 平3
117		吉田南城 城跡	吉田										○							○		
118		出原新墓地遺跡	出原					○														平3
119		すずが洞 〃	吉田 月夜平			○	○	○	○										○			
120		吉田キャンプ場	〃 吉田山						○									○				
121		上の平(五輪原)〃	大鳥山			●		○					○							●		竪穴住1 中世火葬墓 平3・4
167		大宿 〃	吉田			●	○	○		●			●			○	○		○	○		竪穴住5 土器埋蔵壙 平5
168		深山田 〃	〃			○	○	○		●			○						●			竪穴住3 土器埋蔵群 昭51・平4

高森町古墳一覧

番号	登録番号	古墳名	所在地	○墳丘現存	○石室現存	
123	1323	大塚	上市田伊勢神社境内	○	○	
124	8416	高見	〃 高見 603	○		
125	7325	護摩堂 1号	〃 護摩堂 462－2			
126		護摩堂 2号	〃 護摩堂 462 17	○		
127	7321	猿楽塚 (唐沢原1号)	下市田唐沢原 2256 -ロ	○		
128		唐沢原 2号	〃 唐沢原 2276－ロ			
129		唐沢原 3号	〃 唐沢原 2276--ロ			
130	7322	御射山	〃 古御 976			
131		磯塚	〃 磯ナギ			
132		北原 1号 (塚越)	〃 北原 2876	○		
133	7327	北原 2号	〃 北原 2097 -ロ			
134	7329	若宮の森 (若宮1号)	〃 若宮 2124－イ			
135	7330	田屋の塚 (若宮2号)	〃 若宮 1772			
136	7325	畑中の塚 (金部1号)	〃 若宮 1846－ロ	○	○	
137	7326	金部 2号	〃 若宮 1895－ロ	○		
138		金部 3号	〃 金部 2084－ロ	○		
139		金部 4号	〃 金部 2092			
140		金部 5号	〃 金部 2089			
141		金部 6号	〃 金部 2091			
142		天伯 (北林1号)	〃 天伯 2964			
143		北林 2号	〃 北林 2063－4			
144		北林 3号	〃 北林 2084--ロ	○		
145		北林 4号	〃 北城 2022	○		
146	2908	羽根	〃 羽根 1564			
147	2909	法界塚	〃 道寿 2081－2			
148	2910	大門	〃 大庭 1170--ロ			
149	2904	荒神の森	〃 大庭 1154			
150	2911	大庭	〃 大庭 1156－1			
151	2912	丸山	〃 市の坪 809－イ			
152	2913	平塚	〃 市の坪 796－ロ			
153	2914	南田	〃 東代地 1951－ニ	○		
154	2915	塚田 1号	〃 荒神前 1265－ロ			
155	2916	塚田 2号	〃 荒神前 1279－ロ	○		
156	2917	秋葉塔塚 (武陵地1号)	〃 武陵地 285－ロ	○	○	
157	2918	武陵地 2号	〃 武陵地 225			
158	2919	祝殿の家 (武陵地3号)	〃 武陵地 161			
159	2930	武陵地 4号	〃 武陵地 170 -ロ	○		
160	2920	福神の塚 (武陵地5号)	〃 武陵地 219－ロ			
161	2921	武陵地 6号	〃 武陵地 4012	○		
162	2922	上祖 1号	〃 上祖 4056			
163	2923	伽藍原 (上祖2号)	〃 ガラム 4059－イ			
164	2924	上祖 3号	〃 上祖 4082			
165		中谷	〃 中谷 547			
166		坂牧の社	〃 新井原 386	○		
169		北原 3号	〃 北原 2100－1			新発見H2
170		北林 5号	〃 北城 2080－1			新発見H5

高森町城館跡一覧

NO	町番号	城館跡名	所在地	規模・形状	残存遺構	存続期間	在城者	備　考
1	114	原城城跡	山吹龍ノ口	200×150連郭	堀・主郭・二の郭	応永年間	龍口氏	
2	115	山吹城跡	山吹丸山	200×150連郭	堀・土塁・主郭	慶長年間	座光寺氏	
3	59	吉田古城城跡	市田　吉田	250×150単郭	郭・堀・土塁	室町時代	吉田氏	
4	60	吉田本城城跡	市田吉田	400×200連郭	主郭・二郭・出郭・堀・土塁	室町時代	吉田氏	
5	117	吉田南城城跡	市田吉田	200×150連郭	主郭・二郭・堀・土塁	室町時代	吉田氏	
6	56	城山城跡	市田吉田	500×250連郭	主郭・二郭・堀・土塁	室町時代	吉村氏	平1調査　二の郭・虎口・建物址 大丸山公園造成
7	82	大丸山城跡	市田下市田	500×100単郭	土塁	室町時代	不詳	
8	98	古御屋城跡	市田下市田	200×100連郭	北郭・南郭・腰郭・堀・土塁	室町時代	松岡氏	
9	88	松岡古城城跡	市田上市田	150×100単郭	郭・堀	室町時代	松岡氏	
10	99	松岡城跡	市田	500×200連郭	主郭～五郭・一郭～六郭・腰郭・水路跡・井戸跡・虎口・建物址・工房址	室町時代～戦国時代	松岡氏	平3調査　二の郭・虎口・土塁・石積遺構・石垣遺構・礫石配列・建物址・工房址・水路跡
11	91	松岡南城城跡	下市田新井	500×150連郭	主郭・二郭・三郭・出郭・堀・土塁・腰曲輪	室町時代～戦国時代	松岡氏	
12	94	大下砦跡	市田牛牧	150×100単郭	郭・堀	不詳	不詳	
13	116	次郎城砦跡	市田牛牧	100×50単郭	不詳	不詳	牛牧次郎	
14	113	坂巻砦跡	市田牛牧	200×150連郭	郭・腰曲輪・堀	室町時代	坂巻氏	
15		原町陣屋跡	市田牛牧			江戸時代		

原遺跡から検出された５基の後期敷石住居址で、現在のところ飯田下伊那地方では高森町だけの検出例になっている。今回の報告にあるように、深山田遺跡・大宿遺跡の縄文時代晩期の土器棺墓群の検出例は、飯田・下伊那地方のみならず長野県内でも特筆される発見例である。

弥生時代では、中期の一番古い林里式土器が山吹丸山遺跡で発見され、縄文時代晩期の土器棺墓群に続くこの時期の遺物も発見されている。弥生時代の古い遺跡は、天龍川に近い低位段丘面に多いのが普通であるが、山吹丸山遺跡は中位段丘に近い所として注目されている。次の寺所式の土器は今のところ発見されていないが、これに続く北原式土器は、下市田北原・中谷遺跡で住居址が検出されている。とくに北原遺跡では住居址が７軒検出され、磨製石鏃が大量出土して、磨製石鏃製造地として知られた遺跡である。平成５年11月、北原遺跡の上段面、小原遺跡から磨製石鏃を伴う中期の住居址が３軒検出されて、上段部への広がりを物語っている。今後も上段部から発見される可能性が高くなっている。

弥生時代後期になると遺跡数も急速に増加し、低位段丘面はもちろんのこと、中位段丘から上位段丘・山麓地帯から山地帯まで町全体に広がっている。住居址が検出された遺跡は20以上に及び、出原出早神社付近遺跡では20軒、吉田月夜平遺跡では12軒が検出され、山吹追分遺跡では相当数の住居址の存在が予想される。低位段丘面ではとくにその数が多いのが普通であるが、高森町では低位段丘面での発掘調査例が少ないことから、今まで余り多くの住居址が検出されていないが、発掘調査が進めばこの数は増加するはずである。

中位段丘から高位段丘上にも大きな集落の存在も予想されるが、２～３軒の小集落が小台地上または山麓小扇状地で検出されたり、山麓や山中小台地からこの時期の土器片が収集され、今後の調査によって高地小集落検出の要素は多い。このことは、弥生時代は水田耕作が始った時代で、天龍川自然堤防に近い低位段丘面に多くの集落が構成されていたが、後期になると人口増加等により上段地域へも集落が広がり、小さな沢を利用した水田耕作・台地上での畑作が行われるようになった。今回の深山田・大宿遺跡の調査例はそのひとつであり、大島山上の平遺跡の例など典型的な小集落の例でもある。

古墳時代になると、高森町には古墳が46基以上築造されていて、この時期の文化地帯のひとつに数えられる。これらの古墳も下市田地籍に集中し、上市田地籍（伊勢宮神社付近）に少数あるが、牛牧・吉田・大島山・山吹地籍に全くないのが不思議に思われる高森町の特徴でもある。平成４・５年の発掘調査により下市田地籍から新発見の古墳が検出されているので、将来は新規古墳が発見されるかもしれない。

墓所としての古墳があればその周辺には古墳を支えた人々の集落が構成され、古墳がなくとも弥生時代に続く人々の集落があるはずであるが、現在のところ、高森町では古墳時代の住居址が検出された遺跡が意外に少ないのが現状である。出原西部・山吹洞・吉田ヨシガタ・下市田金部・中谷・新井原遺跡にとどまっている。これは、濃厚な遺跡地帯でありながら発掘調査例が少ないためで、低位段丘地帯には相当量の住居址が埋没していると思われる。下市田中谷遺跡では煉瓦土採取作業中に30軒以上の住居址が発見されたり、平成５年の町道改良工事に伴

う新井原遺跡の発掘調査で、ごく限られた範囲で6軒の住居址が確認された例はこのことを如実に物語っている。

奈良時代・平安時代になると多くの遺跡が確認されている。奈良時代の遺物は下市田中谷遺跡で多く発見され、飯田市座光寺恒川遺跡群の郡家推定遺跡群に続く主要遺跡とみられる。平成4年の金部遺跡の発掘調査で奈良時代と推定される住居址が検出され、同時代の掘立柱建物址が発見されて、高森町下市田地籍にも奈良時代の文化が広がっていたことが分かる。

平安時代の遺跡は町内全域に広がることが推量されるが、とくに集中する所は、低位段丘面と中央自動車道周辺から山麓にかけた一帯に多く発見されている。今まで発掘調査が割り合い多く行われた大島山瑠璃寺周辺では、奈良時代後半から平安時代の住居址群が数か所で検出されている。さらに山地帯の台地上や洞に面する小台地にまで小集落が検出される例が多く、千早原の最上段地籍・月夜平上段遺跡から住居址が検出されたり、大島山林道周辺から灰釉陶器片が拾えることから、高地集落の存在が推測される事実がある。高森町中央線周辺は、高森町東山道研究会によると東山道の通過推定地籍になっているが、平安時代の遺物発見がない所で、この推論に疑問が残されている。今回の深山田遺跡で検出された3号住居址は、20点以上の灰釉陶器を伴い、掘立柱建物址が併設されている。中央線上方に位置するが、この下方のどこまで、この時期の遺構があるかどうか今後の課題が残されている。

中世、鎌倉・室町時代の遺物出土地は各地にある。発掘調査が進めば進むほど中世の遺跡が多くなっている。従来の発掘調査で中世の遺構が検出されたのは下市田北城遺跡だけであったが、中央自動車道用地内発掘調査以後、瑠璃寺周辺遺跡・山吹中島遺跡・大島山上の平遺跡・広庭遺跡・ヨシガタ遺跡・大宿遺跡・下市田金部遺跡等の中世各遺構や城山・松岡城跡の城郭遺構等検出例が続き、高森町の中世遺構が急速に解明されつつある。

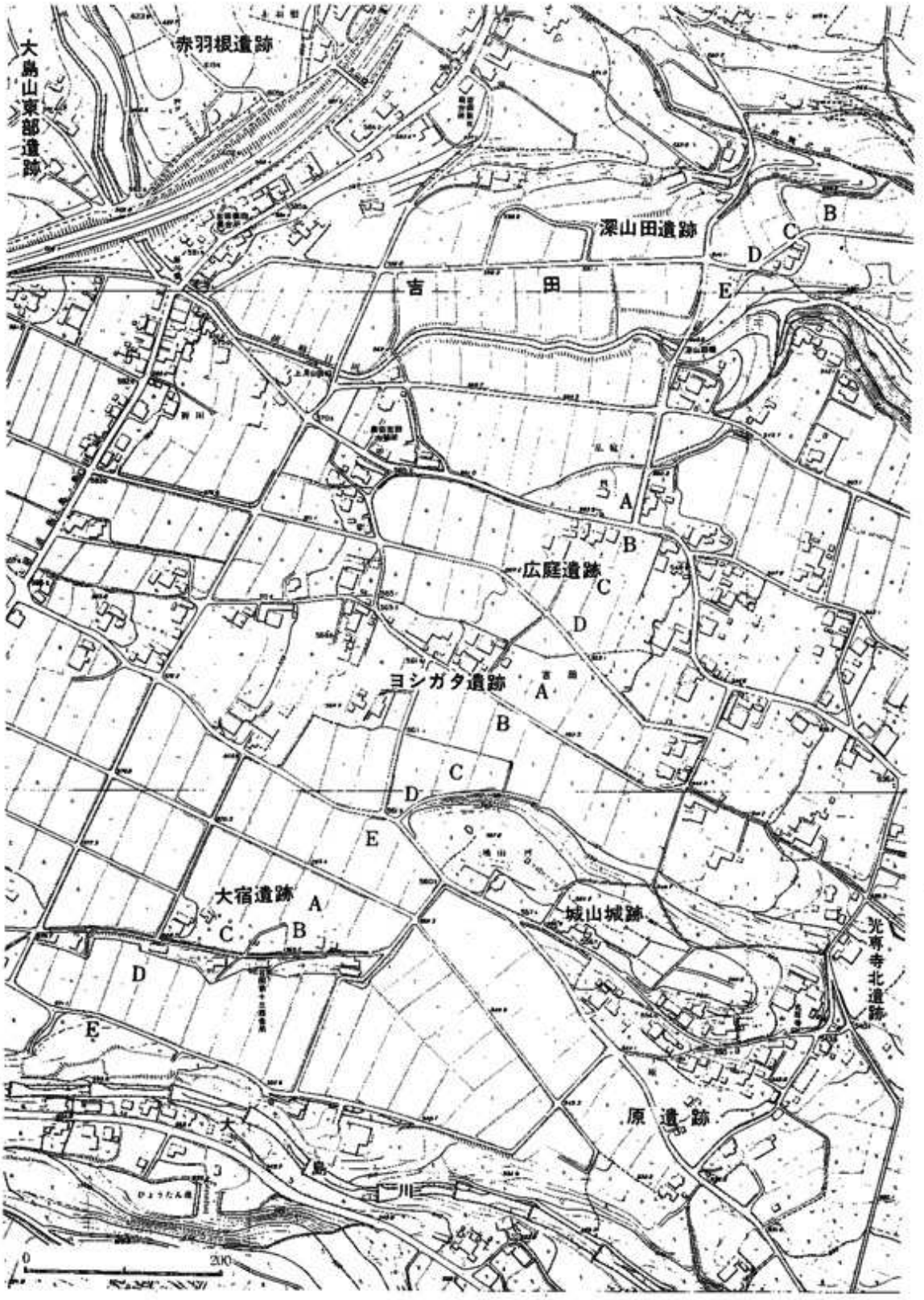
高森町には松岡本城城跡を始めとして、14以上の中世城館跡が残されている。飯田下伊那地方には200以上の城館跡があるが、高森町は多い地域のひとつである。公園計画に伴う城山城跡・松岡城跡の発掘調査が一部分ではあるが行われ、共に堀と堀を利用した虎口が検出され、礎石を持つ建物址・掘立柱建物址・土塁の石垣遺構・工房址等が確認されて大きな成果が上がっている。高森町の城館跡の大部分は、松岡氏の本城である松岡城を盟主にして、松岡氏の一族・重臣らの居城が上位段丘先端部に列状に並ぶ状態で、松岡氏系統の築城方式の共通性・中世末期の徳川系の影響の有無等々、究明資料の豊富な所で、各城跡の縄張図整備作業の進展と共に大きな成果が期待される地域でもある。

これらのほかに、平安時代開創が伝えられる瑠璃寺の旧跡やその外の古社寺跡、城跡周辺に残された城郭関連遺構跡等、中世期の旧跡の多い所でもある。

(2) 広域営農団地農道予定地の埋蔵文化財包蔵地

現在下伊那地方竜西地域に建設中の広域営農団地農道は、高森町では中位段丘の中間、山麓

第３図　高森町広域農道内遺跡位置図



第４図　吉田地区広域農道内遺跡と調査区

扇状地と段丘面が交錯する平坦面を横切るように通過するために、埋蔵文化財包蔵地の豊富なところといえる。

高森町市田・山吹地区南部の上段地域は、古い扇状地の上に大島川・胡麻目川・田沢川等による堆積が重なって、扇状地形が各所に形成されている。この扇状地は大島川・胡麻目川・田沢川等によって開析され、その開析谷によって区切られる地形が各所に残されている。現在の地形を細かくみると、牛牧・上市田・大島山・吉田・出原・山吹地籍によってそれぞれの差はあるが、扇頂から放射状に伸びるいく筋もの開析谷が連続し、下方へ来ると扇端や扇側が差別侵食を受けて、台地状の高まりとなって残されたり、地下水の高い凹地となって起伏の複雑な地形になっているところも多い。

広域営農団地農道用地内にかかる埋蔵文化財包蔵地は、山吹地籍4遺跡・市田地区13遺跡が予定されている。これらの遺跡の中で以前に周辺が発掘調査された遺跡は、深山田・広庭・角田原に過ぎないが、今までの表面分布調査や耕作中などによる遺物発見状況によると、相当量の遺物包含が予想されていた。平成2年から4年次にわたる発掘調査・試掘調査の結果は山吹地区では、縄文時代土壙群・弥生時代住居址群・中世工房址等の検出に留まっていたが、平成4・5年の深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡では、縄文時代早期の住居址・竪穴址・土壙群や、縄文時代中期の住居址と土壙群・縄文時代晩期の土器棺墓群・弥生時代後期の住居址・平安時代の住居址と掘立柱建物址・中世の礎石を持つ建物址や工房的な住居址等の発見が続き、今回の報告書に紹介されている。大島川以南には間屋林・護摩堂・角田原・松源寺平・新井遺跡等高森町の代表的な遺跡が並んでいる。

〔3〕 吉田上段地籍周辺の歴史環境

胡麻目川と大島川にはさまれる吉田上段地籍は、上方大島山地籍から連続した扇状地面が続くところである。細かくみると開析された侵食地形が各所に残り、東西に続く微高地的な台地と、それにはさまれた凹地がいく筋にも並列したところで、これらの小高い台地上や凹地に面する緩傾斜面に現在の集落が発達している。集落の発達しているところはほとんどが濃厚な埋蔵文化財包蔵地で、以前から発掘調査が多く行われた地域のひとつになっている。表2による発掘調査の結果からみると、縄文時代早期から縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世に至る遺跡が豊富であることが分かる。

発掘調査の結果からみると、現在のところ吉田上段地域で最も古い遺物が発見されている所は、昭和45年に調査された県道新川橋の東側下方の深山田地籍である。ここは、北から南へ伸びてきた千早原扇状地の末端にある赤羽根台地の扇端部が、胡麻目川の侵食によって舌状の台地になった所で、その東側先端部に今回調査した深山田遺跡B地点がある。(以前の調査地をA地点、今回の調査地をB地点とする) A地点のものは、ほぼ10.000年ほど前、土器作りが始って間もない頃のもので、縄文時代草創期末の表裏縄文と撚糸文土器が発見されている。B地点

表２　高森町大島山・吉田（上段）地区遺跡調査例

NO	調査年度	遺跡など	調査主体者	調査内容・検出遺構	報告書など
1	大正１０	地域内全体	鳥居龍蔵 市村成人	地区内遺跡分布調査・主要遺物調査	下伊那の先史及び原始時代
2	昭和２６	地域内遺跡 （主として古墳）	大場磐雄 市村成人	地区内遺跡・遺物調査	下伊那史２・３巻
3	昭和２７	ヨシガタ遺跡	木村昌之	古墳時代後期住居址３発見	伊那３０５号
4	昭和４２	中央道周辺遺跡	長野県教育委員会	大島山東部ほか１９遺跡の分布調査	中央道用地内分布調査報告書
5	昭和４３～４４	月夜平Ａ・Ｂ遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址１１、縄文時代後期土壙、 縄文時代後期土器・石器多数、 古墳時代後期土器、平安時代灰釉陶器等発見	月夜平第１次・２次調査報告書
6	昭和４６	瑠璃寺前遺跡 （青木・中島地籍）	長野県教育委員会	縄文時代前期土壙多数、縄文時代後期敷石住居址１、 弥生時代後期住居址３、平安時代住居址１、 江戸時代墓壙	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 高森町地内その１
7	昭和４６	大島山東部遺跡	長野県教育委員会	奈良時代・平安時代住居址６、土壙群	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書高森町地内その１
8	昭和５３	ヨシガタ遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址１	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
9	昭和５４	正真名遺跡	高森町教育委員会	縄文時代中期住居址１、竪穴址、 時期不詳掘立柱建物址	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集
10	昭和５４	広庭遺跡	高森町教育委員会	縄文時代早期竪穴址、縄文時代中期住居址２、 弥生時代方形周溝墓、石組土壙	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集
11	昭和５５	瑠璃寺前遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址３、方形周溝墓、 掘立柱建物址、不整石積物址	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
12	昭和５５	大島山東部遺跡	高森町教育委員会	縄文時代後期敷石遺構、弥生時代後期住居址、 平安時代住居址、柱穴群、土壙群	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
13	昭和５５	広庭遺跡	高森町教育委員会	縄文時代中期住居址、同敷石遺構、弥生時代後期住居址、古墳時代住居址、同方形周溝墓、竪穴址	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
14	昭和５６	権宜垣外遺跡	高森町教育委員会	縄文時代早期住居址、縄文時代前期住居址、 弥生時代中期住居址、竪穴址、土壙群	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集
15	昭和５６	瑠璃寺付近遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址、竪穴址、墓壙	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集
16	昭和５７	瑠璃寺付近遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址、平安時代住居址、土壙、溝址	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
17	平成１	城山城跡	高森町教育委員会	堀、虎口土橋、掘立柱建物址、石列、竪穴址、土壙、 ピット群、旧吉田学校校舎礎石群	高森町埋蔵文化財発掘調査報告書第７集
18	平成１	千早原遺跡	高森町教育委員会	縄文時代早期土壙、同前期集石炉、縄文時代中期住居址１、同後期住居址６（内敷石住居址１）、平安時代住居址１、土壙１００以上、溝址３、旧石器	未報告
19	平成３早成４	大島山上の平遺跡 大島山上の平遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期住居址１、平安時代土壙１、中世火葬墓１７６、縄文時代早期七器集中地、中世火葬墓３	未報告
20	平成３	権宜垣外遺跡	高森町教育委員会	縄文時代中期竪穴址、土壙、溝址３	今回報告
21	平成４	深山田遺跡	高森町教育委員会	縄文時代早期竪穴址１、同土壙３、縄文時代前期土壙、縄文時代中期住居址１、同土壙群、縄文時代晩期土器埋蔵群、弥生時代後期住居址１、同土壙１、平安時代住居址１、同掘物址、溝址	今回報告
22	平成５	広庭遺跡	高森町教育委員会	縄文時代中期住居址１、同土壙群、弥生時代後期住居址１、中世工房址３、中世・近世竪穴址１０、掘立柱建物址５、中世溝址２、時期不詳溝址３	今回報告
23	平成５	ヨシガタ遺跡	高森町教育委員会	弥生時代後期竪穴址、中世礎石配列建物址２、時期不詳土壙、溝址６、石積遺構、格子状遺構	今回報告
24	平成５	大宿遺跡	高森町教育委員会	縄文時代早期住居址１、同竪穴址３、早期・前期土壙１５、縄文時代中期土壙群（８０以上）、 縄文時代晩期土器埋墓群、同土器集中地３、 同土壙９、弥生時代後期住居址２、同土壙３、 同周溝２、平安時代～中世住居址２、中世竪穴址１、 同掘立柱建物址３、同土壙３、時期不詳土壙８０	今回報告

のものは縄文時代早期の山形文・楕円文からなる押型文土器や条痕文土器で、約9000年ほど前のものである。地区外になるが、この台地の地続きになる北側の上段地域・千早原扇状地の扇頂部でも、旧石器と縄文時代早期の山形文・楕円文の押型文土器が多く発見され、早期末の条痕文土器も含まれている。中央自動車道用地内発掘調査により、赤羽根遺跡でも押型文土器片が発見され、出原西部地籍で集石炉が検出されていて、千早原扇状地の上から下までが、すでに10.000年前から8.000年前ころ、先人の活動舞台であったことが分かる。

胡麻目川右岸地帯や左岸沿いでも古い時代の遺物が発見されてきている。昭和45年に農協吉田支所横で早期後半の土器が発見され、平成4年に大島山上の平遺跡の北側凹地から同様の押型文土器が大量に発見され、平成5年の調査によって南傾の大宿地籍の台地上から多量な押型文土器・条痕文土器と共に住居址・竪穴址・土壙が検出されている。中央自動車道用地内発掘調査により赤羽根遺跡でも押型文土器片が発見されており、月夜平奥のすぎが洞でも押型文土器が採集されていて、吉田・大島山地区の山手から扇央部にかけては、古くから拓かれたところの多いことが分かる。

縄文時代前期（約6.000 年前）になると早期以来の山手高所のほかには、吉田扇状地先端部に当たる清東原・清東地籍でも遺物が散見され、開拓の手が伸びていることがわかる。しかし、濃厚な遺跡の発見は大島山瑠璃寺前遺跡に留まっていた。今回の発掘調査により深山田遺跡ではこの時期の土壙群が、大宿遺跡では早期の住居址・竪穴址に隣接した土壙や集石炉が検出され、この時期の生活舞台の広がりを窺うことができる。

吉田河原や出砂原地籍を除く吉田上段地域には、縄文時代の埋蔵文化財包蔵地は19か所知られているが、そのうちで中期（4.000 ～5.000 年前）の遺物が発見されている所は大半を占める17か所を数える。住居址などの遺構が確認された所は、広庭の銘塚地籍と今回の調査地、正真名の上溝・南原・大宿遺跡であるが、3軒以下の住居址や土壙などの検出に留まっている所が多い。昭和55年の農業基盤整備事業に先立つ発掘調査で確認された広庭遺跡北向地区の7軒以上の住居址、竪穴址・土壙群・敷石遺構等の遺構群のあり方は、大きな集落の存在を暗示している。今回の調査による深山田・広庭・大宿遺跡の土壙群の検出例は、中期の集落が近くにあるものと思われる。

縄文時代後期から晩期（3.000 ～3.500 年前）のものは、後期では赤羽根・月夜平・すぎが洞・吉田キャンプ場遺跡、晩期では深山田地籍に留まっていた。深山田地籍では耕作中の発見であったが、条痕文の甕形土器が出土していてそのあり方が注目されていた。平成4年の深山田遺跡の土器棺墓群・平成5年の大宿遺跡の土器棺墓群は画期的な発見で、吉田地籍が学会からも注目されることになっている。共に、氷式の甕形土器と条痕文の甕形土器・壺形土器が棺に用いられ、数基以上の土器棺の集団が検出されている。住居址等の生活址の発見はないが、これらの近くに存在されると思われるので、今後の調査に期待される地域になっている。

弥生時代（2.000 ～3.000 年前）になると、中期の資料は赤羽根・清東下段で僅かに発見されているだけであるが、これに続く後期の時期になると、19遺跡中17遺跡で遺物が発見されるよ

うになる。住居址が検出された遺跡も、深山田・広庭・ヨシガタ・大宿・赤羽根・月夜平遺跡で、方形周溝墓も広庭銚塚地籍と大宿遺跡で発見され、縄文時代中期にみられれような吉田地区全域にわたる開発が進んだ時代でもある。この傾向は、高森町全域でも共通する傾向ではあるが、凹地を挟んで尾根上の台地が平行する吉田地区の地形が生活に適していたように思える。検出された住居址は月夜平遺跡を除いては3軒以下の例が多い。調査範囲が狭いこともあるが、中・上段地域の特質ともいえる。後期の集落構成を月夜平遺跡でみると小集落の傾向が分かる。標高630mの高燥な台地であるから、畑作を生業とした小集落かと思われる。検出された住居址は、後期前半の座光寺原式期の住居址2軒、後半の中島式期の住居址3軒、中島式に続く弥生時代最終末の住居址が4軒で、長い間この地に小集落が構成されたことが分かる。月夜平よりさらに高い所からも弥生時代の土器片が発見されているから、広範囲にわたる開拓が行われたものと思われる。

古墳時代（1.200 ～ 1.800年前）の遺跡は、現在のところ広庭・ヨシガタ・南原遺跡に留まっている。弥生時代終末期まで開拓の進んだこの地域に、古墳時代のものが少ない理由は考古学のなぞのひとつでもある。ヨシガタ遺跡で検出された住居址は、1 m50ｃｍほど深い所であったから、発見が困難なためかもしれない。もうひとつの疑問は高塚古墳がないことである。大島川を越えた南隣に上市田伊勢宮古墳・護摩堂古墳が構築されているから、吉田地籍にもあってよさそうに思える。ヨシガタ遺跡の北側に消滅古墳があったという言い伝えがあるから、古墳時代の吉田地籍の開拓状況は、今後に課せられた大きな課題でもある。

平安時代の遺跡も広庭・ヨシガタ・月夜平遺跡に限られていた。上方の大島山地籍では各所でこの時期の集落が検出されているのに不思議に思えたことであった。今回の発掘調査では平安時代の遺物・遺構の発見が多く、この疑問が解決されつつある。すなわち、深山田遺跡では大量の灰釉陶器を伴出した住居址が検出され、須恵器片を多く伴う掘立柱建物址も発見されている。大宿遺跡では平安時代から中世期のものと推定される住居址が検出されている。遺構の確認はないが灰釉陶器片・須恵器片は広域農道調査地の全域から発見されているので、平安時代の遺構が各所にあるものと思われる。しかし、上段地域から山麓地帯の平安時代の遺跡は中央自動車道周辺から上方に多く、町道中央線周辺ではほとんど発見されていないので、深山田の住居址が下限になるのか今後発見されるか、これからの課題となるところである。

平安時代の遺構・遺物が中央自動車道より上方に多いことは、この時代の生産形態の変化によるものとされる。大島山・吉田上段地籍では、平安時代開創と伝えられる瑠璃寺の所在も大きな理由のひとつにもなる。それにも増して山麓地帯やその下方に主要な交通路があったかどうかにもよる。奈良時代に開設された東山道はどこを通過しているかということも大きく関連する条件のひとつでもある。

山麓地帯のことはさておいて、中位段丘上の現在の中央線（町道1－1号線）あたりを通過予定地と推定する、高森町東山道研究委員会の説を採用するならば、中央線周辺から少なくとも平安時代の遺構・遺物の発見があってもよいと思われる。現在のところ、この周辺から発見

が伝えられていない。このことから、深山田遺跡の平安時代の住居址の発見が、重要な検証課題のひつということになる。

中世に関しては、昭和45年度調査の正真名遺跡窪田垣外地籍の水路址・竪穴址・掘立柱建物址、城山城跡の堀等に限られていたが、平成４・５年の調査により多くの中世遺構が検出されている。広庭遺跡の水路址・工房址・掘立柱建物址・竪穴址、ヨシガタ遺跡の礎石配列の建物址群・水路址・大形溝址、大宿遺跡の工房址的な住居址・竪穴址・掘立柱建物址群等の遺構で、城山城跡を取り巻くように中世の遺構群が連続して検出されている。古字からみてもこの地域の中世的な生活基盤が予想される。吉田城山城跡を本拠とする吉田氏の管理下に置かれたこの地区の片鱗を窺うことができる。今回の調査地域は、有力古字のあるところより上方に当たるところでありながら、このような中世遺構群が連続するわけであるから、東側下方にはこれ以上の中世の遺構群があるように思われる。

段丘東端には吉田河原・下平・小沼・竜の口を見下ろす古城・吉田本城を備えたこの地区であるから、今後の調査によって中世遺構群もさらに増加する地区と思われる。

Ⅲ. 調 査 の 結 果

1．深山田遺跡

今回の調査地域は吉田2580番地周辺で、ミヤマダ地籍と深山田地籍が接触するあたりに位置する。ミヤマダ地籍は胡麻目川左岸に続く尾根状の台地一帯で、西北上方赤羽根地籍境から東西450m・南北150mほどの範囲で、町道２－55号線あたりを境にして深山田地籍に接している。深山田地籍はここから東側一帯で、100mほど東のツカコシ地籍に接している。

周辺の地形をみると、千早原扇状地の南麓崖下、又沢川・小沢川にはさまれた赤羽根の扇状地が胡麻目川に沿って東へ伸びる尾根状台地が形成されている。北の小胡桃沢川右岸は東西に続く高燥台地、南の胡麻目川左岸にも尾根状台地が並行し、その中間に低湿地が続く起伏の多い地形になっている。その台地地形の先端を南北に横切るように広域農道が計画されている。広域農道の通過するあたりから胡麻目川の侵食谷は急激に深さを増し、調査地の内Ｅ地区の東南は、比高差30mほどの急崖である。第５図調査区位置図にあるＡ地区は，小胡桃川右岸の先端部にあり、Ｂ地区は中間の低湿地の中、Ｃ・Ｄ・Ｅ地区は胡麻目川沿いの台地先端部に位置している。

深山田遺跡は、従来町の遺跡に未登録であったが、昭和54年の構造改善事業に伴う発掘調査地に続くところと思われ、試掘調査が計画された。調査の結果は、縄文時代早・前期の竪穴址や土壙が検出され、縄文時代中期の住居址・土壙、縄文時代晩期の土器棺墓群、弥生時代後期の住居址、平安時代の住居址等が検出されて、予想外の濃厚遺跡であることが実証された。

「調査結果の概要」

縄文時代早期竪穴址１・同土壙３以上・同土器集中地１、縄文時代前期土壙５以上・同周溝状遺構１、縄文時代中期住居址１・同土壙10以上、縄文時代晩期土器棺墓７・同土壙30以上、弥生時代後期住居址１・同土壙２、平安時代住居址１・同建物址、時期不詳土壙約40・溝址３、低湿地の遺物集中地。

〔1〕 縄文時代早期の遺構・遺物

縄文時代早期の土器片が、Ｃ～Ｄ地区にかけた一帯、Ｅ地区中央部で発見され、出土した土器片はＣ～Ｄ地区で約50点、Ｅ地区では20点ほどである。Ｅ地区では遺構が発見されないが、Ｃ・Ｄ地区では竪穴址・土壙が検出されている。

① 竪穴址（土壙14）（第８・９・10図、写図２）

Ｃ地区の南側で検出された竪穴址で、竪穴の大きさは約3.9mの楕円状のプランで、東側は約３分の１が１号住居址に切られている。竪穴の形態は浅い摺鉢状の掘り込みで、壁面は緩やかに落ち込み、硬い床面はみられなかったが、穴底の黄褐色土中から土器片が集中的に出土し、その周辺には炭が多く含まれていた。焼土の検出もなくピットの所在もはっきりしないが、周囲には小ピットの配列はみられる。

出土した土器は、東南壁沿いに約20点ほど固まって出土している。器形を知るまでには至らないが、粘土紐貼りつけ・表裏条痕文のもので、押型文土器も３点ほど含まれている。石器は１点だけである。

② 早期土器片出土の土壙（第８・９・10・11図、写図２・３）

早期の土器片が出土した土壙は、Ｄ土壙１、Ｃ土壙３・７・８・９等であるが、量的にも土壙形態・出土状態からも、土壙３が早期に比定する条件が揃っている。この土壙３は、南側中央あたりにあった土壙で、上面は１ｍほどの方形状、深さ52cmほどの円形筒形土壙で、上層には炭の包含が多く、中層茶褐色土中に土器片が集中しているが、壙底近くからも出土している。第10図１～８がそれで、楕円文の押型文土器が主体である。

土壙３の南側の土壙１、北側の土壙７・９からも押型文土器が出土しているが、他の時期の土器片も出土しているので、早期の土壙かどうかはっきりしない。

③ 土器片集中出土地（第７・10図）

調査地籍最南端のＥ地区で、楕円文の押型文土器を主体にした土器片20点以上が発見されている。１か所に固まっていても２～３点ではあるが、下部黄褐色土中から出土し、その範囲は第７図にある○印のところである。土壙・集石状遺構は検出されているが、早期であるかどうか不詳である。出土した土器は第10図26～41で、大形な楕円文穀粒状の押型文土器が主体で、26は口縁の裏に縄文が施されている。Ｃ・Ｄ地区の楕円文に比べると穀粒状文が大きい。後述の大宿遺跡にこのタイプのものはなく、牛牧新田原遺跡のものに類似している。

〔２〕 縄文時代前期の遺構・遺物

明確な時期は決めがたいが、前期の頃かと思われる土壙、周溝状遺構がある。前期と思われる土壙は第８・12図でみられるＣ地区土壙13・17・18・20・30かと思われる。とくに土器片の多かった土壙は17・18で黒色土系の覆土が深い土壙である。

E地区で検出された周溝状遺構は、南北3.5m・東西2.5mの範囲に、幅80cm～1.6mの楕円状の溝で取り囲んだもので、東南部の溝は広く深さも80cmほどある。覆土の多くは黒色系の砂質土であり、土器片の出土は少なく小破片であるが、前期と思われるものが出土している。

(3) 縄文時代中期の住居址と土壙

① 1号住居址（第8・10・13図）

C地区の南側で検出された住居址で、土壙14の東側を切っている。東側の既設道路下に3分の1かかっているので、西側の一部しか検出されていない。床の深さは検出面で60cmあり、道路面から測ると1.2mほど深いところにある。覆土上層は茶褐色砂質土が厚く堆積していた。プランの全容は不詳であるが、推定4～5mほどの円形で、側壁は直に近く掘り込まれて40cmほどの深さがある。床面は砂礫混じりではあるが非常に硬く、大きくて深い柱穴が3個確認され、中央西側に炉が検出された。道下をえぐるような調査であったので形態不詳ではあるが、炉石が取り除かれ、20cmほど下に焼土塊があり土器も出土している。出土土器は少なく、西側に縄文早期の土器片が数点出土しているが、土壙14のものかと思われる。第10図34の土器は、炉中の土器で、中期後葉の土器である。

② 縄文時代中期の土壙（第8図、写図4）

この時期の土壙は少なくとも10基以上はあるかと思われるが、はっきりしたものは少ない。比較的多くの土器片が出たのはC地区の土壙34で、この周辺に中期の土壙があると思われるが、集中的に土器出土の土壙は見当たらない。

(4) 縄文時代晩期の土器棺墓群（第16・18図、写図5～9）

C地区の北側一帯で、黒色砂質土の覆土の土壙が約50基検出されている。この中で、土器棺が検出されたものは、第16図の1～4であり、晩期の土器が集中して出土したのは5・7である。第18図の主要土器は1～4の位置に埋葬された主体の土器で、どの土器棺も浅い土壙を掘り、その中には横倒しのもの、埋め込みのものもある。1は氷式甕形土器と条痕文の甕形土器を合わせたもの、2は条痕文の壺形土器を逆位に埋めたもの、3は氷式形土器と条痕文甕形土器の口を合わせたもの、4は氷式甕形土器を逆位に埋めたもので、5・7は甕片が多く出ているが、その形態は不詳である。

これら主要土器棺墓の周辺に約20基、その東南側、3号住居址の東側にかけて同様の黒色土の堆積する土壙が約30基が検出されている。この全部が晩期のものと決めかねるが、3号住居

址内を含めて周辺にも晩期の土器片が出土し、その範囲は円弧状に広がり、深山田台地の先端を取り巻くような配列があるので、これらを含めて土器棺墓群とした。

① 土器棺墓１（第16・17・18・19図、写図７・９）

検出面から約25cmほどの穴を掘り、N16°Eの方向に雷文施文の氷式甕形土器が横倒しに埋められ、その上に縦に半割りした条痕文の甕形土器が上面だけ被せられていた。何片かの口縁が近くに飛んではいたが、ほぼ原形に近い状態で出土している。主体になる氷式甕形土器は、口縁部がやや高く埋められ、口を塞ぐ別の土器は見当たらない。甕の口元に打製石器が置かれていただけで、副葬品らしいものは発見されていない。甕の中・周辺から炭が出てはいるが、元々煮沸器であったこの甕には、とくに炭化物が付着しているので、この炭と思われる。焼土は発見されていない。

土器棺１の１（第19図、口絵写真）は口径38cm・器高36cmで、口縁は朝顔花形に外反し肩部に段を持つ形で、口縁付近は無文で口縁部に低い突起がある。胴部から底部近くまで雷文状弧文と縦の細い条痕が施され、底部近くは極端に薄い土器で胎土はやや軟弱である。１の２(第19図)は条痕文の土器で、円筒形の甕形土器である。口径は36cmで、器高は底部を欠くので不詳であるが、45cm以上ある。条痕の方向は口縁部の近くはやや右下がり、胴部から底部にかけては斜方向が強く、羽状のところが多い。

② 土器棺墓２（第16・17・18・19図）

土器棺墓１の北北西１mほどのところに、逆位で埋めらた条痕文の壺形土器で、口縁部と底部が欠損している。上側は崩れ落ち、胴部辺りは埋葬当時の円形を保っているが、平状石が置かれていたので、南側は崩れ落ちている。頸部が２片壙底黄褐色砂礫土中に突き刺さっていた。土壙の大きさは確と確かめられていないが、壺の大きさより割合大きな穴である。検出の時に掘り込みが進み過ぎたようにも思われる。

口径・器高とも不詳であるが、胴部最大幅は45.5cmもある。肩部上方に押圧突帯が付けられ、その間隔は２～2.5 cmで、頸部から肩にかけての条痕は縦方向に近いが、胴部から底部にかけての条痕は左から右への斜方向が多く、施文は荒く羽状のところもある。胎土は硬く黄灰色で、焼き締められた土器である。

③ 土器棺墓３（第16・17・18・21図、写図7・9、口絵写真 ）

土器棺１の北北東、25cm離れた所に氷式土器の底部がある。氷式甕形土器と条痕文の甕形土器による合わせ口甕棺でN17°Eの方向に埋められている。北側の条痕文土器の上辺は原形が崩

れているが、下辺は原形を留め、その下に別の氷式甕形土器が敷かれており、合わせ口甕棺２個体のほかに２個体の氷式甕形土器の破片が使われている。合わせ口２個体の甕は、合わせというよりは重ね口のように、条痕文土器の中に氷式土器が入り込んでいる。この空間を埋めるために、その上下に縦割りした氷式土器が合わせられていたと思われる。

３の１の土器は、氷式甕形土器で、口径29cm・器高39.5cm・肩部最大幅28.5cmのほぼ完形品で、調整痕のほかは無文の長胴形の土器である。縦割りにした形跡はみられない。

３の２の土器は、口径31.6cm・器高は底部を欠損しているので不詳であるが、35cm以上はある。胴部最大幅は31.2cmあるから、胴張りはしているが肩の張りは少なく、口辺には表裏ともに太い沈線が付いている。条痕文は口辺あたりから底部にかけて左上から右下にかける斜めの施文であるが、胴部下ほど傾斜がきつい。羽状傾向は少ない。底部の欠損は埋葬時に欠いたものと思われるが、開口部に蓋があったかどうか不詳である。

④　土器棺墓４（第16・17・18・20図）

土器棺墓２の南南西80cmほどのところに、氷式（擦痕付）甕形土器が逆位に埋められている。グリット掘りの折に土器片が取り上げられたこともあるが、原形は大きく崩されていた。幸い、口縁が下向きで４分の１ほど残されていて、逆位の位置が確かめられた。他の土器片は見当たらないので、単独に埋められたものと思われる。

口径は推定39cmくらいで、口辺を太い沈線で取り巻き、頸部辺りは無文、肩部から底部にかけて縦に擦痕状の筋が付けられている。深山田遺跡には類似の土器は少ないが、後述する大宿遺跡の土器棺には類似の土器が多く出土している。

⑤　土器棺墓５（第16・22図）

土器棺墓２の北北東80cmのところに、条痕文の甕形土器片が約50点が集中的に出土した土壙５がある。土器棺の崩れたものと思われるが、その形態は不詳である。この場所は、表土からは80cm以上深いのところにあり、周囲の状況からみても耕作等の攪乱の形跡はないので、埋葬時に以前の土器棺が崩されたもののように思われる。土壙５の北北東、調査地の北隅に土壙７・８がある。土壙８からも晩期の土器片が多く出土している。５よりは少ないが同様のものかと思われる。このような例は、大宿遺跡の土器棺墓群にもあった。

⑥　その他の土壙群（第16・22図）

土器棺墓１～４の周辺には、ほとんど接触または重複する状態で、土壙９～25が検出されている。全て土器棺墓とはいえないが、全部が黒色土の覆土であること、全体の配列が約４mほ

どの幅で北から南へ帯状に並んでいること、土器棺墓２～17の間には小ピットが40個検出され、土器棺墓２を取り巻くグループ、直列状に南東に並ぶグループがあり、土器棺墓群の中心に配列されたピット群と思われるので、関係のある土壙とみている。

ここから南西に向かって円弧に並ぶ土壙16～59が、既設道路の下から検出されている。この周辺から出土する遺物は縄文時代晩期のものが多く、３号住居址の覆土や、その西側の土壙16～20周辺からも晩期の遺物が出土している。その範囲をみると環状になりそうであるので、晩期の土壙が多く含まれるように思われる。ただし、土器棺墓24・25の南側は、道路の側溝や道路工事の掘削が進んでいて破壊されているために、空白なところがあるので、確かなことは分らない。土器棺墓群の東側で倉庫建設の折に70cmほど掘ったが、攪乱が多く土器片も見つかっていない。

(5) 弥生時代後期の遺構

① ４号住居址（第13・23図、写図10）

Ｅ地区の北西端で、４号住居址の一部が検出されている。半分以上が西側用地外にかかるために、全体のプランは分らないが、南北5.5mほどの方形竪穴住居址で、掘り込みは調査面で25cm・西側の土層記録面では約50cmほどの深さを持つ竪穴式住居址である。床面は非常に硬く、平坦であるが、南側には二重の貼り床が検出されている。遺物は西側隅に甕形土器の一部と小破片・不整形の石器出土に留まっている。

この住居址の周辺では、北側や南側一帯から石包丁石器（第13図９・10）や弥生時代の土器片の出土が多かったが、作業小屋の未撤去・キュウイの栽培等のために拡張調査が不能であって、北側にかけての遺構確認ができなかったことは惜しまれる。北東のＤ地区から、この小屋まで20mくらいの間は、未調査であったから関連する遺構があったかもしれない。

② 土壙４（ＥＤ４）（第７・15図、写図10）

Ｅ地区４号住居址の西南８mほどのところに、周溝状遺構の北側沿いに、Ｅ土壙３・４が検出されている。ともに覆土が黒色土で深さ50cmほどの土壙で、土壙４からは上層から中層にかけて、石包丁形石器（第15図１）と弥生時代後期の土器片が出土している。土壙３からも１片だけであるが同時代の土器片が出土している。

(6) 平安時代の遺構

平安時代のものと思われる遺物は、Ｂ地区の低地・Ｃ地区の中央付近・Ｅ地区の南側から検

出されているが、量的に多く出土したところは、C地区の3号住居址とその周辺である。

既設道路下にかけて住居址が検出され、その南・西側から須恵器片が集中的に出土したが、検出の結果建物址と思われる。

① 3号住居址（第24・25・26図、写図11～13）

C地区のほぼ中央、既設道路下にかけて検出された隅丸方形竪穴式住居址である。道路下にかかるために、第一次と第二次にかけて検出調査が行われている。

プランは、南北6m・東西5.5mのやや不整形の隅丸方形竪穴住居址で、主軸方向はN10°Eとしたい。調査面からの壁高は南側では35cmほどあるが、北東側では15cmほどである。最初から異常なほど黒い覆土が見られ、掘り下げるにつれて炭の混入が多く火災に遭った住居址で、焼土塊・炭化材の出土が夥しく、とくに北東側に多くみられ、柱材・屋根材の集まり方・並び方から、北方向に倒れたものと思われる。カマドは東隅に構築された石芯粘土製のものであるが、水道敷設溝で切られているので、原形が不詳なことが多い。東側に焼土塊が固まり、壁外に煙道の一部が残されていた。床面は火災に遭ったこともあって、焼き締められて硬い床であったが、各所に凹凸はみられる。主柱穴はP1～P4の4本であるが住居の中央寄りに偏っている。この4本だけで屋根を支えることは容易でないので、屋外を取り巻く18個のピット群が重要な機能を果たすと思われる。その配列と4つの主柱穴の関係から、寄棟状の屋根が想定され、屋根端が地上を離れ、生活空間を広めたものと思われる。後述する大宿遺跡の平安時代末から中世にかけた1・3号住居址の住居形態と類似点が多く、平安時代から中世にかけての住居形態を知る好い例と思われる。周溝は検出されない。カマドの南側に、径80cm・深さ15cmほどの貯蔵穴状の掘り込みがあった。

出土する遺物は非常に多く、一覧表（表3）の通り灰釉陶器30個体分以上・土師器5個体分以上・刀子1・鉄片等である。復元された土器は灰釉広口壺1・小口壺1・碗形土器12・皿形土器5・土師坏形土器2で20個以上に及ぶ。広口壺は口辺が朝顔花形状に広く開き、口縁は波状に作り出している。低い高台がつき、薄い灰白色の灰釉が施されているが、胴体から底部までは無釉のように思われる。小口壺は口縁から肩部にかけて、暗緑色の灰釉が施釉されているが、胴部から底部は幅広いヘラ削りの粗い面が多く、底部は粗い整形で安定しない。碗形土器・皿形土器は整ったものが多く、灰白色の施釉が多い。土師器は糸切り底の坏形土器である。土師器の甕形土器は破片さえも発見されていない。

吉田上段地籍では平安時代の住居址の検出例は今まで少ない。上方の大島山地籍では奈良時代・平安時代の住居址は多く発見されている。山麓地帯にも住居址の発見例が多く、平安時代開創が伝えられる瑠璃寺があれば当然のことと思われる。大島山に近い吉田上方部では灰釉陶器片の発見がみられるが、高森町中央線が南北に走る段丘先端部では、現在のところ灰釉陶器の発見が伝えられていない。続いて調査をした広庭遺跡でも、量は多くないが灰釉陶器片は出

表3　深山田遺跡3号住居址出土土器一覧

NO	土器形態	口径	器高	底形	高台高さ	胴部最大幅	底施文	施釉状況	図版番号	備考
1	広口壺	11.5	21.5	9.5	0.3	13.5	荒い仕上げ	胴部下まで灰白色	25図	口縁朝顔花状
2	小口壺	4.5	9.2	6.5		8.0	胴・底部ヘラ削り	淡灰色	2	
3	灰釉碗形	16.0	7.2	7.7	1.3		付高台	灰白色	3	
4	〃	15.3	5.9	7.0	1.0		付高台（ロクロ整形）	乳白色	6	
5	〃	15.2	7.1	7.2	1.4		付高台（ロクロ整形）	灰白色光沢あり	7	
6	〃	15.0	6.0	6.7	1.0		付高台（外反）（ロクロ整形）	乳白色	9	
7	〃	16.5	6.0	7.7	1.2		付高台　糸切り	青灰色	10	
8	〃	14.7	5.9	8.3	0.9		付高台　糸切り	黄灰色	13	
9	〃	16.3	6.3	7.6	1.1		付高台　糸切り	乳白色	14	
10	〃	15.3	6.4	8.0	1.2		付高台　糸切り	青灰色	17	
11	〃	17.0	6.3	8.0	1.2		付高台（外反）（ロクロ整形）	乳白色	18	
12	〃	15.0	6.0	8.0	1.0		糸切り	青白色	20	
13	〃	15.5	6.0	8.0	1.2		付高台		21	
14	〃	10.3	4.0	5.7	0.8		付高台　糸切り	青白色	4	
15	土師坏形	9.2	2.8	4.5	無台		糸切り		19	瓦器状
16	灰釉皿形	11.5	2.2	6.0	0.7		糸切り	乳白色	5	
17	〃	10.5	1.7	5.5	0.4		糸切	〃	8	
18	〃	10.2	1.8	5.2	0.4		糸切り	〃	11	
19	〃	10.0	1.9	5.0	0.4		糸切り	〃	12	
20	〃	10.3	1.6	6.0	0.5		糸切り	〃	15	
21	〃	10.5	2.2	5.6	0.5		糸切り	〃	16	

土し、ヨシガタ・大宿遺跡でもいくらか出土しているが、住居址の発見はなかった。その意味からも、深山田遺跡の平安時代の住居址の発見は大きな意味がある。

② 建物址（第26・27図、写図14）

3号住居址の西側に、平安時代の須恵器片が集中的に出土したところがある。黒色土の堆積が厚く、初めは住居址かと思われたが、検出した結果ピット群になった。整った方形区画のものは見当たらないが、何列かの直線的な配列がみられるので建物址と扱った。

直線的な配列がみられものは、P2～P3、P4～P5、P7～P9、P10～P12～P14、P15～P16の4～5組がある。遺物は土壙16周辺から西側一帯に多く、第26図のように平安時代の須恵器片が主体である。ここから東側、3号住居址の南一帯にも同形式の須恵器片が出土するところがあり、3号住居址とかかわる建物址があったとも思われる。

(7) その他の遺構・遺物

① B地区の遺物（第14・15図）

土器棺墓が検出された東側一帯は低地であり、重機による掘り下げを試みた。黒色土の堆積が厚く、2m以上下層に黒褐色土があり、平安時代灰釉陶器片・弥生時代土器片・縄文時代土器片が出土している。遺構等の検出までには至らないが遺物包含層があることを確かめることができた。

② E地区の集石遺構（第7図）

E地区の4号住居址と周溝状遺構の中間東側に、拳大の石が数十個並ぶところがある。遺構とする有力な根拠はないが、周辺から縄文時代早期の土器片が出土している。

③ E地区の溝址（第28図）

E地区の南端辺りに幅約4m、深さ1.5mほどの溝がある。時期不詳ではあるが、縄文時代の土器片・石器が出土している。

(8) 深山田遺跡のまとめ

① 新登録の遺跡

報告にもあるように、昭和54年の構造改善事業に先立つ発掘調査により、ミヤマダ地籍上方で石組を持つ土壙が検出され、表裏縄文・撚糸文を持つ早期の土器が発見されていたが、広庭遺跡とされたいたので、見落とされていた。また、町道5086号線の改修工事中に、埋蔵文化財調査委員による現地調査があったことを後で知ったが、その調査報告がなかったので、登録漏れの遺跡になってしまった。広域営農団地農道が計画された頃には、遺跡としての登録がなかったが、地形的に気になる場所として、教育委員会では試掘調査の希望を持っていた。幸い、県耕地課・町建設課の理解ある配慮によって試掘調査が実現した。未登録のまま未調査に終わったならば、この大遺跡の発見はないまま終わったわけで、調査が行われたことは大変有り難いことと思っている。今回の調査によって新登録「深山田遺跡」になっている。

② 縄文時代早期の遺構・遺物の発見

報告にもあるように、縄文時代早期の遺物が広い範囲で発見され、竪穴址・土壙等の遺構が検出されたことは大きな成果のひとつである。以前から高森町は、縄文時代早期の遺跡が多いことは知られていたが、発掘調査等によって確認された遺跡はそう多くない。千早原・正木原・増野原・鐘鋳原等の遺跡は、表面採集調査により確認されていた。昭和46年の中央自動車道用地内発掘調査により、出原西部遺跡と山吹神田裏遺跡で集石炉が検出され、増野川子石遺跡では、縄文時代草創期の遺物が多量出土して注目されている。昭和54年度の構造改善事業に先立つ発掘調査により、吉田広庭遺跡鉾塚地籍と深山田地籍で、早期の遺物が発見されたことは大きな成果であった。高森町の上段道路にかかわる発掘調査により、平成２年、千早原遺跡で押型文土器片が多く出土し、平成４年には、牛牧新田原・上平・共経・鐘鋳原・大島山上の平遺跡で、縄文時代早期の遺物発見が続き、牛牧新田原遺跡小木曽地籍では、多くの土器片・石器を伴う竪穴址や集石炉が検出された。これに続いて「深山田遺跡」の遺構・遺物の発見で、高森町の早期の遺跡が急激に増加したことになった。平成５年には、後半に報告する「大宿遺跡」でも700 点以上の土器片・石器が出土し、住居址・竪穴址・土壙・集石炉が検出されて、希薄であった縄文時代早期の資料性を高める結果になっている。

深山田遺跡の土器は、押型文土器・表裏縄文土器・撚糸文土器等種類も多く、押型文土器にも時代差があって生活の変遷が窺われ、ミヤマダ地籍・深山田地籍の別場所で検出されたことは、「深山田遺跡」の広がりを知る大きな手がかりとなっている。

③ 縄文時代晩期の土器棺墓群の発見

縄文時代晩期の土器棺墓群の発見は、飯田・下伊那地方では最初の発見であった。これら土器棺墓の中には、合わせ甕棺・合わせ口甕棺・逆位の壺棺・逆位の甕棺等が隣接して検出されところに特長がある。従来、飯田・下伊那地方でも、土器棺墓と推定される壺・甕棺の土器は発見されているが、豊丘村林里遺跡・阿智村川畑遺跡の発掘調査例を除いては、耕作等の偶然の発見で、資料性に欠けるものが多かった。しかも、合わせ口甕棺の発見は飯田・下伊那地方では、最初の検出であるばかりではなく、長野県下でも例の少ない発見として注目されている。しかも、同じ吉田地籍で引き続いて発見され、比較する資料が多いことも特長のひとつになる。

合わせ・合わせ口土器棺の構成は、① 氷式土器と条痕文土器の組み合わせで、主体になる土器は氷式の土器が使われていること、② 条痕文土器の全てが底部を欠いて使われていること、③ 棺として使われた土器は以前に煮沸器に使われたものが埋められていること、④ 当時の生活面が確かではないが、土器の厚さにせいぜい10cmほど足したくらいのところに埋められていることが確かめられている。雷文文様を持つ氷式土器の発見は、飯田市下伊那地方では稀有の発見でもある。合わせ口甕棺は、その後飯田市北方・阿南町帯川の根吹遺跡でも検出され、この期の解明資料が増えつつあるが、後述する大宿遺跡の土器棺墓群の資料と共に主要な規範資料になると思われる。重複するような報告・考察等が、後述する大宿遺跡の土器棺墓についても述べられているが、よく比較検討して頂きたい。

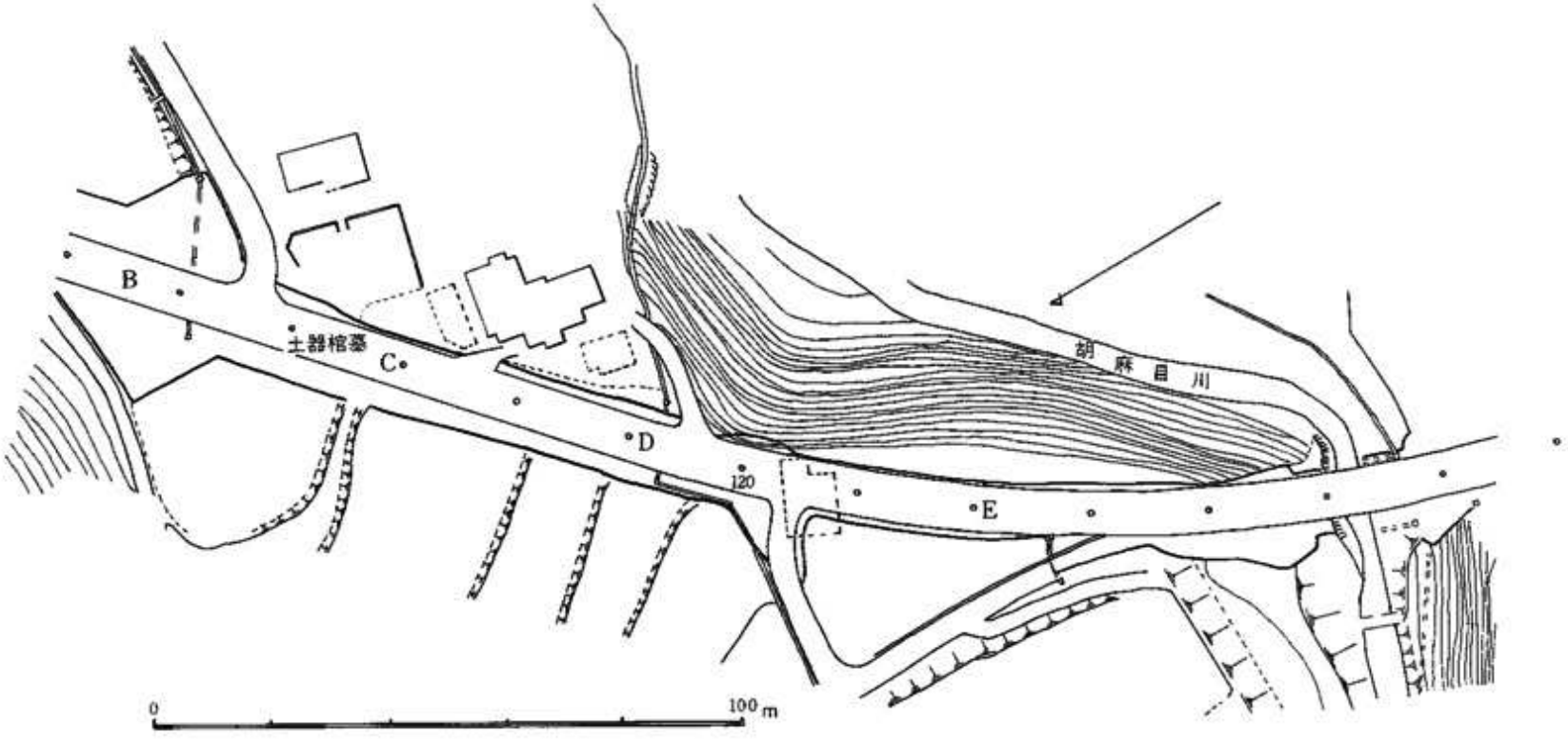
④ 豊富な灰釉陶器を伴出した住居址

報告の中でも触れたように、多くの灰釉陶器がセットで発見されたことにも意味があるが、吉田上段地籍内の発見された位置の方が、大きな課題として残される。すなわち、高森町の内、吉田上段地籍から山吹垣外・下町・駒場へ通ずる町道1－1号線（中央線）あたりと、吉田上段地籍上方から大島山地籍に続く一帯を比較してみると、現在のところ、平安時代の遺構・遺物発見の様子に大きな違いがある。すなわち、上方の地域では平安時代の遺構・遺物がほとんどの遺跡で発見されているのに、中央線周辺では、表面採集調査でも発見されていない。

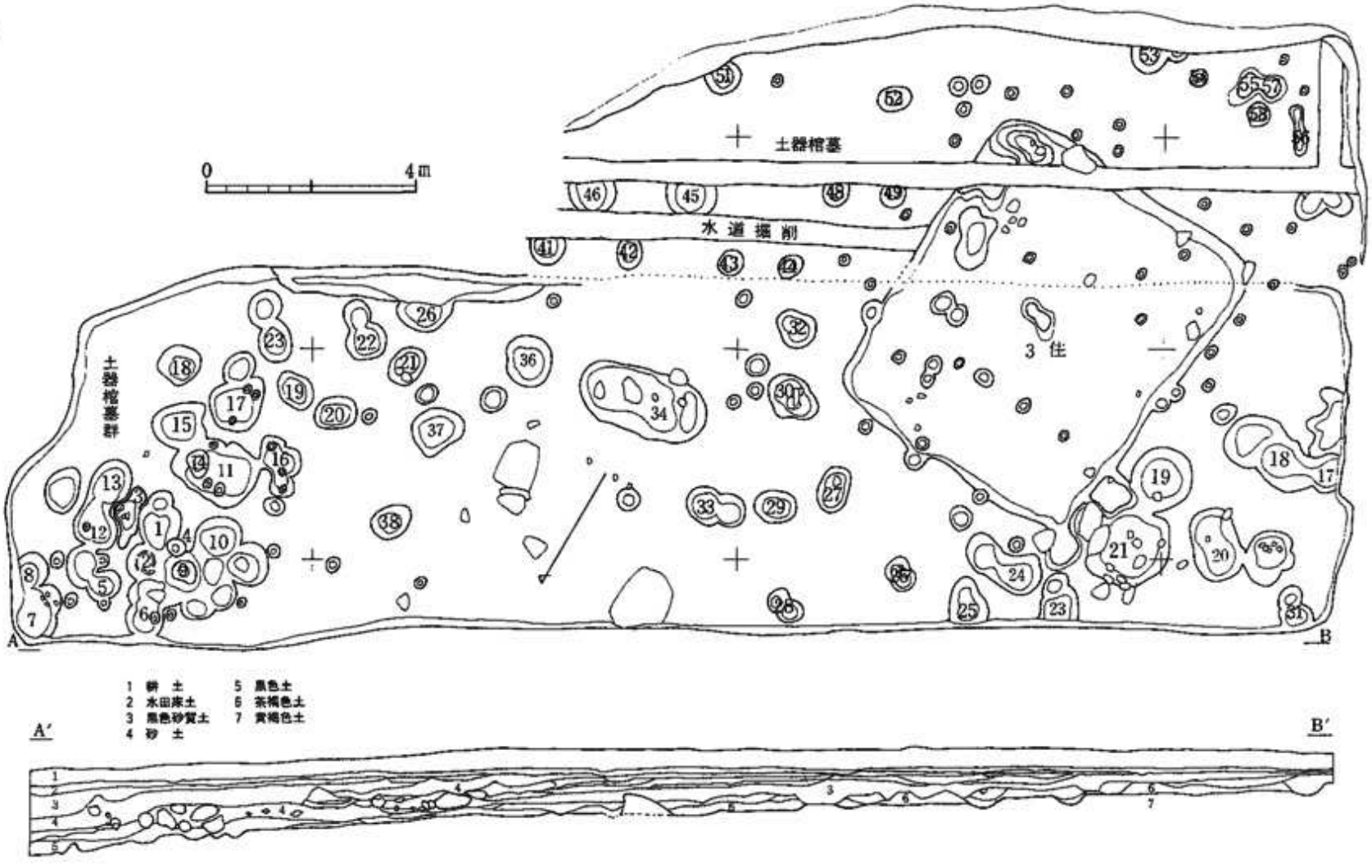
高森町全域でも同じようにいえることであるが、山麓扇状地から中位段丘あたりまでは、平安時代の遺物・遺構の発見が多いのに、中段の段丘先端地域になると、縄文時代や弥生時代の濃厚な遺跡が数多くありながら、今のところほとんど発見されていない。今回の深山田遺跡の住居址・建物址の発見は、これら二地域の中間地帯にあり、さらに下方にかけて発見されるかどうか興味深いことのひとつになる。上段地域における平安時代の遺構検出の下限になるか、下方に続くのか、今後の調査の大きな課題と思われる。調査地から50mほど下方のツカゴシ地籍では、平安時代かと思われる須恵器片が採集されているので、確かめたいところでもある。

高森町東山道研究会では、通過推定地を吉田地籍上段の中央線辺りと推定している。他の研究者の中には、座光寺の恒川地籍から、下市田の金部地籍を通過して、山吹八日市場・小沼地籍を推定する人もいる。

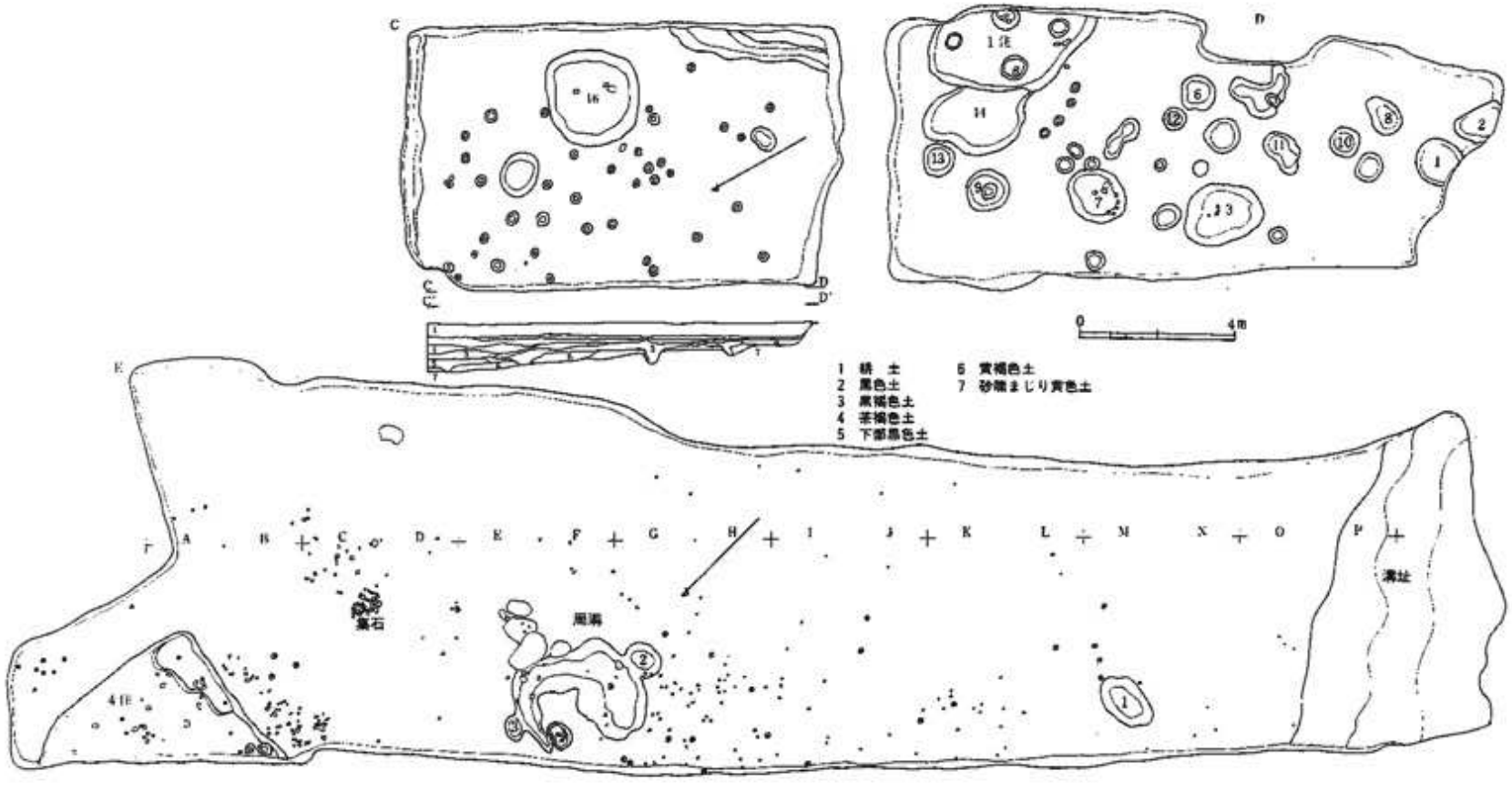
東山道通過推定地とするならば、奈良・平安時代の遺構検出・遺物発見があってもよいと思われる。奈良時代はともかく、平安時代の遺構・遺物の所在は不可欠と思っている。そのためにも、深山田遺跡の平安時代の遺構発見はひとつの示唆が与えられたと考えられる。



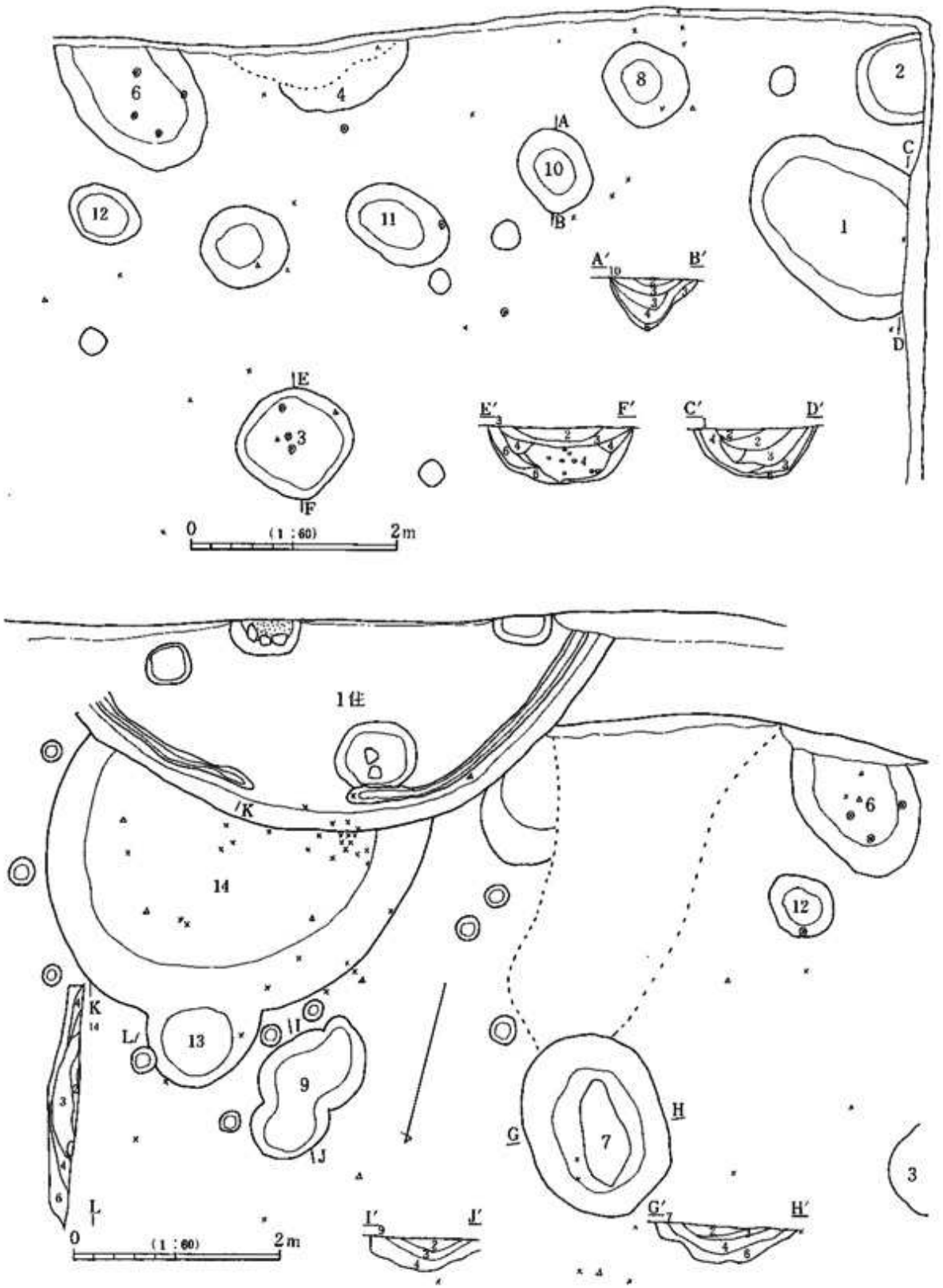
第５図　深山田遺跡調査区位置図



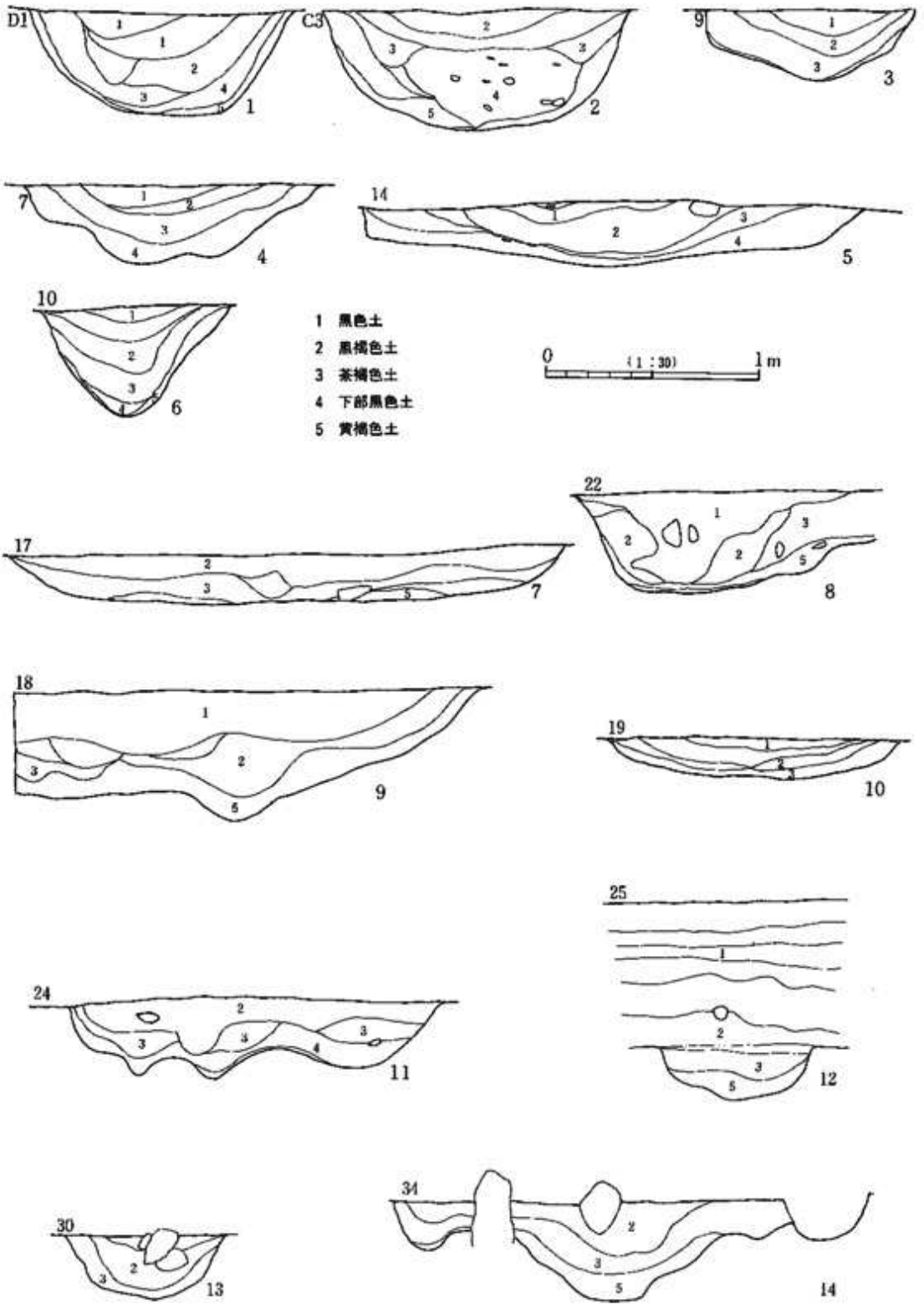
第６図　深山田遺跡遺構全体図 (1)Ｃ地区



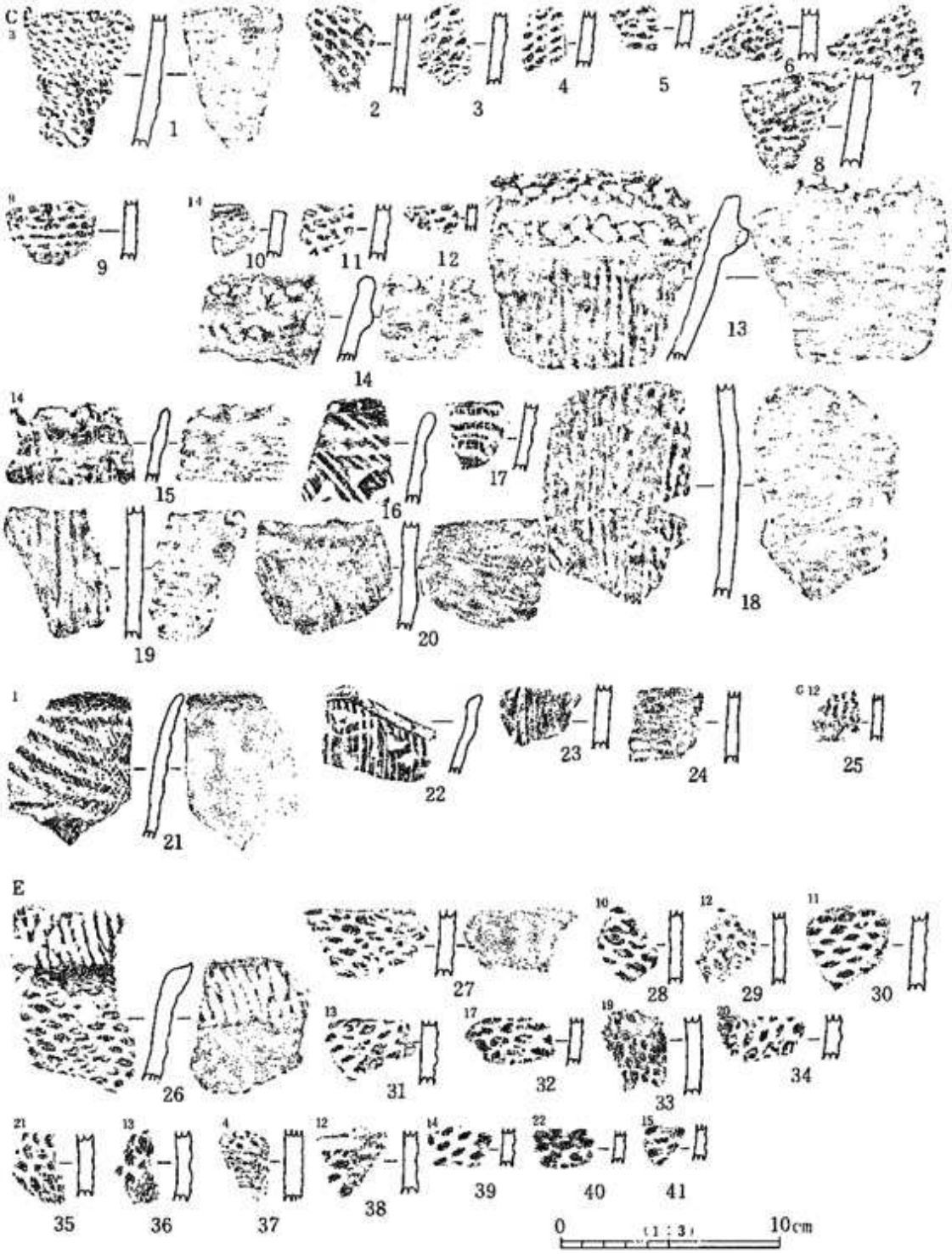
第７図　深山田遺跡遺構全体図 (2) Ｃ・Ｄ・Ｅ地区



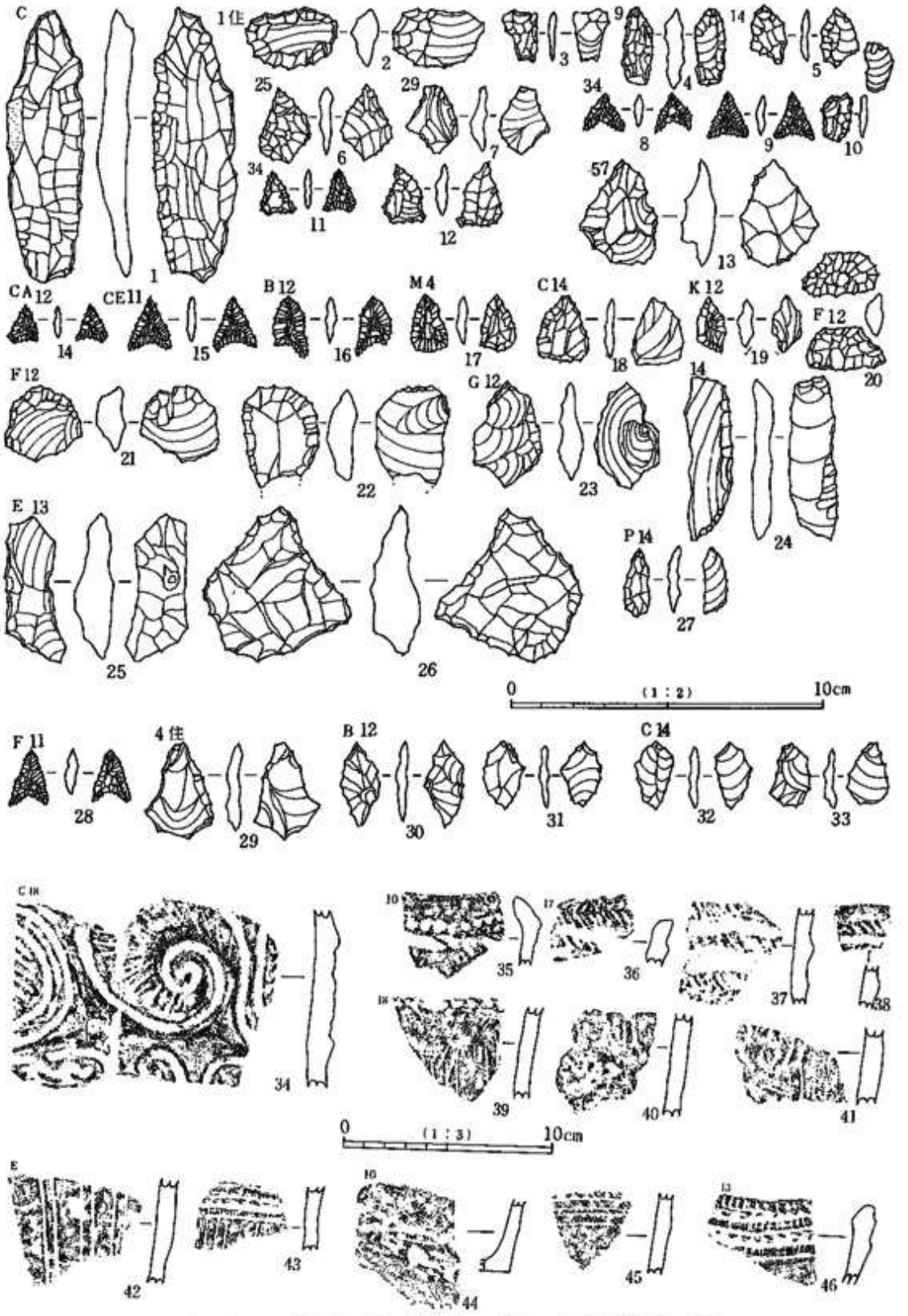
第8図　深山田遺跡1号住居址、C・D地区の土壙



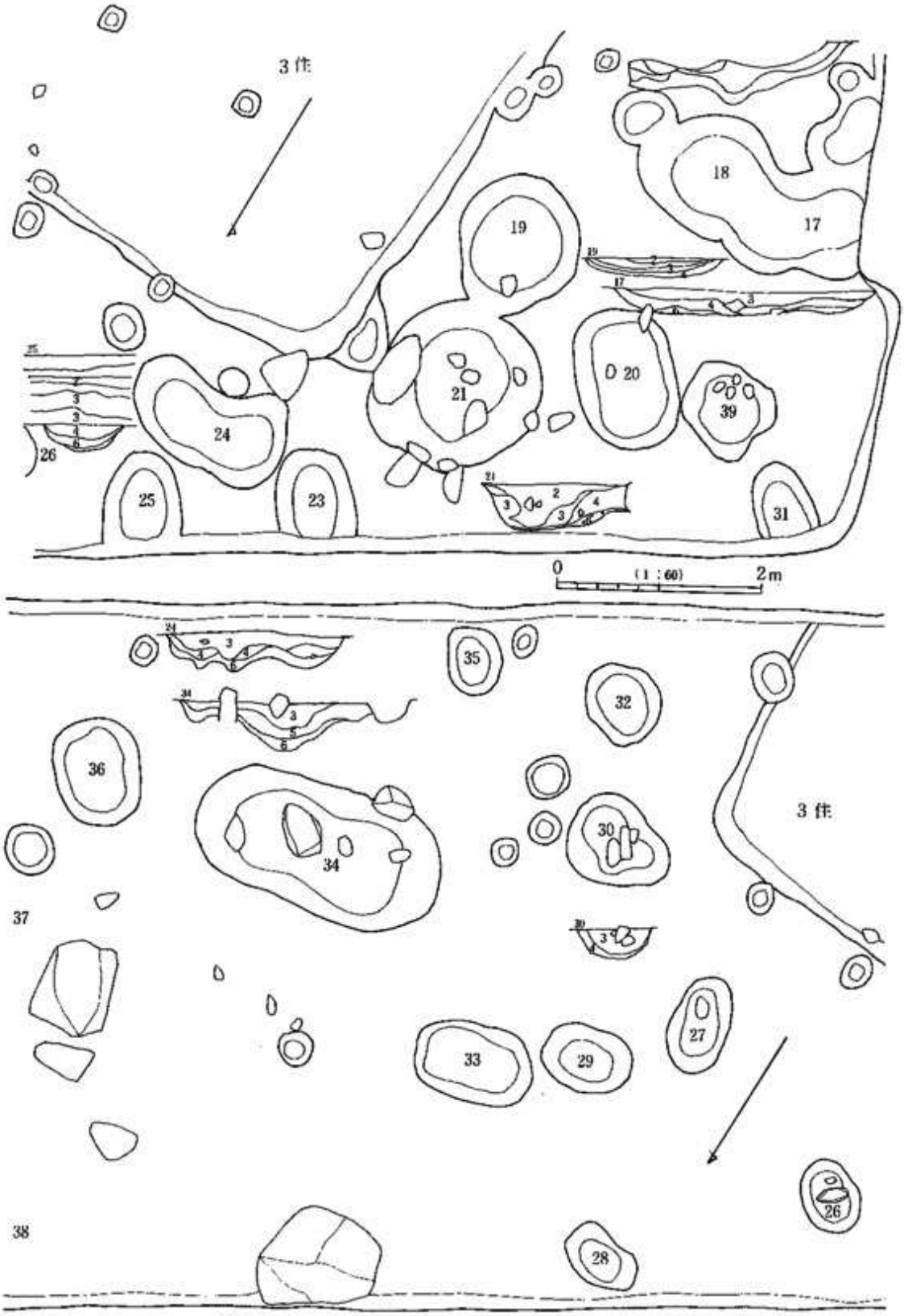
第９図　深山田遺跡Ｃ・Ｄ地区土壙断面図



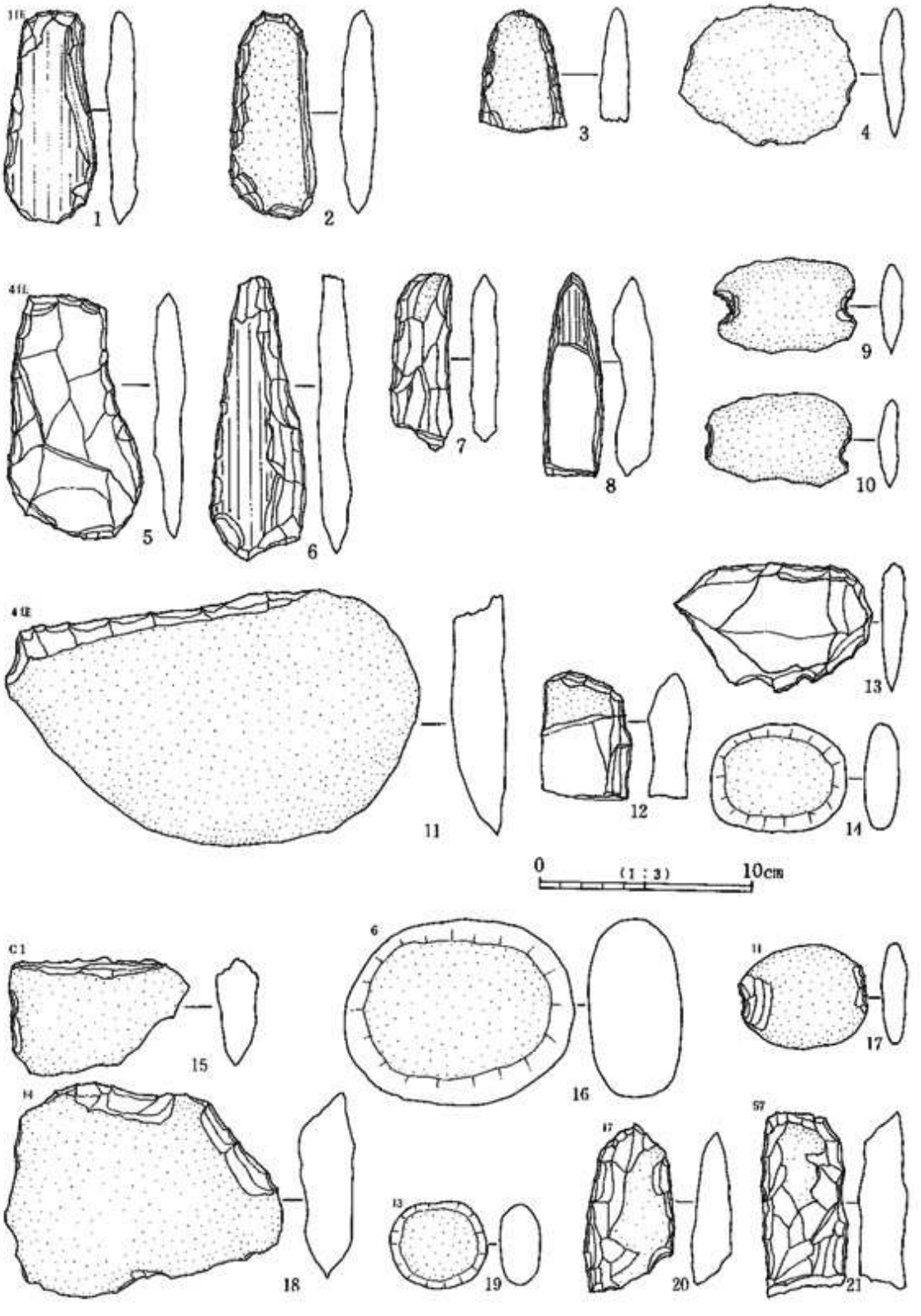
第10図　深山田遺跡C地区土壙3・9・14、E地区出土土器



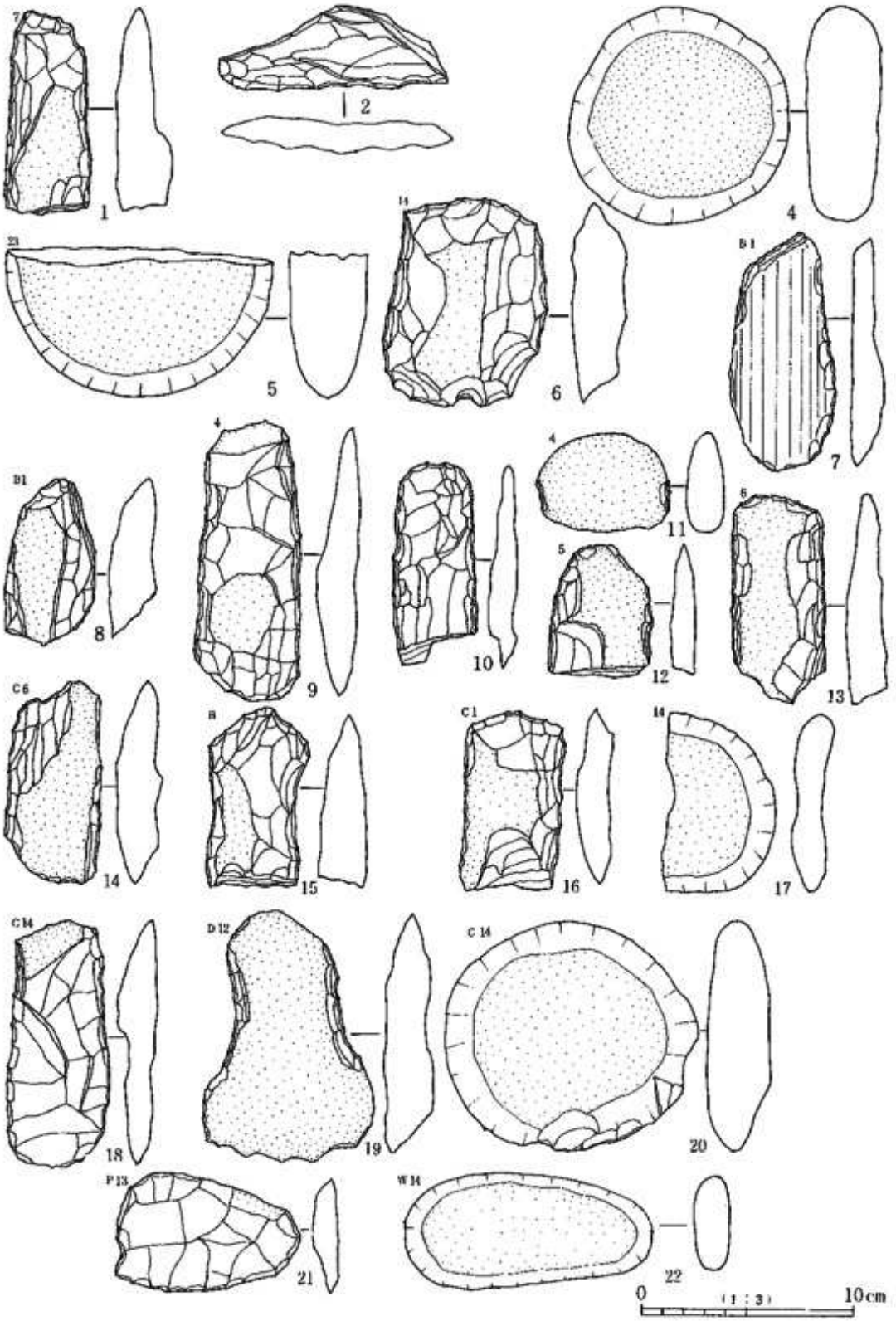
第11図　深山田遺跡土壙、各・グリット出土石器・土器



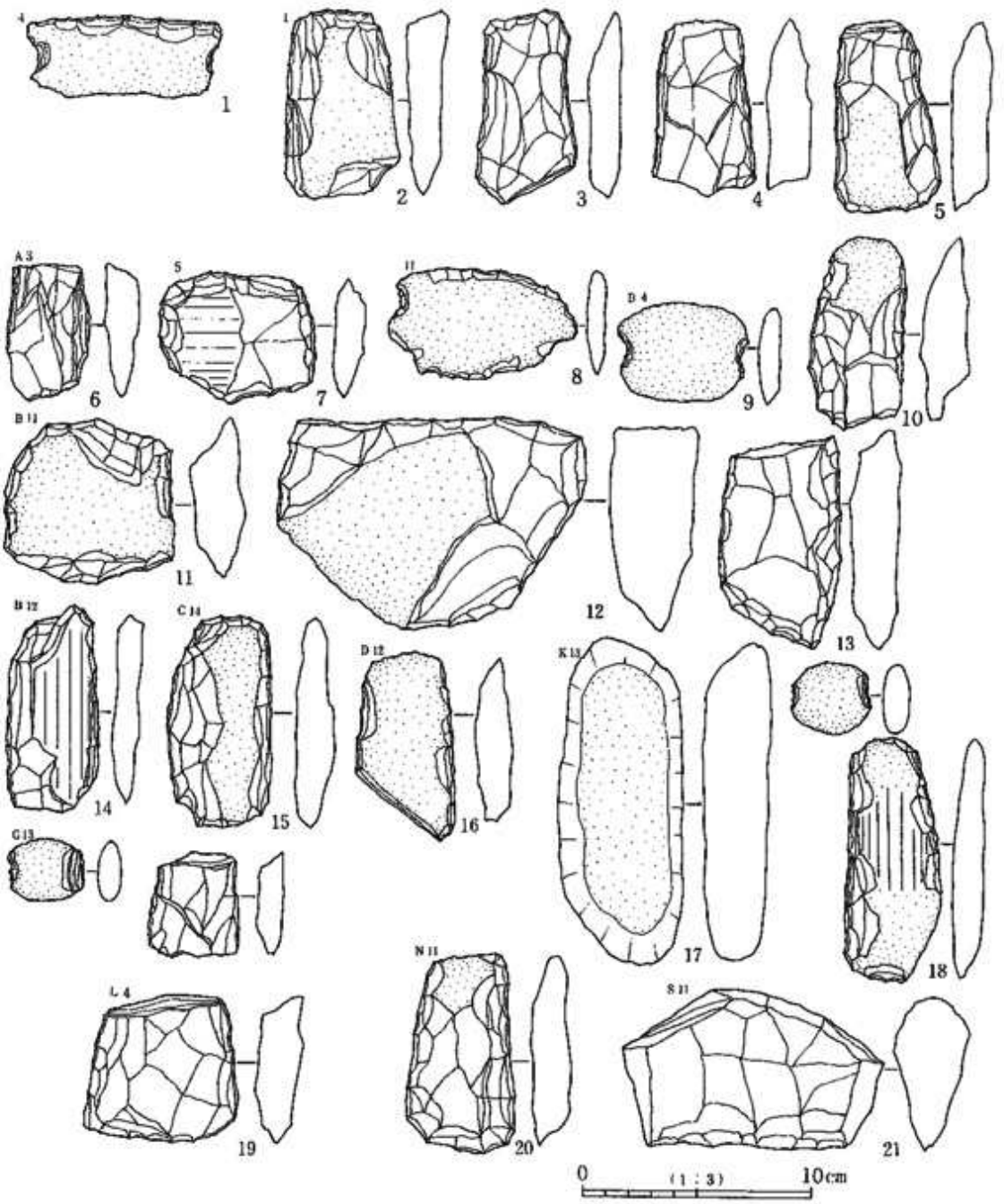
第12図　深山田遺跡C地区3号住居址周辺の土壙



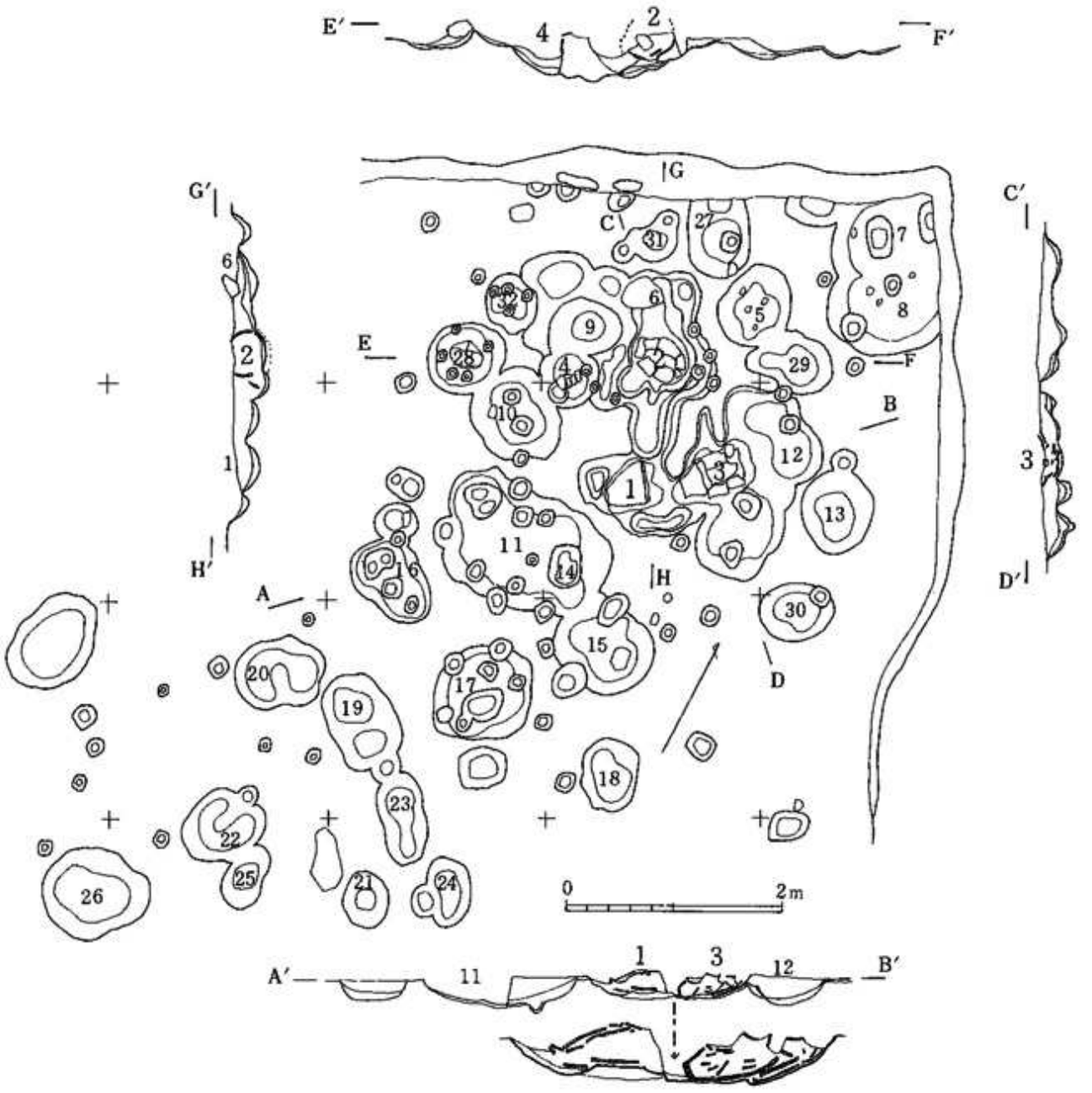
第13図　深山田遺跡1・4号住居址、C地区土壙出土石器



第14図　深山田遺跡土器棺墓、B地区土壙出土石器

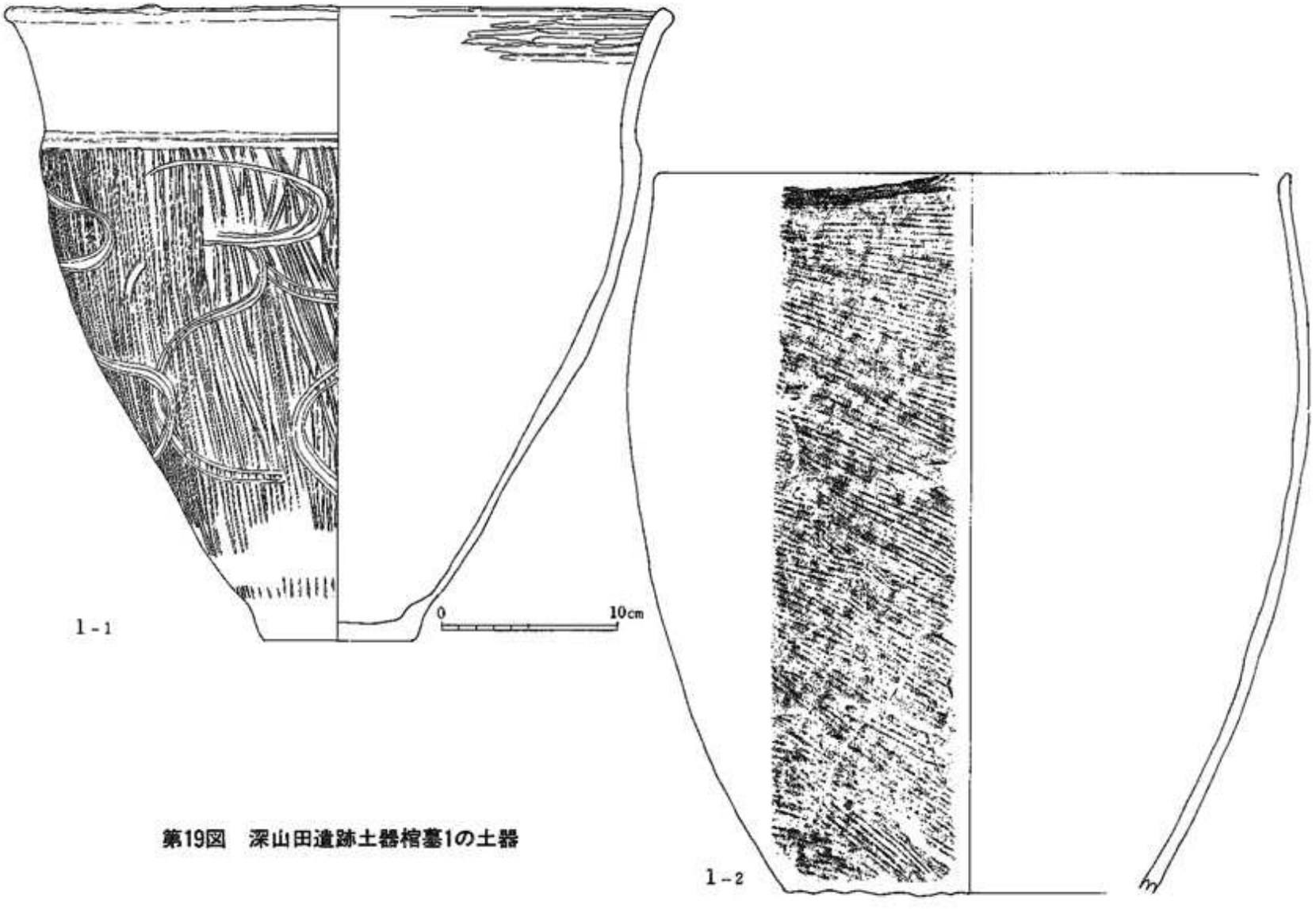


第15図　深山田遺跡E地区土壙4、溝址1、グリット出土石器



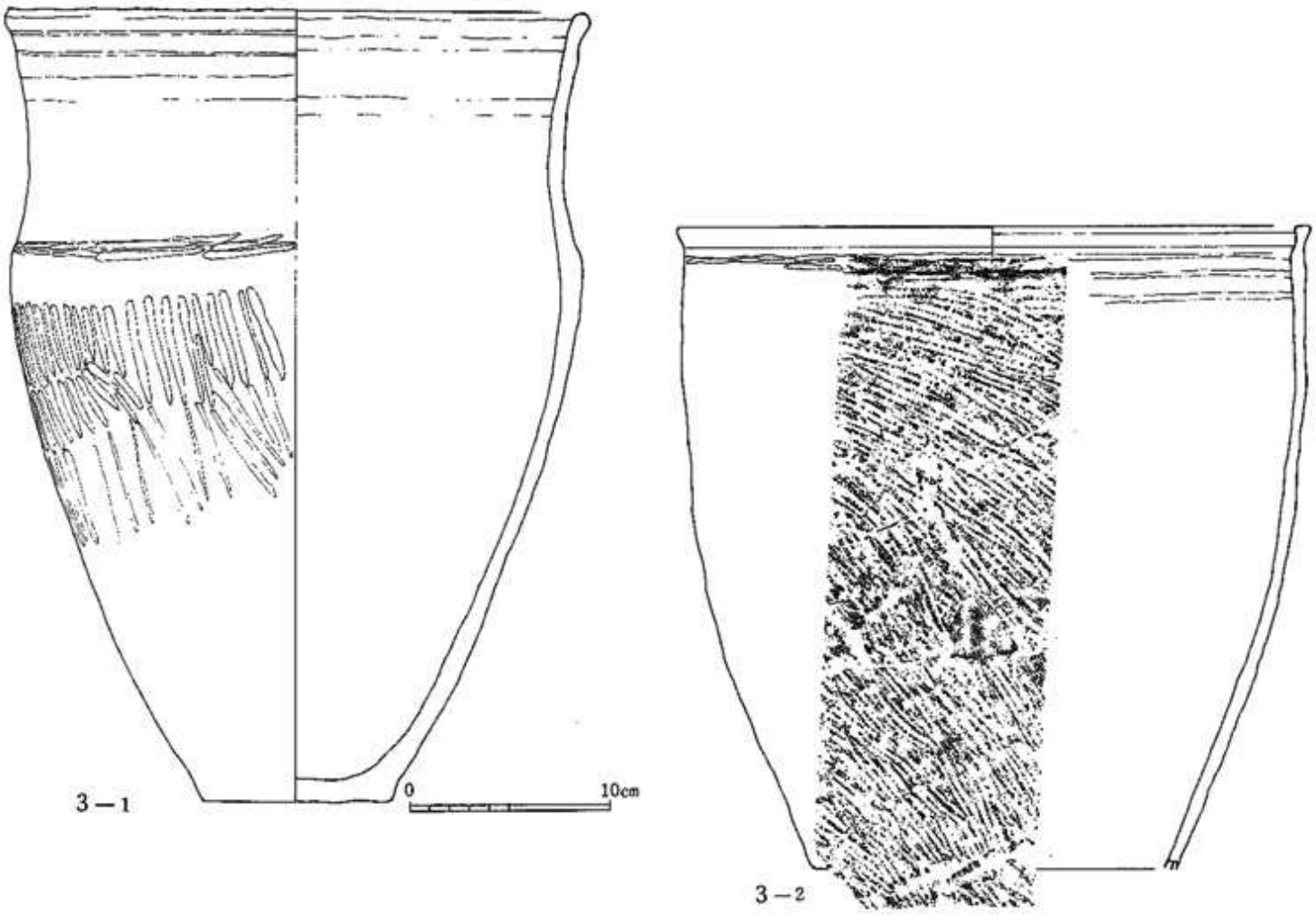
第16図　深山田遺跡土器棺墓群全体図

第17図　深山田遺跡土器棺墓1・3・2・4土器出土状況

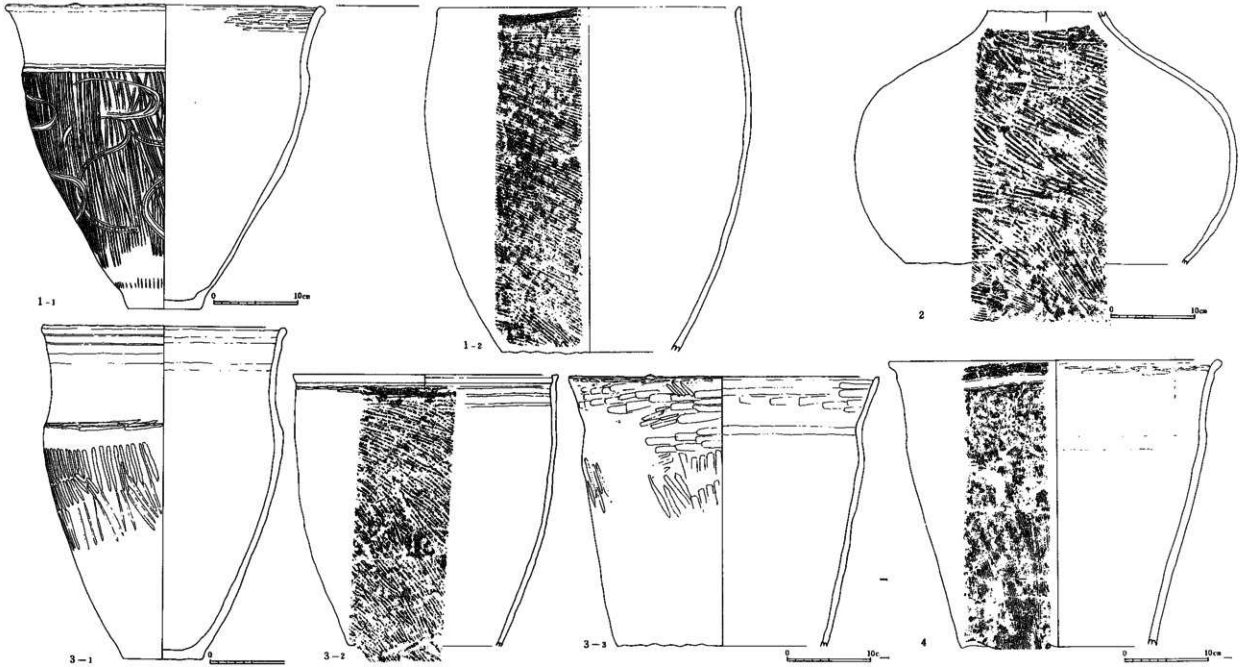


第19図　深山田遺跡土器棺墓1の土器

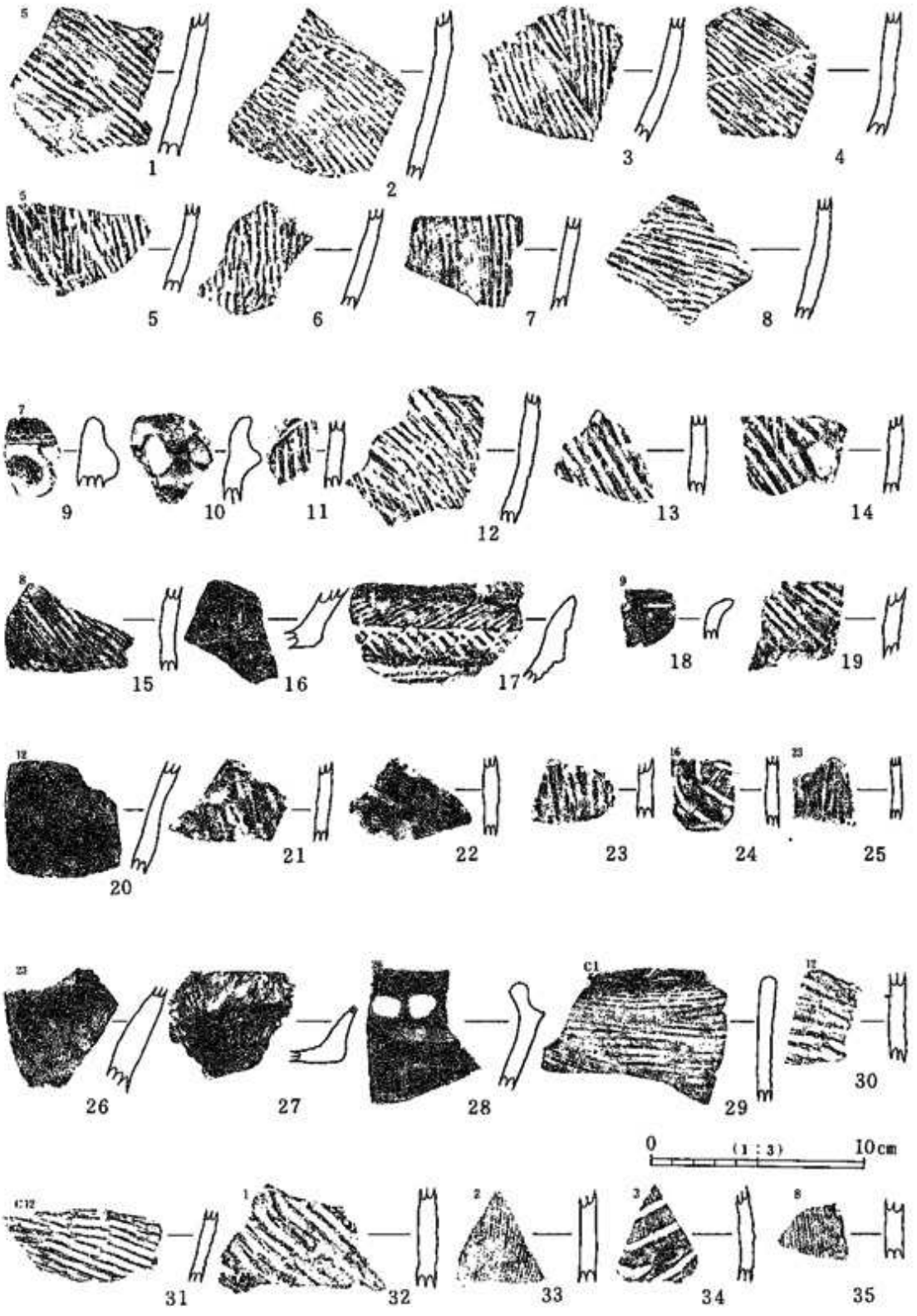
第20図　深山田遺跡土器棺墓2・4の土器



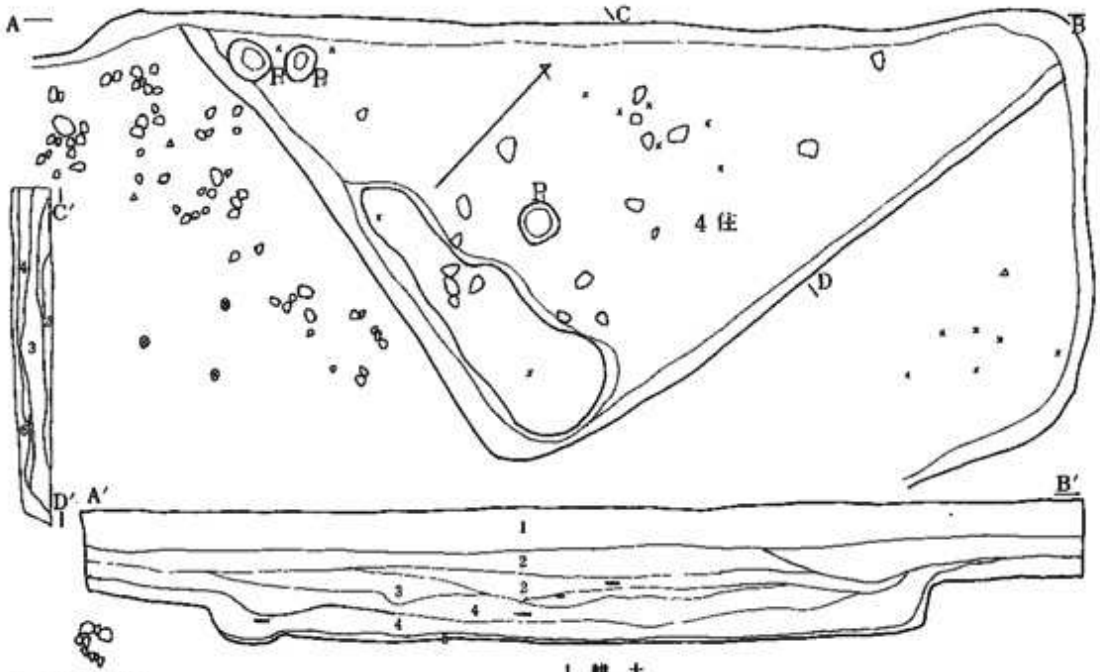
第21図　深山田遺跡土器棺墓3の土器



第18図　深山田遺跡土器棺墓1・2・3・4・出土土器



第22図　深山田遺跡土器棺墓等出土土器

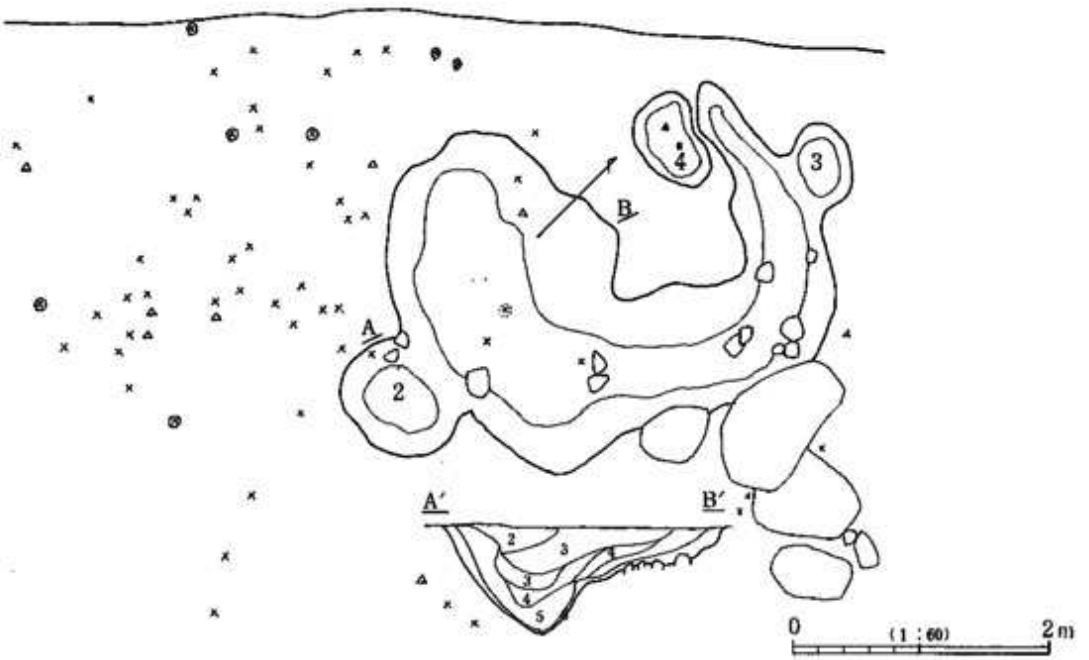


1．4号住居址

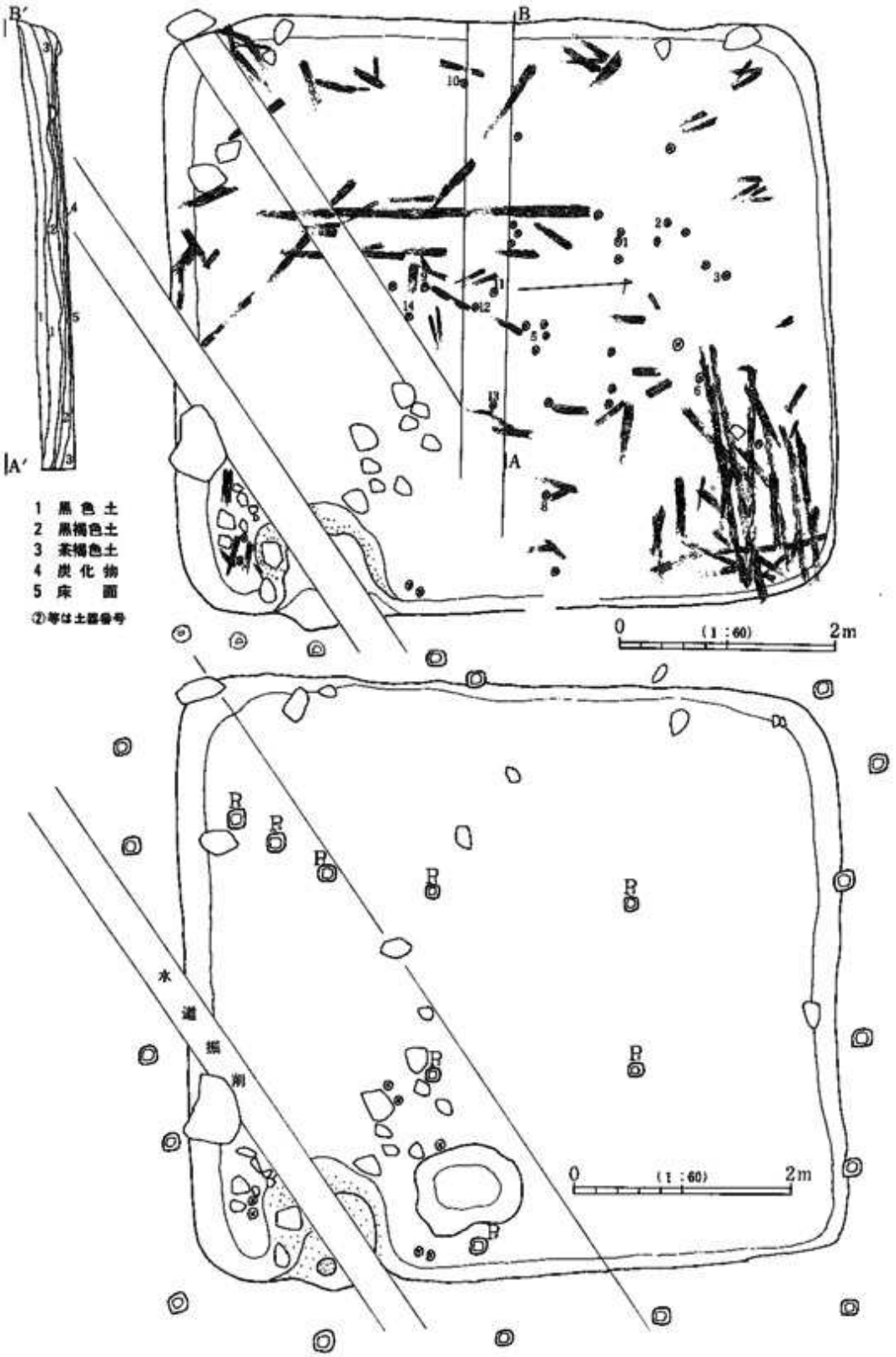
1 耕 土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 茶褐色土
5 下部黒色土
6 黄褐色土

0 (1:60) 2m

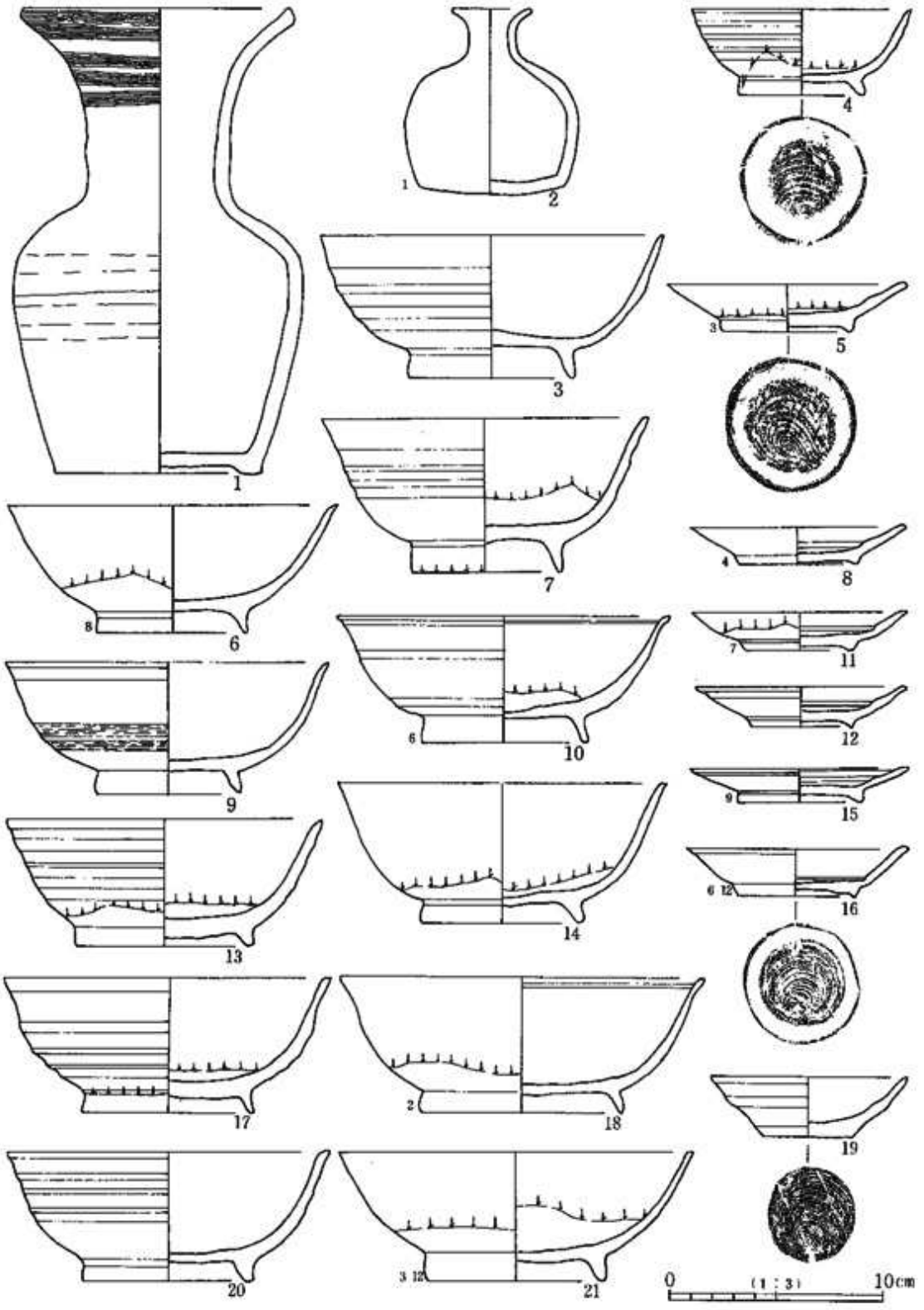
2．周溝状遺構と土壙2・3・4



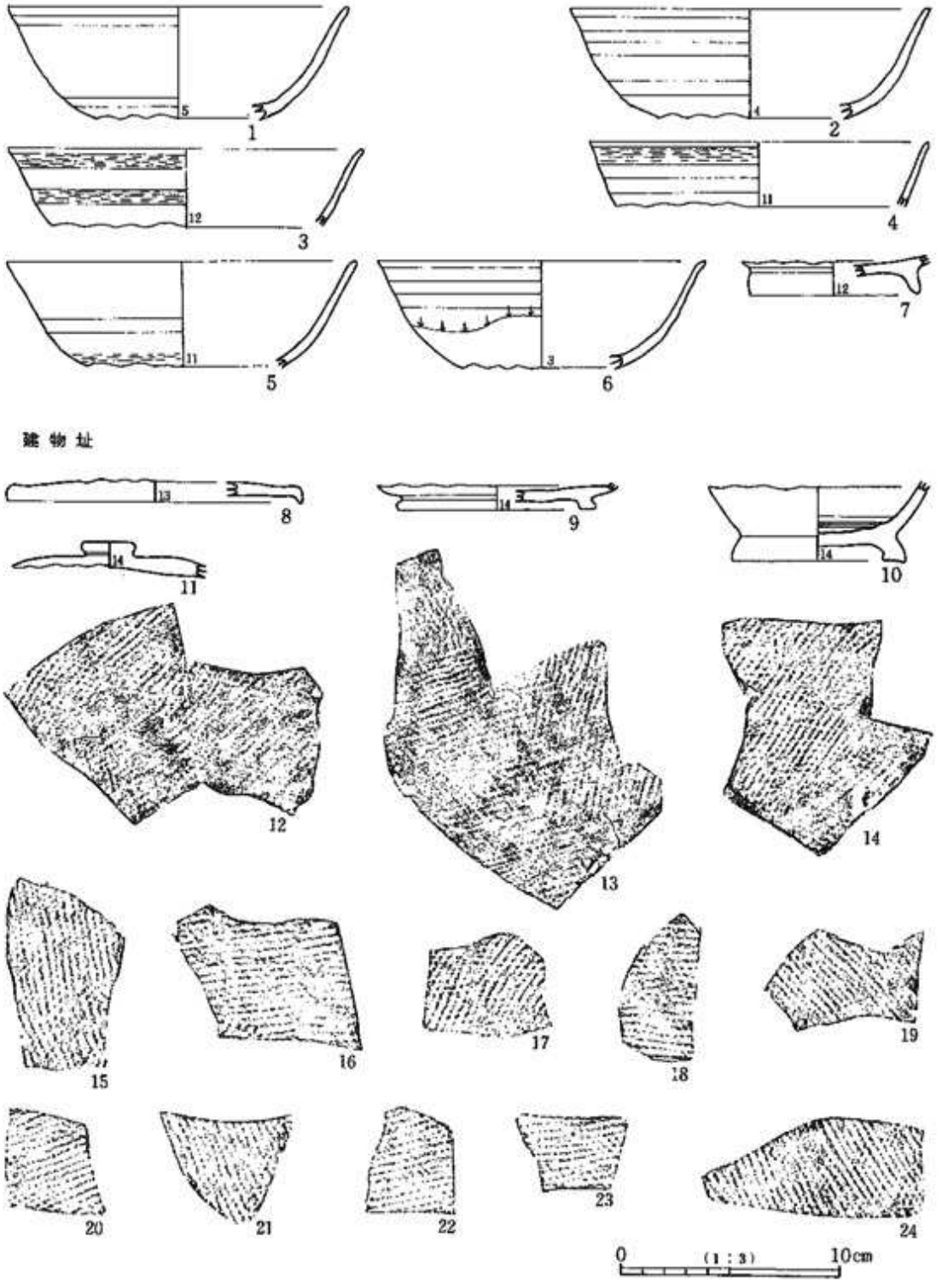
第23図　深山田遺跡Ｅ地区4号住居址、周溝、土壙



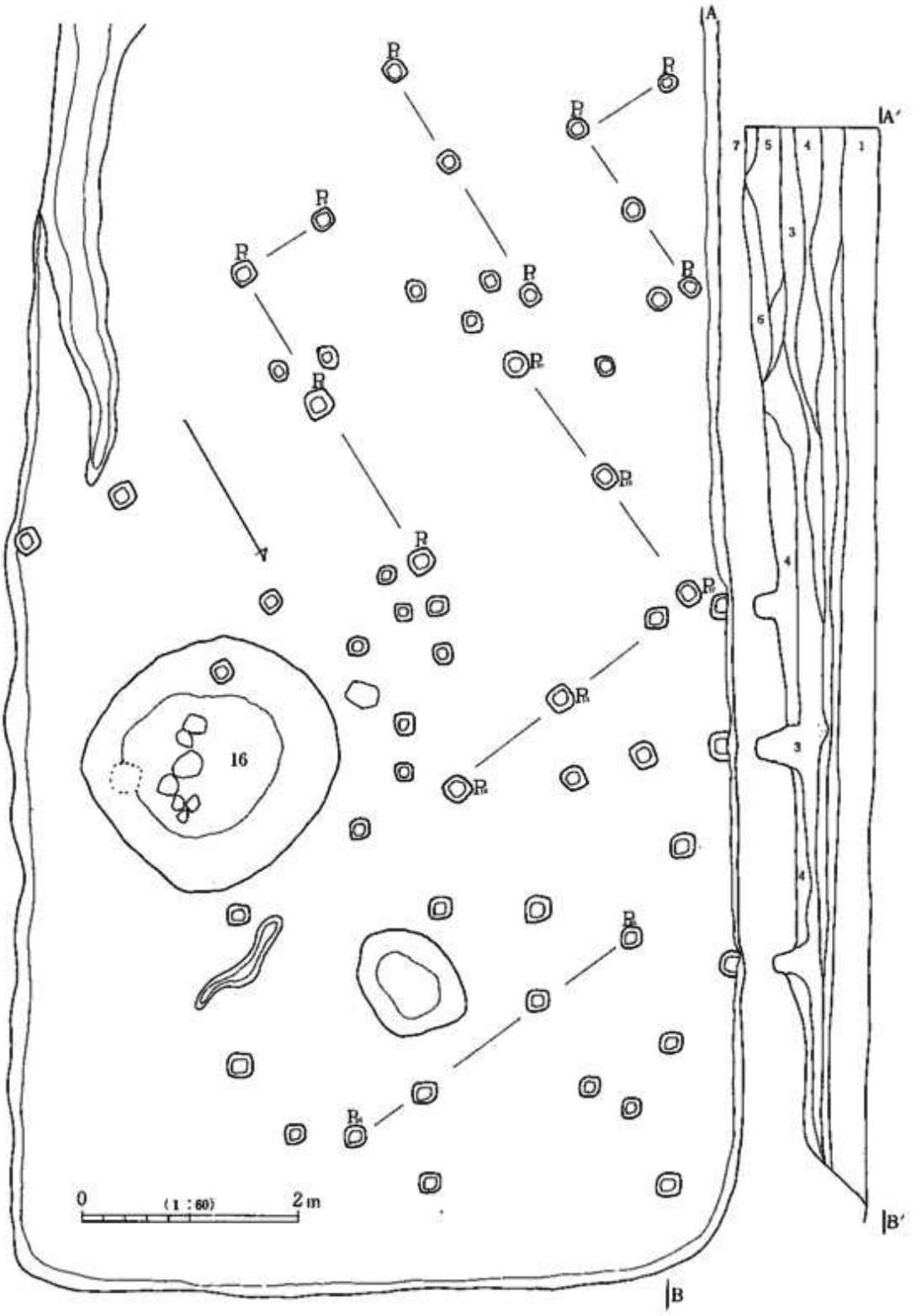
第24図　深山田遺跡3号住居址(上層炭、下層全体)



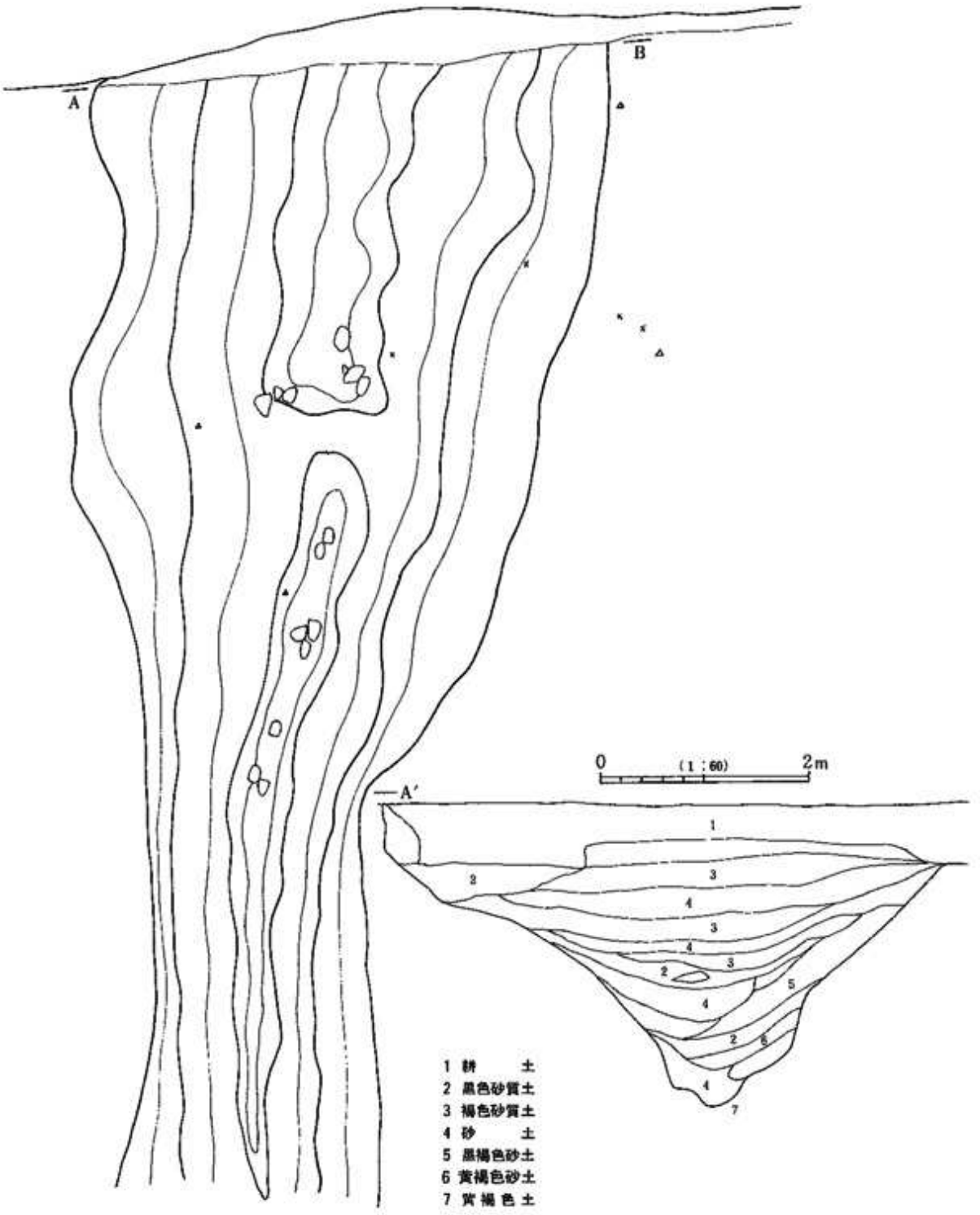
第25図　深山田遺跡3号住居址出土土器（1）



第26図　深山田遺跡3号住居址・建物址出土土器(2)



第27図　深山田遺跡C地区建物址群



第28図　深山田遺跡E地区溝址

Ⅲ. 調 査 の 結 果

2．広庭遺跡（広庭地籍）

胡麻目川の右岸一帯を広庭地籍と呼び、大島川と胡麻目川に間する吉田地区上方地域は集落の密集するところで、前々から遺跡の濃厚なところとして知られている。

広庭遺跡の範囲は、県道飯島・飯田線から東側下方で、地籍名でいうと花立・正名口・穴田・タナダ・ヲヲイシ・貉塚(狸)・牛王地・広庭・キタムキ・カンダガイト・スナヤトメ等に分れている。

昭和54・55年頃に行われた土地改良事業前の地形景観を、その時の調査報告書では、「県道西側、大島山東部遺跡花立地籍と一連の平坦面で、その東側は緩やかな斜面となる正名口やタナダがある。農協吉田支所付近で平坦になり、さらに、その東のヲヲイシ・貉塚あたりで傾斜がやや強まるが、やがてその東の広庭あたりではまた平坦面になる。開析面としての性格を持つ吉田地区の主要面は、全体的にみれば西高東低する緩傾斜面ではあるけれども、よくみると斜面と平坦面が相互に続き、また、それぞれが単一の地形ではなく、放射状の凹地が西から東へ刻まれている。西端に当たる正名口から東側の広庭にかけては、階段状の台地に乗ることになる。台地の北側は胡麻目川に向けて北東に傾く斜面になっている」と書かれている。

昭和55年頃の構造改善事業により、外見の地形は大きく変容したものと思われるが、今回の発掘調査により起伏の大きい地形が各所で観察され、台地と台地の間の凹地の存在が実証されている。南西側のヨシガタ遺跡周辺ではとくに顕著であった。

西端で最も高所に位置する正名口で標高570m、東端のキタムキ地籍では520mを測る。従来から広庭遺跡として登録された範囲が広いことや、地形面からみて一様でないことから、以前に、二年次にわたる土地改良事業に先立つ発掘調査では、広庭遺跡正名口地籍などと呼び分けている。その例に倣うと、今回の発掘調査地は広庭遺跡「広庭・桜垣外」地籍となる。なお、従来広庭遺跡B・C・D地区と呼ばれたミヤマダ地籍は「深山田遺跡」として広庭遺跡と分けて登録することにした。

広庭遺跡一帯は、吉田地区上段の中心部とその周辺部に当たり、中世頃、ここを本貫とした吉田氏の開発したところで、古い農家も多く、古字にもマセ口・殿田があり、下方へ行くとカメヤシキ・蔵ヤシキ・シホヤシキ・小路・古屋敷・アラヤシキ等集落・施設を物語る字名が残されている。南側の台地上には城山城跡が残り、今回の発掘調査でも広庭遺跡B地区では工房址・竪穴址・水路址が、C・D地区では竪穴址・掘立柱建物址群が検出され、西南のヨシガタ遺跡では礎石配列を持つ建物址等々中世遺構が検出され、城山城を取り巻く中世期の主要遺構群の所在が推定される。

広庭遺跡内の発掘調査例は多く、昭和54年に縄文時代中期住居址３・弥生時代後期方形周溝墓を検出した銘塚地籍（広庭Ａ）、昭和55年に縄文時代早・中期住居址３・古墳時代住居址３・竪穴址・楕円形周溝墓を検出した北向地籍等で、多くの遺構が検出されている。それでも、上方の大鳥山瑠璃寺周辺に比べると調査例は少ない方である。

今回の発掘調査地は、1610・1611番地から1209番地あたりに当たり、町道１－５号線北側をＡ地区、南側水田をＢ地区と呼び分け、一段高い牛王地地籍の水田の北から50mをＣ地区、それより南側がＤ地区である。なお、Ｂ地区には道路予定地東側に、道路面まで掘削して土地造成をするところがあるので、そこも含めて調査が行われている。

発掘調査の結果は、縄文時代中期住居址１・同土壙群（79基）・弥生時代住居址１・平安時代から中世にかけた掘立柱建物址１・中世建物址６・同工房址３・同竪穴址８・同水路址１・溝址４等が検出され、比較的遺物出土の多い縄文時代中期の土壙群、中世の多様な遺構群が検出されたことは大きな成果のひとつである。

〔1〕 縄文時代中期・弥生時代の遺構

① １号住居址（第32・33・37・40図、写図19）

Ｂ地区の北側で、縄文時代中期の竪穴式住居址が検出されている。町道１－５号線沿いに大きな溝址４・５（自然流路）があり、ともに幅３m以上に及ぶ大きな流路で、北と南に分流している。この流路にはさまれて住居址の一部が残されている。縄文時代中期の住居址と弥生時代後期の住居址である。１号住居址は縄文時代中期、２号住居址は弥生時代後期である。

１号住居址は、南側と北側の流路にはさまれてほぼ３分１残されている。残された部分でみると、楕円形のプランの竪穴式住居址で、南北4.5mほどと推定される。西側に掘り込まれた炉の痕跡がある。原形は確と分らないが、７個ほどの石が置かれ、炉底に厚さ４cmほどの焼土があった。石囲い炉があったと思われる。第33図の土器と石器が出土している。壁高は旧来の水田造成により削られて残りが少ないが、一番高いところで20cmほどである。柱穴と思われるピットはＰ１～Ｐ３の３個が確認される。床面の確認もやや困難であったが、遺物の出土レベルから判断せざるを得なかった。東側に調査用地の余裕はあったが、流路のコースでもあり、排土の土盛り場として使用したので、調査されていない。

出土遺物はこの時期としては少なく、炉内の土器片（第33図）炉横の削落面から出土した把手（33図３）のほかは土器片20片程度である。40図２～11は出土石器である。

② ２号住居址（第33図）

Ｂ地区北側の溝址４の検出中に、黒色土の落ち込む方形の部分が検出され、石包丁形石器・

土器片が出土したので、２号住居址とした。落ち込みの部分は約1.5mほどしか残されていないが、東側にコーナーが残り、床面らしいところもほんの一部残されている。

この住居址と繋がるかどうかはっきりしないが、試掘時に重機による排土作業中、この周辺には広い範囲に黄白色の砂層が広がり、その中に黒色土の堆積するところが多く、弥生時代の土器片が発見された。この辺りに弥生時代の住居址があったことも推測される。

弥生時代の遺物は、Ａ地区でもＣ・Ｄ地区でも発見はされているが何れも僅かで、遺構の確認はこの住居址だけである。

③　Ｂ地区の土壙群（第34・35・36・37・38・40図、写図17）

本線通過地の東側から、東側の削平予定地全域に約50基の土壙が検出されている。土壙一覧表（表４）にあるようにいろいろな形態があるが、この中で、深くて形態の整ったもの、遺物出土の多いもの、炭・焼土等を伴うもの等を上げると次のものである。完形・半完形の土器が出土した土壙は、１・26・31であり、深くて筒形形態で遺物出土が多い土壙は７・８・11・16・18・26・27・28・29・32が上げられる。深くて摺鉢状の土壙は、１・３・12等が上げられ、炭の出土が多いものは土壙１・８、炭も多く焼土を伴う土壙は７である。これらの深くて土器出土の多い土壙の配列をみると、中には隣接するものもあるが、（29・32・30・31や26・27の例）調査地の中では３～４ｍほどの間隔に位置し、回りにいくつかの土壙を持つ配置が観察される。

土壙１（第34・36・40図、写図21・24）

調査地中央西側で検出された土壙で、長軸1.2m・短軸1.1m・深さ44cmを測る摺鉢状の土壙である。試掘の時に、重機で掘り下げが過ぎたところであるから、さらに深いと思われる。東側の壁縁から壙底にかけて、１個体の土器片が表裏重なって貼り付くように出土し、錘石４個を含めて７個の石器が副葬され、炭化物の混入も多かった。中の土器が復元されたものが、第36図１で、口径38cm・器高41cm以上・胴部最大幅30cmで、口辺に爪形の帯が付けられ、頸部には縄文を地文にした縦の竹管が施され、胴部には半截竹管の弧文・横びきの文様で構成された土器である。

土壙２６（第35図）

工房址２の南側に、筒形で深い土壙26・27が並ぶ。長軸1.3m・短軸80cm・深さ45cmのもので、壙底に数個の石と共に、１個体の土器片が集中していた。調査終了まぢかに発見された土器群で、壙底は確かめられていないので、50cm以上の深さがあったかもしれない。復元された土器は竹管・縄文で構成される文様で、土壙１・31の土器に類似している。

土壙３１（第35・36図、写図21・24）

調査地の東南部、工房址１の東側の溝に沿って南から土壙31・30・29・30が並ぶ。一番南側の土壙31は、長軸２m・短軸1.4mで、深さ31cmであったが、その中層から甕形土器（第36図３）が横倒しに潰れ込んで検出されている。円板１・石器７も出土している。この土壙は浅いが、北側の30・29・32はとくに深く、土壙30からは、土壙31と類似の土器口縁が出土し、29・30からは円板が出土している。ここの土壙群の内では、筒形で深く、遺物出土の多い土壙が最も密集しているところである。

出土した土器は浅いこともあって、欠損して部分が多いが、口径33cm・器高35cm・底部径11cm、口縁に四つの突起が付けられ、押引の帯が付く。頸部までは縦の竹管、その下から胴部にかけて太目の縄文を地文にして半割竹管の区画文が並ぶ。底部に近いあたりは横走する縄文帯が付いている。土壙１・26に類似の土器が出土している。

土壙７（第34・37・40図、写図22）

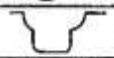
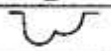
Ｂ地区調査地の東側、流路の転石群の近くで検出された土壙で、長軸 106cm・短軸88cmの楕円形の掘り込みで、深さ78cmを測る深い筒形の土壙で、覆土の堆積も複雑である。上層には黒色土・黒褐色土の堆積が厚くあり、黄混じり茶褐色土中に炭や焼土が検出され、その厚さは10cmほどに及ぶ。この層からの土器片・石器の出土が多い。この焼土の下層にも黒色土の堆積層がみられ、壙底やその近くからも土器片・石器が出土している。土壙７の周辺には他の土壙が無く単独配置で、土壙１と類似している。

土壙８（第34・37・40図）

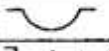
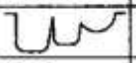
Ｂ地区中央工房址１の東側の土壙で、土壙17・19と接触するように並んでいる。長軸1.2m・短軸１m、深さ52cmあり、掘り方は中間に段を持つ二重構造の土壙で、段から上は摺鉢形・下は筒形である。覆土は総体的に黒色土・黒褐色土が多いが、段から上に炭の混入が多く、下層は茶褐色・黄褐色土の複雑な土層が入り組んでいる。土器片・石器等下層に多く10数点出土している。工房址１のピット群の多いところがあって、下層までの検出が十分でなかったので、未発見の土壙があるかもしれない。

Ｂ地区の土壙は西側本線用地内では、６基の土壙が検出されたが、遺物出土の多い土壙は１だけに留まっている。ＳＴno135 の用地境東南側・削平予定地に集中するが、その西側一帯には工房址１・２、竪穴址４や、それを取り巻くピット群があって、下層までの掘り下げが進んでいないところがあるから、確実なことは言い難いが、土壙群の中心は、東側一帯にあると思われる。深くて遺物出土の多い上記土壙の回りには、いくつかの浅い土壙が取り巻くように思

表4　広庭遺跡B地区土壙一覧　NO.1

地区	遺構名	長軸X短軸		深さ	断面形	出土土器	出土石器 出土遺物	備考
B	土壙1	120	110	44		甕、円板2	7	磨石打石
〃	2	67	58	15				
〃	3	160	105	52		6	1	
〃	4	58	43	23				
〃	5	86	83	10		2		
〃	6	100	60	6				
〃	7	106	88	78		34	8	焼土、炭が多い
〃	8	120	100	52		14	5	
〃	9	104	90	40		9	6	竹管ある
〃	10	102	96	23		5	1	
〃	11	150	96	41		19	3	半截竹管
〃	12	135	120	49		9	2	爪形
〃	13	136	110	41		5		
〃	14	114	104	34		5	1	唐草
〃	15	115	110	28		5	1	
〃	16	120	110	62		5	3	
〃	17	110	100	27		15	1	
〃	18	144	110	64		15		爪形
〃	19		76	38		3		
〃	20	116	110	42		7円板	1	加曽利E
〃	21	120	100	50				
〃	22	126	100	45		15	3	竹管
〃	23	140	140	29		18		爪形・竹管
〃	24					2	3	
〃	25	130	100	43		6	1	
〃	26	170	98	56		17	3	爪形
〃	27	120	94	78		16	1	
〃	28		235	111		19	7	
〃	29	110	70	66		30円板		

広庭遺跡B地区土壙一覧 NO.2

地区	遺構名	長軸X短軸		深さ	断面形	出土土器	出土石器	備考
B	土壙30	120	108	70		7	2	竹管、区画文
〃	31	202	150	32		壺1 円板1	3	
〃	32	126	100	67		16円板2	3	
〃	33	80	65	13				
〃	34	126	76	37				
〃	35	130	114	30				
〃	36	100	86	31				
〃	37	60	50	14				
〃	38	60	44	25		1		
〃	39	74	66	17		1		
〃	40	136	72	14		1		
〃	41	68	58	19			1	
〃	42	60	38	21		5縄文4中世1		
〃	43	68	44	36				
〃	44	84	80	22				
〃	45	64	50	23				
〃	46	126	90	30				
〃	47	130	90	39				
〃	48	100	94	38		1	1	
〃	49	104	56	21		1	1	
〃	50	100	90	37		2		
〃	51	80	78	21		5		
〃	52	112	70	34				
〃	53	130	90	24		1	2	
〃	54	116	96	30		3		
〃	55		96	34			2	
〃	56	78	56	34		1	2	
〃	57	64	48	28		1		
〃	58	76	72	14			1	

われる。また、東・南側一帯は地形傾斜もみられ、各所に中世ころの黒色土のピット群が所在し、下層黄褐色土までの検出が不十分なところもあり、下層には未発見の土壙もありそうに思われるが、高森町各地で検出された土壙群に比べると遺物出土の多い土壙群であった。土壙群の時期は、竹管文を主体にした縄文時代中期中葉の後半に比定されると思われる。

④ C・D地区の土壙群（写図20）

西側の一段高い位置（高低差1m）にあるC・D地区では、C地区で17基、D地区では30基で、合計47基の土壙が検出されているが、B地区に比べると浅くて不整形のものも含まれている。C地区の北側A・B列あたりで2基検出されたが、そこから南側P列まで30m余の間には土壙が発見されず、P列から南側D地区N列までの35mほどの間に、40基余の土壙が検出されている。

土壙の掘り方が検出面から40cm以上のものを上げてみると、C地区では土壙1・7・8・10・12・15の6基、D地区では土壙6・7・10・17・18・20の6基で全体の4分の1に当たる。この中で、掘り方が整い、遺物出土が多かった土壙は、C地区では1・10・12・15の4基、D地区では6・17・18・20の8基になる。掘り方が整い、覆土状態がよく遺物出土の多い土壙は、C地区では土壙12・15、D地区では6・20の4基に絞られる。

C地区土壙12（第43・44・46図）

C地区南V列に土壙11・12・15が並ぶ。土壙12は、長軸134cm・短軸110cm・深さ54cmで、茶褐色・黄褐色土の下に黒褐色土の堆積のある筒状の整った土壙である。遺物は土器片・石器で、第44・46図にあり、爪形文を主体にしたものが多い。

C地区土壙15（第43・44・47図、写図25）

土壙12の西側に続く土壙で、長軸108cm・短軸104cm・深さ49cmを測る。隅丸方形状の整った土壙で、褐色土・灰褐色土の中層から黄褐色土の下層にかけて土器片の出土が多く、17点を数える。第44図47～49の土器で、中期中葉に近いものである。

D地区土壙6（第43・44図）

D地区の中央I列にある土壙で、長軸120cm・短軸80cmの楕円状の土壙で、深さ47cmを測る。上層は黒色土の堆積が厚く、壙底に近い10cmほどには茶褐色土があり、その上層黒色土中から土器片9・石器3点（第44図51～53）が出土している。C地区15の土器に類似する。

掘り方は筒状に近い整った土壙である。この辺りを限界にして南側は転石の多いところで、西側上方は上方水田の土手下でもあり、黒色土の残りがあった。土壙20のほか、いくつかの土壙があったが、東側は水田造成の掘削が進み、砂礫土の堆積が多く遺構の検出は少ない。

D地区土壙２０（第43・45図）

D地区M列で検出された土壙で、長軸 110cm・短軸70cmの楕円形を呈し、深さは45cmある。黒色土・黒褐色土の堆積が厚く、壙底10cmくらいは茶褐色土が堆積し、深い摺鉢状の土壙である。このあたりには10基に近い土壙が検出されているが、浅いものが多く、東側の用地外に続くものが多い。

遺物は土器片20点ほどと、石器５点が出土している。第45図13～22で、爪形文を主体にした土器片の出土が多い。

C地区南側とD地区にかけた土壙をみると、C地区S列あたりはまばらであり、D地区のH列あたりに集中する傾向がある。その南側はまたまばらになることから、用地外西側・東側を含めて弧状に続くのかもしれない。土壙出土の土器片は、縄文時代中期中葉後半の爪形文・竹管文のものが主体のように思われるが、土壙外の周辺からは、縄文時代後期の土器片も多く発見されているので、土壙の中には後期のものもあり、溝状遺構が２～３あるので、これらが後期に属するかもしれない。また、中世陶器片も南・西側で発見されているので、その時期の遺構が重複していることも考えられる。

(2) 平安時代・中世の遺構

平安時代と思われる土師器・須恵器片がC地区の南側で検出され、中世以降の遺物はA・B・C・D地区全域から発見されている。遺構としてとらえられたものは、工房址・竪穴址・掘立柱建物址・土壙・水路址・溝址等で、B地区からD地区全域に広がっている。

① 工房址１（第48・49・50図、写図26）

B地区南側で検出された溝状の凹地・焼土と掘り込み・大小さまざまなピット群で構成される遺構群を工房址１とした。その範囲は中央にある３ｍ×３ｍほどの凹地を含めて、西側の溝址・東南の溝址・周囲のピット群を含めると10m×15mくらいになる。中央の窪みには、上面に焼土塊・下面に炭混じりの黒色土が堆積し、片口形の陶器片が集中している。この黒色土を取り除くとピット群があり、焼土を中心にして、住居址の床の硬さまではいかないが、タタキ状の硬いところがある。ここを中心にして外側に多くのピットが取り巻いている。これらのピットは径５cm～15cmと大小まちまちであり、深さも５cmほどのものから、20cm以上に及ぶも

のもある。第48図に太線で表現したピットが掘り方の深いもので、中には40cmのものもある。これらの深めのピットは、楕円状に取り巻く配列がみられ、小屋かけの形跡が推定される。焼土を中心にしたあたりから中世陶器片の出土が多い。(第50図)

西側には湾曲して南西へ向かう幅40～80cm・深さ30cmほどの溝址、東側には幅２m・深さ20cmほどの溝址が南東南に伸び、溝沿いにピットが並ぶので、工房址１に関連するものと思われる。とくに東側の溝址の東端に近いあたりから、鉄滓が10数点出土し、それに続くあたりに掘立柱建物址４がある。後述する工房址２、竪穴址１・２・４、建物址１～４も関連した遺構かと思われる。

② 工房址２（第49・50図、写図27）

工房址１の北側に、周溝とそれを取り巻くピット群があり、周溝の内側はタタキ状の硬い面があり、東側に焼土を持つ炉状の窪みがあるので、工房址２とした。周溝の範囲は、南北2.7m・東西５mの楕円状で最大幅80cm・最小幅20cm、最も深い東側で80cmを測る。西北側では溝は消えてブリッジ状の空間がある。深めのピットの配列をみると、東側で直列５個、西側では溝内またはその外縁に８個ほどが二列に並ぶ。中央部のタタキ面にも数個のピットがある。広い範囲でみていくと、深いピットの配列範囲は南北４m・東西5.5mほどあり、北東の竪穴址４まで含めると７m余りある。

出土した遺物は少ないが、東側の炉状の窪みから瀬戸系の坏形陶器（第50図11）と西側ピット群周辺から皿形陶器（第50図２）が出土している。

③ 工房址３（第53図）

C地区D列の東壁沿いに、焼土が２か所検出された。その焼土の間に南北に続く細い溝址があり、東側壁沿いの焼土付近には、黒色土の落ち込みがあり、試掘調査当時から陶器片の出土が多かった。南側にある竪穴址４も関連する遺構と思われ、確証は無いが、工房址３として登録したものである。

④ B地区の竪穴址

B地区には工房址２の北側に竪穴址４、西側の道路予定地中央付近に竪穴址１、北側水路址の北側に竪穴址２がある。

竪穴址４（第49・55図、写図27）

B地区工房址２の北側に接して竪穴址４がある。東西 2.2m・南北 1.6mの小判形状の竪穴で、深さは30cmほどある。その周囲を取り巻くように16個の小ピットがある。この竪穴は、工房址２の北東側の周溝に接していて、黒色の覆土であることから、単独の遺構ではなく工房址２にかかわる遺構のように思われる。

竪穴址１・２（第55図）

工房址２・竪穴址４の西側に、竪穴址１・２が検出されている。このあたりは試掘調査の折に重機による掘削が進み過ぎたところで、赤褐色土まで削り取られてしまったために、竪穴址１・２の上面が削られ、下部の床面・ピットの下部が残されていた。下層に直行する溝址、タタキ状の硬い面、方形状の竪穴状遺構が残されていて、竪穴址１・２としたところで、それぞれ数片の陶器片が出土している。

広くＢ地区の調査地全体をみると、北西側の竪穴址１・２、中央付近の竪穴址４・工房址１・２、南東側の深いピット群、東側の建物址１～３、南側の掘立柱建物址４等は、一連の中世遺構かと思われる。場合によっては溝址２（水路址）や溝址１・２も含まれるかもしれない。

⑤　Ｃ地区の竪穴址

Ｃ地区では北側のＢ列あたりに竪穴址１・２・３、工房址あたりに竪穴址４、Ｈ列あたりに竪穴址５・６が検出されている。それぞれが異なった形態ではあるが、一連の中世の遺構かと思われる。

竪穴址１（第58図、写図29）

東側にあって長軸２m・短軸1.5m・深さ45cmあって、斜めの掘り方の不整形な竪穴である。周囲に小ピットが５～６個ある。用途は不詳である。中から常滑甕片・山茶碗片が出土している。

竪穴址２（第58図、写図29）

Ｂ列25にあり、長軸1.3m・短軸1.2m・深さ40cmほどの方形状の竪穴址で、穴内に小ピットがある。穴底はいくつかの窪みに分れている。覆土は黄灰色の混色土の堆積土が重なり、埋め土の様相がある。１片だけであるが、下層から青磁碗片が出土している。

竪穴址３（第58図、写図29）

竪穴址２の西側に並ぶ竪穴址で、長軸２ｍ・短軸1.6m・深さ53cmで、黄褐色混じりの覆土が各所にある。摺鉢状の掘り込みで、壁斜面に２個のピットがある。南壁沿いのピットは深さ55cmある。大石が３個落ち込み、大石の下は安定した黒色土で、青磁碗片・瀬戸系陶器片・鉄滓が出土している。

これらの竪穴址の周辺からは、山茶碗片・常滑壺片・同甕片・土師器片・陶器片が多く出土している。

竪穴址４（第59図）

この竪穴址４は、Ｇ列東側壁際にあり、一辺1.9m・深さ40cmある。一部が東用地外に続くので形態不詳であるが、工房址３に繋がるものかと思われる。摺鉢片が出土している。

竪穴址５（第59図）

Ｋ列25にある竪穴址で、上部から大石の転入があり、その石の下に黒褐色土や焼土が堆積している。長軸2.3m・短軸２ｍ・深さ56cmの大きめな竪穴である。穴底には、３か所に窪みがある。壁の掘り込みは直に近く、壁に切り込むように３個のピットがある。深さは60～75cm、穴の径は40cmほどある大きなピットである。ピットの覆土は板築状の混色土がみられる。遺物は中世土師・瀬戸系陶器片・鉄片が出土している。

竪穴址６（第59図）

Ｉ列24にあり、長軸2.2m・短軸1.9m・深さ54cmある。黄褐色混じりの覆土が各所にみられ、摺鉢状の不整形な掘り込みで、壁斜面に２個のピットがある。南壁沿いのピットは55cmほどの深さがあり、西隅から西に向かう細い溝が作られている。瀬戸系陶器片が出土している。

これらＣ地区の竪穴址の共通していることは、不整形の掘り込みであること、覆土は黒色系のものが主体であるが、茶褐色・黄褐色混じりの埋め土状の土層がみられること、板築状の覆土を持つピットを持つ等の様子から、工房址３に繋がる中世の遺構かと思われる。

竪穴址１から竪穴址６までの配列をみると、竪穴址１～３が東西方向に並び、その南西側に掘立柱建物址１・２と工房址３の焼土がある。その間に溝址１・２もある。竪穴址４は工房址３の中に含まれ、その南側に建物址５・６が並ぶ位置にある。建物址１を取り巻くように溝址１・２や竪穴址１～６が配列されているように思われる。

⑥ B地区の建物址（第51・52・53図）

B地区の東側一帯に4か所のピット群が検出されている。このピット群の中で方形配列がみられるのは、建物址4だけであるが、その構成・集合状態から建物址1～4として登録した。中には、黒色土の覆土であるもの、灰白色の砂質土の覆土を持つもの等があり、時期差がみられる。

建物址1（第51図）

工房址2の東側に、16個の深いピットが集合し、さらに東南へ2m離れた所に7～8個のピット群がある。位置も少し離れ、方形的な配列はみられないが、ピットの深さは50cmほどあるものもあり、重複状態もあるので、一つの集合体とみたい。ピット中やその周辺から鉄滓や陶器片が出土している。

建物址2（第51図）

調査地東端に近いあたりに、25個くらいの深いピットの集合体があり、方形配列が推測出来そうな深さ30～40cmのピット群もあるので、建物址2として登録した。周辺から鉄滓・陶器片が出土している。

建物址3（第52図）

調査地の東側にほぼ東西方向に並ぶ6個のピット列がある。並行するピット列は確認されていないが、さらに東側にあるのかもしれない。このピットの覆土は、灰褐色土・黄灰色のもので、深さは30～40cmあった。一つのピットから中世陶器片が出土している。

建物址4（第52図）

調査地の南隅に、方形配列を持つ掘立柱建物址4がある。方形の範囲は南北5.4m・東西5.5mの正方形に近い配列で、梁・桁方向とも5～6個のピットが並ぶ。ピットの深さは30～40cmほどのものが多いが、中には78cmに及ぶものもある。南側の柱間は、60・110・70・100・120cm、西側は120・1101・140・90・110cmとまちまちではあるが、工房址1の南の溝址に接する位置にあり、溝址の方向に類似してる。山茶碗片、土師坏片が出土し、近くから鉄滓が多く出ている。

⑦　C地区の掘立柱建物址（第53・54図）

C地区の北側D列からH列までの10mほどの範囲に、方形的に並ぶピット群がある。重複状態があるので建物址５・６とした。さらにその南側Ｊ列からＳ列にかける20mほどの範囲に、直列的に並ぶ何組かのピット列がある。方形的な配列もみられるので建物址７・８とした。

建物址５（第53図、写図28）

C地区東北側Ｅ～H列にある建物址で、ピットの構成範囲は南北4.5m・東西８mほどで、用地外東側へ続くものと思われる。ピットの径は約25cm、深さは30～40cmで中には68cmのものもある。東西方向の柱間は 170・ 200・ 160・ 130・140cm の６間、南北方向は、 150・70・110・150cm の５間で、不揃いではあるが、西側の配列が整っている。この建物址の中に溝址が東西に走り、焼土１・２がある。東側壁沿いに土壙５・竪穴址４の落ち込みがあり、試掘調査の折から本調査にかけて多くの中世陶器片・鉄滓が出土している。

建物址６（第53図、写図28）

建物址５の西側に10°くらい方向を変えた建物址６がある。西側と北側に方形配列がみられるが、他ははっきりしない。西側では柱間５で 140・ 210・ 130・140cm を測る。ピットの深さは30～48cmで、さらに西側に浅いピットが並ぶ。周辺から中世土師器片・常滑甕片・平安時代須恵器片が出土している。

建物址５・６の時期区別ははっきりしないが、出土遺物の様子から平安時代と中世の掘立柱建物址が重複しているように思われる。

建物址７（第54図）

K列からO列にかけて７mほどの間に、ピットが直列的に並ぶ所がある。方形の配列は見当たらないが、建物址７とした。

建物址８（第54図）

O列からＳ列にかけて10mほどの間に、６個のピットが直列に並び、東へ直行するピット列もある。柱間は５間で、間隔は 160・ 160・ 140・ 180・180cm で、東へ直行する列は柱間３以上で、 200・ 110・140cm を測る。

建物址７・８の周辺では中世陶器片の出土は少ないが、ここから南側では陶器片の出土が多

くみられるので、建物址５から建物址８までの範囲は50mほどに及ぶことになる。

⑧　Ｂ地区の水路址（第55・56・57図、写図30）

Ｂ地区本線用地内西側石垣下からＥ２°Ｎの方向に続く溝址２があるが、幅1.5m、深さ1.7mに及ぶ深い溝址である。調査面では黒色土の覆土であったが、20cmほど下から黄色土の砂礫質に変わり、深さ40cmほどの所には、炭混じりの黒色土があって、硬いタタキ状の面が続いている。２・３か所に焼土があるので、ある時期にこの面が使われていたと思われる。この硬い面を掘り下げると黄褐色砂礫土に変わり、累石が現れる。この累石を整理した所が、第56図上の配石図である。最下面に水路の蓋石が並ぶ。この蓋石は大きいもので 110cmもあり、多くの平状石が並べられている。この蓋石を取り除いたものが、第56図下の石組水路である。石の横面を揃えながら水路が構築されている。両側に並べた側石の下は黄褐色のタタキで、敷石は無い。石囲いの中は細かい砂と泥で埋まり、水の流れた形跡がある。掘り込み全体からの遺物発見は少なかったが、第57図の燭台・瀬戸系陶器片・摺鉢片が蓋石付近で発見され、宋銭らしい古銭残欠も出土している。

ＳＴno135 から東側一帯には、大きな転石があり、砂礫土の堆積の厚い溝址４がある。この溝址４(流路)の下に水路址があるので、ある程度の年代を考えてよいと思われる。

南側一帯に広がる工房址１・２、竪穴址１・２・４、建物址１～４等の中世遺構との繋がりの有無は不詳であるが、出土遺物からみて同じくらいの年代かと思われる。

⑨　近世または年代不詳の遺構

Ｂ地区北西側で検出された竪穴址は近世のものと思われる。北側を流れる溝址４・５の年代は不詳であるが、水路址の上を流れることから近世以降のものと思われる。

Ｃ地区には黒色土の多い溝址がいくつか検出されているが、中世に繋がるもののほかは不詳である。

Ｃ地区の南側、町道5074号線の南側には近代かと思われる川跡があるが、その南側から中世陶器片の出土する所もある。

〔3〕　広庭遺跡のまとめ

①　縄文時代中期の土壙群

広庭遺跡広庭地籍では、縄文時代中期と思われる土壙がＡ地区で１基、Ｂ地区で約50基、Ｃ・Ｄ地区で47基の合計97基が検出されている。これらが全部縄文時代中期のものとは言い難い

が、B地区の土壙には中期中葉に近い時期のものがあり、C・D地区の土壙は、中葉のものと後葉のものがあると思われる。

配列状況は確かとはいえないが、B地区では主体となる土壙を中心にしていくつかのグループが構成されながら、集団を形成しているようにみられる。C・D地区の土壙群は弧状を描きながら集団の構成が窺われる。

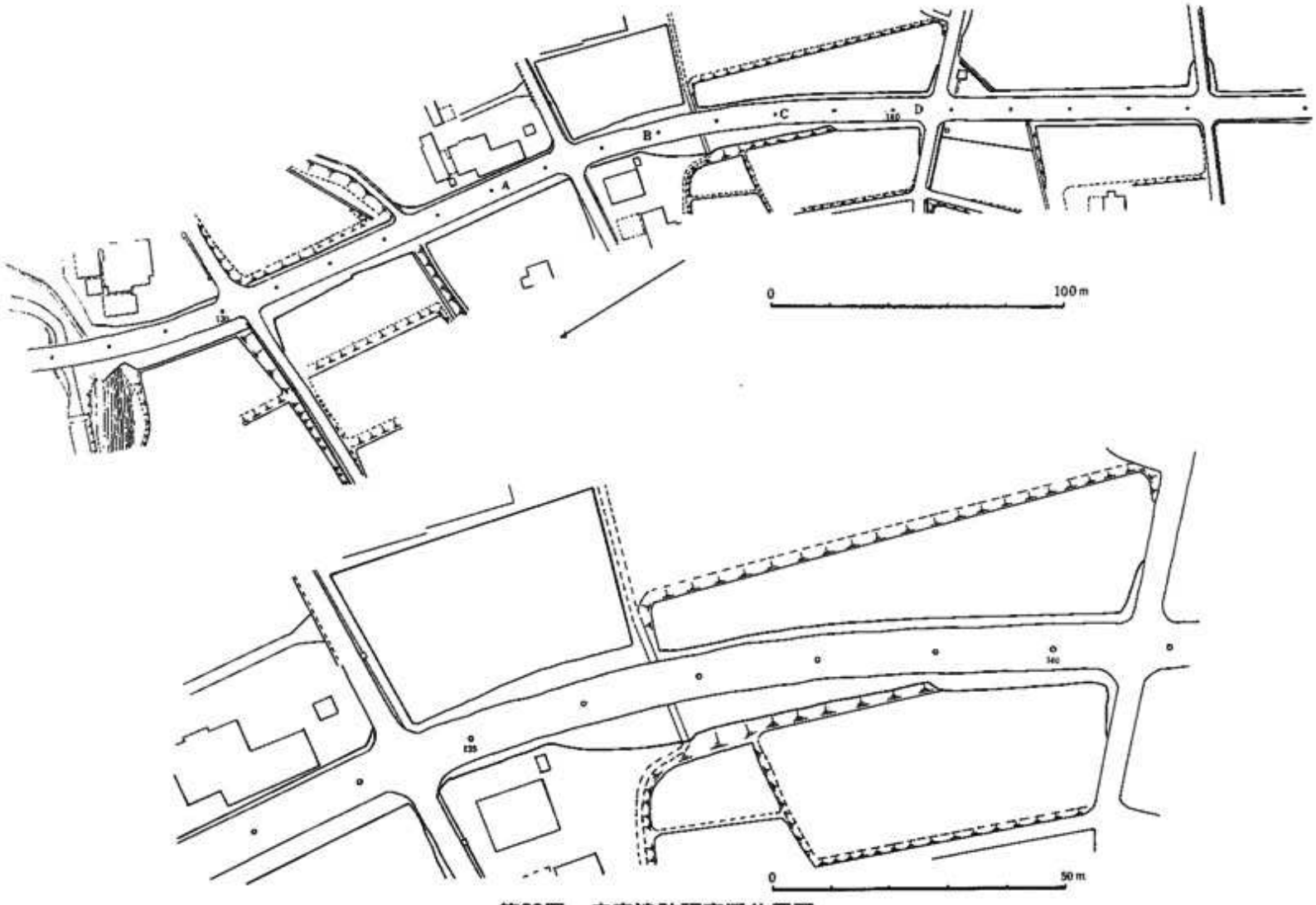
いずれにしても、両地区合わせて住居址の検出が1軒だけであるから、住居と土壙群のあり方の解明は出来ていないが、深くて筒形状で、遺物出土の多い土壙もかなり検出されているので、貴重な資料が得られたものと思っている。

② 中世遺構群の検出

広庭地籍周辺にはマセ口・カメヤシキ・シホヤシキ・蔵ヤシキ等の中世屋敷跡を想定出来るような古字があり、城山城跡の北側に位置するところとして、中世遺構の存在が予想されたところである。

今回の発掘調査により、中世遺構群が広い範囲にわたって検出されたことは、この地域の特性を実証する大きな発見であったと思われる。個々の遺構については本文で報告されている通りであるが、工房址1・2・3、竪穴址1・2・4、建物址1～8、水路址等の遺構が100m以上の範囲に広がること、個々の遺構そのものは単独で発見されても、大して意に留まりにくい遺構であるが、その配列・集合状態・遺物の出土状態等から関連的にみることによって、個々の遺構が生きてくるものと思われる。その意味では、現在この遺構群の位置付けは出来なくとも、今後に残される資料提供がなされたものと思われる。

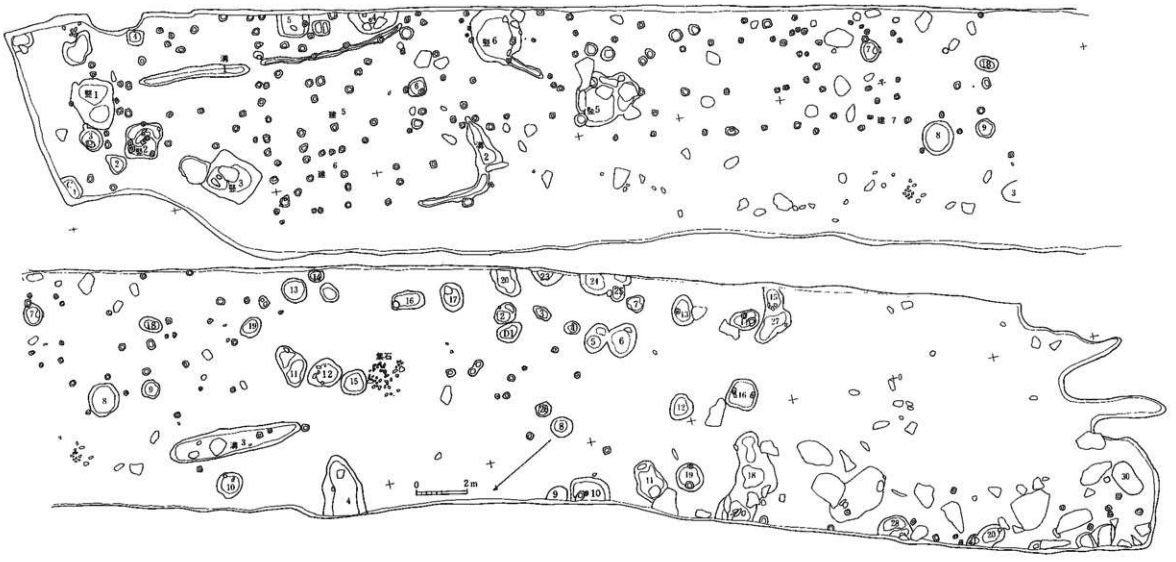
後述するヨシガタ遺跡の中世遺構・大宿遺跡の中世遺構や城山城跡を含めて総合考察する資料になると思われる。



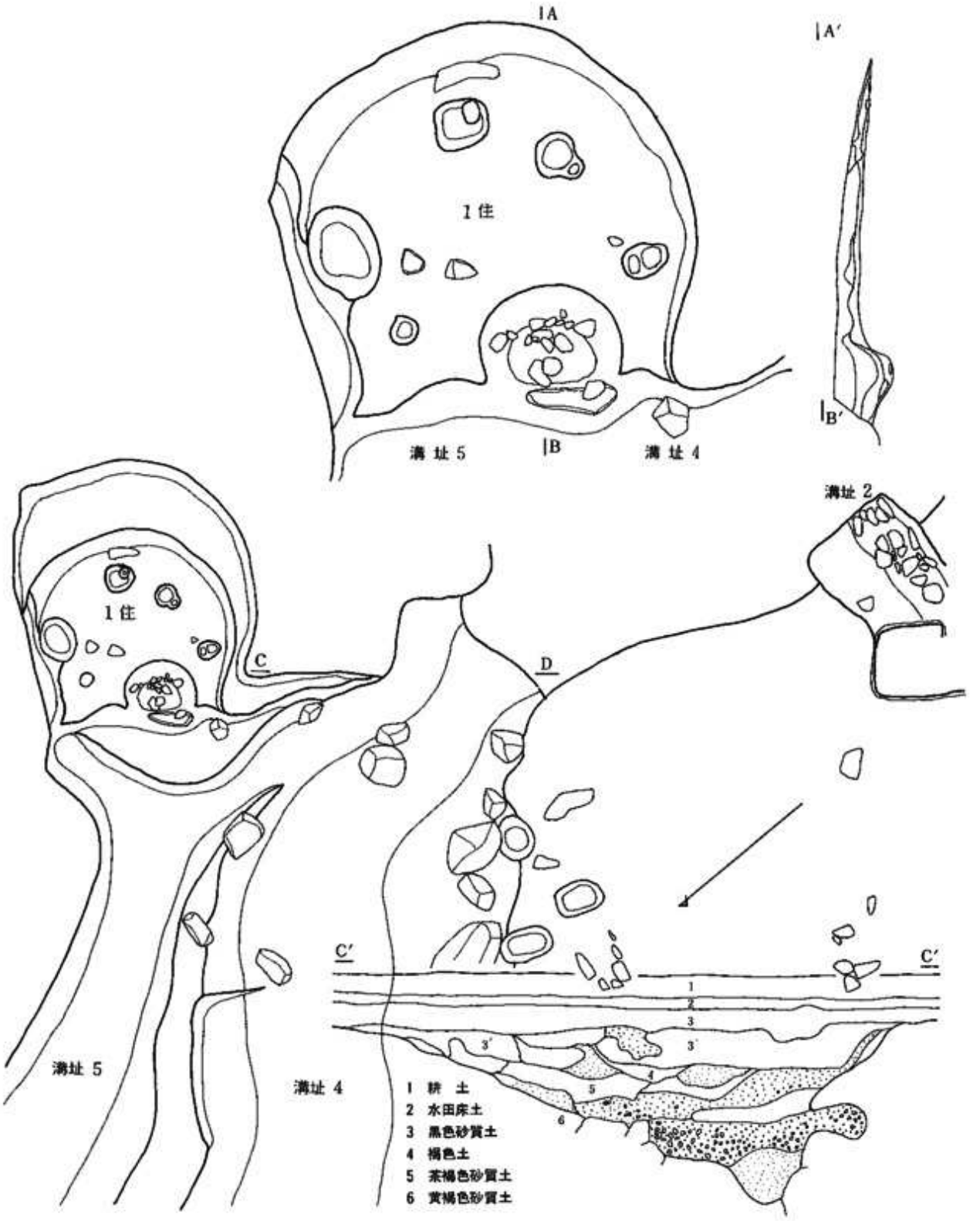
第29図　広庭遺跡調査区位置図

第30図　広庭遺跡Ｂ地区遺構全体図

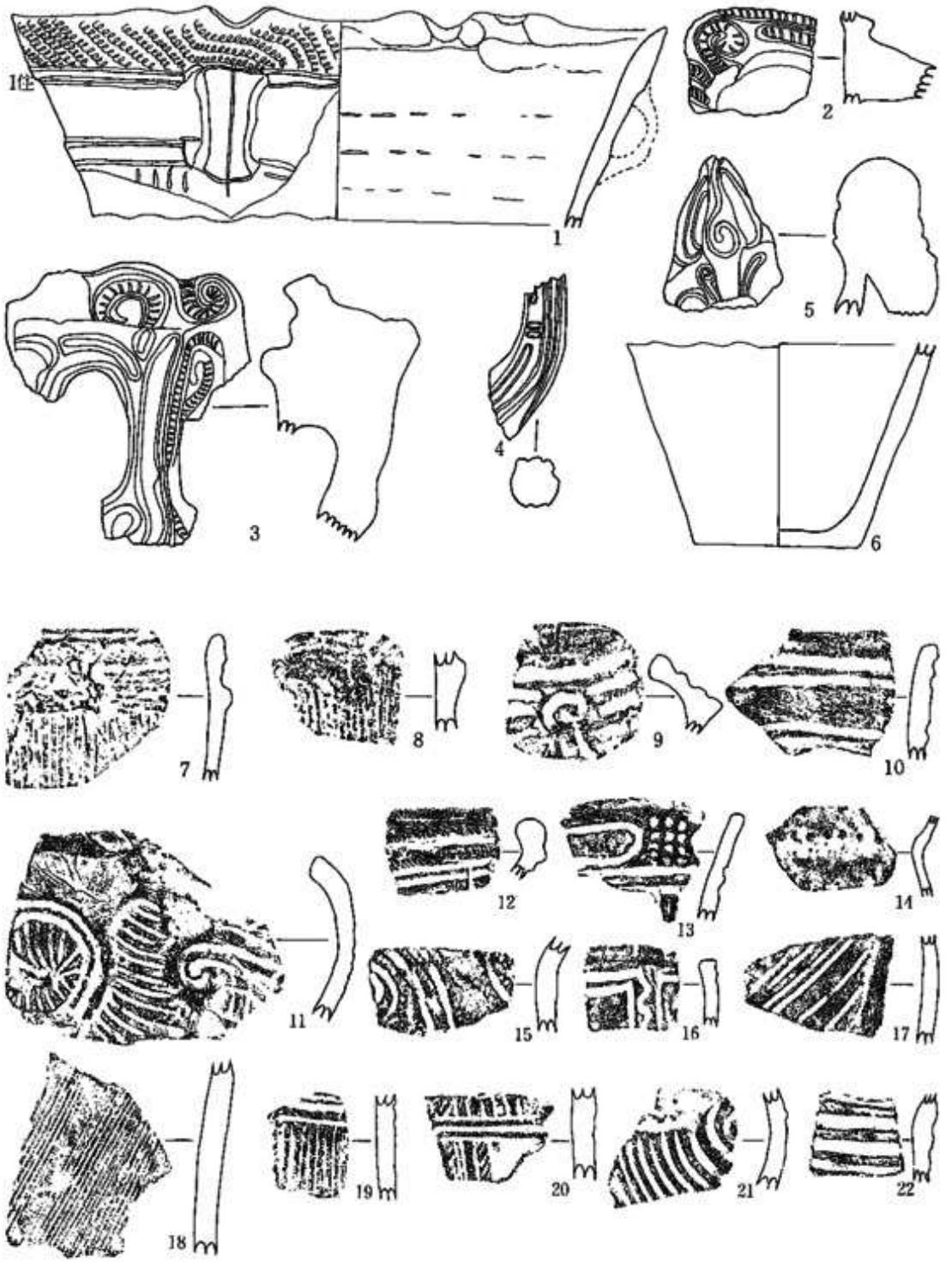
85.86



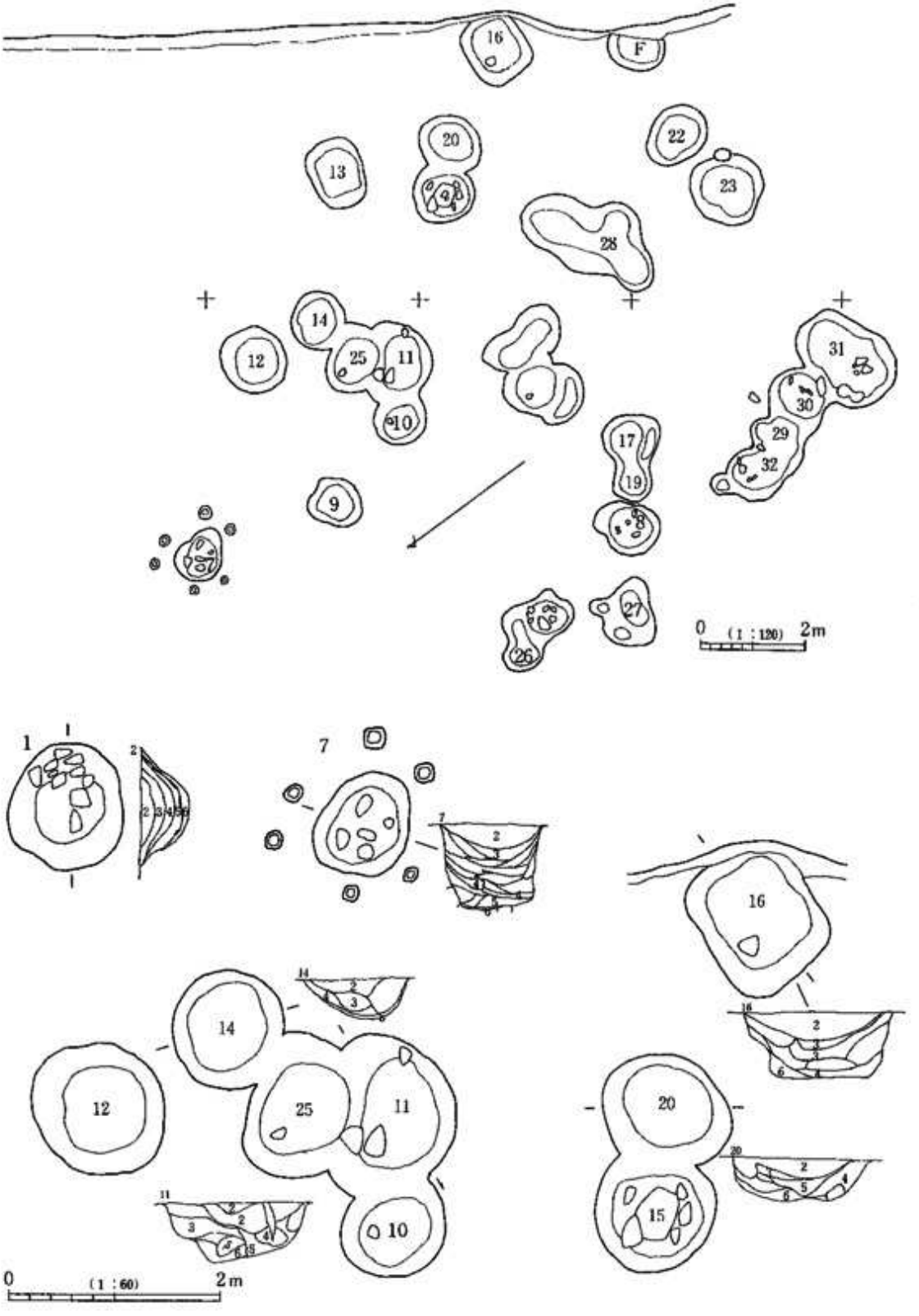
第31図　広庭遺跡C・D地区遺構全体図



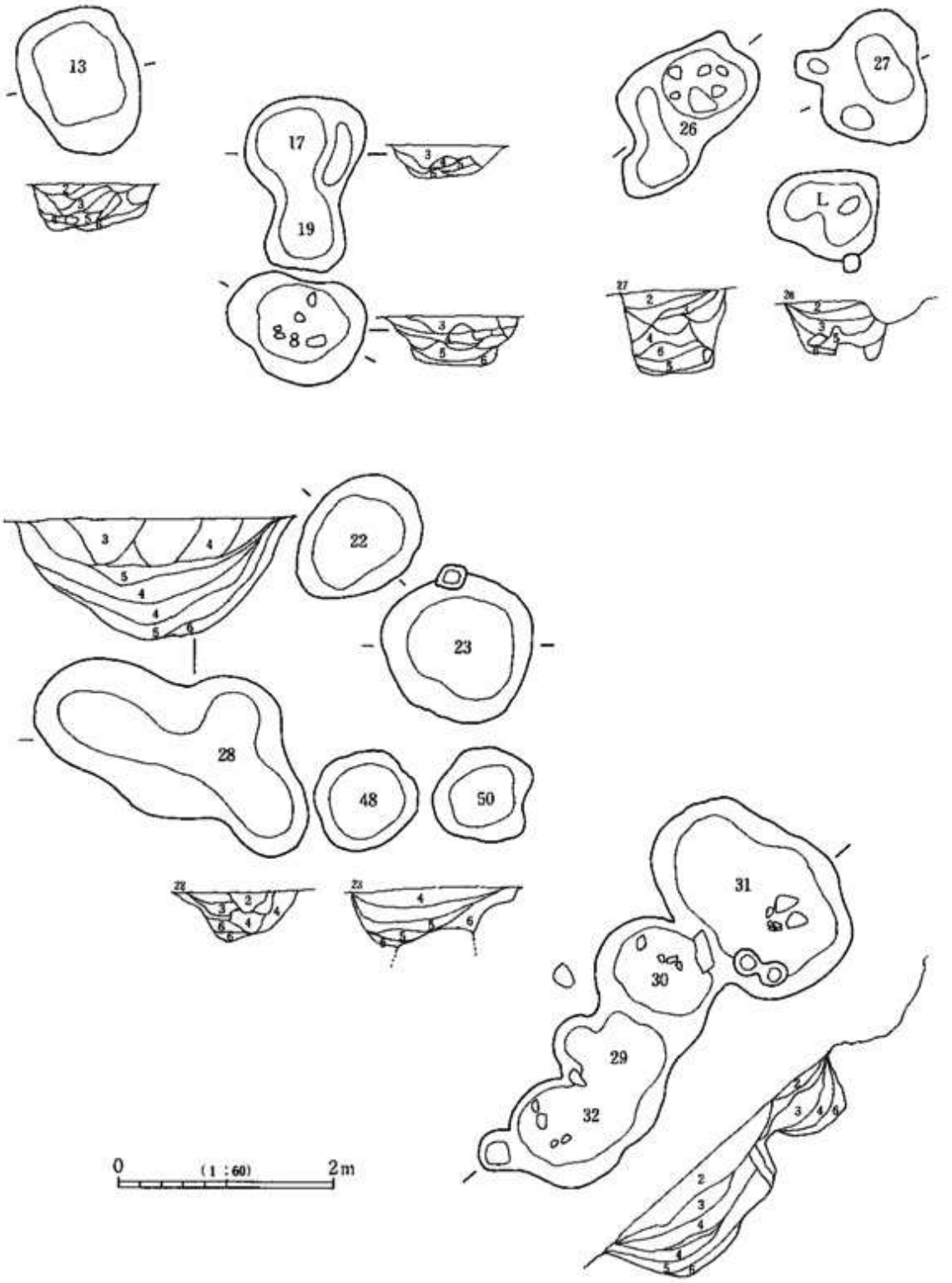
第32図　広庭遺跡B地区1号住居址、溝址4・5



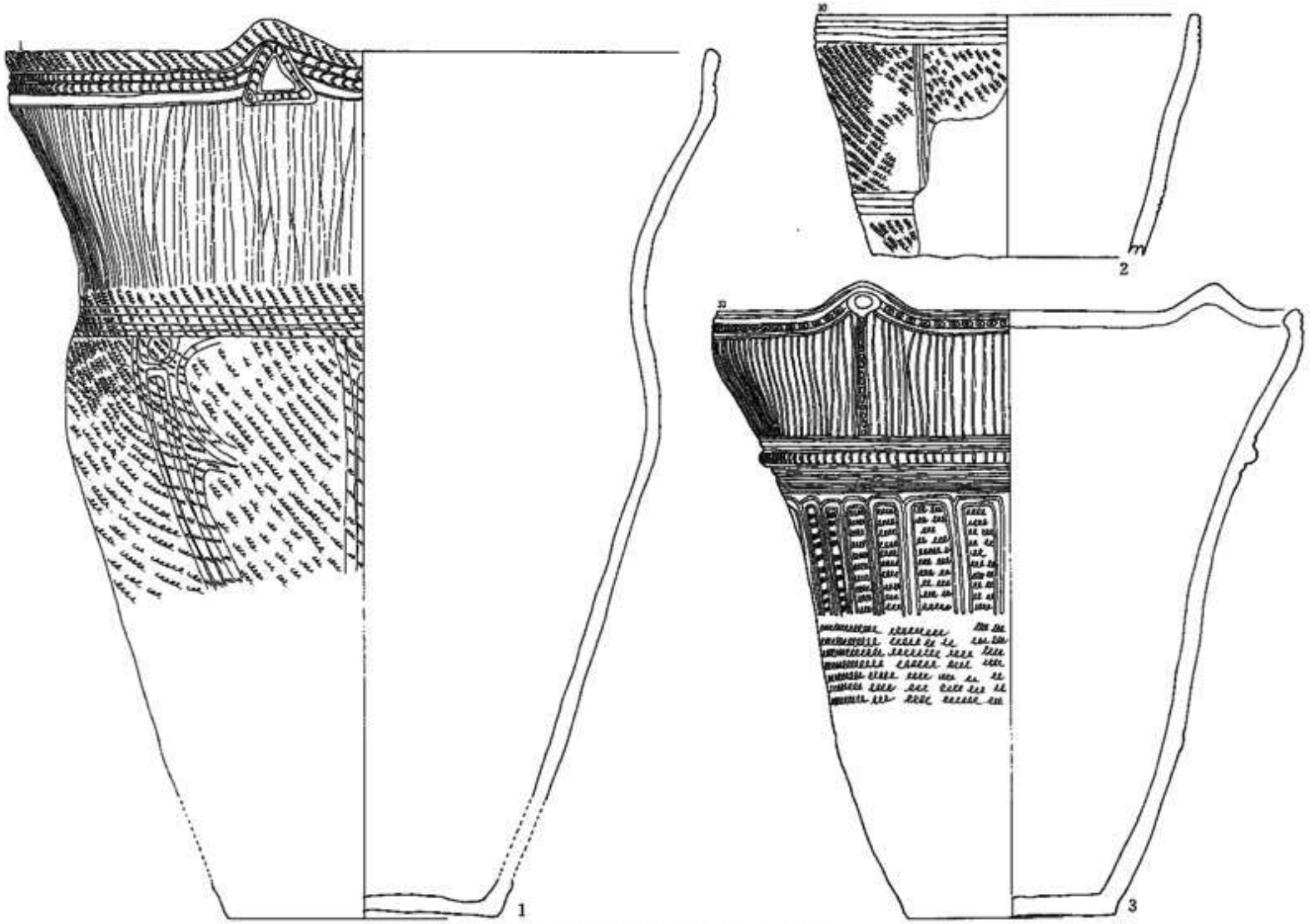
第33図　広庭遺跡B地区1号住居址出土土器



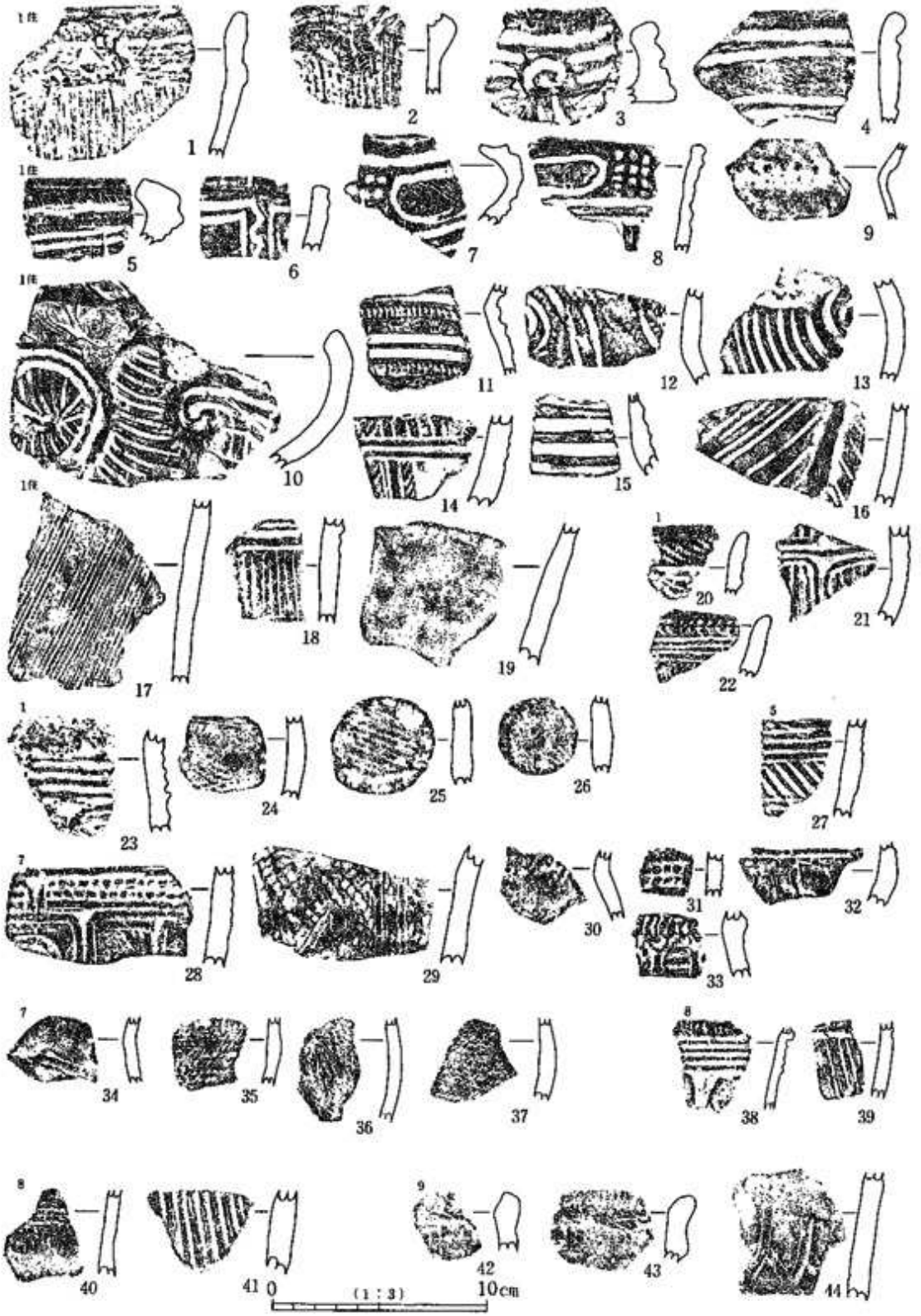
第34図　広庭遺跡B地区土壙 (1) (ド1・7・11～25)



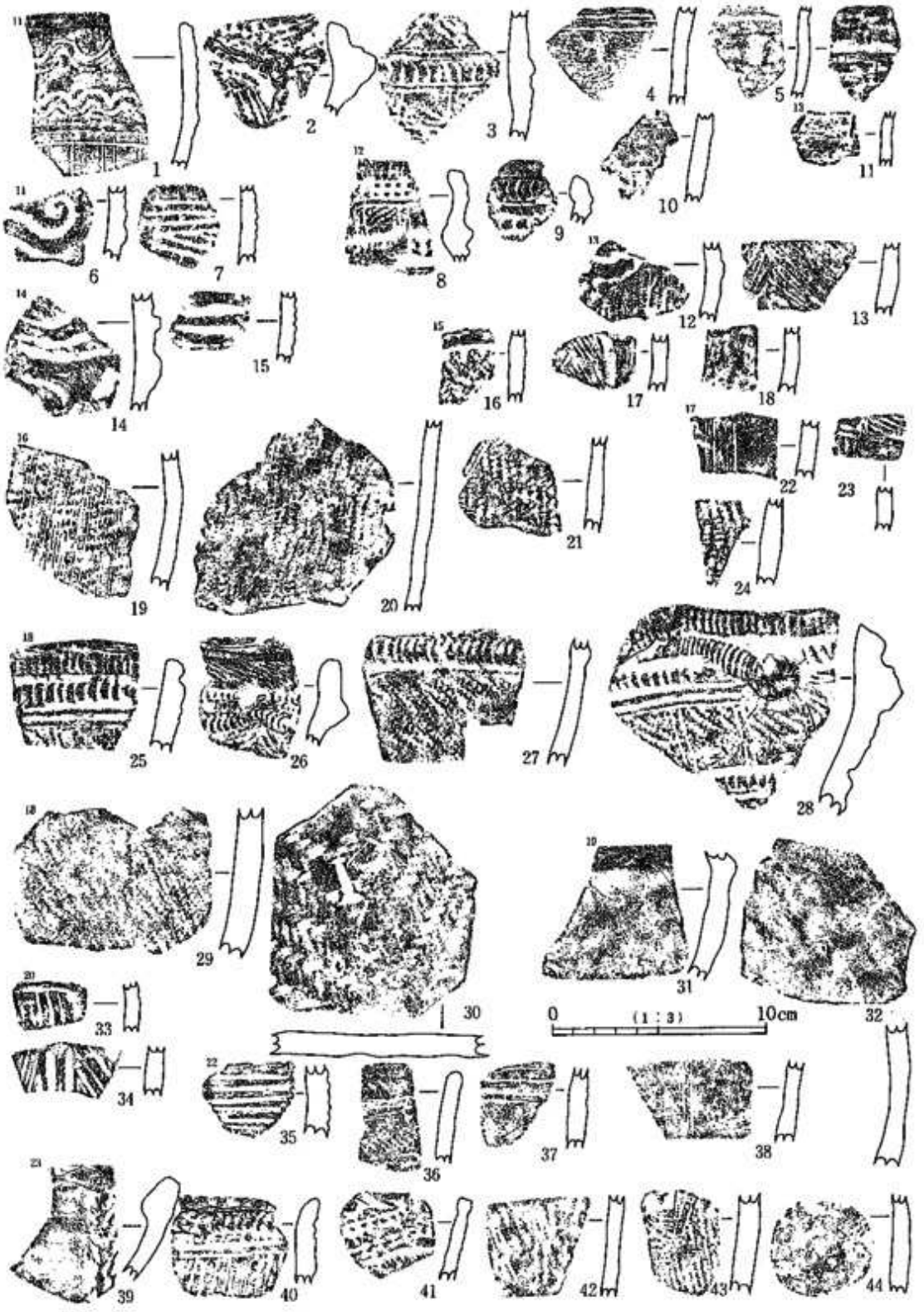
第35図　広庭遺跡B地区土壙 (2) (ド13～32)



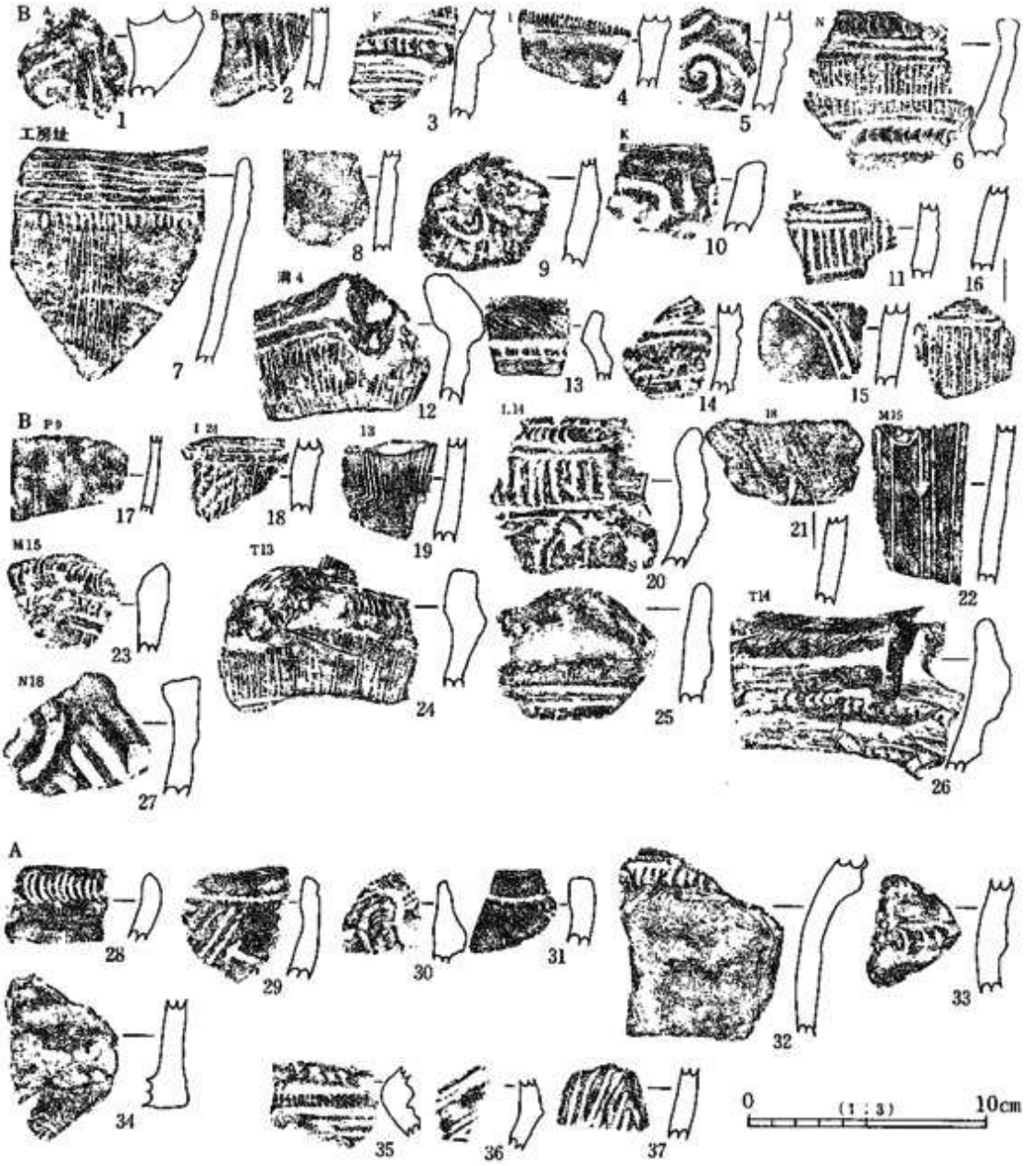
第36図　広庭遺跡B地区土壙1・30・31出土土器



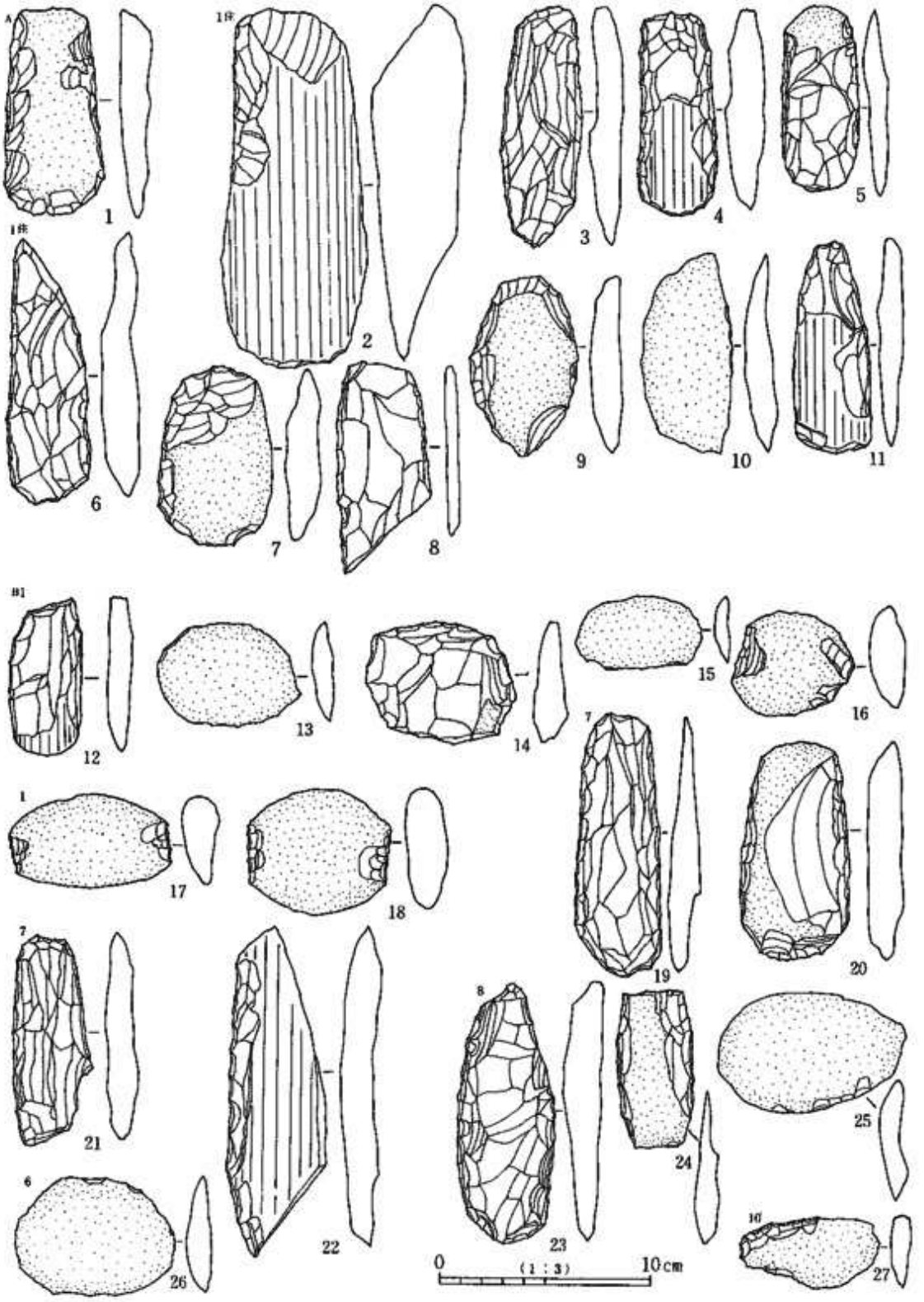
第37図　広庭遺跡B地区1号住居址、土壙1・7・8・9出土土器



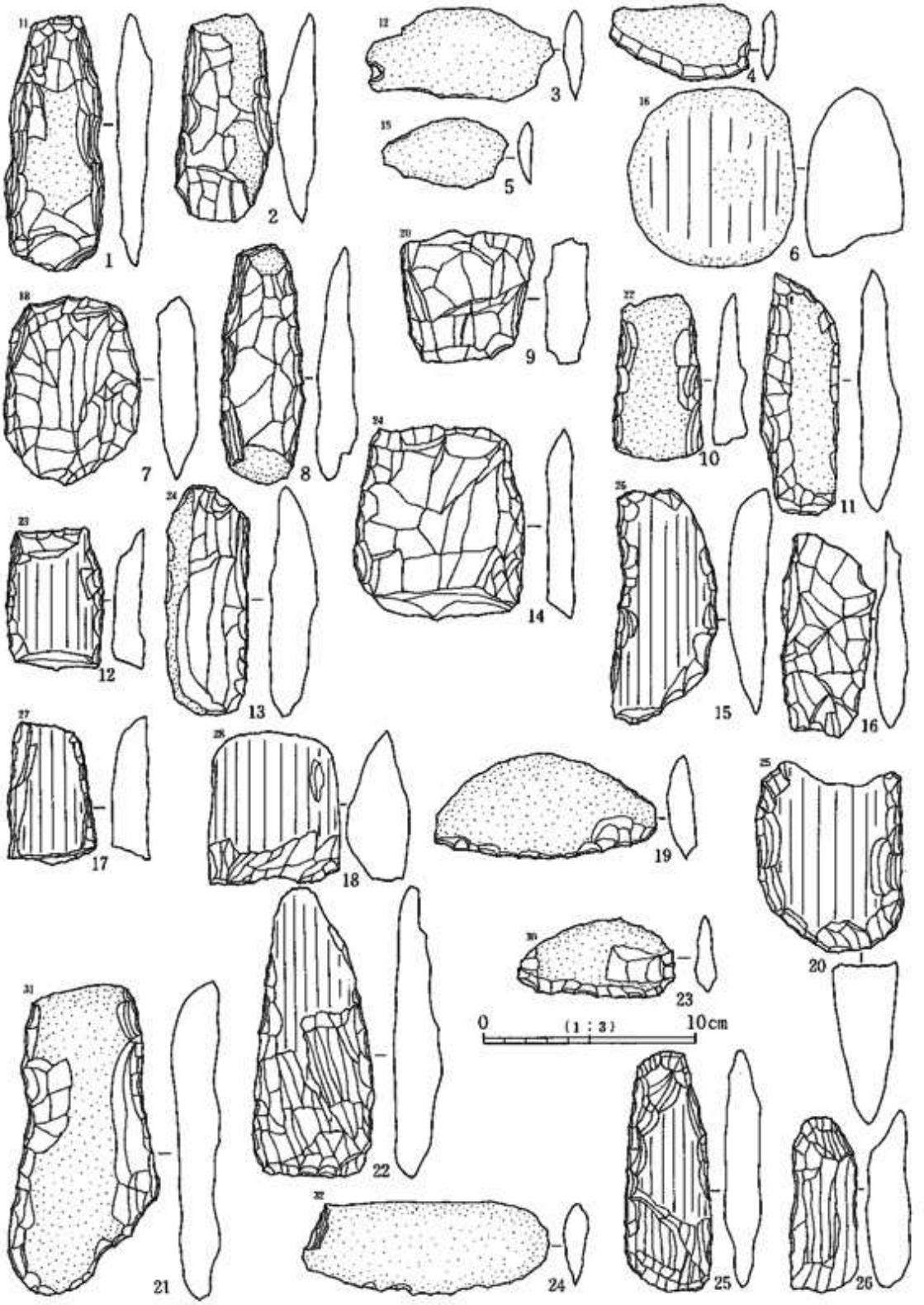
第38図　広庭遺跡B地区土壙11～23出土土器



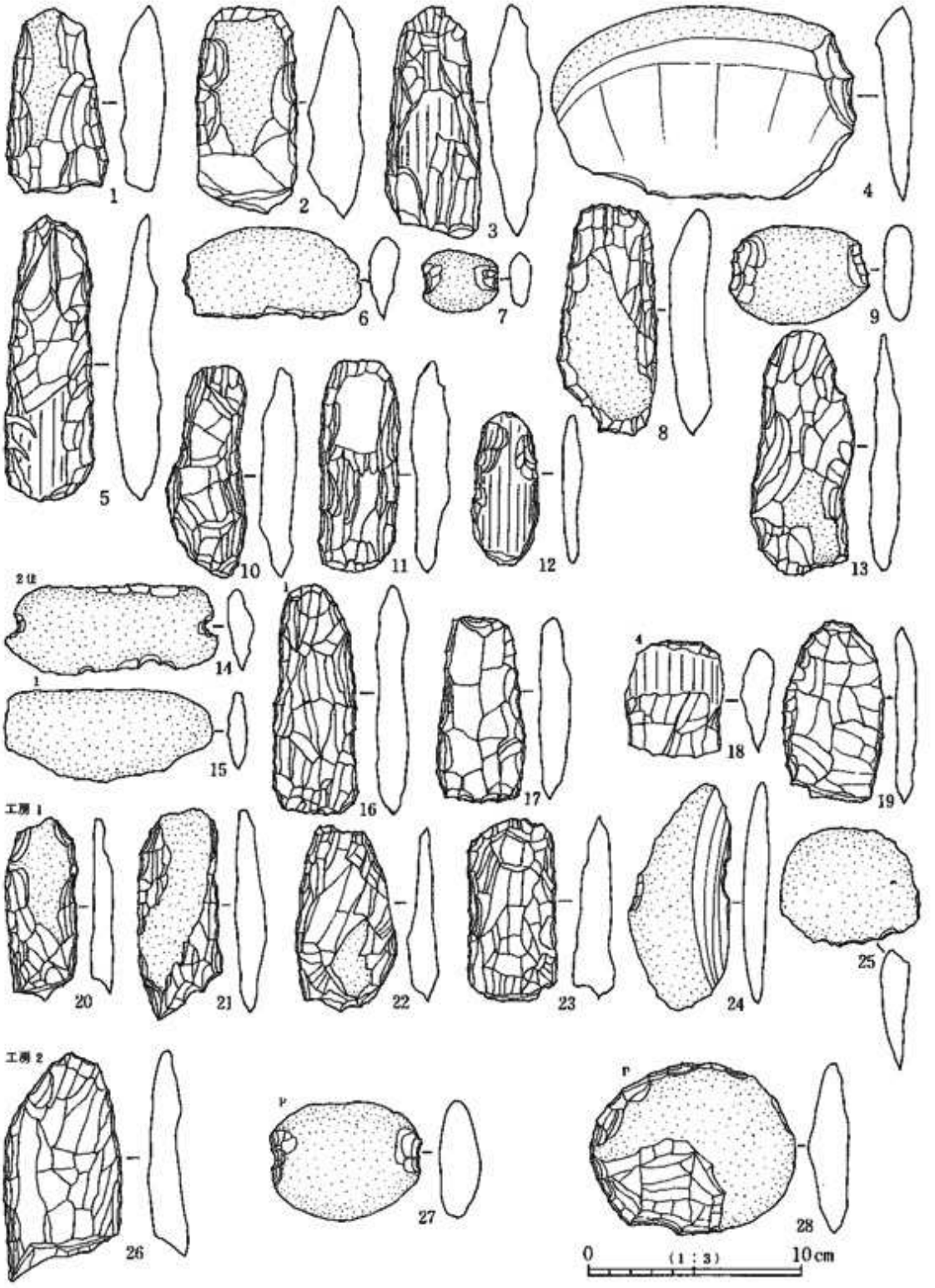
第39図　広庭遺跡A・B地区出土土器



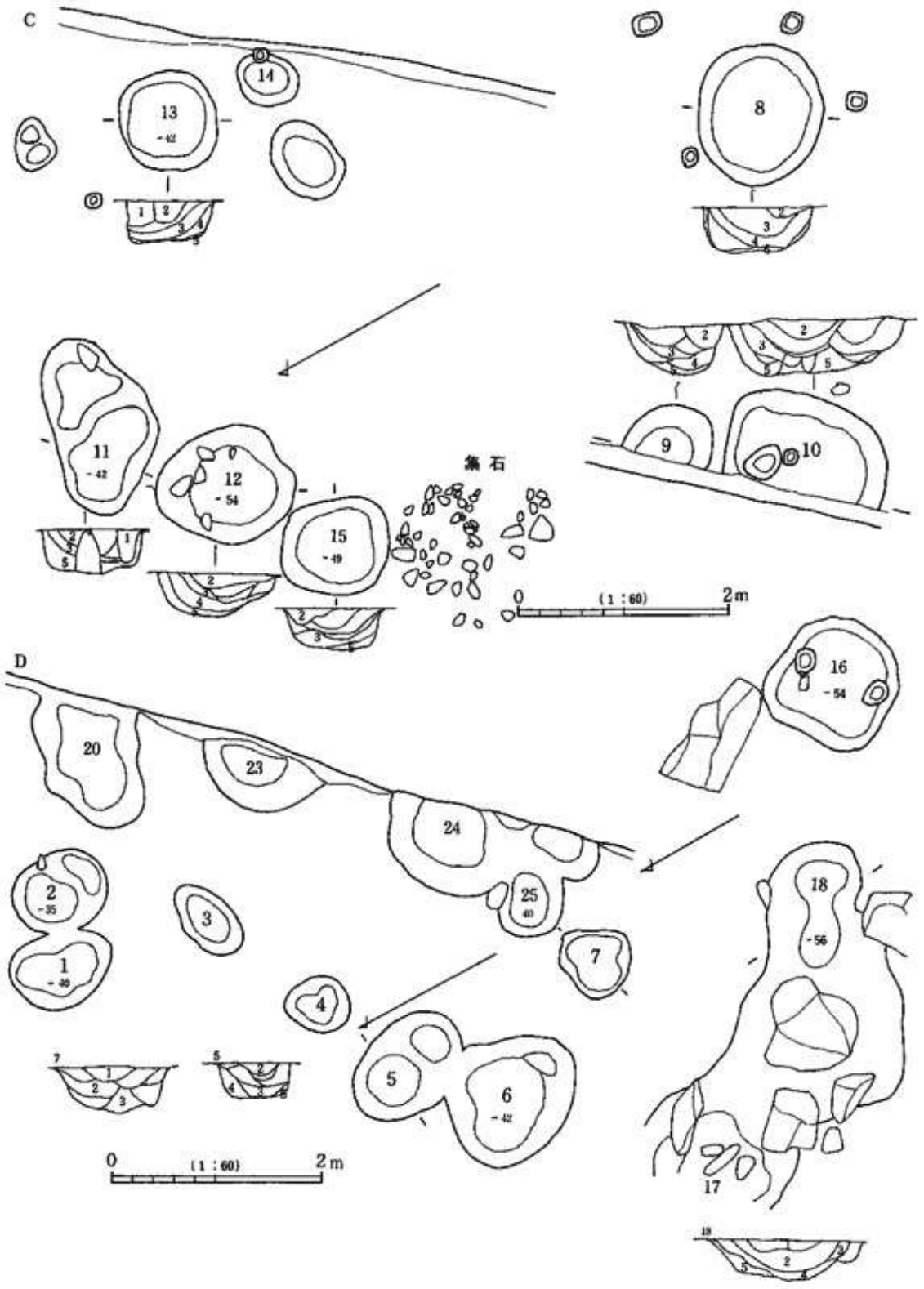
第40図　広庭遺跡A・B地区1号住居址、土壙1～10出土石器



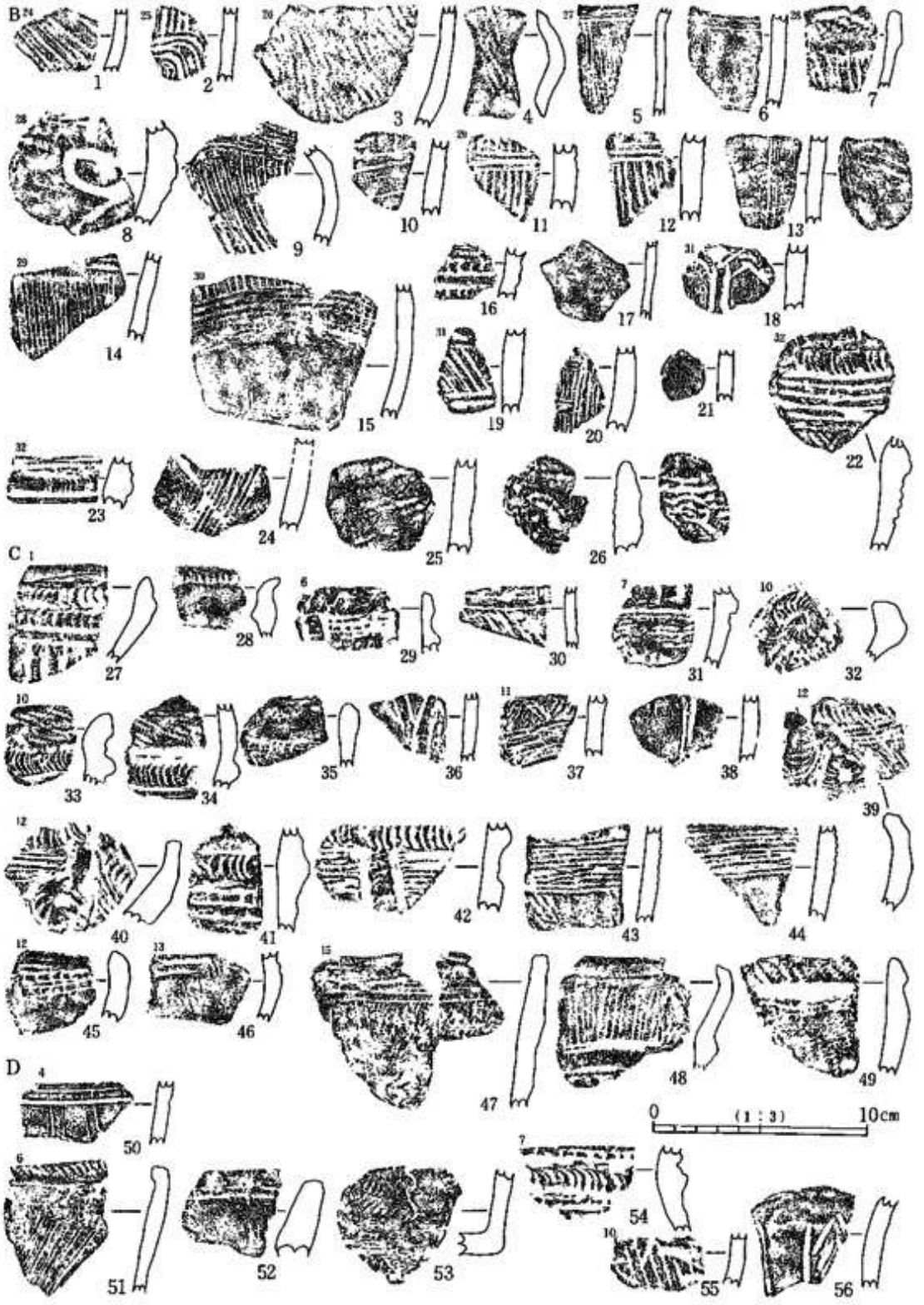
第41図　広庭遺跡Ｂ地区土壙11～32出土石器



第42図　広庭遺跡B地区グリット、工房址等出土石器

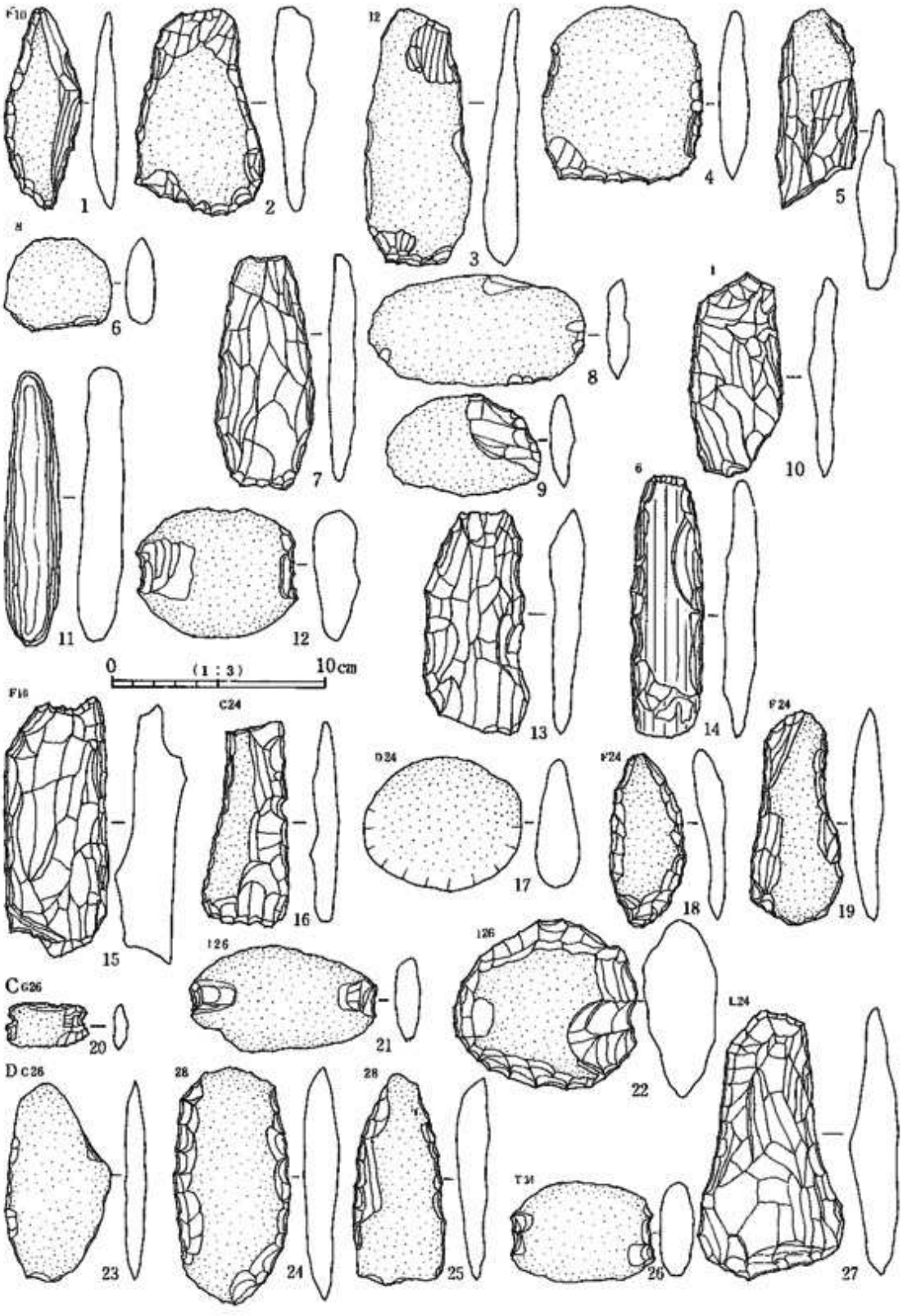


第43図　広庭遺跡C・D地区土壙

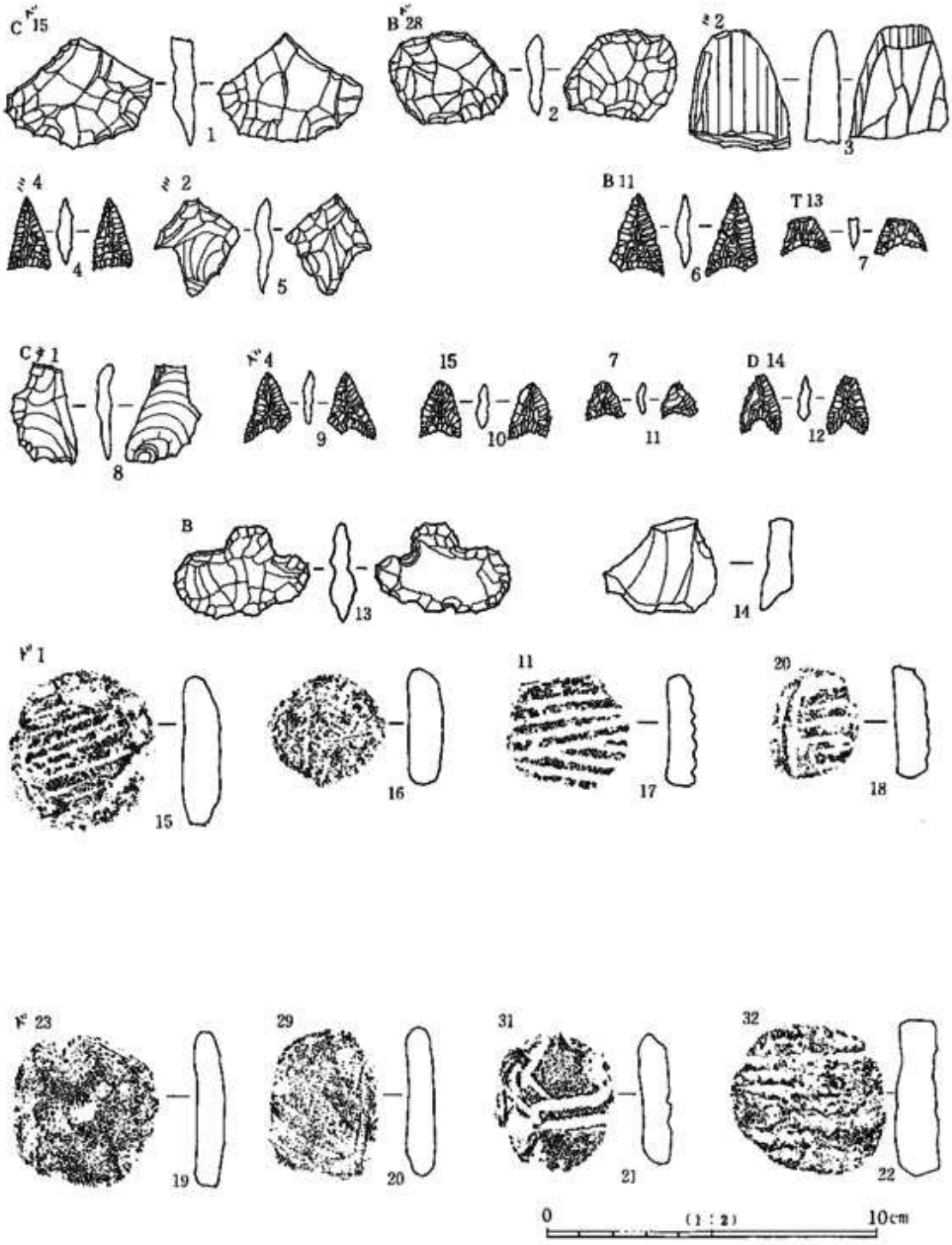


第44図　広庭遺跡B地区、C・D地区土壙出土土器

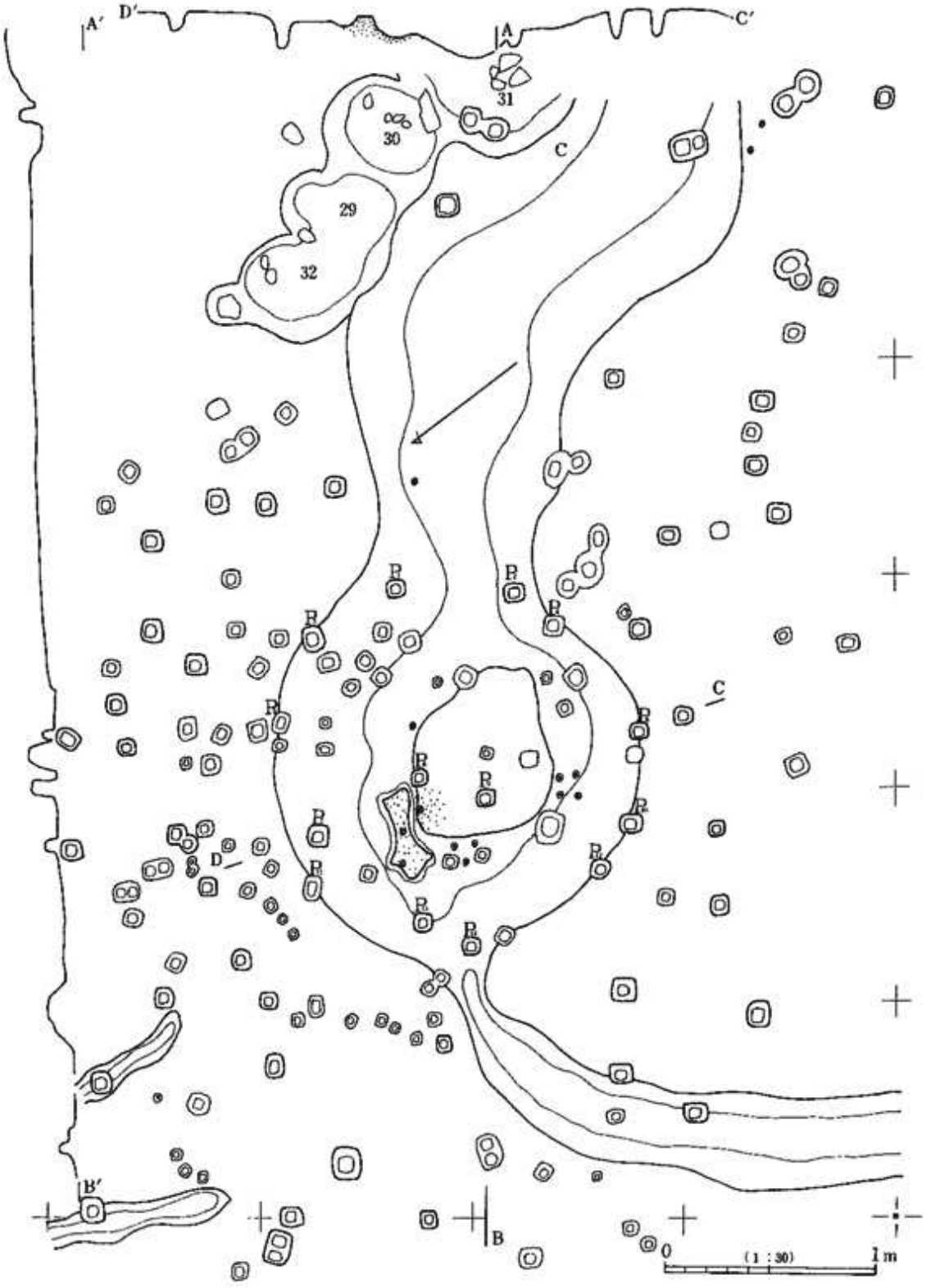
第45図　広庭遺跡D地区土壙、竪穴址出土土器



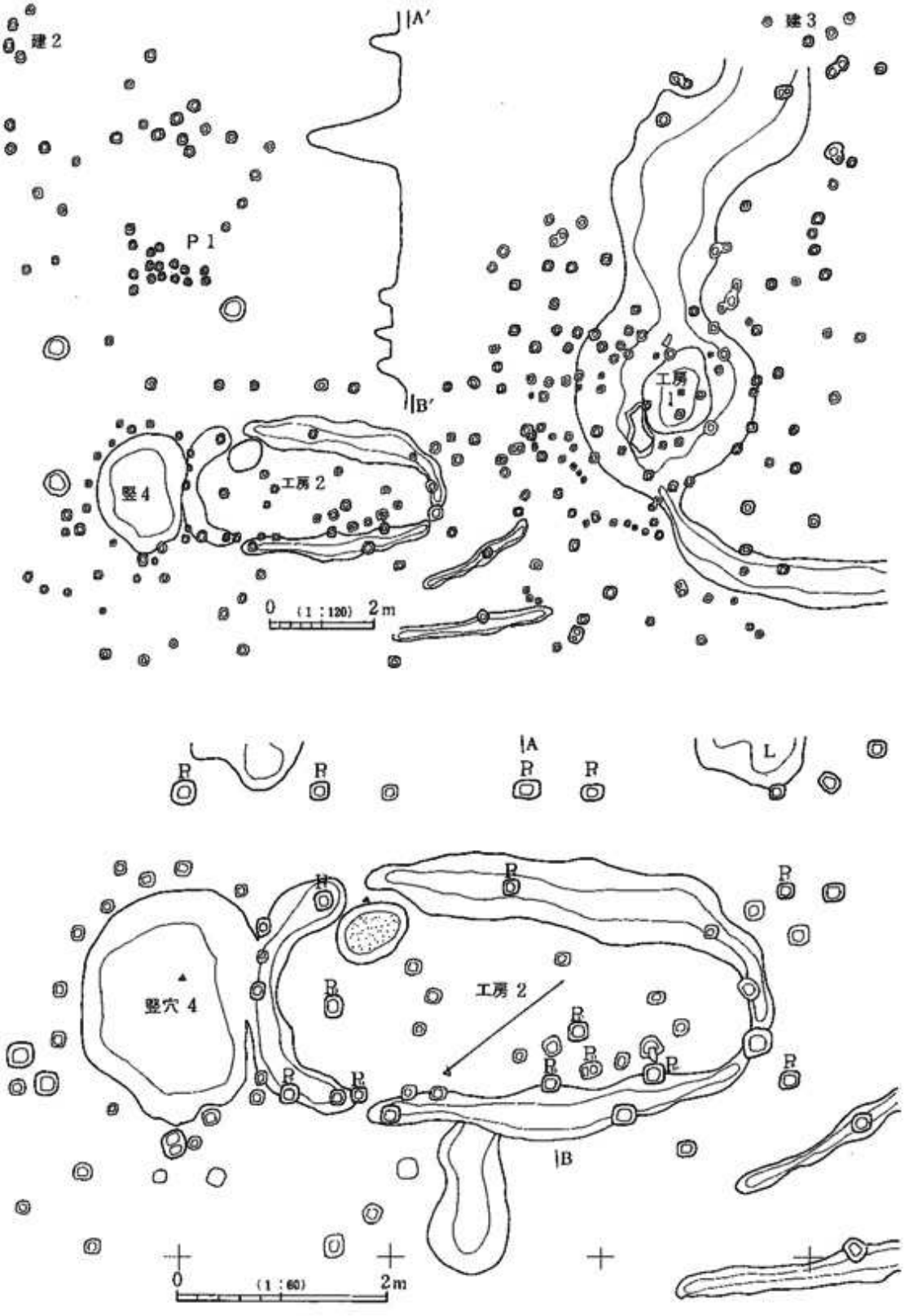
第46図　広庭遺跡C・D地区出土石器



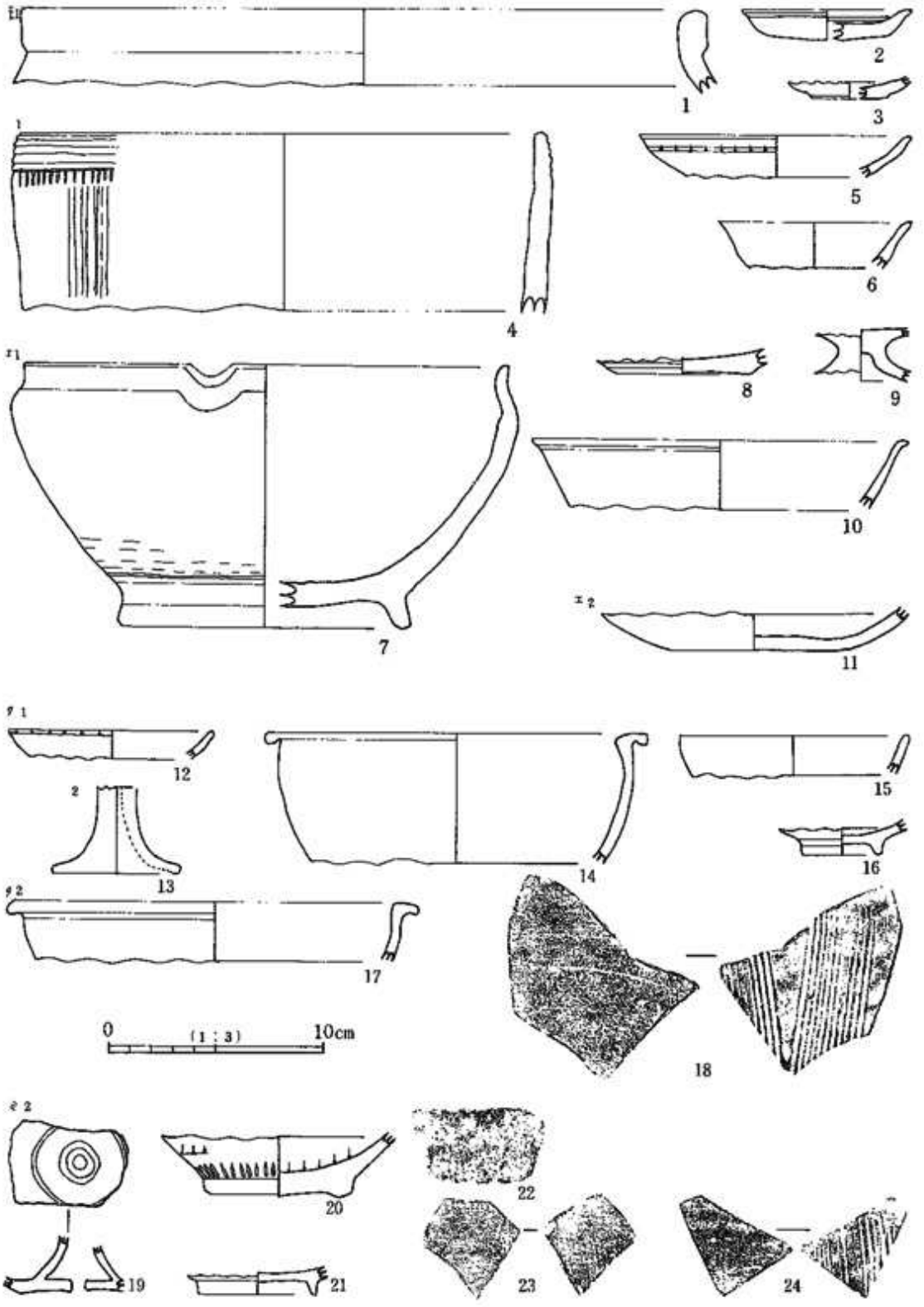
第47図　広庭遺跡B・C・D地区土壙、グリット出土石器と円板



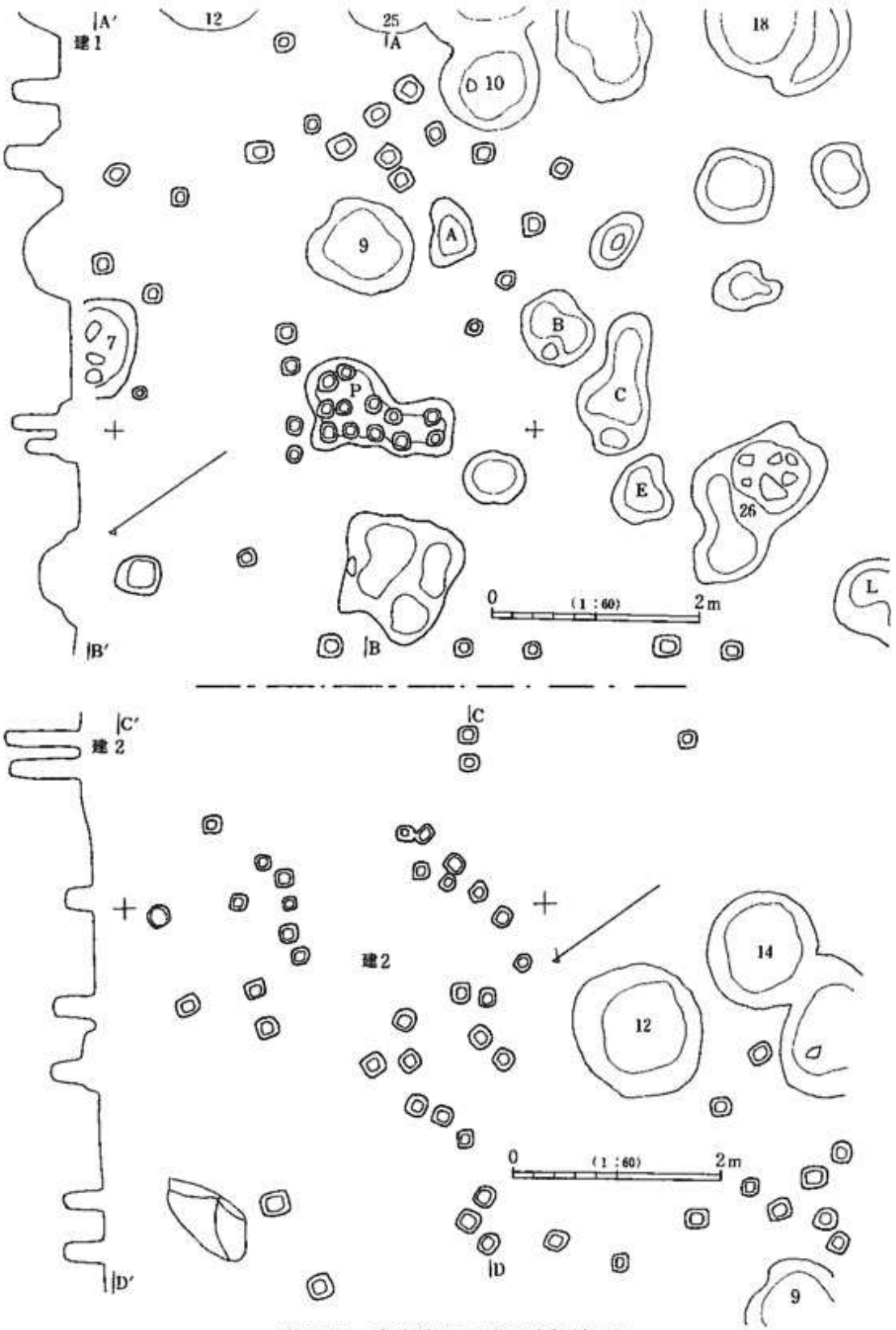
第48図　広庭遺跡B地区工房址1



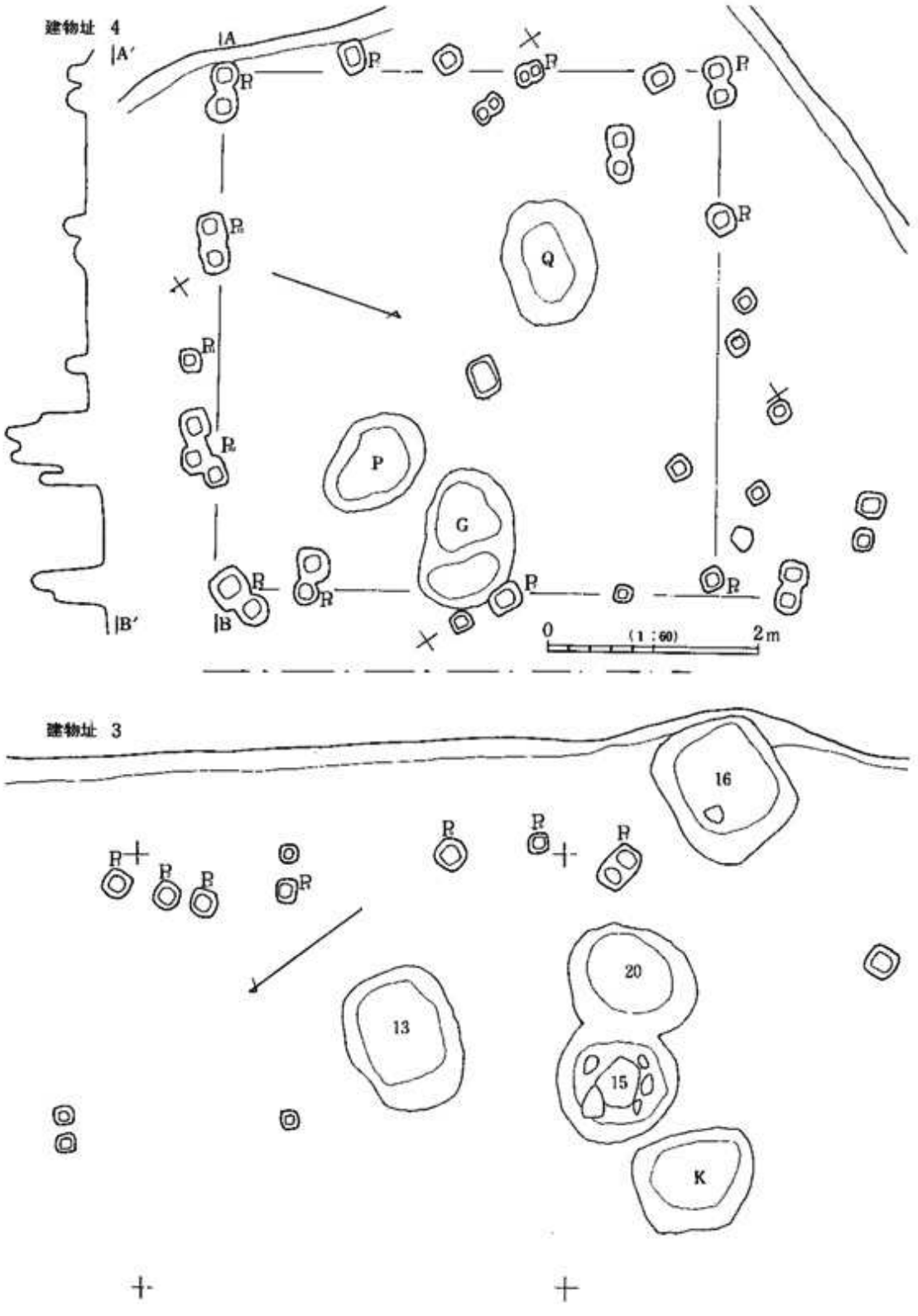
第49図　広庭遺跡B地区工房址周辺と工房址2・竪穴址4



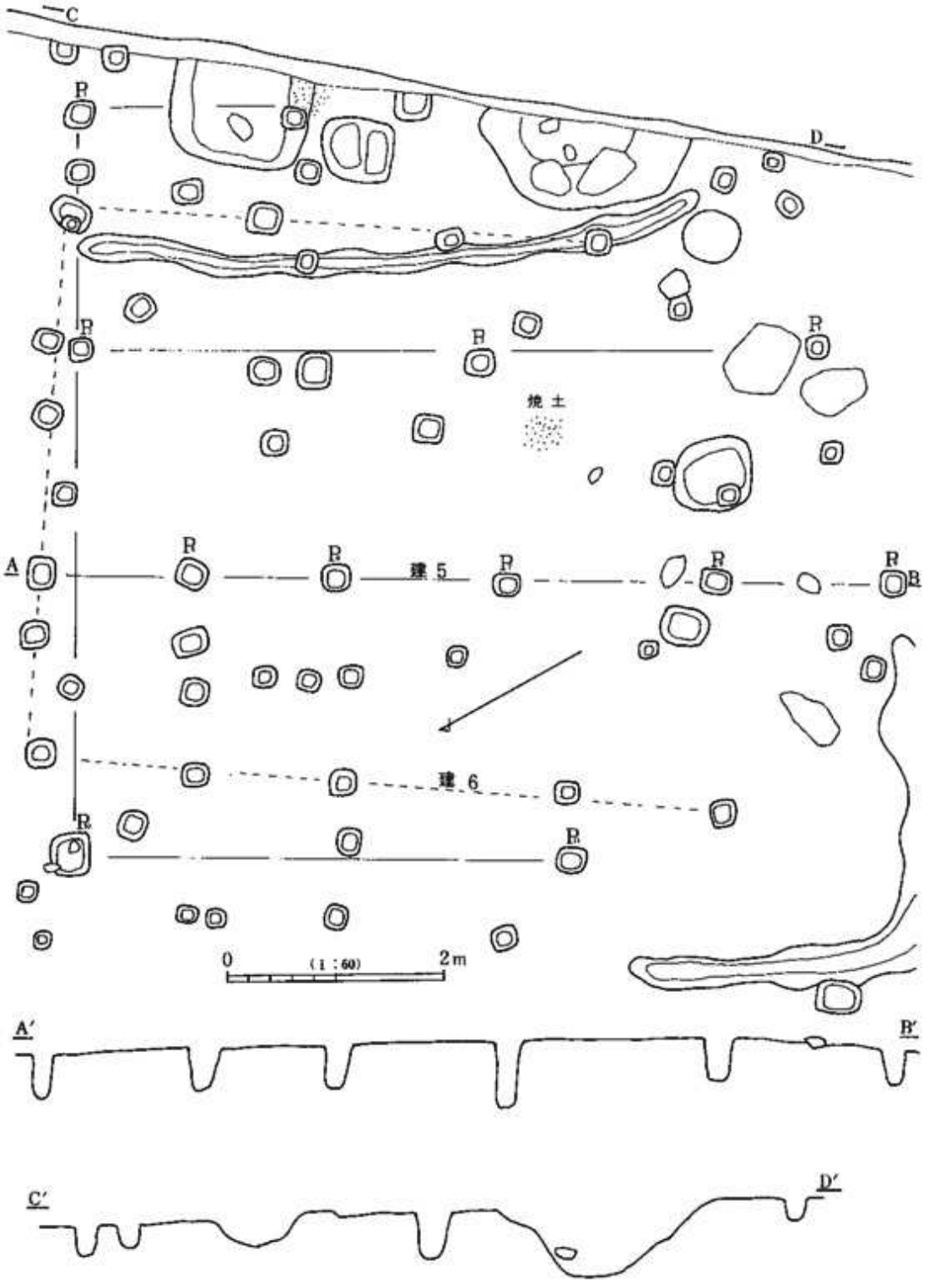
第50図　広庭遺跡B地区工房址1・2、竪穴址1・2、溝址2出土土器



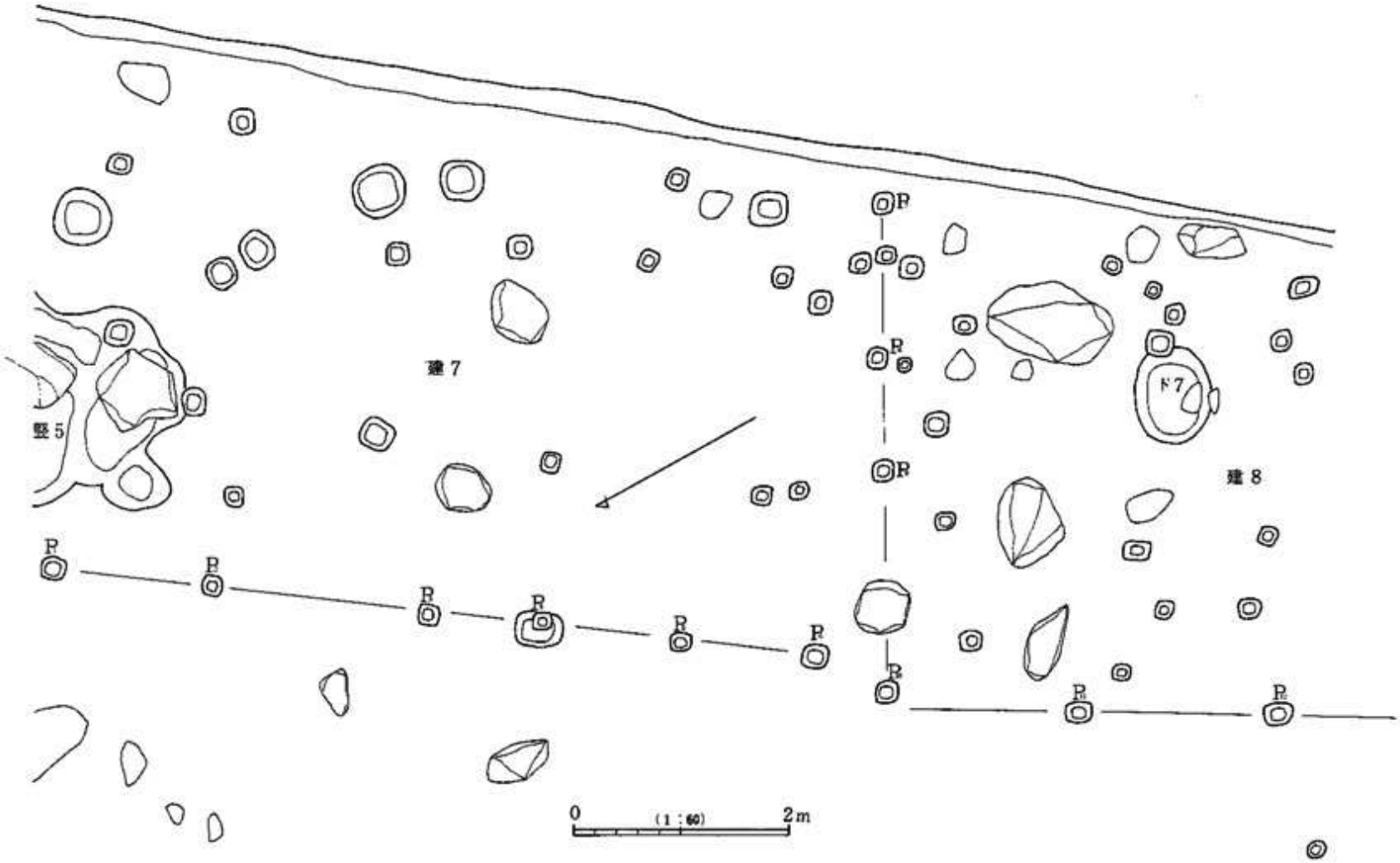
第51図　広庭遺跡Ｂ地区建物址1・2



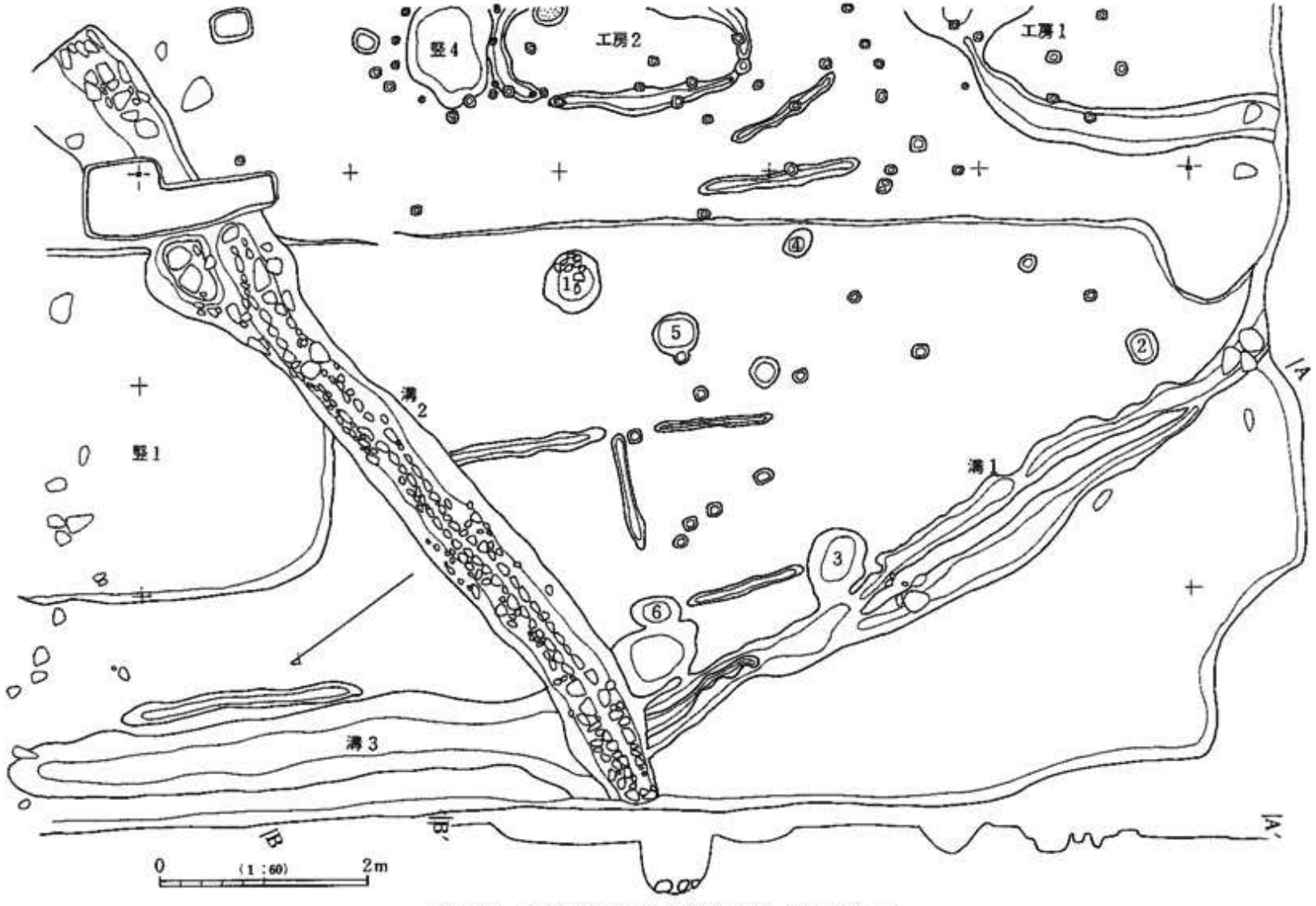
第52図　広庭遺跡Ｂ地区建物址3・4



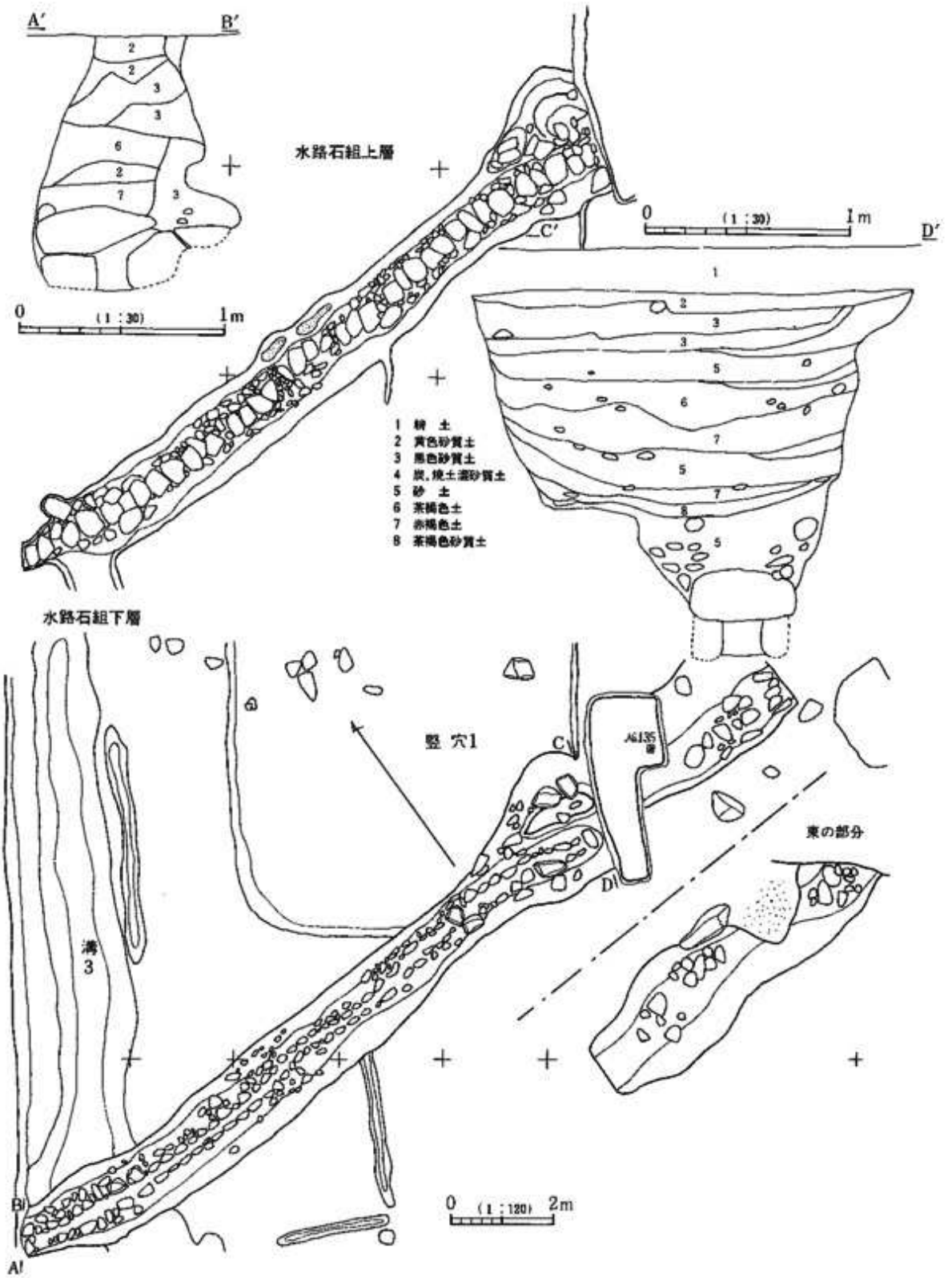
第53図　広庭遺跡C地区建物址5・6



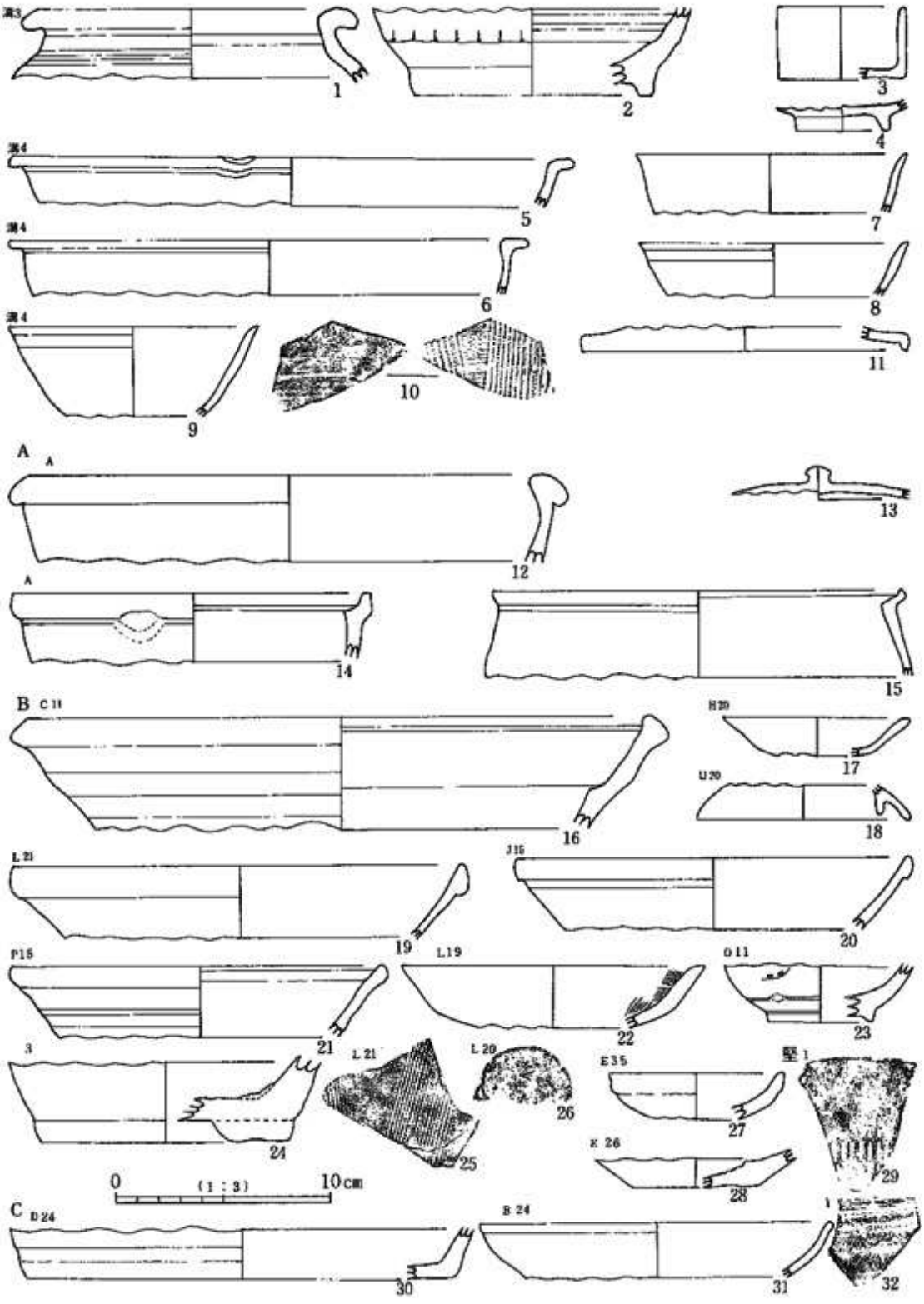
第54図　広庭遺跡C地区建物址7・8



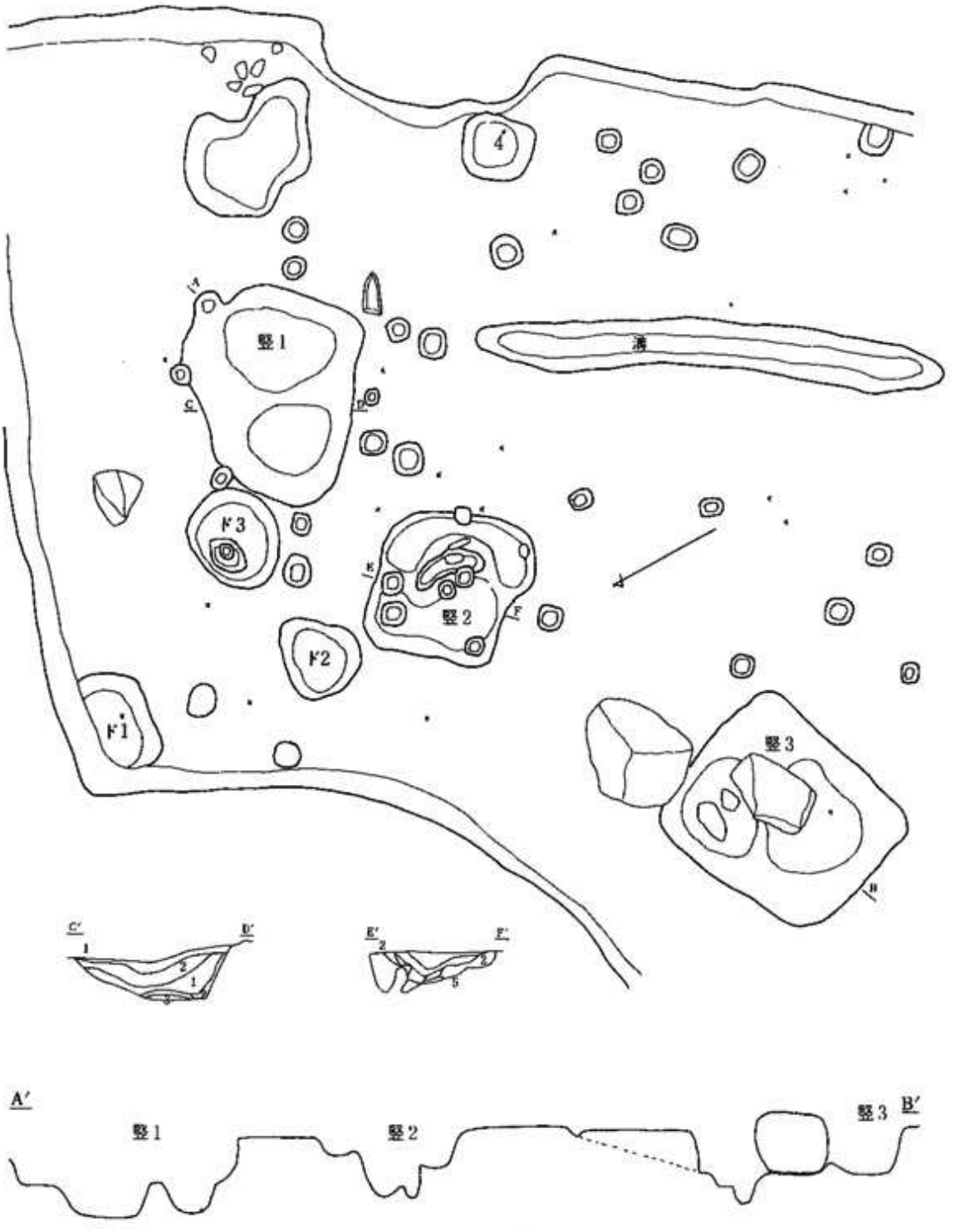
第55図　広庭遺跡B地区溝址1・2・3、竪穴址1～4



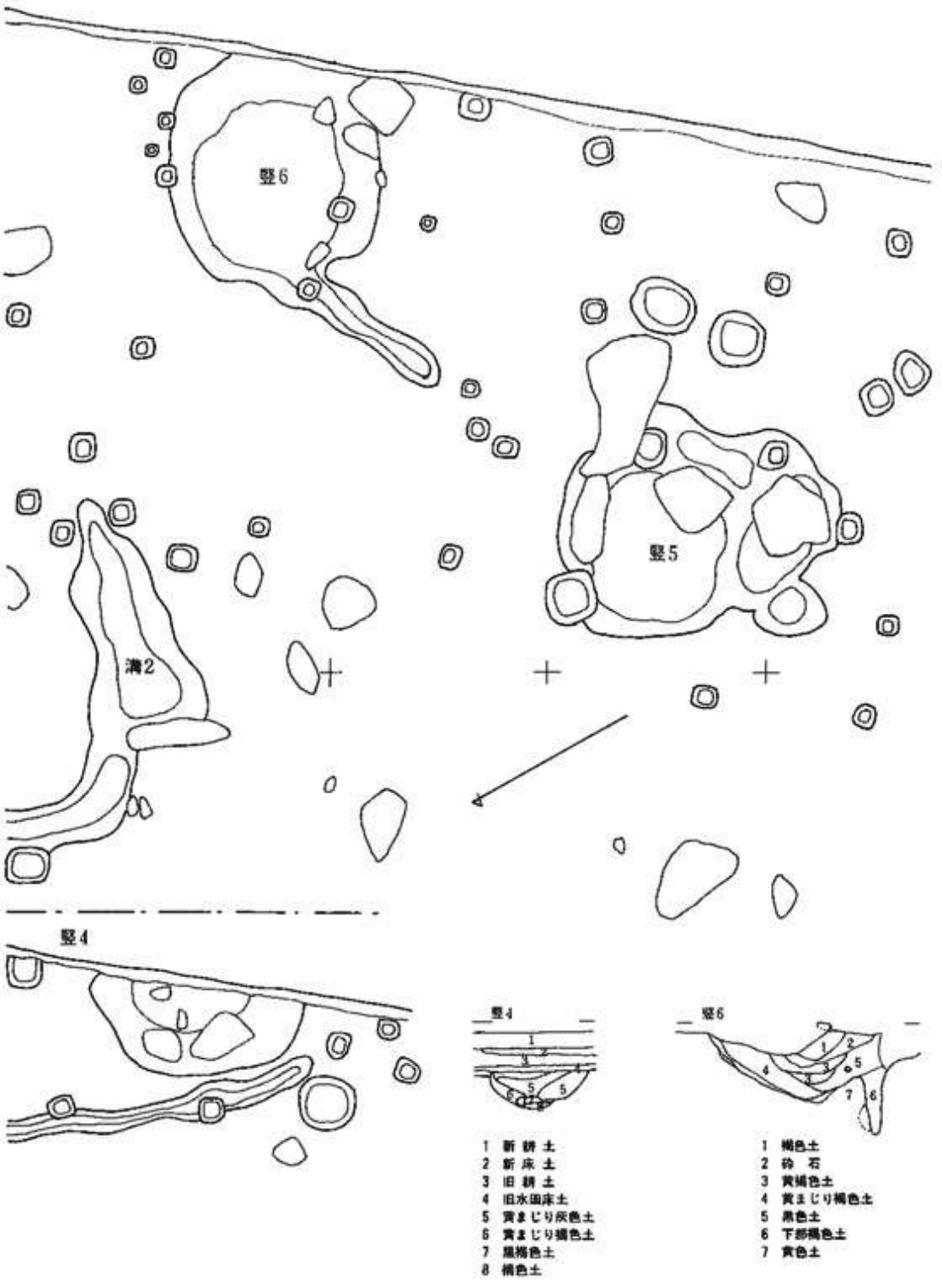
第56図　広庭遺跡B地区溝址2(水路址)



第57図　広庭遺跡Ｂ地区溝址3･4、Ａ～Ｃ地区グリット出土土器



第58図　広庭遺跡C地区竪穴址1・2・3



第59図　広庭遺跡C地区竪穴址4・5・6

Ⅲ. 調 査 の 結 果

3．ヨシガタ遺跡

広庭遺跡の南側に続く一帯がヨシガタ遺跡である。町道２－53号線が県道飯島・飯田線に交差するあたりから、城山の北側一帯に続いている。上方のタアジロ・ナカガイト・ヨシガタ・ウメノキダ地籍までは、一連の西高東低の緩傾斜地であるが、東側のニホンダ・マスノダ・タケノコシあたりになると、凹地を挟む起伏の多い地形のように思われる。ヨシガタ地籍周辺でも、北の広庭境・南の大宿地籍境に並行する凹地があり、城山台地の西端までくると両側に凹地地形が並び、現在でも低湿地が各所にみられる。今回の広域農道通過地を北から辿ってみると、広庭地籍の北側に、胡麻目川に面する北の沢の低地がある。広庭牛王地地籍の南には松ノ木田・ガマダ・ニタンダの低湿地があり、現在でも各所に湧水地がある。城山台地の西側を迂回すると、その南側にも山ノ崎の低地があって、その西南に、大宿遺跡のある石塚の台地へ登る。ここを過ぎるとまた稲田ガヒラ・石原田の低湿地があり、石原田の南部はやや高さを増すが、町道5057号線あたりから急傾斜になって大島川へ落ち込む地形になっている。東西方向に道路が多く、これらの凹地のへりを通過する位置にあるともいえる。

今回の調査地は、ヨシガタ遺跡の東端に位置する所で、低湿地の多い所ともいえる。以前から、これらの低地を水田や果樹園するために、西側を削り取り、東側へ盛り土して耕地の平坦化を図ったり、昭和55年頃の土地改良事業によってさらに盛り土造成が進んでいるので、土堤の高さがところによっては２ｍ～３ｍ以上に及ぶところもある。

ヨシガタ遺跡の発掘調査例は少ない。昭和27年、ヨシガタ地籍で耕作中に発見された1.5m以上深い所で検出された古墳時代後期の住居址、昭和54年に土地改良事業に先立つ発掘調査で、ジマイ地籍から検出された弥生時代後期の住居址調査に留まっている。ジマイ地籍が大宿遺跡の範囲に含まれるとするならば、ヨシガタ地籍の一例だけになる。

ヨシガタ遺跡の主要部は、県道飯島・飯田線周辺から城山台地の西・ウメノキダあたりまでと予想されるが、城山城跡がここにある以上、この周辺に中世の遺構群があると予想される。また、低湿地の持つ機能を考えれば、別の意味で主要な遺跡地帯ともいえる。

今回の発掘調査の結果は、ヨシガタ遺跡内の遺構検出は、Ａ地区での弥生時代後期の周溝状遺構、Ｂ地区の礎石配列を持つ建物址群、Ｃ・Ｄ地区の石垣遺構や溝址、Ｅ地区の溝址の検出に終わったが、北側の広庭遺跡の工房址・竪穴址・建物址等の中世遺構群の検出、西側の大宿遺跡の竪穴址・建物址の検出等を含めると、広範囲にわたり中世遺構が連続していることになる。起伏の多い地形であるが故に、中世城郭とかかわる遺構の所在が有力とも思える。

(1) 弥生時代後期の周溝状遺構

広庭遺跡E地区に隣接する低地から、転石群の中に黒色土の覆土の周溝状遺構が検出されている。一か所から弥生時代後期の土器片が出土しているので、弥生時代の遺構と思われる。遺構の正体ははっきりしないが、2か所に平状石の配置がみられ、蛇行した溝が取り巻くように検出されている。

(2) 中世・中世以降の礎石配列建物址（第61・62図、写図32）

町道5074号線の南の低地に、礎石配列の建物址が検出されている。このあたりは旧来から低湿地であったと思われるが、構造改善事業により土手の造成は高く、5m以上に及ぶところがある。礎石配列が確認されたところは、716番地のガマダ地籍の低地に当たる。構造改善の削平が進んでいるので、耕作土下30cmあたりで石が顔を見せたところもある。北側の町道5074号線沿いの土手下では黄砂礫土中で平石が検出されるが、南へ行くほど傾斜が強く、黒色土の堆積が厚くなり、黒色土中にすえられる平石もある。

北側では、町道の土手と平行するように7個以上の平石がならび、それに直行する平石が3～4個検出された。建物址1である。北側の平石の間隔は西側から、90・120・100・110・90・110・120cm、直行する平石の間隔は、90・80・120cmである。これらの平石群の中には、別の配列もみられ建物址5としたところもある。南へ行くと、建物址1の平石に続く配列もあれば、別方向の配列もあるので、建物址2にした。さらに南へ行くと方形配列のものもあり、建物址3のグループである。このあたりから急激な傾斜を持って地形は下がるが、その黒色土中にも平石の配列がある。建物址4のあたりは浸水を始めるところがあって、水面の下で平石の所在を確かめたところもある。確実な方形配列を持つ建物址はないが、いくつかの礎石配列を持つ建物址があったと思われる。

南の湿地帯の縁付近から、縄文時代中期・後期、弥生時代の土器片が出土し、平石群の周辺からは、青磁・常滑・瀬戸系の陶器片が発見され、時期は新しいと思われるが、小形な土管も検出されている。(第62図)

(3) 石垣遺構と溝址

城山台地寄りの果樹園(C地区)の、2m以上深いところから石垣状の遺構が検出されている。常滑の甕片・瀬戸系の陶器片数点が出土している。検出調査の結果、埋め土が厚く包含層の所在は確認されていない。構造改善事業の盛り土の跡かと思われる。

城山台地に近いあたりに溝址が検出されたが、あいにく6月で浸水が激しく検出調査は出来なかった。城山台地に平行するものではなく、東へ向かう溝址のようである。

〔4〕 溝址と格子状遺構（第63図）

城山台地の西側の低地（E地区）は山ノ崎の低湿地で、雨の度に水溜まりの出来るところであった。広域農道の通るところは、構造改善事業で削り取られて、上の田との高低差は1mありながら、土手下を除いて包含層が残されている。縄文時代中期・弥生時代後期・中世の土器片や陶器片が出土している。古い時期の遺構の確認はなかったが、第63図にあるように、溝址が4、中近世かと思われる特殊な格子状遺構が検出されている。

〔5〕 ヨシガタ遺跡のまとめ

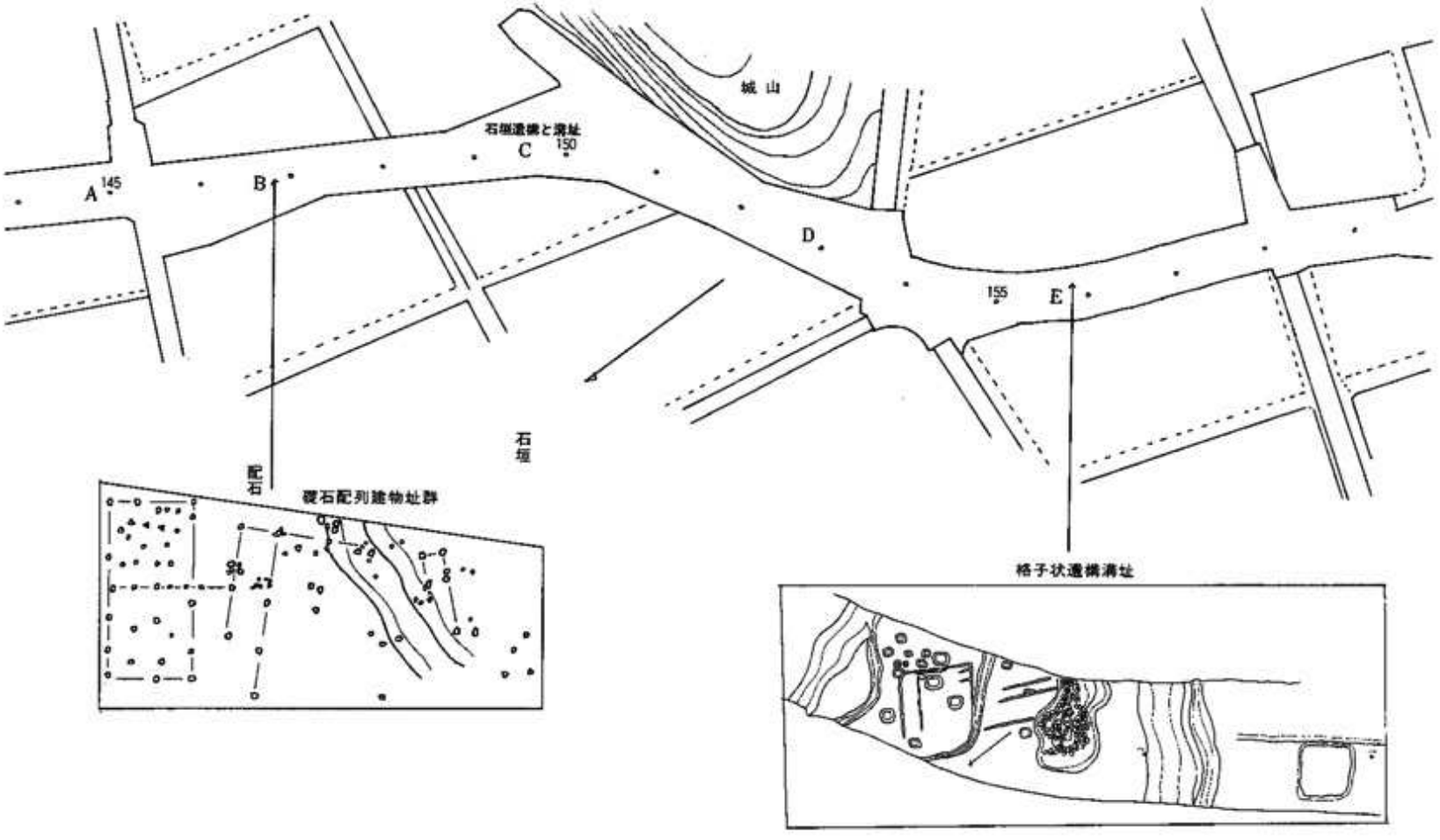
ヨシガタ地籍の地形でも触れたように、いくつもの湿地帯を通過するところで、雨降りの多かったこの年の調査はいろいろな障害に遭遇した。

検出量の多かった広庭・大宿遺跡を控えていたために、十分な検出が出来なかったが、礎石配列の建物址の検出は、この地域の特殊性を知る重要な発見と思われる。複雑な地形の中で、2m以上も深いところから、中世の陶器片が検出されたり、時期不詳ではあるが溝址の発見が多かったことも、この場所の地形状況を如実に物語っている。

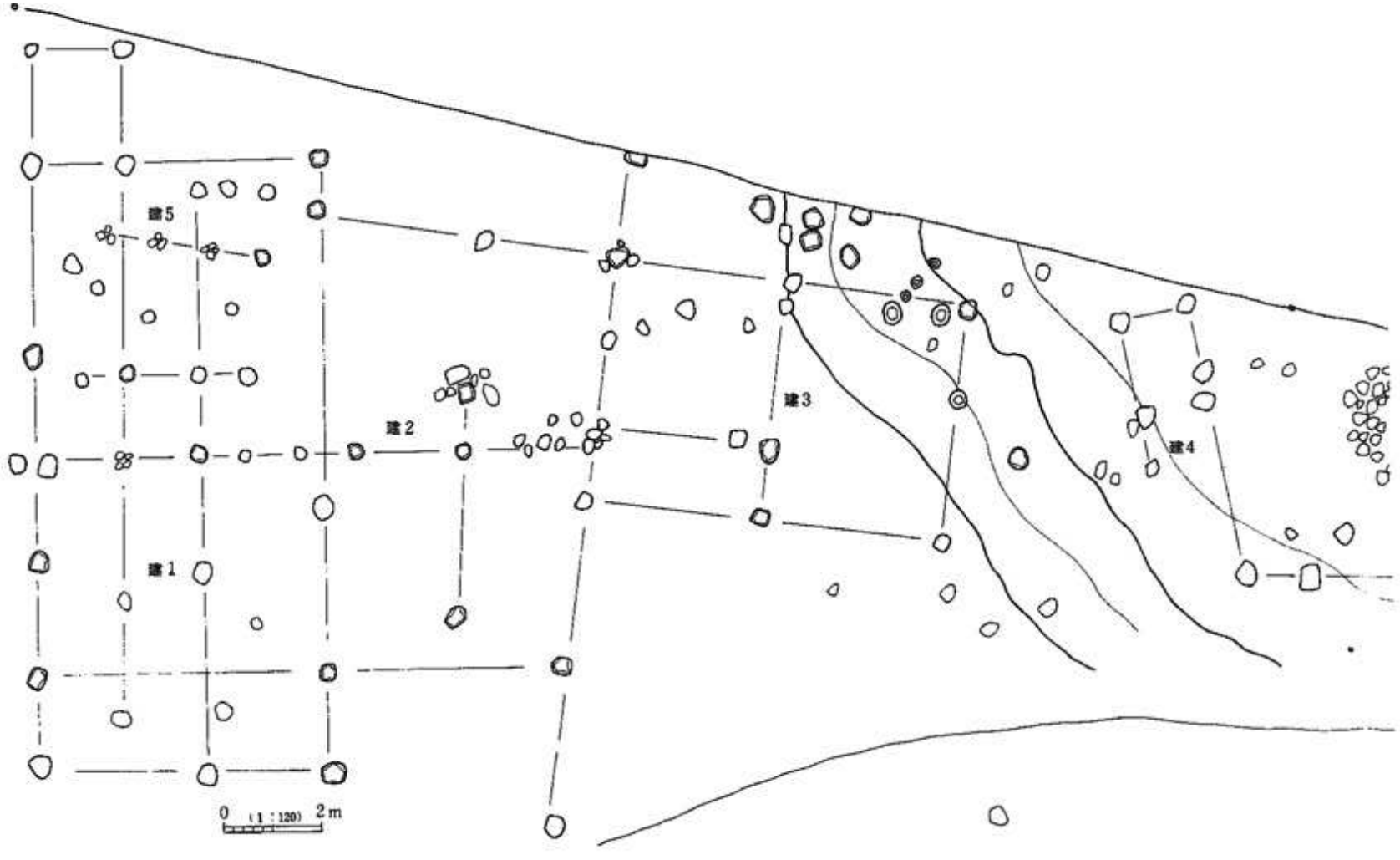
B地区の礎石配列の建物址のように平石の配列があるところは別として、確実な配列は確認されないけれども、平状石が各所から発見され、その近くから中世陶器が発見されたところが多い。地域の方から、「平石は出ないかと」よく聞かれたことがある。構造改善事業中に平石の配列があったと言う方が多かった。広庭遺跡のB地区でも、C・D地区でも気になる平石が発見されている。ヨシガタ地籍でもD・E地区では、礫群の中に平石が配列したようなところは各所にあった。これが何であったかは確認されていないが、今後に残された課題のひとつになると思われる。

広域農道の通過地域の中には、構造改善事業の行われたところが多いが、この事業が行われた水田の下層に遺物包含層が残され、遺構が検出されたところが多いことも、今回の調査で確認されている。

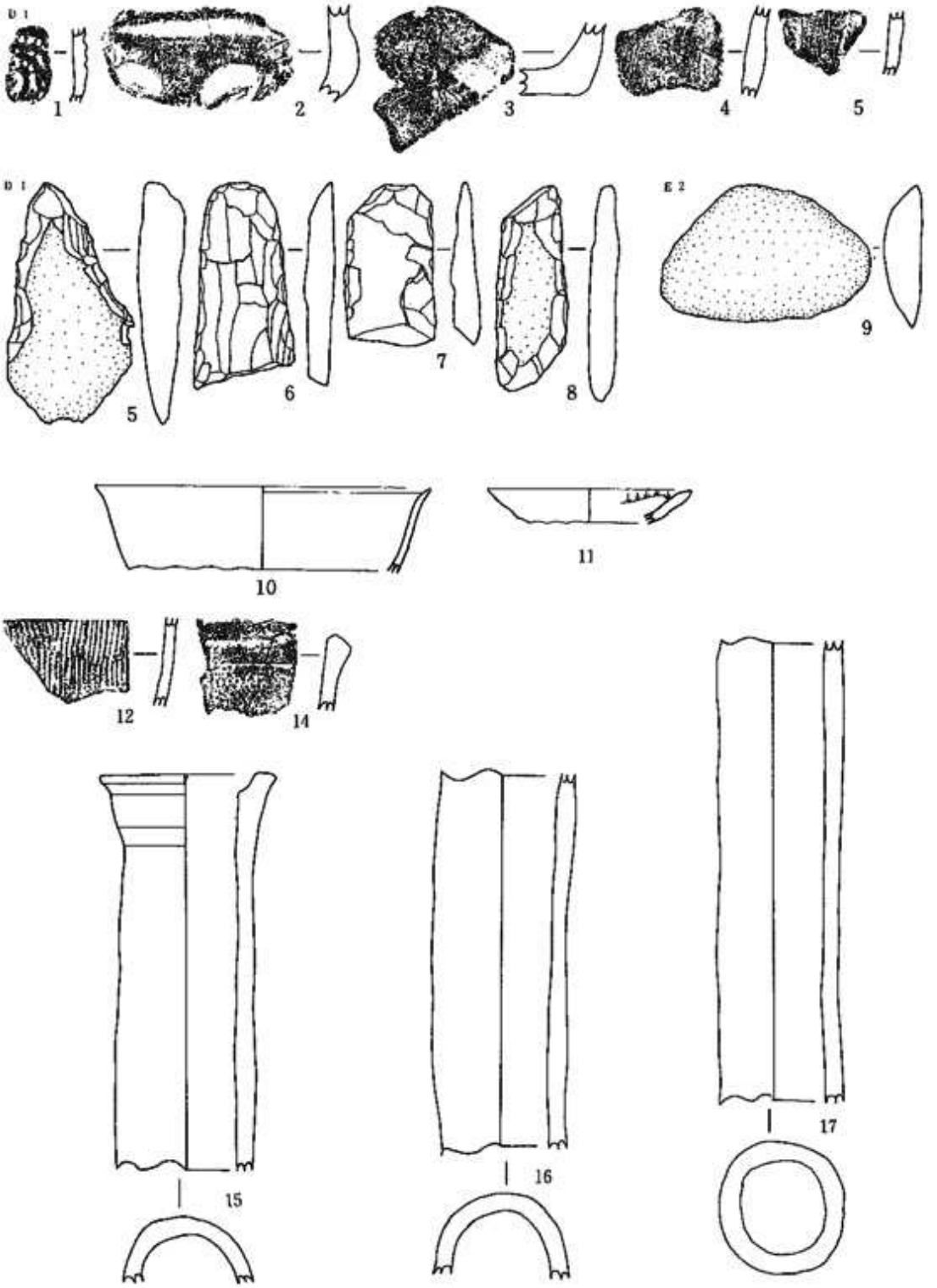
城山城跡の周辺地域の中で、城跡にかかわる中世遺構がつかめた訳ではないが、他地域に比べて中世遺構が多いことは事実である。今回の事実を足がかりにして、この周辺の中世遺構の解明が出来たらいいなと思われる。



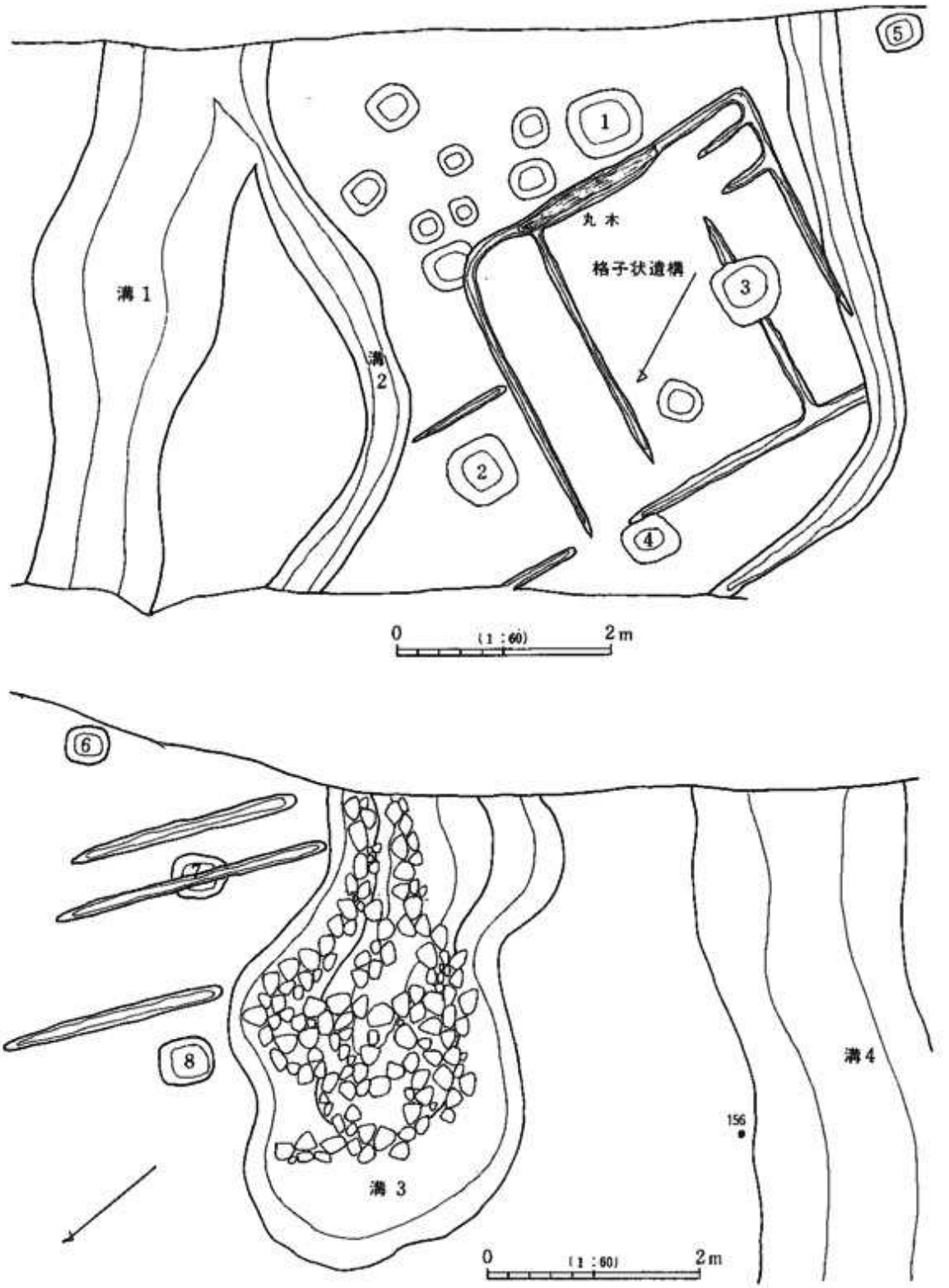
第60図　ヨシガタ遺跡調査区位置図



第61図　ヨシガタ遺跡礎石配列建物址1～5



第62図　ヨシガタ遺跡B地区出土遺物



第63図　ヨシガタ遺跡Ｅ地区溝址、格子状遺構

Ⅲ. 調 査 の 結 果

4．大宿遺跡

ヨシガタ遺跡の南側に位置し、西は県道飯島・飯田線の東側一帯から城山台地の西側あたりまでの範囲で、北はヨシガタ地籍と間する低地から石塚の台地を含めて、その南側の石原田地籍までの範囲である。

地籍名をみると、県道飯島・飯田線より上方に番面・大宿があり、県道下にヲヲシク・出口・ジマイ・イシズカ・山ノ崎・タキバ・石原田・タナダがある。東西に続く台地上は西上方からヲヲシク・ジマイ・イシズカで、広域農道の通過地はイシズカ地籍になる。

広域農道の通過地を地形的にみると、北東側は、ヨシガタの南の低地はイシズカと城山沿いの山ノ崎の低地がある。調査地ではヨシガタ遺跡のＥ地区と大宿遺跡のＡ地区にあたり、黒色土が３ｍ以上堆積するところである。南側の台地上もイシズカの一部で、西側のジマイ・ヲヲシク地籍を経て大島山に続く台地である。この台地の南端を縦断するように広域農道が通過するので、調査地Ｂ・Ｃは台地上にある。この台地の南側は急崖となって稲田ガヒラの低地へ落ち込み、石原田の低位段丘から大島川侵食谷へ続く起伏の多いコースを辿っている。

調査区Ａは山ノ崎の低地に面する傾斜面で、イシズカの名のように転石と黒泥土の多いところである。通過地は構造改善事業の埋め土が１ｍ以上載せられ、その下に黒色土、茶褐色土の包含層がある。２ｍほど下から弥生時代の土器片が出土したところもある。Ｂ・Ｃ地区は台地上にあり、台地の南は転石群が多くＢ地区では北側に面して遺構群が検出され、Ｃ地区は台地全面から遺物・遺構が検出されているが、尾根の中央付近は遺構・遺物出土が希薄で、北側傾斜面には縄文時代早期・中期の竪穴址・土壙群が集中し、南側斜面には縄文時代晩期の遺物集中地がある。この辺りは転石群がとくに多いところで、南側は急角度で落ち込む地形で、よくある縄文時代晩期の遺構立地と類似したところである。

検出された遺構は非常に多く、東側の低地に面するＡ地区では、縄文時代・弥生時代の遺物包含がみられ、周溝状遺構と土壙が検出されている。台地上のＢ・Ｃ地区は道路敷地のほかに土地造成区域も含まれるので、調査対象範囲が広く、広いところでは35ｍもあり全体の長さは100m以上もあるので、調査面積は2000㎡にも及ぶ。検出された遺構は縄文時代早期から中世に至る長い間に広がり、遺構数も多い。その概要は次の通りである。

縄文時代早期住居址１・同時期の土器が出土した竪穴址・土壙は42基ある。とくに集中的に出土した竪穴址・土壙があるので、土器片は470 点以上ある。器形の知れる土器も数点出土している。縄文時代前期の土壙・集石炉も数基検出され、中期の土壙も数10基あると思われる。縄文時代晩期の遺物出土も多く、土器棺が隣接して５か所に埋葬された土器棺墓群が１か所、

離れた位置に２～３基の土器棺墓が検出され、それとは別に低地に面する傾斜面に相当量の土器片・石器も出土し濃厚な縄文時代晩期の遺跡となった。

弥生時代後期の住居址が２軒検出され、この時期の土壙も１～２基ある。形態的にみると平安時代であるが、出土遺物から想定すると中世期と思われる住居址が２軒検出され、中世の遺構は竪穴址・石組土壙・不整形の掘立柱建物址４基が検出されている。

(1) 縄文時代早期・前期の遺構

B・C地区では広い範囲から縄文時代早期・前期の遺物が多く出土している。これらの遺物が出土した遺構は、B地区では５号住居址のほかに土壙８基、C地区では土壙37基（内竪穴址３）が数えられる。これらが全て早期または前期のものではないので、とくに出土遺物の多かった遺構・特色のある遺構について報告する。

① B地区５号住居址（第65・68・70図、写図32）

B地区西側で検出された竪穴式住居址で、南北3.2m・東西3.1mの円形竪穴住居址で、中央やや北側に小振りな石４個を用いた石囲い炉がある。床面は茶褐色混じりの面にタタキ状の硬い面がみられた。壁高は18cmほどの深さで、まだ下面に床があるように思われるが、炉の高さ・ピットの状況により掘り下げてない。ピットの覆土も黒褐色土で深さ20cm程度である。

出土した遺物は中期のものも含まれている。第68図11～13・18は早期または前期のもので、この他に山形文の押型文土器の小片がある。小形石器は第70図１～５で剥離面を使用する石器である。覆土や土層等から早期に比定するにはやや材料不足であるが、直径30cm足らずの小さな石囲い炉の形態、東側に隣接して直列的に並ぶ早期土器出土の土壙48・31・12等があること、他の早期の竪穴址の覆土に似ていることから、早期または前期の住居址と扱った。

② B地区土壙１９（第65・68・70図）

B地区西側の北斜面で検出された竪穴址状の土壙である。長軸212cm ・短軸150cm の楕円状の土壙で掘り方は円筒形で深さは40cmある。

出土遺物は山形の押型文土器片20点ほど出土し、１か所に数片固まっていた（第68図６～８）石器は不整形のもので、横刃型・剥片石器が多い。１個だけだが丸形磨石が出土している。

表5　大宿遺跡（縄文早期・前期）土壙一覧表　NO.1

NO	土壙番号	地区位置	出土土器			大きさ・深さ			出土石器												備考
			早期	前期	中期	長軸	短軸	深さ	打石	磨石	乳石	横刃	礫器	錘石	石鏃	石匙	スタ	剥石	丸磨石	剥片	
1	5号住 ●	B	2	10		320	310	24				2					1		2	4	
2	B11	〃	2			118	90	30				1			1					1	
3	〃12	〃	3			170	150	61												1	
4	〃17	〃	3			70	62	45													
5	〃19 ●	〃	20	2	4	212	150	40	2			3					1		1	4	竪穴状
6	〃29	〃	2		6	70	64	26							1					1	
7	〃30	〃	1			107	70	25											1		
8	〃31	〃	3	5		166	150	57				1					1	1		1	
9	〃48	〃	1			130	126	46													
10	C2	C	1	2		68	34	24	1												
11	〃4	〃	3	3		89	80	54												1	
12	〃16	〃	1	1		104	94	20	1												
13	〃25 ●	〃	6	4	5	150	100	45									2	4		3	
14	〃27	〃	4		2	114	110	30													
15	〃28	〃	4	1	5大	118	90	38	4			1					1	1		19	
16	〃29	〃	3			192	120	25													
17	〃30	〃	1		10	210	100	30										1	2	8	
18	〃32	〃	5		4	196	160	24	1			1					3		1	1	
19	〃33	〃		2	1	114	94	29									3		1	2	
20	〃34	〃	4	2	8	180	180	45	5							1	3			8	
21	〃35	〃	1		7	128	102	19	2							1				5	
22	〃40	〃	3		3	90	86	39	1									1		1	
23	〃42	〃	4	2	8	148	143	57	2											2	
24	〃45	〃	2		7	142	96	24	3					1						6	
25	〃47 ●	〃	29	7	5	230	198	32	1			2							2	3	
26	〃49 ●	〃	45		7	336	246	44	3			6	1			1	5	10	5	15	竪穴状
27	〃52	〃	2		4	108	90	33									1			3	
28	〃53	〃	4		5	176	110	54	5			2							1	3	
29	〃57	〃	2		7	160	142	38	2			2					1	1		2	

大宿遺跡（縄文早期・前期）土壙一覧表　NO.2

NO	土壙番号	地区位置	出土土器			大きさ・深さ			出土石器											備考
			早期	前期	中期	長軸	短軸	深さ	打石	磨石	乳石	横刃	礫器	錘石	石核	石鏃	スク	剥石	丸基石	剥片	
30	C58	C	1			182	126	33	2			1						1		4	
31	＊66	〃	10	3		170	166	52	2			1					2	1	5●	3	
32	＊67	〃	27	1	7	186	160	75	2			1					2		3	2	
33	＊70	〃	4	5		154	110	40										1		1	
34	＊71	〃	1			102	90	32					1								
35	＊74	〃	5			94	80	18	1			2			1				3		
36	＊77	〃	2			100	70	49													
37	＊78●	〃	69				250	59	1			7			2	1	2	11		20	
38	＊82●	〃	101			314	300	24	1			8				3	1	6	1	10	竪穴状
39	＊85	〃	1	5		92	84	27				1									
40	＊92	〃	1									1									
41	＊94	〃	1			140	140	27													
42	＊98	〃	1			56	50	32													
43	105	〃	2	5		106	90	28								1		1			

③　B地区土壙１２・３１・４８（第68・70・71図）

	長軸	短軸	深さ
１２	１７０	１５０	８１
３１	１６６	１５０	５７
４８	１３０	１２６	４６

B地区５号住居址の南隣に隣接しあった土壙で、右表のように大きくて深い土壙で、掘り方は筒形である。中層から下層にかけて平石が出土している。覆土は黒褐色の下に茶褐色土堆積が厚く硬めである。

土壙31の中層から下層にかけて尖底乳房状突起の底部（第71図１）と山形文押型文土器片が出土し、土壙48からも尖底乳房状突起が出土している。小形石器では、第70図12～15は土壙31のもので、剥片石器・横刃型石器・小形丸磨石が出土し、B地区では土壙19とともに早期の土壙として比定する材料が整っている。

④　C地区の縄文時代早期の土壙

C地区の土壙は土器棺墓の土壙を除いて105基登録されている。この内、別表のように縄文時代早期・前期の遺物が出土した竪穴址・土壙は36基ある。その内、10片以上出土した土壙は、47・49・66・67・78・82の６基である。出土土器の中で特徴的なものが出土した土壙25を含めて７基について報告する。なお、前期の遺物出土の多かった土壙19・42・47については後述する。

⑤　C地区土壙２５（第72・73・74・76図）

C地区西側、土壙49の南隣で検出された土壙で、南北１m・東西1.5m・深さ44cmの楕円形の土壙で、上面に配石状の石が置かれている。黒色土系の覆土が厚く、この黒色土と下層の茶褐色土中から早期土器片６・前期土器片４・中期土器片５が出土している。第74図の１～３は、赤褐色の変形楕円文土器で、穀粒が大きく、土壙49に１点・土壙82に２点出土しているが、他に余り例のない土器片である。

石器は、横刃型・剥片打石器のほかに、小形石器で第76図１～５のスクレーパー・ナイフ状の整った石器が出土している。

⑥　C地区土壙４９（竪穴址）（第72・73・74・76図、写図41）

C地区の西側で検出された竪穴状の掘り込みで、南北2.5m・東西3.3m・深さ40cmほどあって、形態的にみれば竪穴式住居址のようであるが、焼土が検出されていないので竪穴址とし、遺構整理上土壙の中に含めている。

上層検出作業中から楕円状に黒色土の堆積がみられたが、周辺に多くの土壙があるので、整ったプランが掴められなかったものである。約10cmほどの黒色土を取り除くと押型文土器片の

出土が始まり、中層の赤褐色中や、下層の黄褐色土中から多くの土器片が出土するようになった。土器片は竪穴全域から出土するが、東側下層黄褐色土中の出土が多く、丸磨石の出土は西側に多かった。下層の黄褐色土に貼り付くように30～40cmほどの円形平状石が数個出土している。

床面と思われるところははっきりしないが、黄褐色砂礫質土の上に厚さ２～３cmの赤褐色粘質土が堆積し、この層から土器片が出土し、炭粒の混入もあるので、この辺りが床面かと思われる。東側では、南側が高く北側が低い傾斜した竪穴でもある。この竪穴の周辺には、土壙25・32・47があって早期土器片が出土している。

出土した土器片は45点を数え、第73図では穀粒形押型文土器は２(28・29)、22～27は格子目の押型文土器の口縁部、30・30の２は山形文、31～34・36は格子目文押型文土器で、総体的には格子目文の土器片が多い。

石器は、第74図８～26にあるもので数は多い。８～11・14は丸石・磨石で５個ある。丸石・磨石が多いのも特長のひとつである。16～19・21は単純剥離の横刃型石器、15は大形な礫器である。小形石器は、第76図16～26で、エンドスクレーパー・スクレーパー・ポイント状の整った石器が出土している。

⑦　C地区土壙６６・６７（第73・75・76・77図、写図43）

C地区東側、土壙82の北・東に沿って土壙66・67がある。土壙の大きさは表の通りである。上面からの土壙の形態は同じようであるが、66は深くて筒形、67は筒形ではあるが浅めで壁のたちは傾斜がみられる。遺物の出方も違う。

	長　軸	短　軸	深さ
６６	１７０	１６０	５０
６７	１８０	１５０	３４

土壙66の遺物は、早期の土器片は10個であるが、その内、第73図の40は山形文の押型文土器で、底部に近い部分であるが器形が推定できる。土壙上層で出土している。41～44は中層出土のもので、表裏条痕文を持つ土器片である。第75図１～７・第76図27～31の内、第75図１～３・６・７は丸石または磨石である。１～３の磨石は土壙上層から３個並んで出土している。本遺跡中最も典型的な精製された磨石である。出土位置からみて確実な早期の伴出石器とは言い難いが、他の丸石出土状況から推して早期のものかと思われる。小形石器はエンドスクレーパー・ポイント状のものも出土している。

土壙67からは27点の早期土器片が出土し、第73図45～53は山形文押型文土器と表裏条痕文の土器片であるが、これらの多くは壁に沿って発見されている。石器は75図９・10は丸石、76図30・31はポイント状石器と剥片石器である。

⑧　C地区土壙７８（竪穴址）（第67・71・78・79・81図、写図42）

C地区の西北隅にあり、用地外に多く続く状態で土器片が集中的に出土したところである。

黒色土の堆積が厚く下層の茶褐色土、赤褐色土が碗状に落ち込む様子が土層断面で観察することができる。この落ち込みの際から北側にかけて土器片が集中し、尖底乳房状突起の土器底部(第78図)が出土している。始めは小形尖底土器の完形品かと思ったが、輪積み整形の接合部から離れた底部である。

用地境の土層断面をみると、黒色土・黒褐色土・茶褐色土・黄褐色土が複雑に堆積し、黄土までの深さは60cmほどある。下層に幅約4mほどの落ち込みが観察され、この落ち込みの中に早期の土器片が集中しているので、土壙49・82と同様の竪穴址かと思われる。土器片を検出した範囲は、長さ2.8m・幅60cmほどのところから90点ほどの土器・石器が出土している。

土器片は接合されたものを除いても65点以上の多きにのぼり、器形の分かる底部が出土している。第78図1がそれで、山形文の押型を施文する尖底乳房状突起のある土器底部で、輪積み整形の接合部から剥がれたものである。2～24の土器片は、2は表裏条痕文土器の口縁、3・4は小さめの穀粒形押型文土器、6～17は山形文の土器片で、総体的に山形文の押型文土器が多い。18・19は格子目文、22・23は前期系の土器片で、東側上層に集石炉状の石組があったので混在しているものと思われる。

石器は第79図5～23で、5は礫器、他のものは横刃型石器・粗製な打石器が多い。小形石器は第82図の石鏃の他エンドスクレーパー・スクレーパー・ポイント状の石器が目につく。

⑨ C地区土壙82（竪穴址）（第77・78・81図）

C地区東側で検出された竪穴址である。はじめの検出作業の時から黒色土が多く、土器・石器の出土の多いところであったが、黒色土の土壙10・11やピットの重複で確認が遅れたところでもある。南北3.1m・東西2.9mのほぼ円形状の竪穴で、壁高は15cmくらいで浅い掘り込みである。炉や焼土の発見はないが、壁沿いに7個のピットが間隔的に並び、形態は竪穴式住居址のようである。床のような硬さは見当たらないが、土器片の出土面はほぼ揃っている。総体的に地形傾斜に沿って北東へ傾斜している。

上層では黒色土の覆土を持つ土壙10・11が検出された。その後掘り下げてみると黒褐色の堆積土が円形状にみられ、上面からの土器片の出土が多く、何回かに分けた掘り下げ調査により100点余の土器片が記録されている。(第66図)土器片の出土範囲は竪穴全体に広がるが、西北側の配石状石の周辺では大きめな土器片が集中し、一個体の土器片の固まりがあったように思われる。

ピットは黒褐色の覆土を持つもので、15cm×13cmほどのものが多く、深さは14～25cmのものがある。竪穴の掘り方・ピットの配列等からみれば住居址形態である。炭塊は一部で見られたが、西側配石の近くで焼土混じりがあっただけで焼土は検出されていない。

100点ほどの土器片の大部分は押型文土器で、山形文・格子目文の土器が主体である。穀粒または穀粒まがいのものも数点出土している。第78図25～28は山形文土器の口縁で同個体のよう

に思える。32～43・44～47はそれぞれ二型式の山形文の土器片、48・49は格子目文、51～53は表裏条痕文または条痕文の土器片、56は山形文のつく尖底乳房状突起のとれた底部である。55は前期様式の土器である。

石器も多く出土している。第80図７は丸磨石で、このほかに横刃型・半磨製・剥片の打石器であり、小形石器は第81図16～19は小振りな石鏃で、３はエンドスクレーパー・４～14はスクレーパー状のもの・剥片利用の石器等である。

⑩ 縄文時代早期・前期の土器片が５点以上出土した土壙（第76・81・82図）

今まで説明してきた土壙を除いて、縄文時代早期・前期の土器片が合わせて５点以上出土した土壙は９基ほどある。これらが全部早期または前期の土壙とはいえないが、Ｃ地区で土壙４(早６・前３)・２８(早４・前１)・３２(早５)・３４(早４・前２)・４２(早４・前２)・７０(早４・前５)・７４(早５)・８５(早１・前５)・１０５(早２・前５)である。その内、特徴的なものを上げると次のようである。

土壙４・・Ｃ地区土壙25の西側にあり、85cm×80cm・深さ43cmの土壙で石の混入が多い。黒色土の覆土の土壙であったが、出土した土器は表裏条痕文のもので(第82図３・４)石器は黒曜石だけである。

土壙２８・・Ｃ地区土壙49の東側で土壙90と重複して検出された土壙で、第82図９は山形文土器、10は前期のものと思われる。中期の大きな土器片(第88図11～14図)が出土している。土壙90と共に中期の土壙かと思われる。

土壙３２・・Ｃ地区土壙49の北に接した竪穴状の土壙で1.9m×1.6m・深さ25cmの円形の竪穴で、早期の土器片が５点出土し、第82図32は格子状文の土器である。スクレーパー状の剥片も出土しているが、大きさに比べて遺物は少ない。特異なもので平状石が２個床面に接してあり、使用された形跡がある。

土壙３４・・土壙32の東側にある土壙で、180cm ×180cm ・深さ32cmの土壙で、第82図14～16穀粒状まがいと表裏条痕文の土器で、前期・中期の土器も出土している。第81図32～35は石鏃・ポイント状の剥片石器が出土している。

土壙４２・・北側の用地境壁沿いのほぼ中央にある土壙で、東西1.4m×1.3mの方形状の掘り込みで、深さ60cmほどあり、黒褐色炭混じりの覆土の厚い土壙である。早期土器片４・前期と中期の土器片10点のほかに円板２個が出土している。第82図20～22は表裏条痕文の土器片で、

第89図23・24は円板である。前期の土器は図示してないが、覆土等の様子から前期の土壙かと思われる。

土壙４７・・北側用地境の西側で検出された土壙で、1.8m×1.9m・深さ52cmほどあり、黒色土の覆土の厚い土壙で、西側の土壙105 にかけて集石がある。出土した土器は早期29・前期７・中期５と量が多い。第73図９・21は楕円状文・山形文・格子目文の押型文土器で、中には前期のものも含まれている。石器は磨石(第74図５～７)や第76図10～14の硅岩製の打石器やポイント状の剥片石器が出土している。接触する土壙105は前期で、この土壙は早期かと思われる。

⑪　Ｃ地区前期の遺物の多い土壙

Ｃ地区の土壙の中で前期の遺物が多い土壙は、土壙19・25・47・70・85・105 等が上げられる。今まで触れてきた土壙を除いて、土壙19・85・105 について報告する。

土壙１９・・１号住居址の東隣りの浅めの土壙で、掘り込みが20cmほどのものである。石匙(第81図28・29)・エンドスクレーパーや整った打石器(第80図11・12)が固まって出土している。伴出した土器は小片で前期か中期か不詳である。

土壙８５・・調査地の西北隅、竪穴址78の東側で検出された集石を持つ土壙である。集石があるので掘らずじまいで終わったものであるが、前期と思われる土器片が５点出土している。第89図49～51である。

土壙１０５・・北側西上方土壙47に接して検出された集石を持つ土壙である。土壙47と105にかかるように集石があった。焼土等の発見はなかったが、前期の遺物出土の多い105 にかかわるものと思う。出土した土器は第82図44～47・89図57・58で表裏条痕文と前期と思われる太目の縄文を持つものが入り組んでいる。石器は第84図22・23の石鏃と剥片使用の石器である。

⑫　遺構外出土の縄文時代早期の土器（第83図）

第83図にＣ地区の遺構外から出土した縄文時代早期の土器片を載録した。その範囲は東側のＤ列から西側の土器棺墓群周辺までの北側の８列から用地境まで広がる。早期土器片が出土した竪穴址・土壙の範囲に広がることは言うまでもない。遺構から出土する押型文土器、表裏条痕を持つ土器と似通ったものが出土している。

⑬ 大宿遺跡の押型文土器の特徴

第71図は大宿遺跡の代表的な押型文土器を文様・形態別にまとめたもので、第85図は高森町内で平成3年から5年にかけて出土した千早原・大島山上の平・牛牧新田原・深山田遺跡の押型文土器の主なものを並べてみたものである。以前に発見されたその他の遺跡の主要遺物は取り上げてない。また、発掘された土器片全体について数量的な集計がなされていないので、概要を比較する程度の資料提供に留まっている。

第71図1～4は尖底乳房状突起の底部で、B地区で2点、C地区で3点(内1遺構外)でB地区のものは不詳であるが、C地区のものは山形文の尖底部である。12も底部に近いものである。

第71図5～9は楕円状文の押型文土器で、全体のものを数えても20点くらいでその数は少ない。傾向としては大宿遺跡のものは穀粒が小振りである。第85図の1～11は穀粒の大きなタイプで新田原・深山田遺跡のものは大きく、上の平にも大きいものはあるが、千早原・上の平・大宿遺跡では小さいものが多い。

第71図10～18は山形文の土器で、15・16は横走、17・18は間隔の広い縦走のものである。10～14は縦走タイプの大形な土器片で、大宿遺跡では山形文の土器片が多く出土している。似通った山形文の土器片が多く出土しているのは千早原遺跡である。

第71図19～26は格子目文の押型文土器で口縁部が多く出土している。全体を通して格子目の押型文土器の出土が多く、第85図の30～48は高森町各地の格子目文の押型文土器であるが、大宿遺跡からの出土が多い。大宿では土壙49からの出土が飛び抜けて多かった。

大宿遺跡では大小さまざまな丸石・磨石の出土が多い。表5でみられるように竪穴址・土壙から出土したものは32個、遺構外からの7個を含めると39個ある。第86・87図に載せてある。遺構別にみると、B地区では5号住居址で2、土壙19・32でそれぞれ1個ずつ、C地区では土壙47で2、30で2、49で5、66で5、67で3、74で3で、1個出土した土壙が7つある。最も精製されたものは土壙66のものであるが、自然石のままの丸石・周囲を研磨した磨石等いろいろある。縄文時代の早期に伴出するものかどうかはっきりしないが、他の早期遺構に多く出土しているので、早期のものと扱っている。

(2) 縄文時代中期の遺構

縄文時代中期と思われる遺構は土壙だけである。中期と思われる土壙は最も多く、B・C地区あわせて50基以上はあると思われるが、総体的には土器片の出土量は比較的少ない。中期の土器や土器片が5点以上出土した土壙は、B地区では土壙29(6)・31(5)で、C地区では土壙3(15)・15(8)・17(16)・19(6)・22(10)・28(5)・30(10)・34(10)・35(7)・37(10)・42(8)・45(7)・49(7)・53(5)・57(7)・67(7)・69(10)・89(12)・90(5)・99(10)と22基に及ぶ。

第88図1は土壙69出土の底部で、土壙の上面から出土している。爪形文を持つ中期中葉の土

器である。この土壙は1.4m×1.3mで深さ45cmの大きめな土壙で、中期土器片のほかにエンドスクレーパー・打石器が出土している。2は、土壙90上面から出土している。大形な土器片が出土した土壙は、第88図・89図にあるように土壙3・28・35・37・46・53・89等から出土している。竹管の文様の付くものが多く、中期後葉前半の土器が多いと思われる。第95図遺構外の土器片の中にも同様の土器が含まれるが、量的には少ないが縄文時代後期のものもある。

(3) 縄文時代晩期の遺構

C地区の中央東西に続く尾根状の高所から南側斜面にかけて、広い範囲に縄文時代晩期の土器片集中箇所がある。これらの中で、確実な土器棺墓は6基、土器棺墓らしいものは3～4基ある。土器片・石器の集中箇所は大きくまとめると3か所ほどある。

土器棺墓群は、C地区の北西STno165 の西側に、東北東方向に並ぶ5基の土器棺が検出されている。(第96図)周辺の土壙を含めると10基の掘り込みがあった。黒色土の覆土の様子や出土する土器片の時期から晩期の土壙と思われるので、この集団を土器棺墓群とした。

第96図でみられるように、土器棺が確認されたものは、1の1・1の2・1の3・1の4・2の5基である。1の1は氷式甕形土器、1の2は縦割りされた氷式甕形土器と2個体の条痕文土器片の合わせ、1の3は条痕文の壺形土器を正位に埋めたもの、1の4は数個体の土器片集中で形態不詳なもの、2は氷式甕形土器と条痕文の甕形土器の合わせ棺である。1のグループは4基の土器棺が接触するように埋められているが、1の1と1の4は後世の耕作溝で破壊されて形態不詳である。やや南西南に離れた位置に土器棺墓2がある。

① 土器棺墓1の1 (第96・97・99図、写図44・45)

土器棺墓群のほぼ中央に位置しているが、土器の中央を耕作の溝で切られているので埋葬形態が不詳であるが、残された土器は無文の氷式土器で、横倒しに埋められていたものと思われる。漸く復元することができたが、口縁は28.5cm・器高は35cm以上と推定される。

② 土器棺墓1の2 (第96・97・98図、写図44・45・48)

土器棺1の1の北側に接してE35°Nの方向で、口縁部をやや高くして横倒しに埋められている。氷式の甕を縦割りにして合わせて埋めたものと思われ、上下の甕がずれた形で検出されている。この甕の上に第101図 の条痕文土器2個体を合わせるように被せている。

主体となる第98図2の土器は、口径34cm・器高47.5cm・胴部最大幅39cm・底径10.5cmの大形な甕形土器で、口辺に押圧突帯文が付けられ、器面は無文で細かいヘラ調整痕が残る。口縁より肩が大きく張り出し、最大幅は肩部にある。復元してみると、意図的に縦に半割にした痕跡

が歴然と残り、胴部を穿孔した様子が窺われる。この穿孔部を条痕文土器片で上から覆っていたものと思われる。

③ 土器棺墓1の3（第96・97図）

土器棺1の2に北側に接するように、条痕文壺形土器が正位に埋められている。口縁部・底部を欠きとって埋葬したものと思われる。この壺形土器のほかには別個体の土器は見つからない。口径不詳で、胴部最大幅は27.2cmほどある。肩部にやや低めの押圧突帯が付けられている。

④ 土器棺墓1の4（第96・102図）

土器棺1の2の東側に、長軸1.2m・短軸1m・深さ25cmほどの掘り込みがある。この壙中上層から下層にかけて、5個体以上の土器片が集中して出土している。土器棺1の1を崩した耕作の溝が横切っているために原形が破壊されている。あるいは、耕作だけでなく、埋葬後他の土器棺埋葬のために破壊された形跡もある。第102図の土器は氷式と条痕文土器が含まれている。このように隣接した位置に土器片が集中的に出土した例は、深山田遺跡の土器棺墓5にもあった。

これらの土器棺の周辺には、ここを取り巻くように土壙が並んでいる。土器棺墓4と2の中間にも、黒色土の覆土を持つ土壙3・4があるが、数片の土器片が出土しただけである。土器棺墓1の1～4、2の周辺や5・6の周辺には黒色土の覆土を持つピットが40個くらい取り巻いている。土器棺墓につながるかどうか不詳ではあるが、深山田遺跡の土器棺墓群の周辺にも類似のものがあるので、かかわりのあるピットかと思われる。

⑤ 土器棺墓2（第96・97・98・103・105図、写図46・48）

ここの土器棺墓群の南端に位置し、氷式甕形土器がS37°Eの方向に横倒しで埋められている。肩部から胴部にかけて別個体の氷式土器の胴片(第103図17～19)が被され、東側の口縁部の口は条痕文土器の胴片数枚で塞がれていた。主体の氷式甕形土器の下側口縁は一部欠損しているので、壙底に条痕文土器の胴片を置いて甕形土器を埋葬している。

主体になる土器(第97・98図)は口径34cm・器高48.8cm・肩部最大幅31.5cm・底部径10cmの長胴形の氷式甕形土器で大宿・深山田遺跡出土中最も細長いタイプの土器である。

⑥ 土器棺墓11（第105・107・108図）

C地区南東部の傾斜面上端に、口縁に押圧突帯を持つ氷式甕形土器の一個体が出土したところがある。僅かに掘りくぼめて埋めた様子はみられるが、土器棺かどうか不詳である。一応土

器棺墓11として登録した。出土した土器(第107図1)は口径38.8cmの大形な土器で、口縁に押圧突帯を持ち、頸部から胴部にかけて細目の条痕を持つ氷式の甕形土器である。

この場所の南側傾斜面一帯は第105図のように、浅い摺鉢状の窪みが南へ続いているところで、広く広がる礫群の間に黒色土の堆積の厚いところがあり、所々に土器群の塊が検出されている。1～5の位置がそれである。黒色土の堆積するくぼ地の範囲は、南北約6m・東西5mほどあり、この周辺から中央の凹地にかけて土器片・石器が出土し、南側では傾斜を急激に強めて落ち込む地形になっている。土器群のあるところには炭の伴出はあったが、焼土は検出されていない。

出土した土器片の中には一個体のものがあるが、復元が難しく第107・108図の1～22の土器片で、土器棺墓群の土器と類似したものが多い。別の土器棺墓群と考えるのか、生活址とみるのか迷うところでもある。

⑦ 土器棺墓12（第77・97・105・107・108図、写図47・49）

C地区東側、1号住居址の北側で単独で検出された土器棺墓である。長軸1.1m・短軸1.0m・深さ40cmほどの掘り込みの中に、口径43.6cm・器高推定60cmほどの大形な氷式甕形土器（第97・100図）と条痕文甕形土器（第104・106図）を組み合わせた土器棺である。主体になる氷式甕形土器を西南の方向に向け、口縁をやや高くして横倒しに埋められ、この甕形土器の中の中央部付近まで条痕文土器の口縁が落ち込み、その上に別個体の条痕文土器が幾重にも重なるように出土している。一個の条痕文土器の口縁を合わせ、もう一個の条痕文土器で南側の開口部を塞ぐようにしたものと思われる。条痕文土器片の重なり具合が複雑ではあるが、2個体の口縁のあり方をみると合わせ口甕棺のように思われる。

主体となる氷式甕形土器は口径43.6cmで、大宿・深山田遺跡検出の土器棺の中では最も広口で、器高は推定60cm以上はあると思われるので、最大の氷式甕形土器である。胴部下方は非常に薄く土器質ももろくなっているので、土器片は揃いながら復元が困難な土器であった。口縁の開きは大きく、口辺に二本の太目な沈線が取り巻く。肩に段差があるが外への張り出しは小さく、頸部は無文で、肩部から底部にかけて縦の細い条痕文が付けられる。底部に近いところはとくに薄くくびれて底部へ続く。全体的に植木鉢形の土器である。大きさは違うが、深山田遺跡の土器棺墓群1の1の雷文を持つ氷式甕形土器に器形・施文等が類似している。

条痕文の土器はそれぞれ口径28cm・25cmで、胴部最大幅は30cm・27.2cmを測る胴の張りの大きい土器で、底部は欠損して器高は不詳であるが、ともに30cm以上はある。条痕は太めで深く羽状のところがある。

表6　深山田・大宿遺跡　土器棺一覧

土器形式	遺跡名	土器棺NO	土器の大きさ				土器形態			土器様式・施文	埋葬状態	備考
			口径	器高	最大幅	底径	口径:器高	器高:胴幅	口径:胴幅			
氷式変形土器	深山田	1の1	37.5	36.3	34.0	8.8	0.96	0.93	0.90	口辺の開きが大きい 口縁部に突起あり 雷文々様	横倒し 条痕文壺が 合わせてある(1の2)	
	〃	3の1	29.0	39.7	28.6	9.6	1.36	0.72	0.98	器高が高く細長い 無文	横倒し合わせ 口壺棺(3の2と)	軟質
	〃	3の3								口縁に突起あり ヘラ調整 3分の1個体	3の2の下に 敷かれている	
	大宿	1の1	28.5							無文、炭化物付着		口縁上部 だけ
	〃	1の2	34.0	47.5	39.5	10.5	1.39	0.82	1.14	細長いが胴が張る 口縁に刻み 無文、ヘラ調整	横倒し 単独埋め	殻半割 胴部穿孔
	〃	2	31.0	48.8	31.5	10.0	1.57	0.64	1.01	細長く胴が張らない 口縁に突起をもつ 無文	横倒し 氷式と条痕文土器 の合わせ	口を条痕文 土器で塞ぐ
	〃	12の1	43.6		36.8				0.84	口辺の開きが大きく 胴幅が大 胴部に縦の条痕がある。	横倒し 条痕文変形土器と 合わせ口	底部復原 不可 胴部穿孔
条痕文土器	深山田	1の2	36.0		38.7				1.07	斜状条痕文 3分の1個体	1の1の上部に 合わせ	底部欠損
	〃	3の2	31.6		31.2				0.98	斜状条痕文 口縁平坦幅広	3の1と 合わせ口壺棺	底部欠損
	〃	2	27.5		44.0					壺形土器 口縁欠、肩に突帯あり 斜走条痕文、羽状	逆位に埋め	口縁・底部 欠損
	大宿	1の3	28.2		27.2				0.99	壺形土器 肩に突帯あり 横走条痕文	正位に埋め	口縁・底部 欠損
	〃	12の2	25.0		30.0				1.05	筒形 斜状条痕文、羽状 口縁に条痕文が付く	12の1と重ね口 (中に落ち込む)	底部欠損
	〃	12の3			27.2				0.91	変形筒形 斜形条痕文、太め、 羽状あり	12の1・12の2 の土器に合わせ に被せる	殻半割 底部欠損

⑧　土器棺墓１３（第67・106図）

Ｃ地区の中央より東側、土器棺墓12から７ｍほど西側に一個体の氷式甕形土器の上部が単独で出土している。窪みはほとんどなく横倒しに置かれた甕形土器の残りである。無文の氷式甕形土器で、口径35.6cm・胴部最大幅34.8cmくらいと推定され、器高は不詳である。土器棺墓であるかも不詳であるが、周囲の状況から土器棺墓と扱った。

⑨　竪穴址３（第67・108図）

Ｃ地区の東南部耕地境の石垣近くから縄文時代晩期の土器片が集中的に出土している。この場所は耕作の深耕が進んだところで、重機による排土作業当初から土器片が集中出土し、ところによっては耕作土に混入して出土している。耕作による散乱も考えられるが、遺物集中の範囲は５ｍ四方くらいに及ぶ。竪穴址としたものの耕作の掘り込みもみられるので確かめられない。出土した土器片は第108図24～36で、雷文を持つ氷式甕形土器の破片や太目の沈線を持つ甕の口縁である。図示されていないが他と同様の条痕文土器の破片も非常に多い。

⑩　土器片集中地（第67・109図）

Ｃ地区の南側町道232号線沿いの傾斜面に広がる礫群の中から、縄文時代晩期の土器片・石器が集中的に出土している。広く見れば西側土器棺墓群の南側から土器棺墓11周辺の土器集中地まで続くが、量的に多いところは西側である。平状石も多く見られたので、配石遺構があるかどうか・土壙的な落ち込みがあるかどうか確かめの調査も試みたが、はっきりするものは掴めていない。

西側の土器棺墓群をはじめとして、東側の土器棺墓12・13の検出・南側の土器集中等広い範囲にわたる縄文時代晩期の遺構群が検出され、土器様式から東海系の樫王式に並行する土器棺墓群ではなかろうかと思われる。前述される深山田遺跡の土器棺墓群と比べてみると、土器様式・土器棺墓のあり方等類似のものが多く、ほぼ同時期の土器棺墓かと思われる。類似点を具体的に挙げると、合わせ口甕棺・合わせ甕棺のあり方、氷式甕形土器と条痕文土器を併用する方法、主体となる甕棺は氷式甕形土器で、被せに使う土器・塞ぎに使った土器は条痕文式の土器が使用される方法、条痕文土器は全て底部を欠損して使用する方法、条痕文の壺形土器を単独に埋葬する方法、大宿遺跡の場合、離れて埋葬している土器棺墓12等の例を除けば、密接するように集団を形成していること、横倒しに埋葬する甕形土器には縦に半割にしているもの・甕そのものをそのまま使用する方法が併用されている等である。特殊な例を除けば、墓壙を掘り下げて壙内に埋葬する方法等である。何れにしても、今まで発見例の少ない土器棺墓群であったから、今後の発見資料によって再確認しなければならない課題は多い。

〔4〕 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、A地区では周溝状遺構、B地区では4号住居址、C地区では2号住居址と土壙9のほかに、比較的多く土器片が出土した土壙72・77・88・104があり、確認が十分できなかったが、耕作中に土器が集中して発見され、住居址の可能性の高い所が1か所ある。

① 2号住居址（第67・111・112図、写図50）

C地区東側の台地中央で検出された方形竪穴住居址である。東側が農道と耕地境の石垣で破壊されているのではっきりしない所もあるが、プランは南北6.25m・東西5.25mで西側の壁高は65cmを測る。深くて比較的大形な隅丸方形の竪穴住居址である。住居の主軸はW10°Sで、中央西側に偏って構築された枕石を持つ地床炉があったが、焼土は少なかった。

ピットは15個検出されるが、主柱穴はP1～P4と思われ、構成はやや不整である。床面は西隅P1周辺から南側一帯は、硬いタタキ面が検出されたが、北東側には転石があったり、砂礫質土のために識別困難であった。東側は農道で削平されていてはっきりしないが遺物・土色によって推定した。西側壁沿いには覆土中層から焼土が検出され、土器片もいくらか包含されていた。その下層から貯蔵穴と思われる落ち込みがあり、その北側に壺形土器(第112図1)が、浅い穴の中に底を据えた状態で検出された。胴・口縁部が潰れ込んで幾重にも重なる状態で出土し、器形復元は困難なほど潰れている。土器形式は座光寺原式に近い中島式の土器と思われる。この土器のほかに数片の土器片と石器が出土したが、総体的に少なく、上段地域でよく発見される打製石包丁形石器は見つかっていない。

② 4号住居址（第65・111・112図、写図50）

B地区の西隅、2号住居址の南5mの所で検出された竪穴式住居址である。中央に電柱が立てられその周囲が攪乱されていたので、炉や間仕切りのピットが検出されないので主軸方向は不詳であるが、北を主軸に想定するとW6°Sで2号住居址との方向差は少ない。プランは南北4.1m・東西4.3mの正方形に近い隅丸長方形竪穴住居址で、西壁の深さは50cmのやや小振りな住居址である。中央部を除いては床面は硬く、東・南側にはハリ床もある。ピットは8個検出され、P1～P4が主柱穴と思われるが、それぞれが中央へ寄る位置にある。屋根を支える機能を果たすための小ピットの所在が予想されたが、確かめるまでのピットはなかった。南隅に3つの掘り込みが並び、土堤状に高く取り囲む所がある。貯蔵穴と思われるが、遺物の出土はなかった。総体的に遺物の出土は少なく、第112図2の甕形土器口辺と12～14の甕形土器胴部片に留まっている。

土器の出土状況が少ないので確実なことはいえないが、甕形土器の口縁部・主軸方向の類似

等から、2号住居址とともに座光寺原式に近い中島式の住居址かと思われる。

この2基の住居址のほかに住居址があったのかと思われる所がある。それは土器棺墓群の南側STno165 周辺で、耕作中に弥生時代後期の土器底部(第112 図6)が出土したことがある。調査当初にその付近から弥生時代後期の土器片が出土し、床状のタタキ面が検出されている。住居址があったものと思われる。(第6号住居址)

③ 弥生時代後期の土器片を伴う土壙

弥生時代後期の土器片が出土した土壙は、1号住居址西側にある土壙9のほかに、72・77・83・104 である。出土した土器片の数は土壙9(6)・72(2)・77(3)・83(1)・104 (1)である。覆土の状態・出土土器の状態・石器の出土等から弥生時代と思われる土壙は9だけかもしれない。

〔5〕 平安時代・中世の遺構

B地区の3号住居址・竪穴址1・建物址1～3・土壙7・溝址1やC地区の1号住居址は平安時代末から中世の遺構かと思われる。全体的にみるとB地区に多いことが分かる。

① 1号住居址(第113図、写図51・52)

C地区の東側、台地の中央付近で検出された竪穴式住居址で、プランは南北3.6m・東西4.3m・壁高は西側で40cmを測る隅丸長方形竪穴式住居址であるが、北側隅に幅60cm・長さ1.6mの張り出し部が付いている。南隅にカマドが構築されていたが、すでに崩れていたこともあるが、やや掘り込みが進み過ぎて形態不詳のこともある。石芯粘土製カマドであったと思われる。8個の石が不規則ではあるが検出され、夥しい焼土との位置関係から南へ向かう方向がうかがえる。焼け石と焼土の範囲は広く1m×90cmほどあり住居の規模と比べてみると大きなカマドであった。主柱穴は4個あり、P1～P4 で竪穴全体では東へ偏っている。西壁下から1m中側にP3・P4 が並ぶ。柱間は1.1mある。東側は壁沿いにP1・P2 があり、柱間は1.2mである。住居址が小振りとはいいながら、屋根を支えるには変則的であるから、屋内と屋外に検出されたそれぞれの大きめなピット群は、屋根を支えたり壁際の住居空間を広めるために役立っていると思われる。

火災に遭った住居で、覆土中層から床面にかけて炭塊と焼土が厚く堆積し、床面に接する炭化材が多く、第113図上のように中央部から北側へかけて交差するものが多く検出されている。主柱の炭化柱痕がP2 とP4 に残されている。この炭化材から推測すると、径15cmに近い柱で、当時としては太いものが使われていたことが分かる。屋内に穿たれていた小ピットは壁沿いに

いくつかあるが、中央部に近い所にあるので柱穴というよりはほかの目的があるように思われる。南側から東隅周辺まで周溝がめぐっていて、壁沿いにあるP1・P2の間には検出されないので、入口部かと思われる。入口と思われるあたりに大小の掘り込みがあったが、耕作によるものと思われる。

出土した土器は、縄文時代晩期のものに限られている。平安時代・中世を比定する土器・陶器は1片も出土していない。西側壁中段から鉄製紡錘車(第113図3)が出土し、P4の近くから刃部の長い鉄鎌(113図1)と鍛形工具状の鉄器(113図2)が出土している。紡錘車と鉄鎌は平安時代ものに類似しているが、鍛形鉄器は余り見られないもので、中世の所産かとも思われる。特殊なものとしては、滑石製の薄い臼玉が6個出土している。

竪穴の形態、カマドの位置等から平安時代末期の住居址と思われるが、土器片出土皆無・主柱穴の東偏・小ピットのあり方から中世初頭かとも思われる。

② 3号住居址（第114図、写図53・54）

B地区西側台地中央付近で検出された竪穴式住居址で、プランは南北5.1m・東西5.2mのほぼ方形に近い不整形の竪穴住居址で、掘り方は約20cmほどである。東隅に人頭大以上の平状石5個と拳大の石4個があり、その下には厚さ5cm以上の焼土があり、掘り割ってみると、焼土塊・炭の層・地焼けが重なっていて、竈壁の残欠も含まれていて、カマドの崩れがみられる。焼土の重なり方から相当大規模なカマドであったことが推測される。ピットは屋内に主柱穴と思われるP1～P4のほか、30個ほどの小ピットがある。屋外にも30個以上のピットが周囲を取り巻くように検出されている。主柱穴は1号住居址と同様に東に偏っている。西北壁下から1.3mほど離れた位置にP3・P4が並び、その柱間は1.6 mである。東南のピットは壁に沿って穿たれ、柱間は1.5 mを測る。住居の大きさによる柱間の長さの違いはあるが、位置・構成は1号住居址と同じである。東側に3.8m×2.8mの方形状の範囲に段差を持つ低いところがあり、南西側はテラス状の細長い空間がある。西・北側を取り巻く周溝はあるが、東・南側にはない。南隅に長軸 9.5cm・短軸 8.5cm・深さ60cmほどの土壙4がある。中世土師器片と粘土塊が出土している。床面は硬いタタキが検出されているが、東側の一段低い部分はとくに硬く、中央西側に4cmほどのくぼ地があり、底に焼土が固まっていた。

遺物の出土は少なく、北隅の壁沿いに平鎌(第114図1)が出土し、東側カマド横から厚い土鍋状容器と思われる破片が数片出土している。(縄文時代と思われる土器片・石器は出土している)

住居址の形態、住居の片隅に構築されたカマドの位置・構造、主柱穴の東偏と周囲のピット群、鉄製用具の出土等1号住居址と非常に似通っている。平鎌の形態は平安時代末期のものと思われるが、これ以外には平安時代に比定される土器・陶器の出土はなく、時代比定の難しい住居址であることは、1号住居址と全く同じである。1号住居址と同じ時期のものと思われるが、平安時代末期とするか、中世初頭にするか残された課題は同じである。

③ 竪穴址１（第114・115図、写図55）

Ｂ地区南側傾斜面の上縁で検出された方形竪穴址である。長軸2.8m・短軸2.1mで深さ30cmほどの隅丸長方形竪穴址で、西側に偏って４個のピットが並ぶ。黄褐色土を掘り込んだ竪穴で、覆土は黒色砂質土で所々に炭が混入しているが、焼土は発見されていない。床はとくに硬いところは検出されず、黒色土と黄褐色土の境で区別している。

遺物は石鏃・縄文時代土器片は出土したが、時代を比定するものは第 114図２の坏形土器で、瓦質のものであり中世土師器かと思われる。

西北側に細い溝とピット群(建物址１)と中世の土壙と思われる土壙７が隣接している。

④ 建物址１（第 115図、写図55）

Ｂ地区南側、竪穴址１の西北側に隣接して検出された18個のピット群がある。整った構成はないが、方形区画がみられること・その周辺は硬いタタキ状の面が広がること・その北側に石組を持つ土壙７が検出されたことから、中世頃の遺構かと思われる。竪穴址１の区画方向と建物址１の方向は一致しない。

⑤ 建物址２（第65・ 115図）

Ｂ地区北側西上方の傾斜面の上部、土壙19の北側で検出されたピット群である。ほかのピット群と異なることは、第115図でみられるように、焼土塊をピット内に持つものが５個あり、直線的な配列があることである。これらのピットは口径15cmほど・深さ20cmほどあって、上層から10cmほどに炭塊と焼土が詰まっていた。焼土のあるピットは直線的に並ぶ。他のピットを含めると方形配列もあるように思われるので、建物址２とした。北側は台地の斜面が急となり、耕作等の攪乱もあるので、確認することはできなかった。ピット中の出土遺物はないが、周辺から天目茶碗片・瀬戸系陶器片が出土している。

⑥ 建物址３（第65・115図）

Ｂ地区３号住居址の東側10mほどのところで検出されたピット群である。不整形ではあるが３×４の方形配列は想定されるので、建物址３として登録した。西側の３個のピットの間隔は1.2m・1.1m、南側の間隔は1.7m・1.4mを測る。北側の列は不揃いではあるが、束柱を持つ建物址とも思われる。ピット中の遺物は発見されていないが、周辺からは陶器片が出土している。

⑦ 建物址4（第65・115図）

B地区3号住居址の北側に接してピット群が検出されている。3号住居址の北側に並ぶピットと重複しているので確と分らないが、北側に続くピット群はあるので、一応建物址と登録したものである。

B地区を主体にして、中世かと思われる竪穴址・建物址・溝址・土壙等が検出されている。C地区の1号住居址を含めて、3号住居址も中世と想定すると、中世遺構群が所在することになる。証拠付ける遺物発見が少ないので確かとは云い切れないが、B地区の3号住居址の周辺からは中世の陶器片が比較的多く発見されているので、中世遺構があってもよいと思われる。東側には城山城跡があり、その城山と大宿地籍の台地の間には山ノ崎の低地があり、この低地からも中世陶器が出土しているので、大宿の台地上に中世の遺構があってもよいと思われる。

(6) A地区の遺構・遺物（第116図）

調査地東側は、山ノ崎の低湿地に面する斜面で、西南の台地際は構造改善事業で削られ、東北側は1m以上土盛りされている。この土盛りの下に黒色土の堆積があり、町道5058号線あたりでは2mほど下層にある。下層の黒色土中から弥生時代後期の土器片が見つかっている。

STno160あたりに黒色土の落ち込み・溝状の落ち込みがあり、弥生式後期の土器片を含む縄文時代中期の土器片・石器が出土している。第116図の土壙1～3・周溝状遺構である。土壙2の北側には少量であるが焼土も検出され、この周辺から中・近世の陶器片も出土している。ここから東側には、縄文時代中期・弥生時代後期の土器片が集中的に出土しているが、非常に深いところであるので、一部の検出で終わっている。

(7) D地区の遺構・遺物

町道232号線から町道5131号線南側一帯の低位段丘面が調査地Dである。町道232号線を境にして稲田ヒラ・石原田の低地に急激に落ちるところで、深い湿地である。この湿地を越えて町道5131号線あたりに小台地があって、弥生時代・縄文時代の土壙が検出されている。

(8) 大宿遺跡のまとめ

上記報告にあるように、縄文時代早期の住居址・竪穴址・土壙が検出され、多くの土器片・石器が出土している。縄文時代前期の土壙や中期の土壙も数多く検出されている。縄文時代晩期の土器棺墓群や土器棺墓・土器片集中地が検出されて、深山田遺跡の土器棺墓群と共に、県下でも数少ない検出例として注目されている。弥生時代後期の小集落が見つかったり、平安時代

か中世か、時期比定に話題を投げかける住居址が発見されたり、中世遺構が検出されていて、高森町内ではいうまでもなく、郡下でも特長のある主要遺跡の一つに上げられる遺跡となった。これらの成果のうち、縄文時代早期の遺構群の検出・縄文時代晩期の土器棺墓群の発見や、平安時代から中世にかかる特異な住居址の検出例は特筆されるものである。

① 縄文時代早期の遺構群

高森町内では平成２年までに縄文時代草・早期の遺物が発見された遺跡は、北から増野・川子石・神田裏・山吹新田原・出原西部・駒場・千早原・正木原・出原西部・赤羽根・すぎが洞・祢宜垣外・広庭・鐘鋳原・牛牧新田原遺跡と15遺跡の多きに及んでいた。平成２年以降、高森町内上段道路・広域営農団地農道用地内発掘調査により、縄文時代早期の遺物が発見された遺跡が多く、この数は増えている。上段道路では、千早原・大鳥山上の平・共経・牛牧上平・牛牧新田原遺跡であり、広域農道では深山田・大宿遺跡で、新たに縄文時代早期の遺物が発見された遺跡は上の平・共経・上平・深山田・大宿遺跡で総数20遺跡になる。

これらの遺跡で遺構が検出されたものは、神田裏・出原西部遺跡の集石炉・広庭遺跡の土壙に留まっていたが、平成４年以降、牛牧新田原遺跡で竪穴址と集石炉、深山田遺跡で竪穴址と土壙、大宿遺跡で住居址・竪穴址・土壙が検出されている。

ここの大宿遺跡では、高森町で最初である住居址が検出され、土器片・石器が集中的に出土した竪穴址が３軒発見され、遺物出土の多い土壙が７基以上検出されている。発見された遺物も多く、器形を知ることのできる尖底乳房状突起の甕形土器をはじめ、500点ほどの土器片が出土し、小形石器も 200点ほどになる。土器片は押型文土器が中心であるが、楕円文・山形文・格子状文・変形文の全てが伴出し、貝殻条痕文の土器片も含まれている。遺構別にみるとこれらの土器片の組成がいくらかづつ異なっていて、これらの遺構のあり方・時期判定に大きな示唆が与えられる遺跡であると思われる。何れにしても、今後も縄文時代早期の遺構・遺物の発見があるであろうが、重要な規範資料を提供した遺跡と云える。

② 縄文時代晩期土器棺墓群

縄文時代晩期の遺物出土は多く、土器棺を持つ遺構は７基以上は検出され、土器集中出土地が２～３か所あって、土器棺墓群のあり方だけでなく、この時期の生活址の立地状況の一例を知る重要な遺跡になっている。

土器棺墓群の検出は、前述してある深山田遺跡の土器棺墓群の発見に次ぐ重大発見の一つになっている。この遺跡の場合は、深山田遺跡のように５基の土器棺が集合して検出されているばかりではなく、少し離れた位置に単独の土器棺墓も検出されたり、土器棺墓か生活址の一部か判断しがたいが、遺物が集中的に出土する場所も検出されて、集合体としての遺跡のあり方

の一端に接することが出来る。

土器棺墓のあり方は総体的には、深山田遺跡の土器棺墓と極めて多くの類似点があることは報告で触れた通りであるが、細かくみると相違点も多くあることに興味が引かれる。まず、共通点を上げると、① 氷式甕形土器を主体にして条痕文の甕形土器を合わせに使用されている。② 氷式の甕形土器を使用した場合は掘り下げた穴の中に横倒しに埋葬してある。③ 条痕文の土器を単独に使用した場合は正位または逆位に埋めてある。④ 単独にしても合わせにしても、条痕文の土器は底部を欠損して使用している。⑤ 合わせ甕棺墓の場合主体になる氷式甕形土器は縦に半割りにして使用されている。⑥ 条痕文の土器を合わせに使用する場合は2個体以上の胴片が使用されている。⑦ 埋葬する土器の合わせ目や開口部・欠損部には別個体の胴片部を被せている。⑧ 合わせ口甕棺の場合大小の甕が使われ、口縁が重なるように組み合わせている。⑨ 副葬品はほとんど検出されていない。⑩ 土器棺の入った土壙のほかに、周囲に土壙があったりピットがある等である。

相違点は少ないが、① 大宿遺跡の土器棺墓群は直線的な配置であるが、深山田遺跡の場合は固まりの配置である。② 大宿遺跡の土器棺墓には氷式甕形土器の単独のものがある。③ 大宿遺跡では別のところに単独の土器棺墓がある等である。

大宿遺跡・深山田遺跡の土器棺墓はほとんど時代差はなく、東海地方の編年による樫王式に平行する時期と思われるが、個々の土器形式には相違がみられるという研究者もある。深山田遺跡の土器棺墓が発見された後、阿南町帯川の根吹遺跡で、条痕文土器を主体にした合わせまたは合わせ口の土器棺墓が検出され、土器形式からみると水神平系のものである。飯田市北方でも合わせ口の土器棺墓が発見され、今後、飯田・下伊那地方でも土器棺墓の発見が続くものと思われるが、今後に課せられた大きな課題を提供している遺跡でもある。

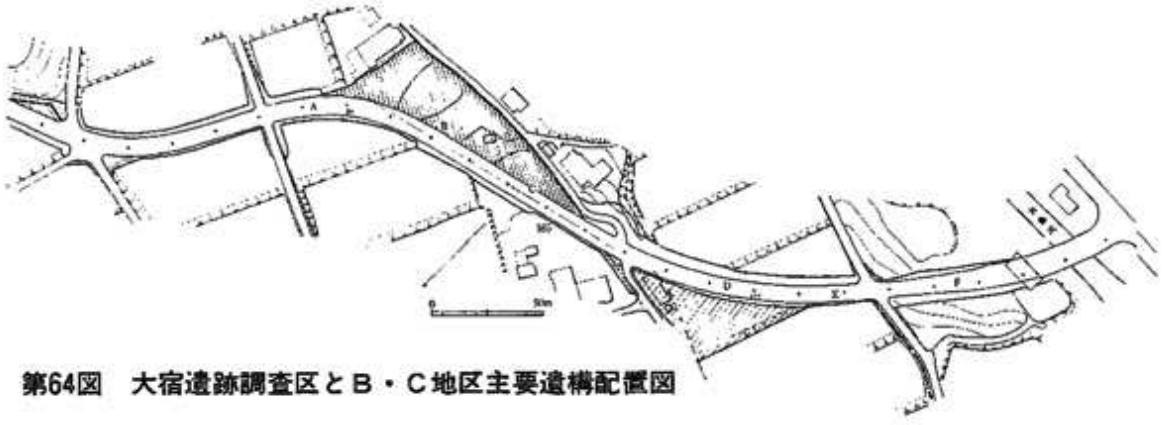
③ 平安時代または中世の住居址

B地区に1号住居址、C地区に3号住居址が検出され、竪穴住居址の大きさに違いはあるが非常に似通った住居址である。形態が隅丸長方形竪穴住居址で、掘り方は深めで壁の傾斜は直に近い。石組粘土製であったと推定されカマドが住居の隅に構築され、周溝をめぐらし、床は硬いタタキが検出されている。竪穴の周囲を補助柱穴と思われるピットが取り巻いている等の形態は、平安時代末葉の竪穴式住居そのものと思われる。出土した鉄器も鉄製紡錘車・長刃部の鉄鏃・平鎌の出土も平安時代と比定する有力な資料であるが、平安時代を象徴する土器・陶器片が一片も発見されていない。また、主柱穴が東に偏って穿たれている例は今まで平安時代の住居で出会っていないので、疑問がもたれることである。また、3号住居址の南隅にある土壙4はこの住居に付属するものとすれば、中世の土師質坏形土器片と思われるものは唯一の検証遺物であり、カマド南側で出土した、ある大形容器の破片と思われるもので、中世期のものと思える。また、1号住居址にしても3号住居址にしても、それぞれの周辺からも平安時代を

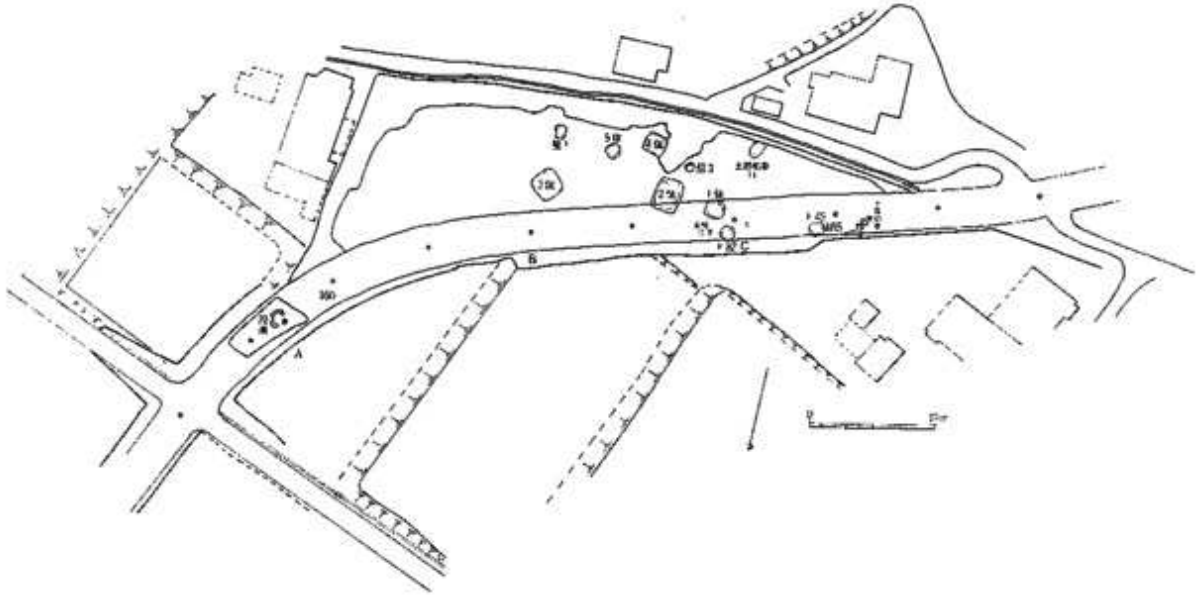
象徴する灰釉陶器を始めとする陶器片・土器片が全く発見されていないので、大きな課題が残された住居址である。今後の類似した遺構の発見例を比較しながら検討していきたい。

1号住居址は、火災に遭っているためにいろいろ貴重な資料が提供されている。屋内に残された炭化材の内、東西方向に長い梁材と思われるもの二本が、P1とP3の間に横たわっている。細かい炭化材は一様ではないが、寄せ棟を推測するような方向のものもある。P2とP4に残された主柱の柱痕は割と太く、15cmほどの太さが想像されて、普通の住居というよりも特殊な目的を持った竪穴のようにも思われる。そのことは、3号住居址の段差のある区画、その区画の中に土壙状の穴を持っていたり、地床炉状の落ち込みを持つなど工房的な感じもする。また、1号住居址にしても、3号住居址にしても屋内に径5cm足らずの小ピットが数多く検出されていることで、補助柱穴とは考えられないことからこの用途を確かめる課題も残されている。

何れにしても、同一報告書の中に、二遺跡にかかわる縄文時代早期の資料・縄文時代晩期の土器棺墓群の類似性・平安時代の住居のあり方の相違等が採録できることは有り難いことで、多くの研究者のご教示をいただきたいと思っている。

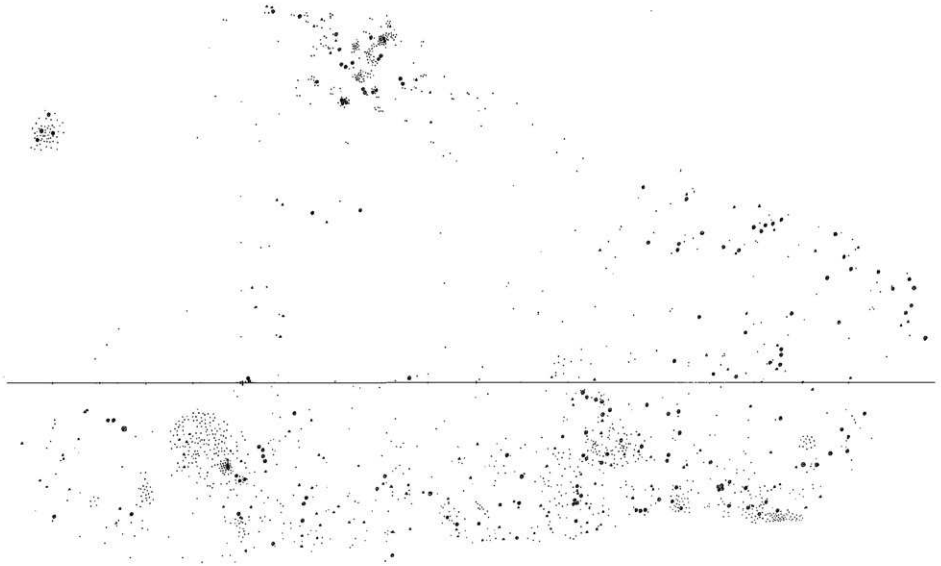


第64図　大宿遺跡調査区とＢ・Ｃ地区主要遺構配置図

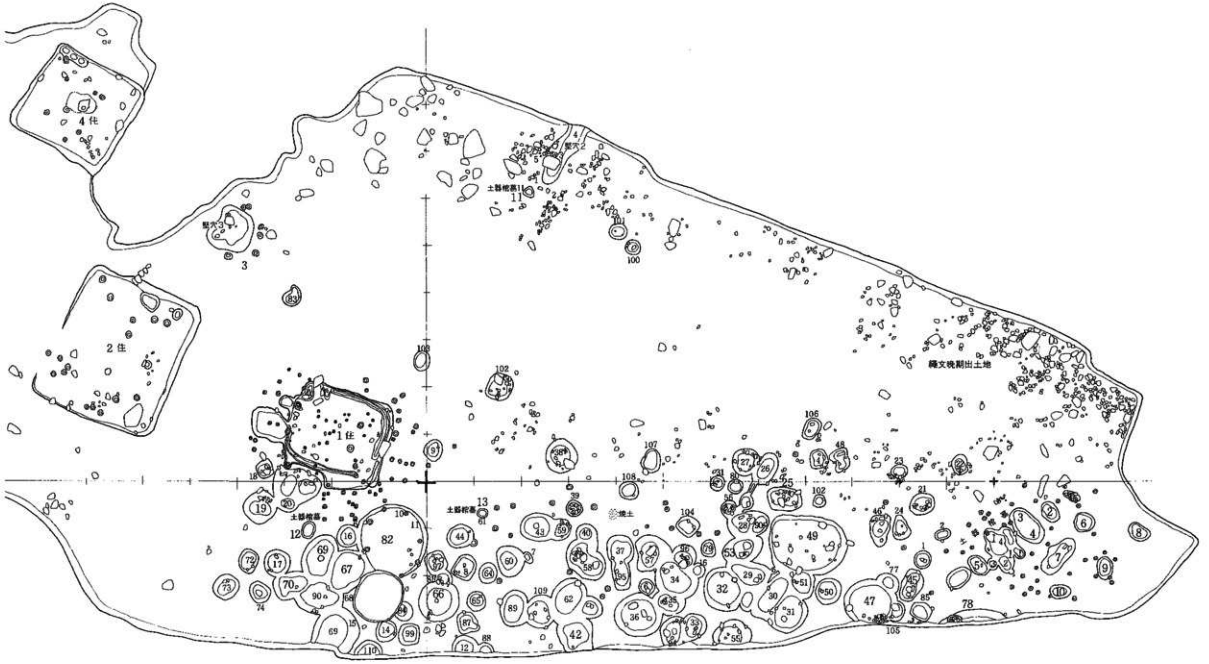


第64図の２　大宿遺跡Ｂ・Ｃ地区主要遺構配置図

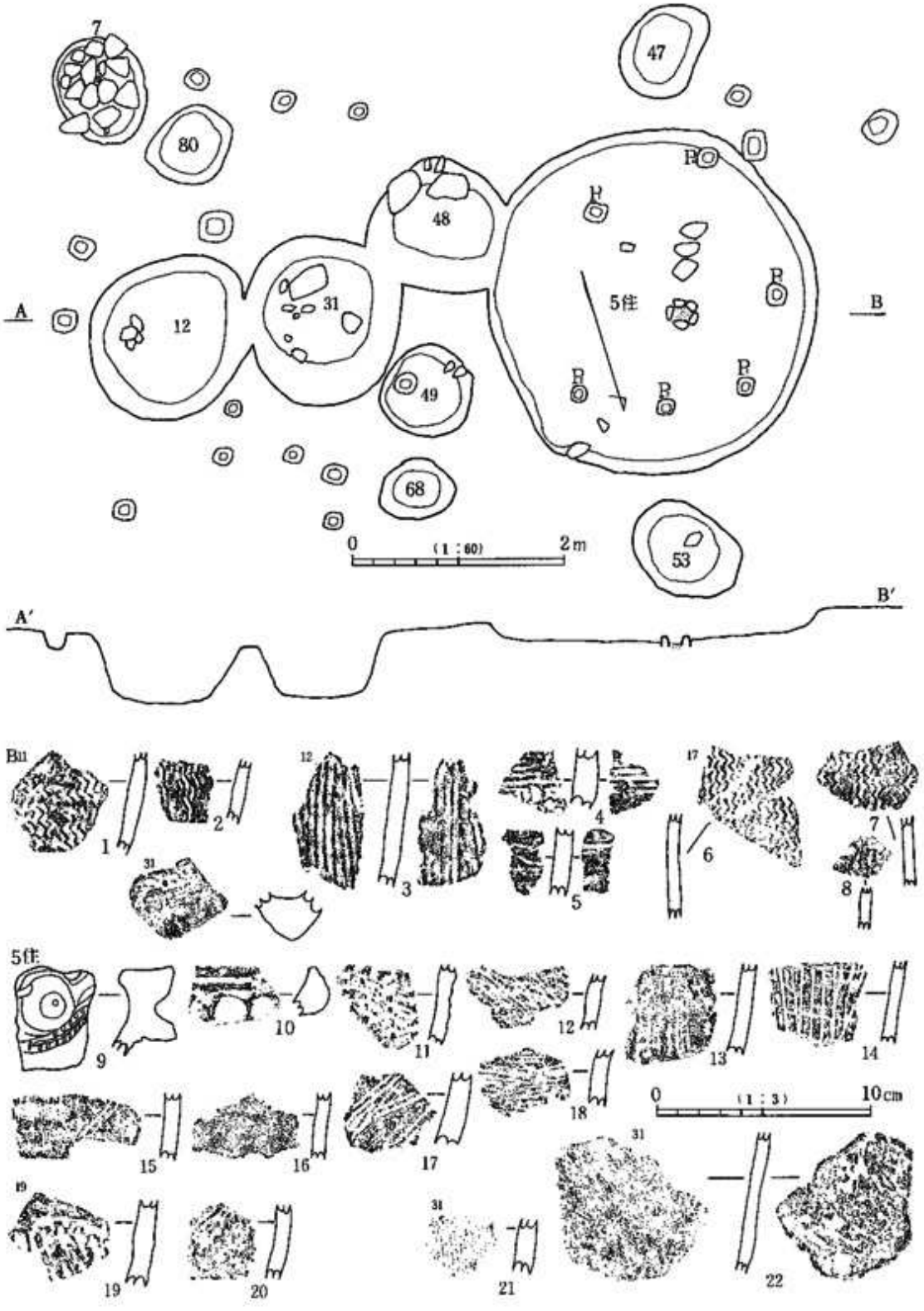
第65図　大宿遺跡B地区遺構全体図



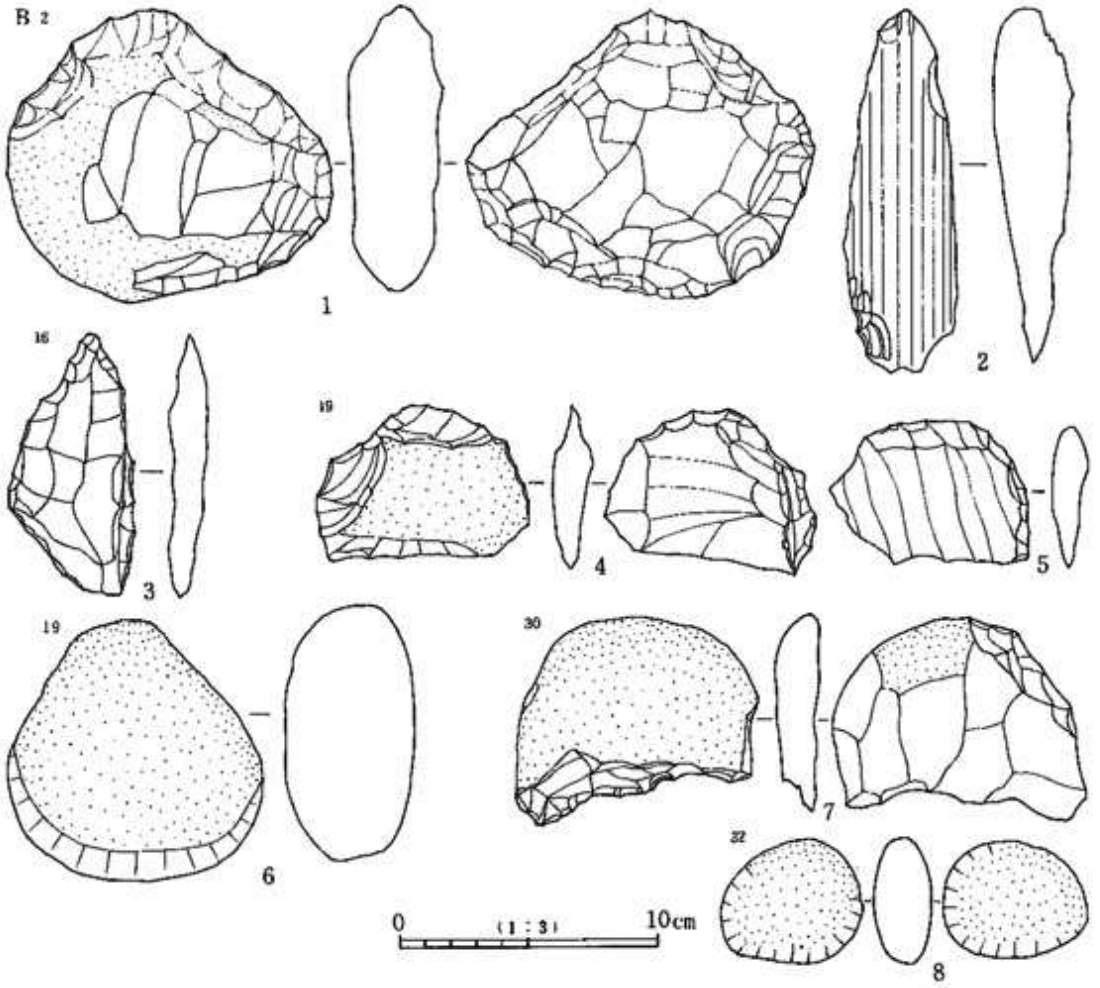
第66図　大宿遺跡C地区主要土器出土分布図

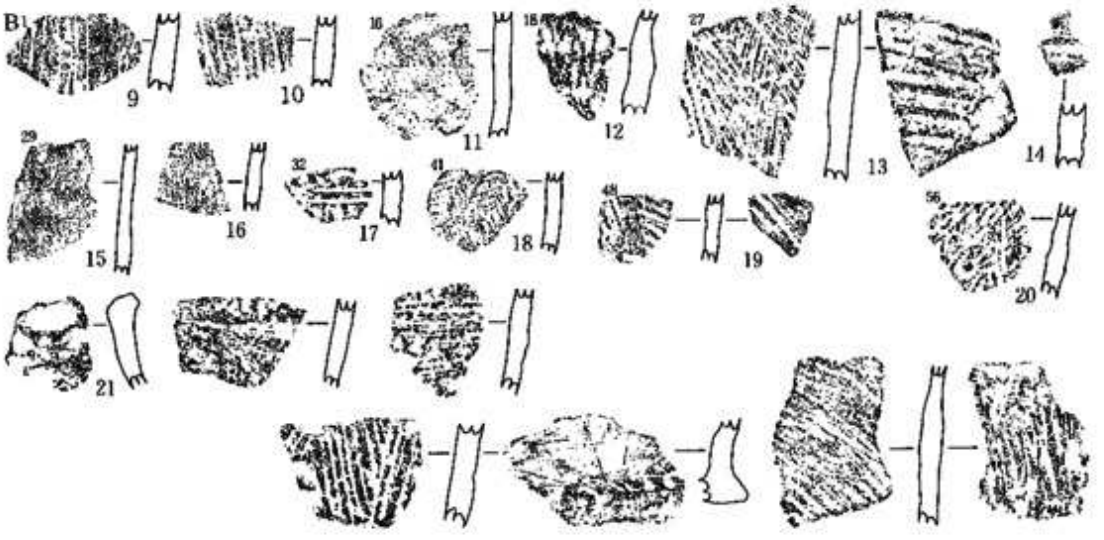


第67図　大宿遺跡Ｃ地区遺構全体図

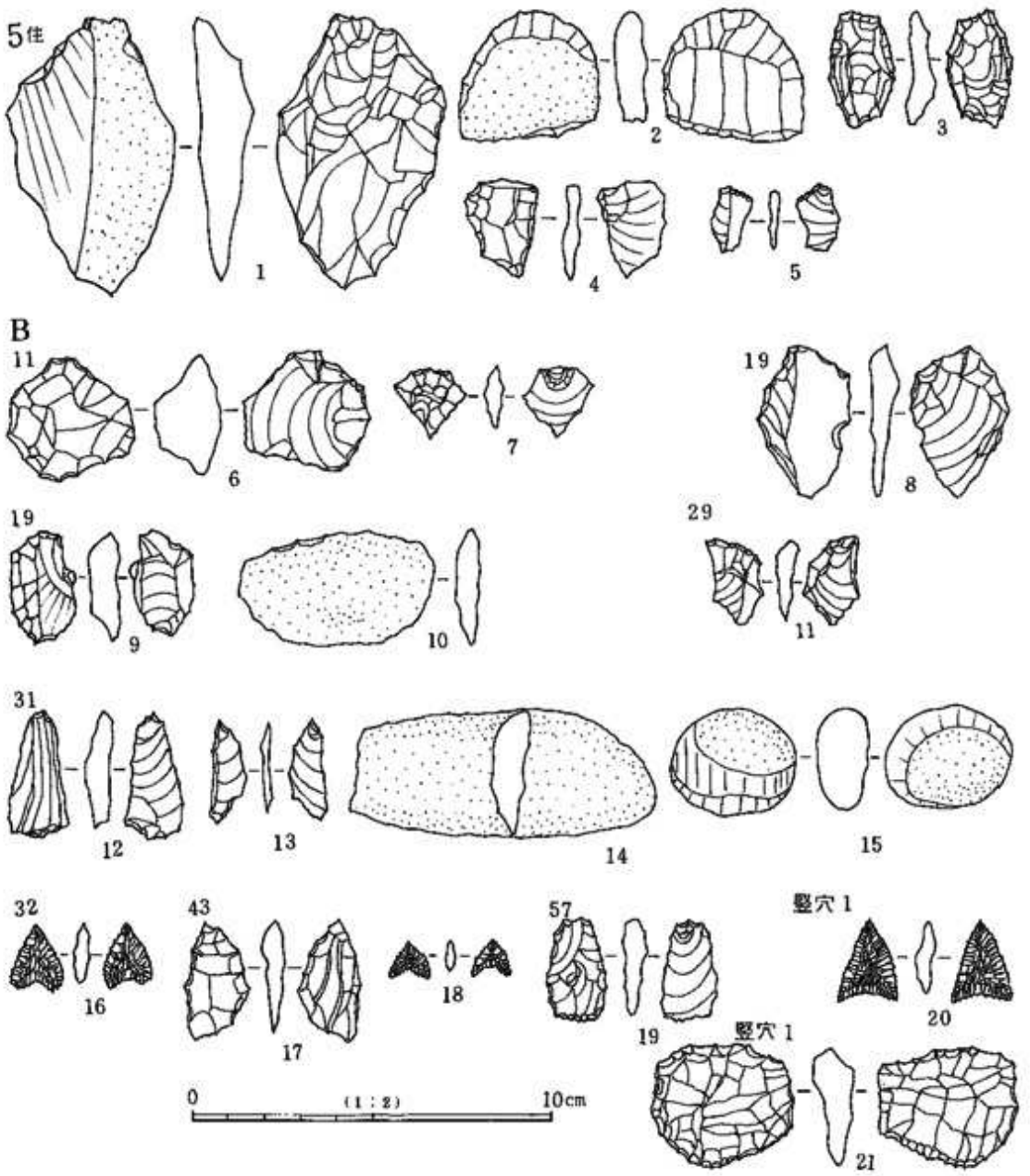


第68図　大宿遺跡Ｂ地区5号住居址と周辺土壙出土土器

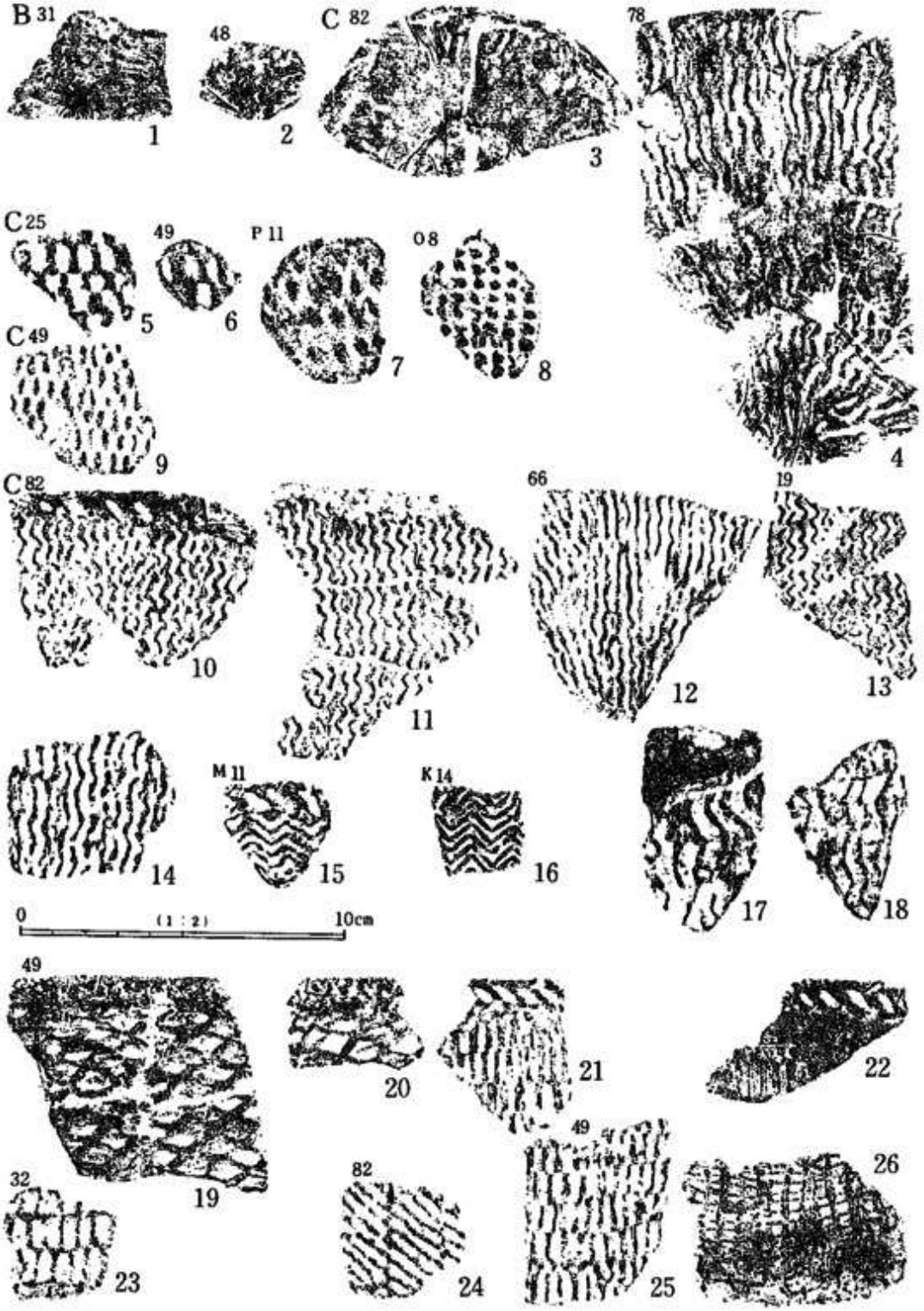




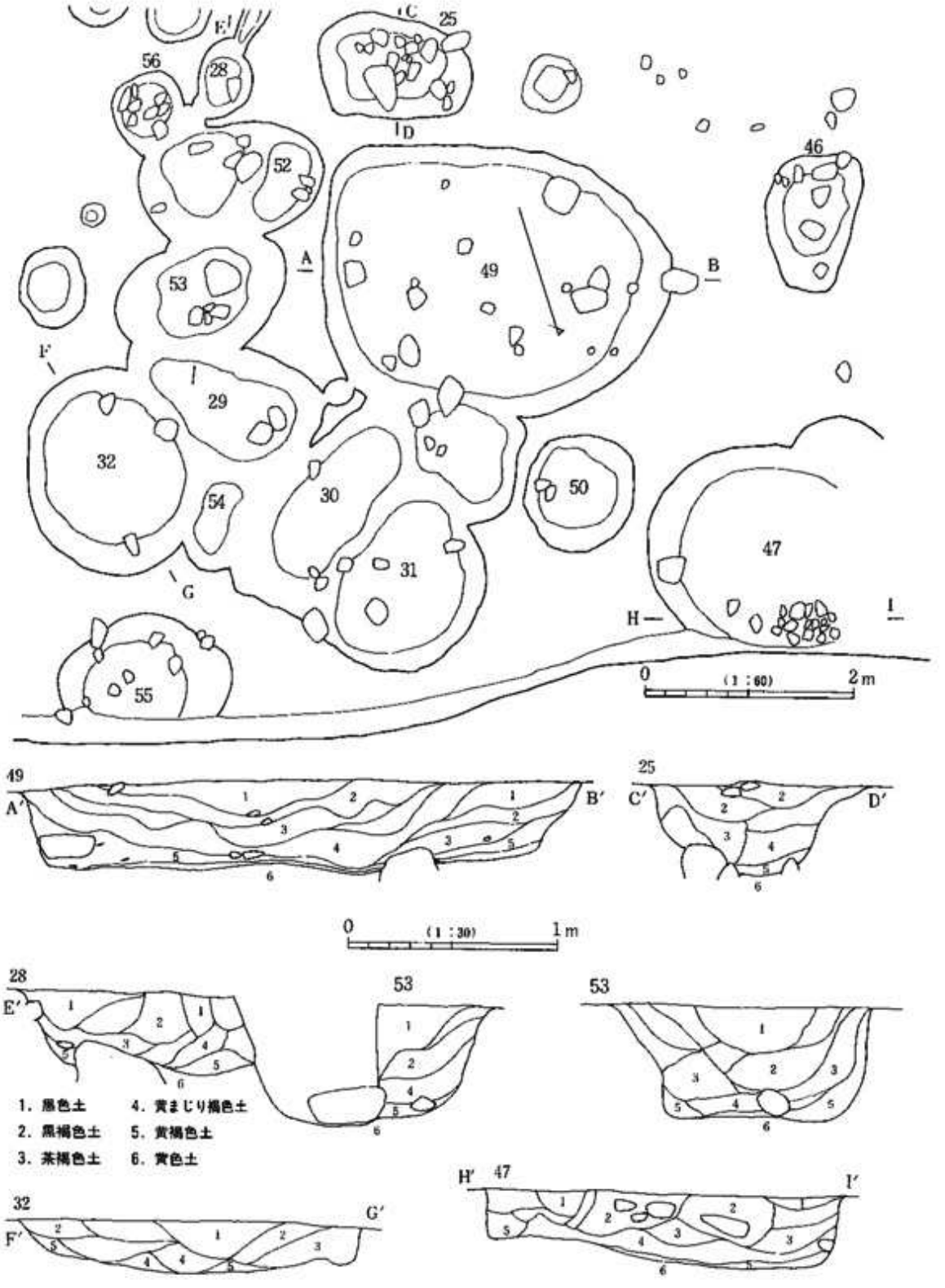
第69図　大宿遺跡Ｂ地区土壙1～56出土土器と石器



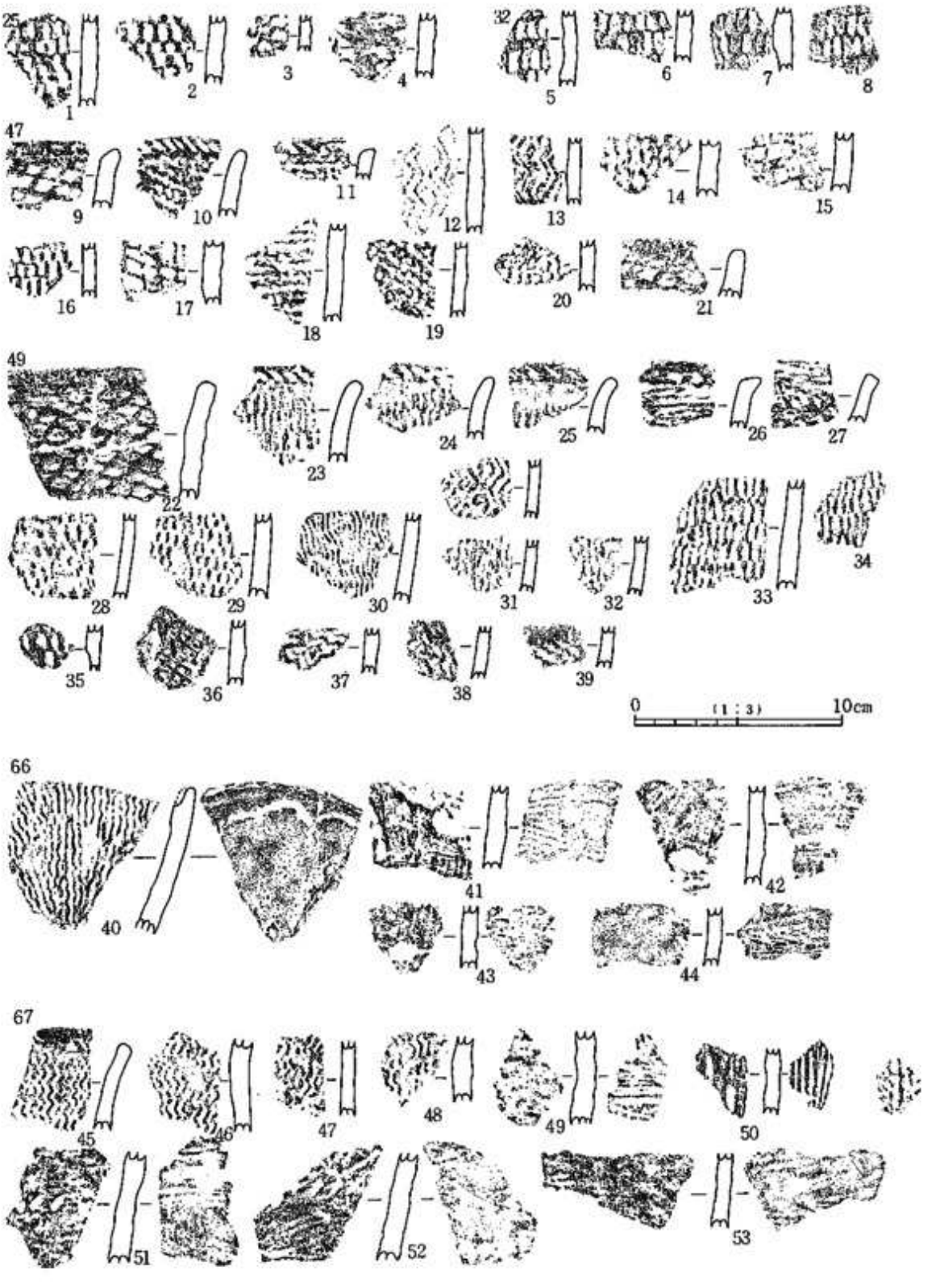
第70図　大宿遺跡B地区5号住居址・土壙等出土石器



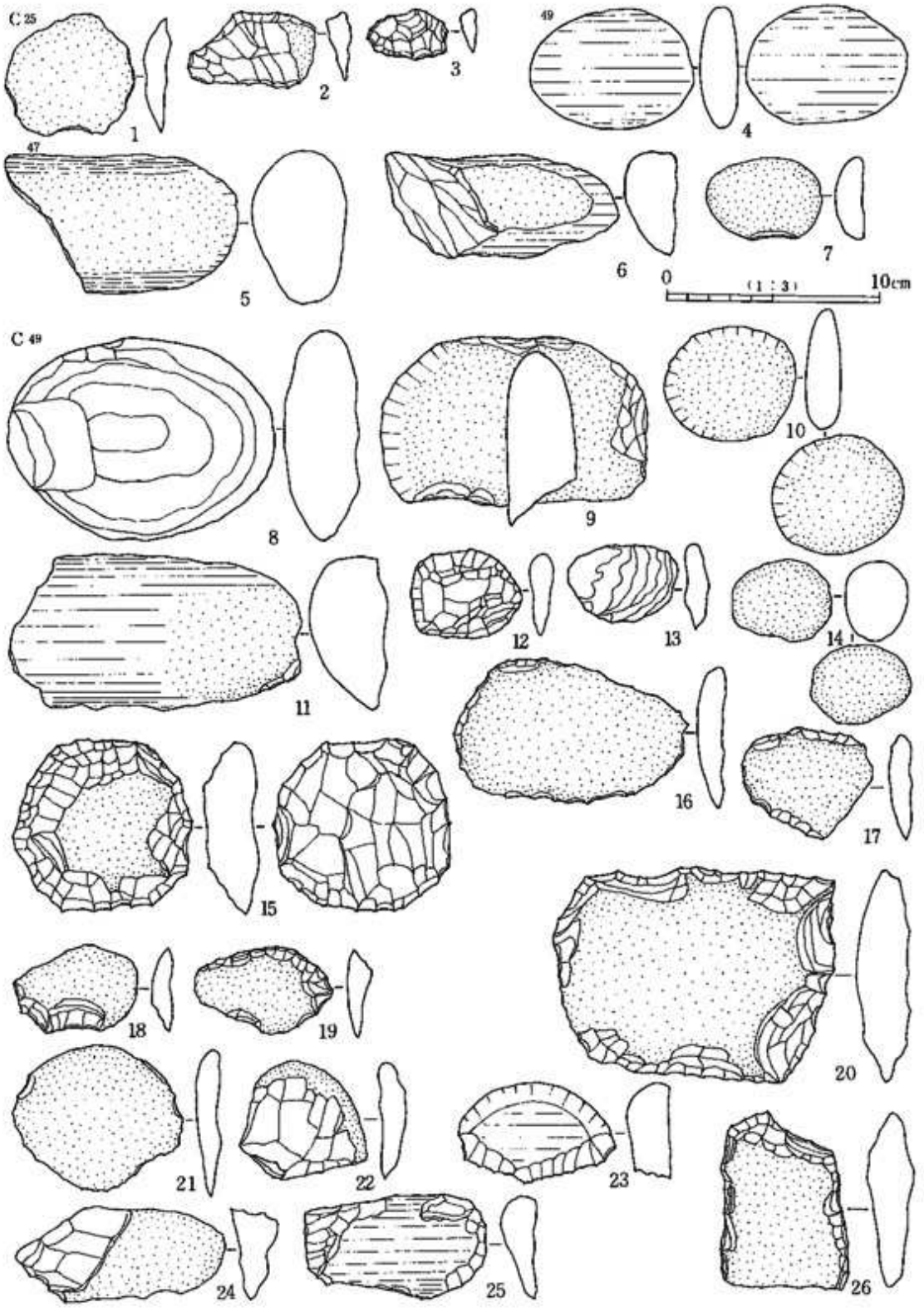
第71図　大宿遺跡縄文時代早期の代表的な土器



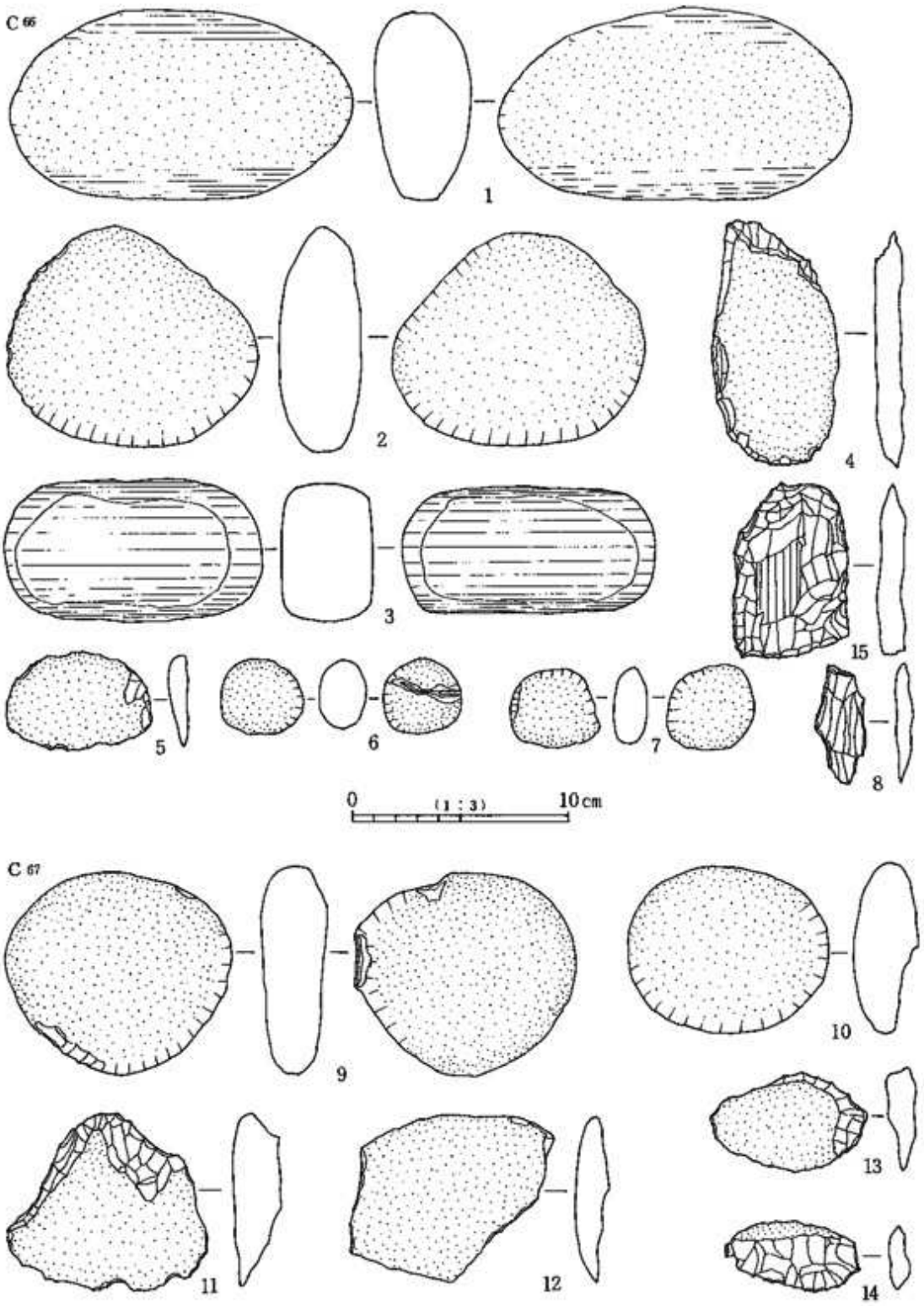
第72図　大宿遺跡C地区土壙49と周辺の土壙



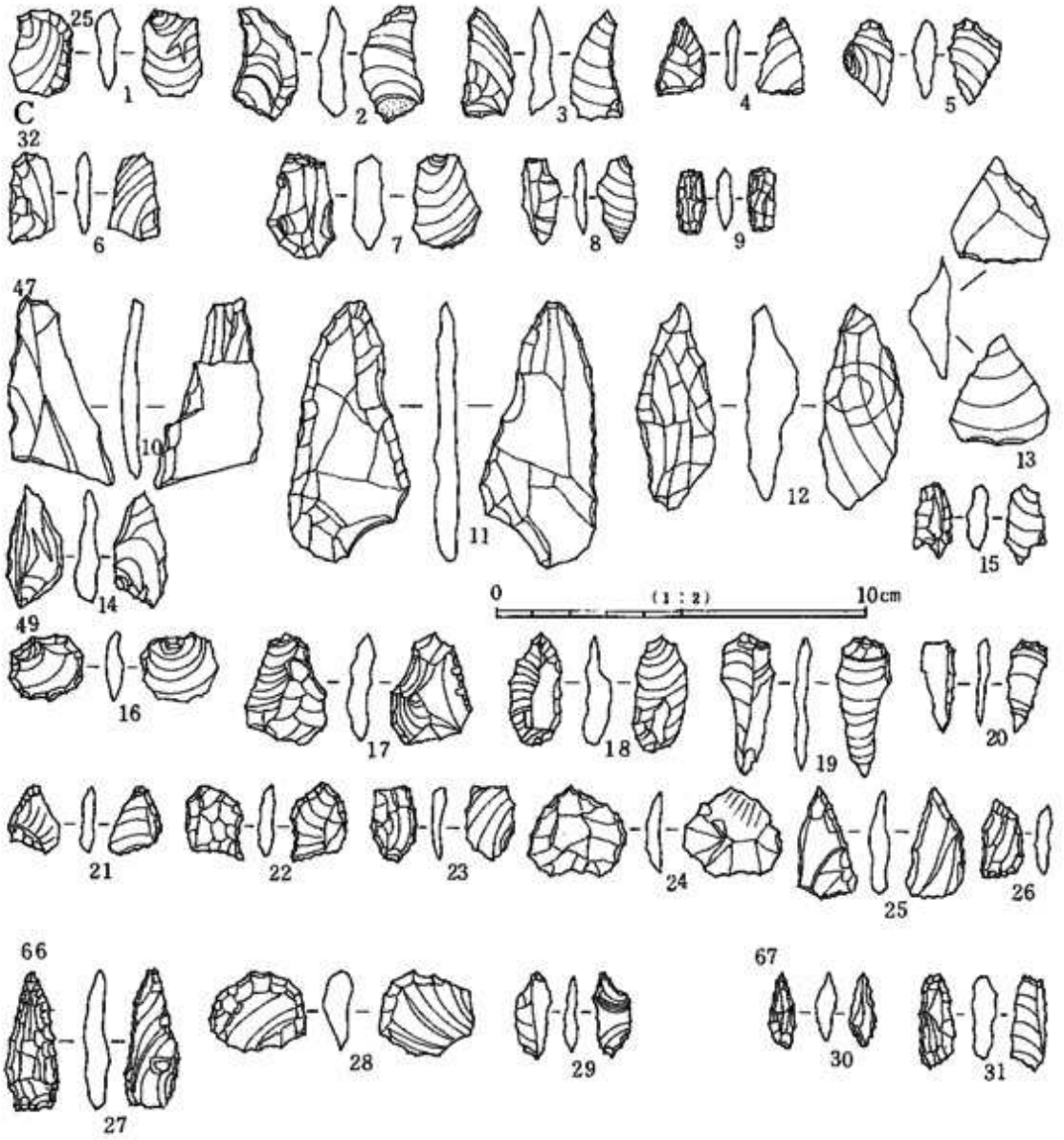
第73図　大宿遺跡C地区土壙25・49等出土土器



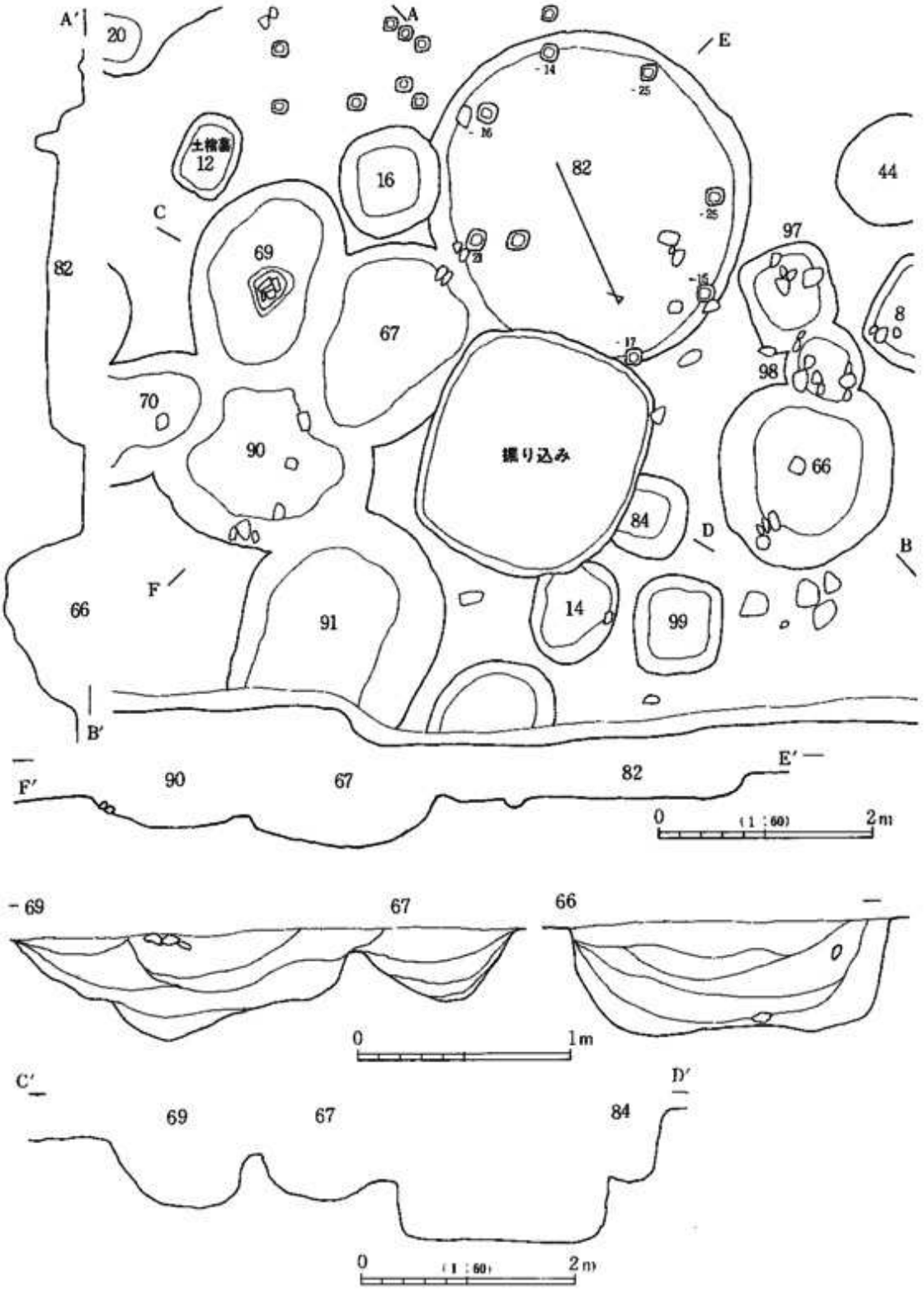
第74図　大宿遺跡C地区土壙25・49出土石器



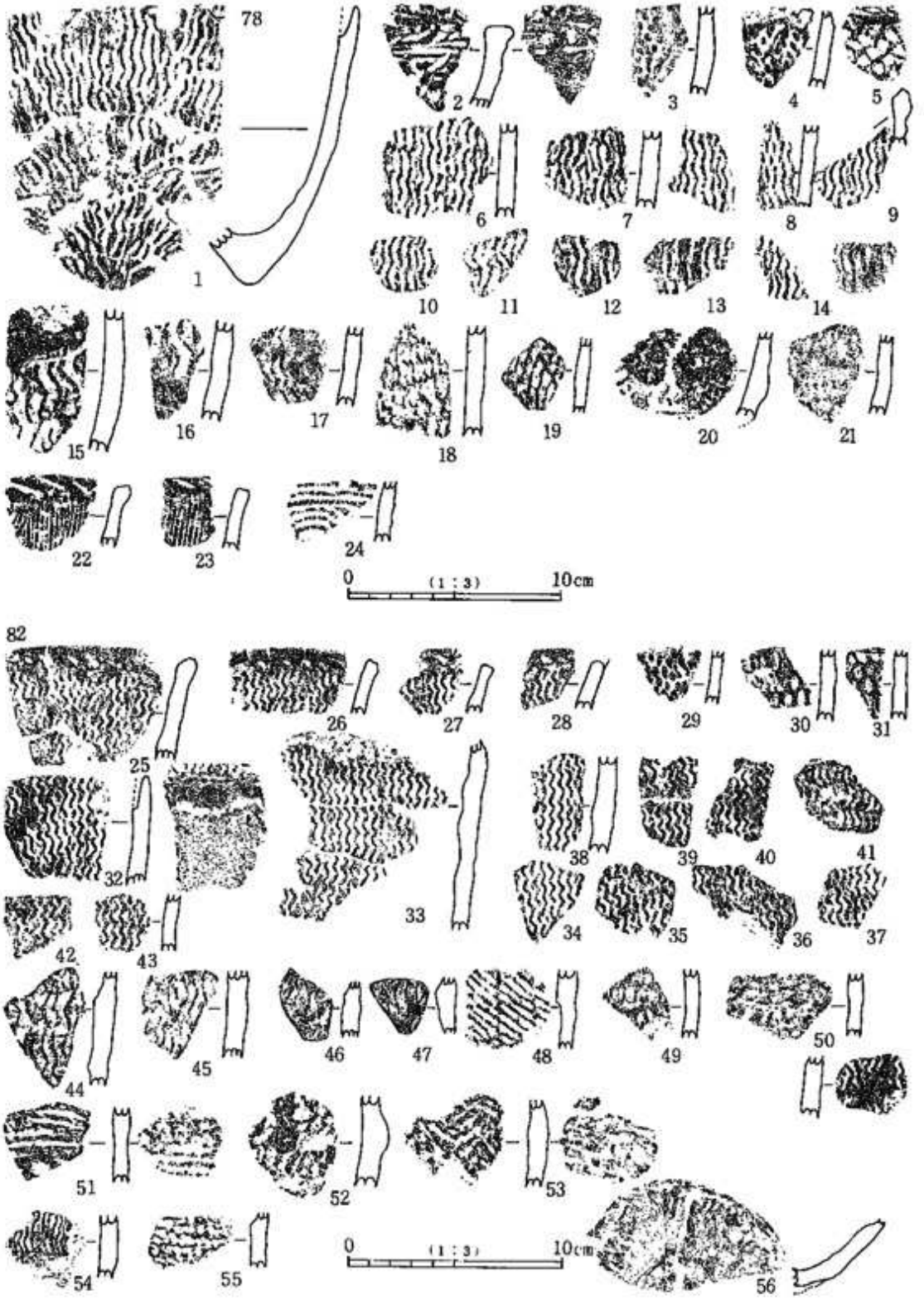
第75図　大宿遺跡C地区土壙66・67出土石器



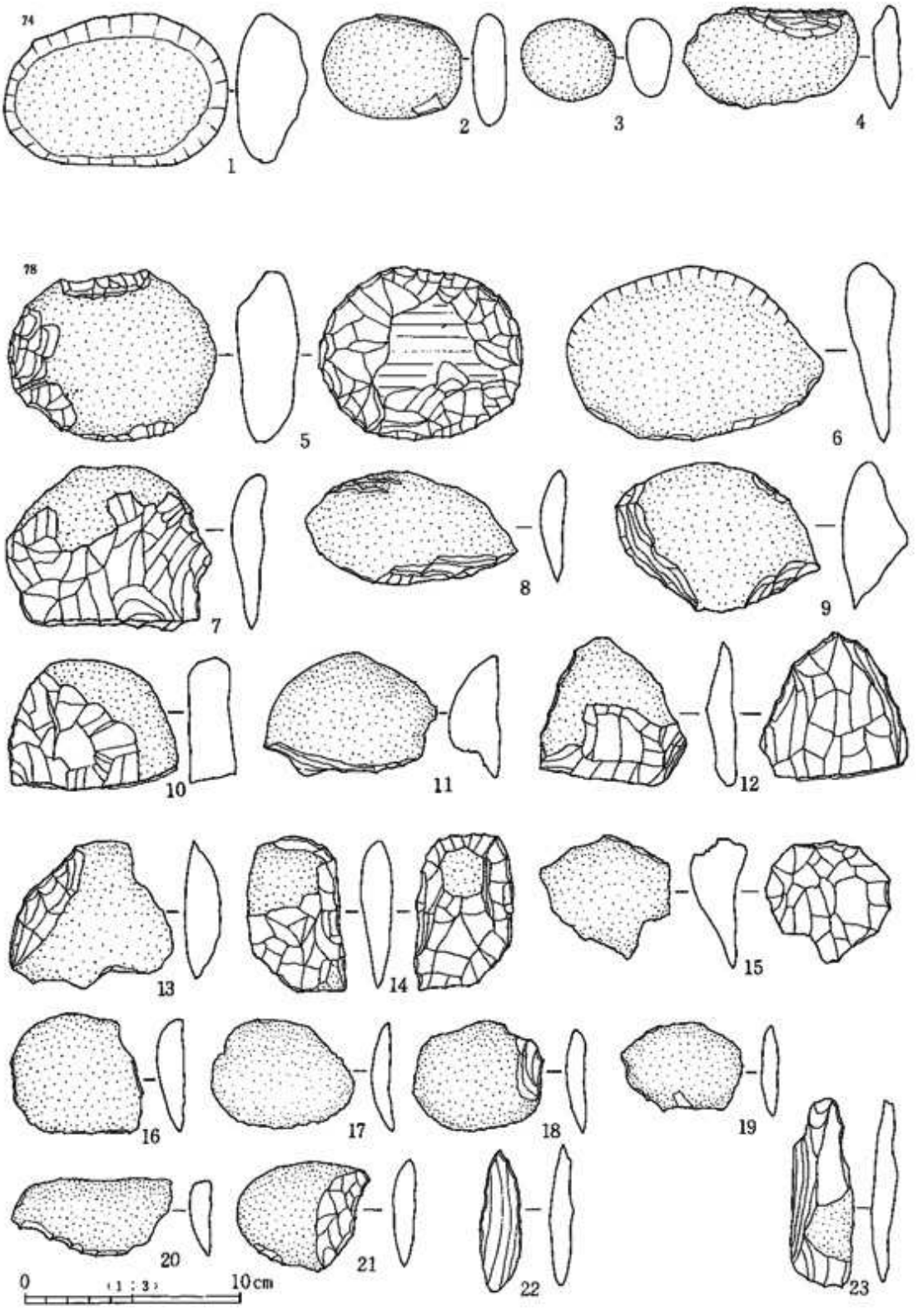
第76図　大宿遺跡C地区土壙25・32・47・49・66・67出土石器



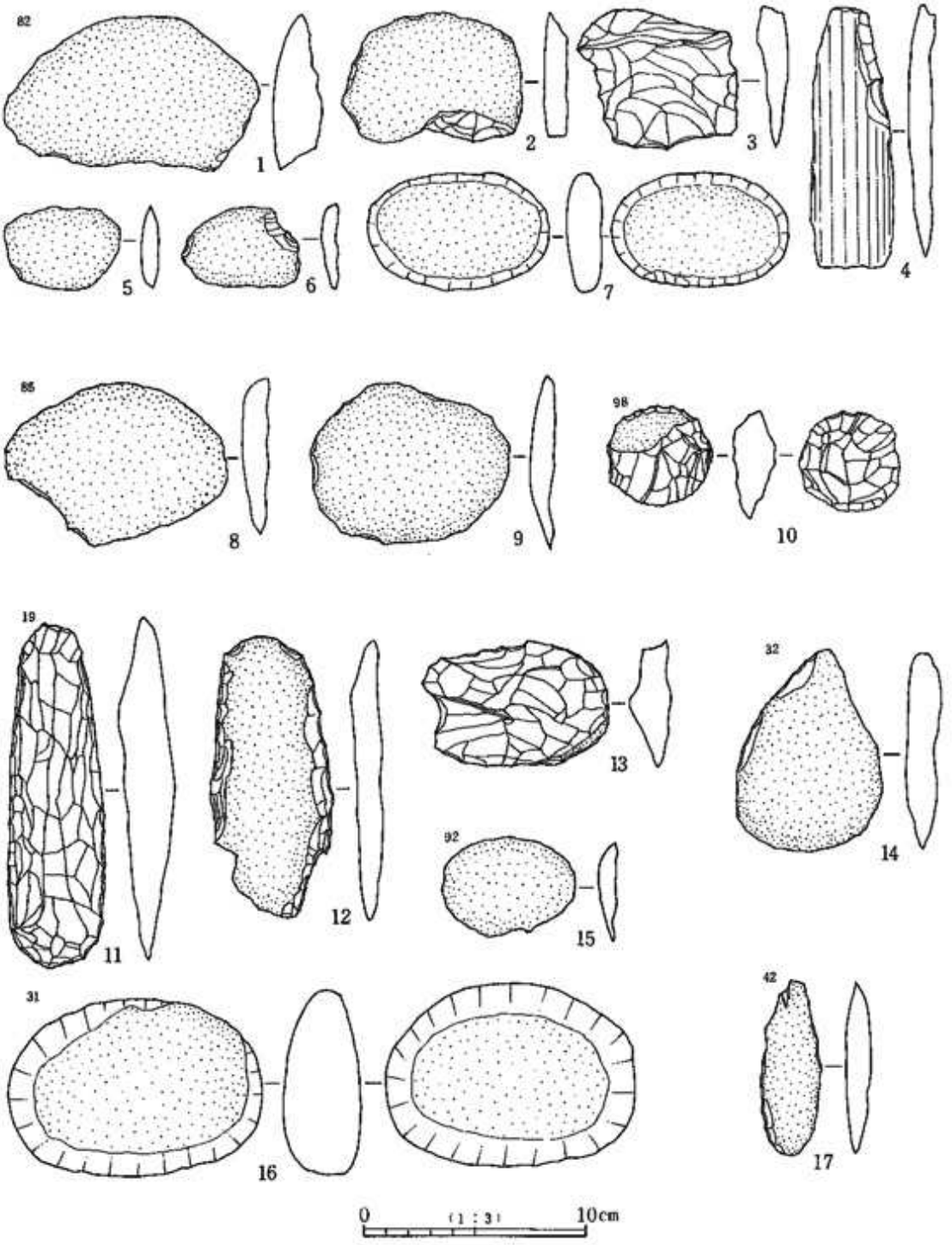
第77図　大宿遺跡C地区土壙82と周辺の土壙



第78図　大宿遺跡C地区土壙78・82出土土器

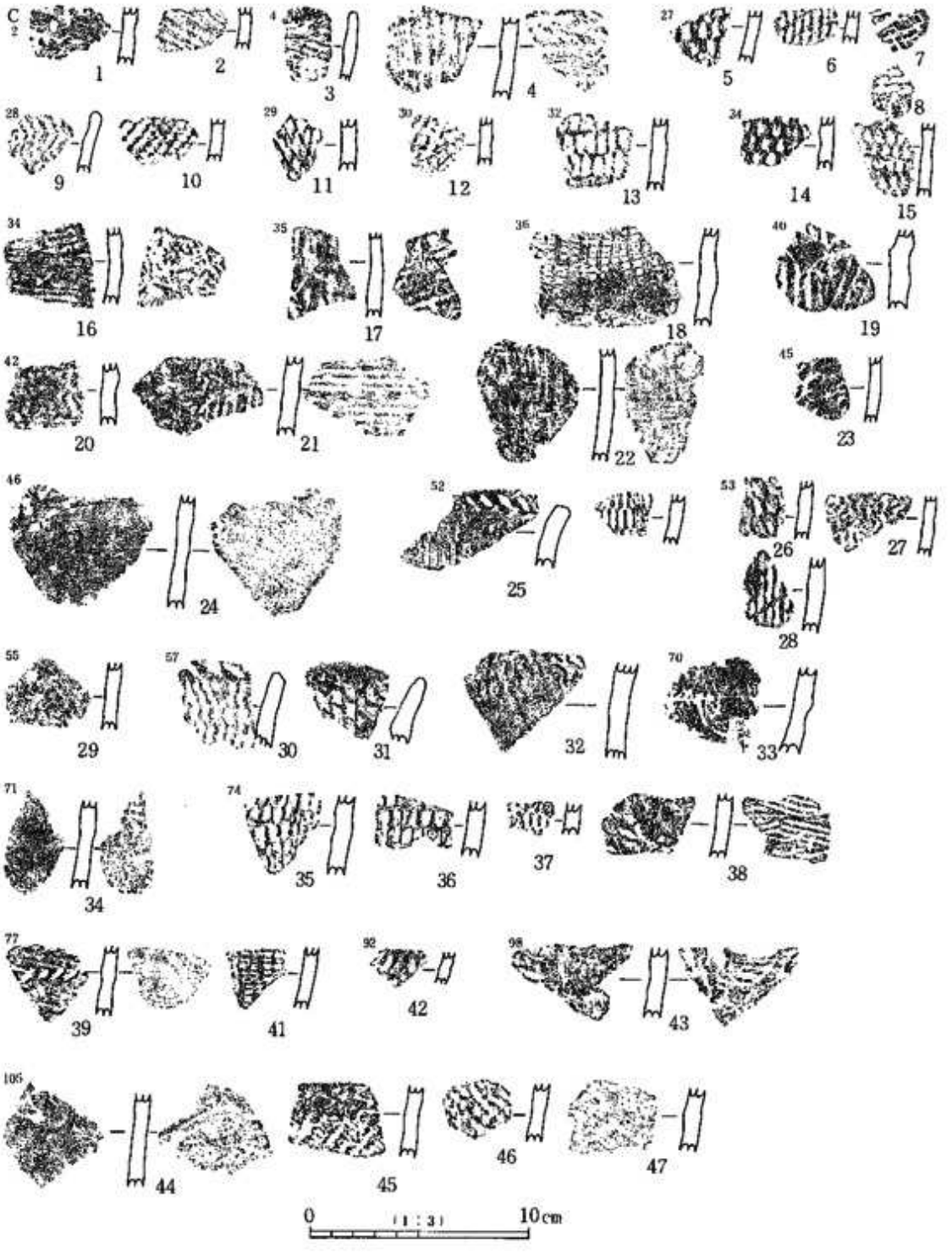


第79図　大宿遺跡C地区土壙74・78出土石器

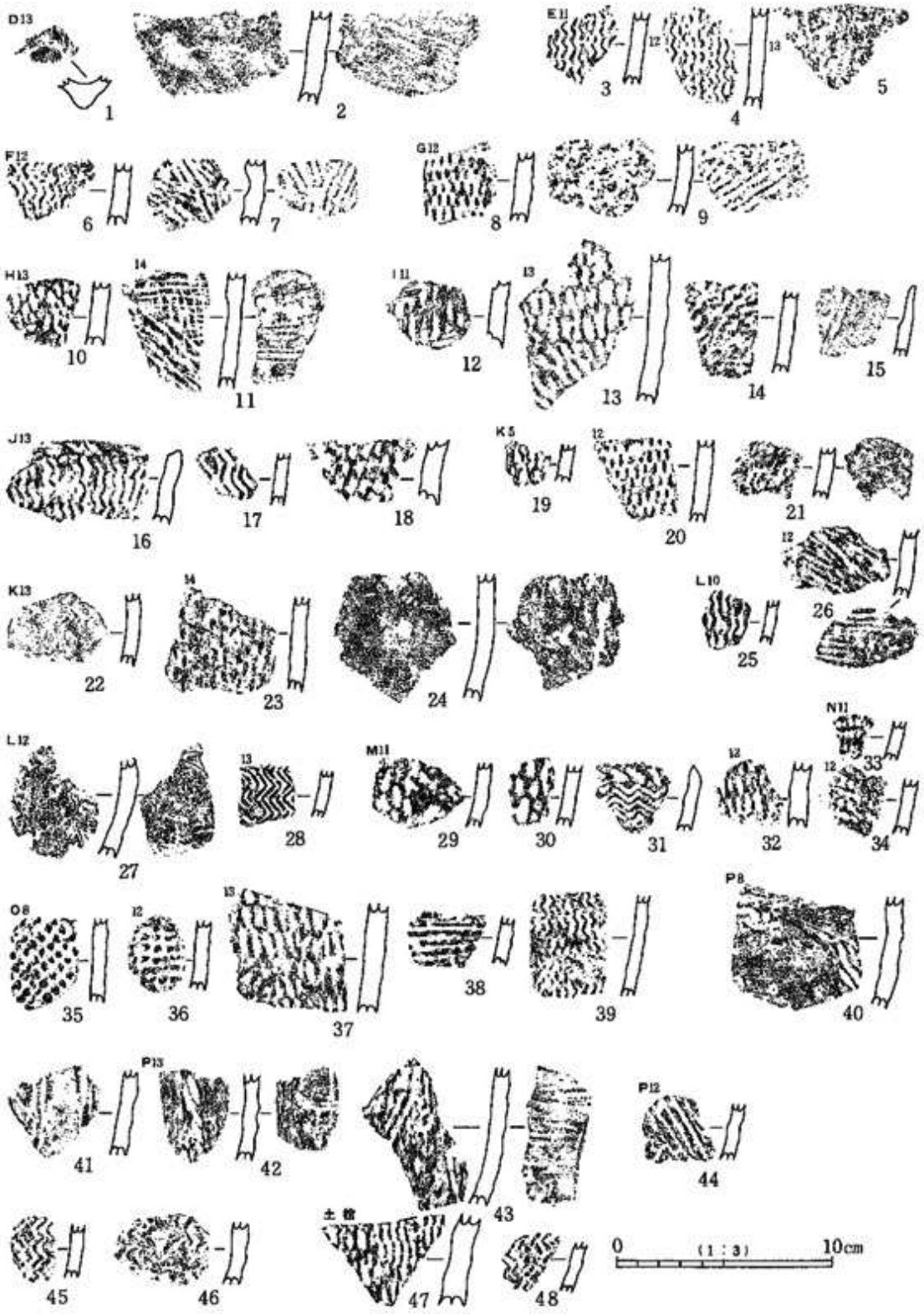


第80図　大宿遺跡C地区土壙82ほか出土石器

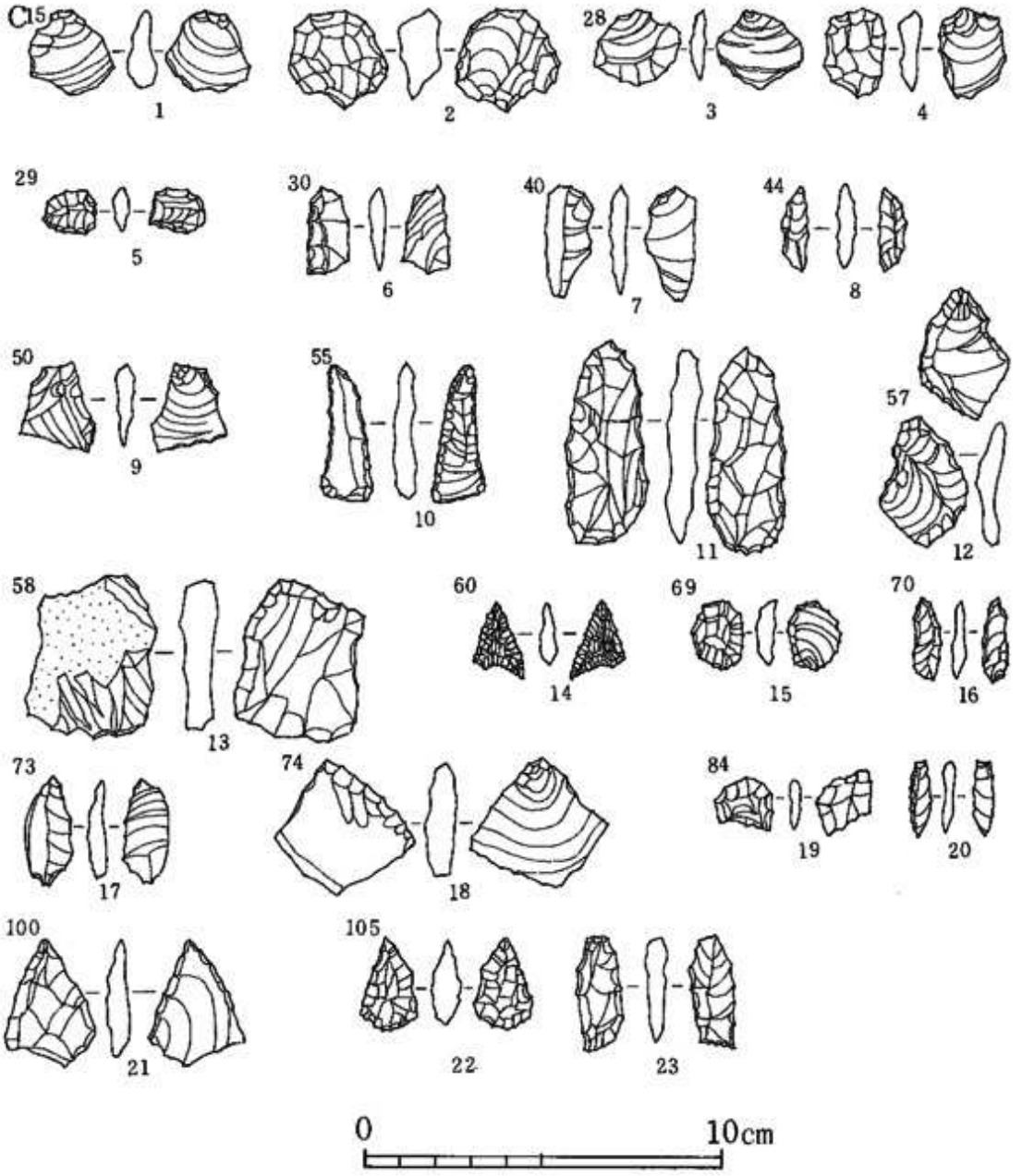
第81図　大宿遺跡C地区土壙78・82等出土石器



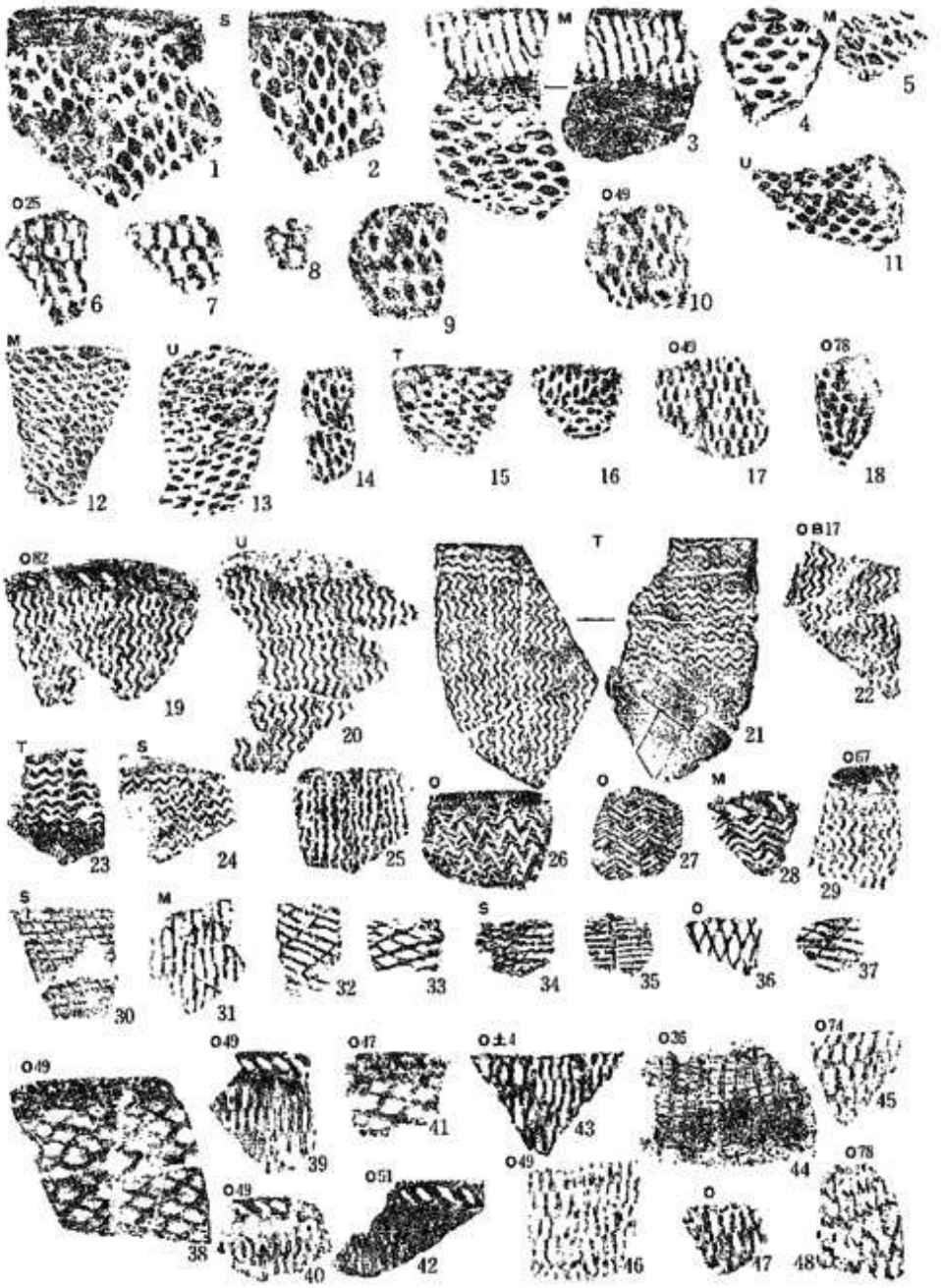
第82図　大宿遺跡C地区土壙2～105出土土器



第83図　大宿遺跡C地区グリット出土土器

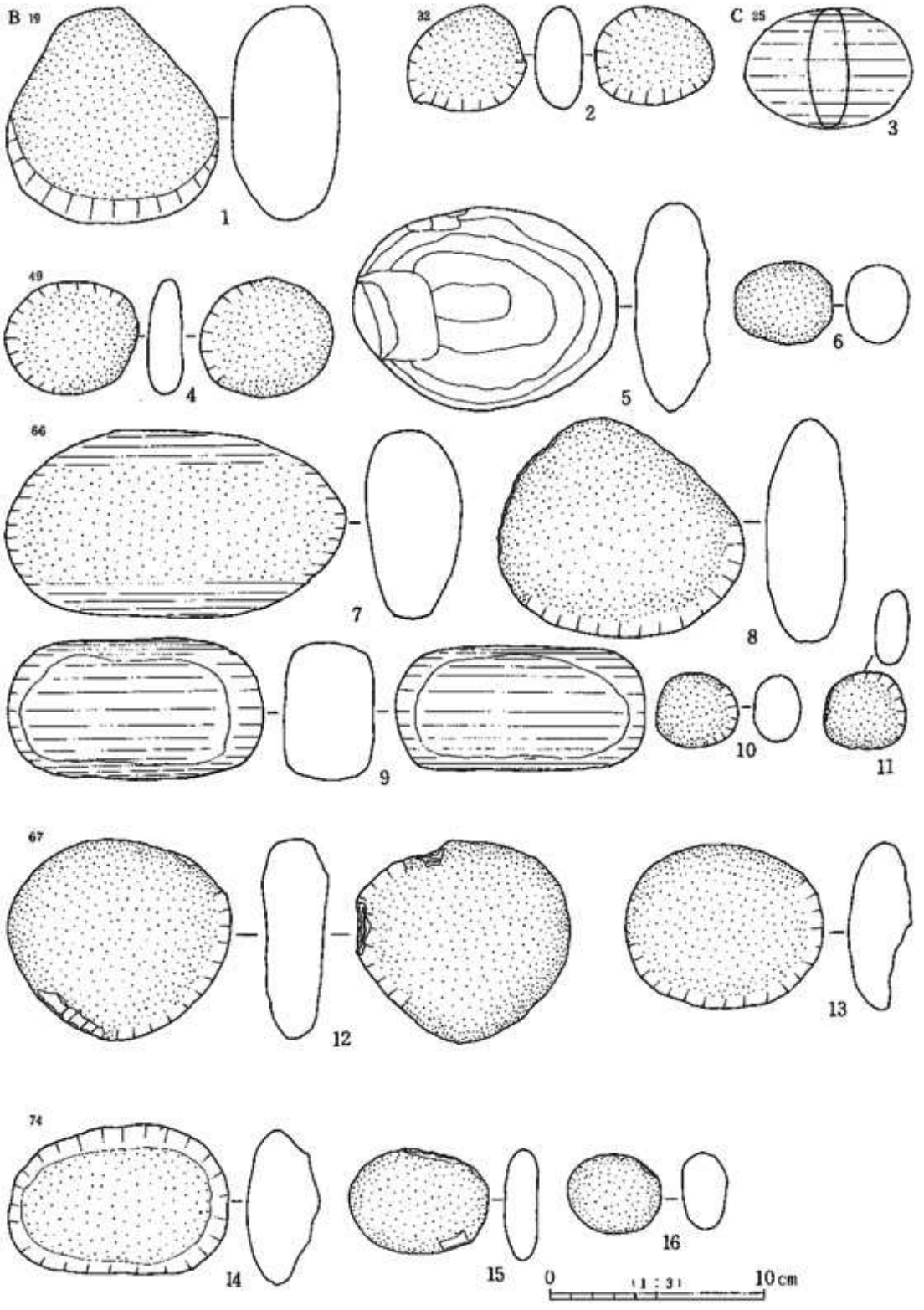


第84図　大宿遺跡C地区土壙15～105出土石器

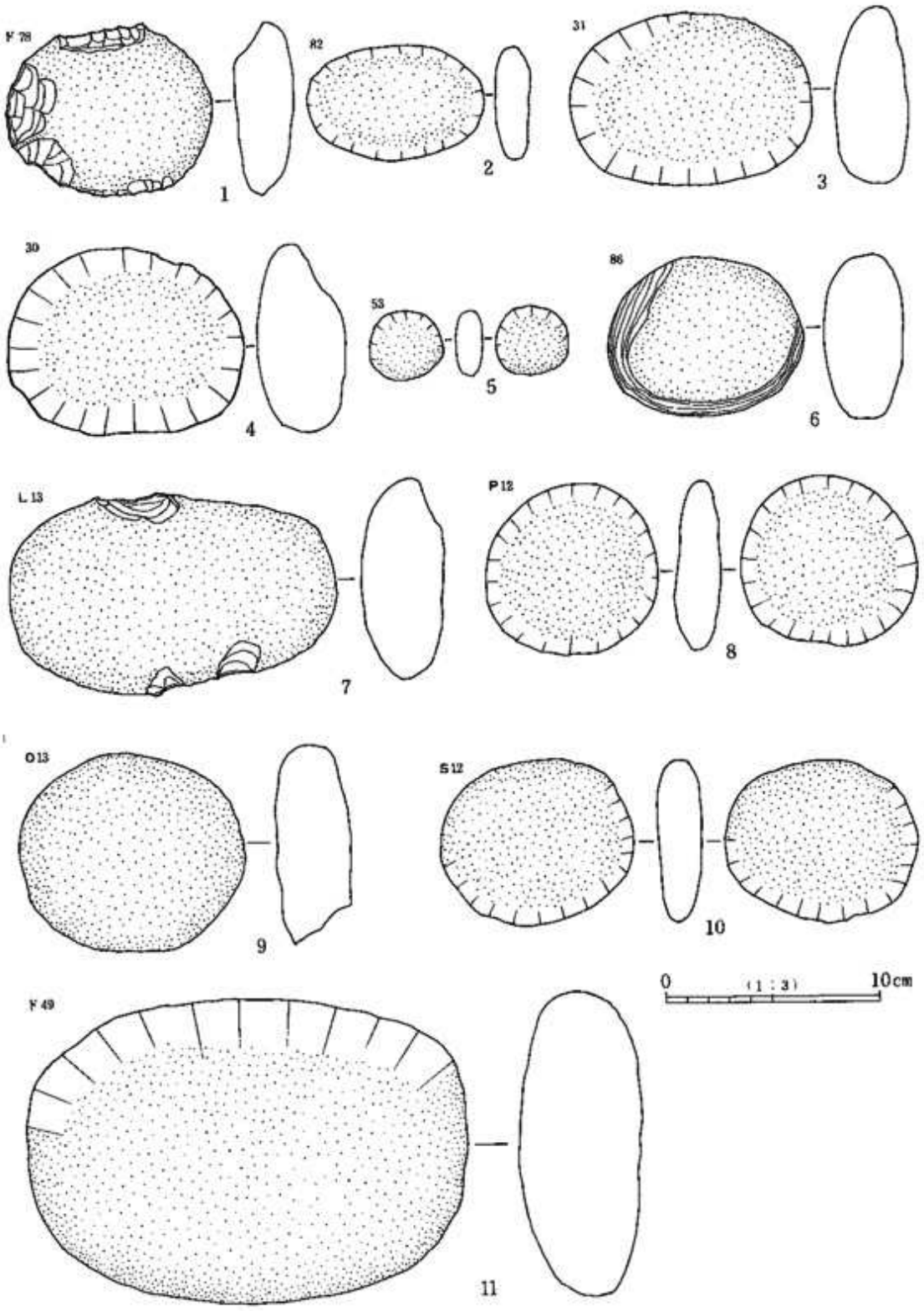


（O－大　宿　　S－新田原　　U－上の平
M－深山田　　T－千草原）

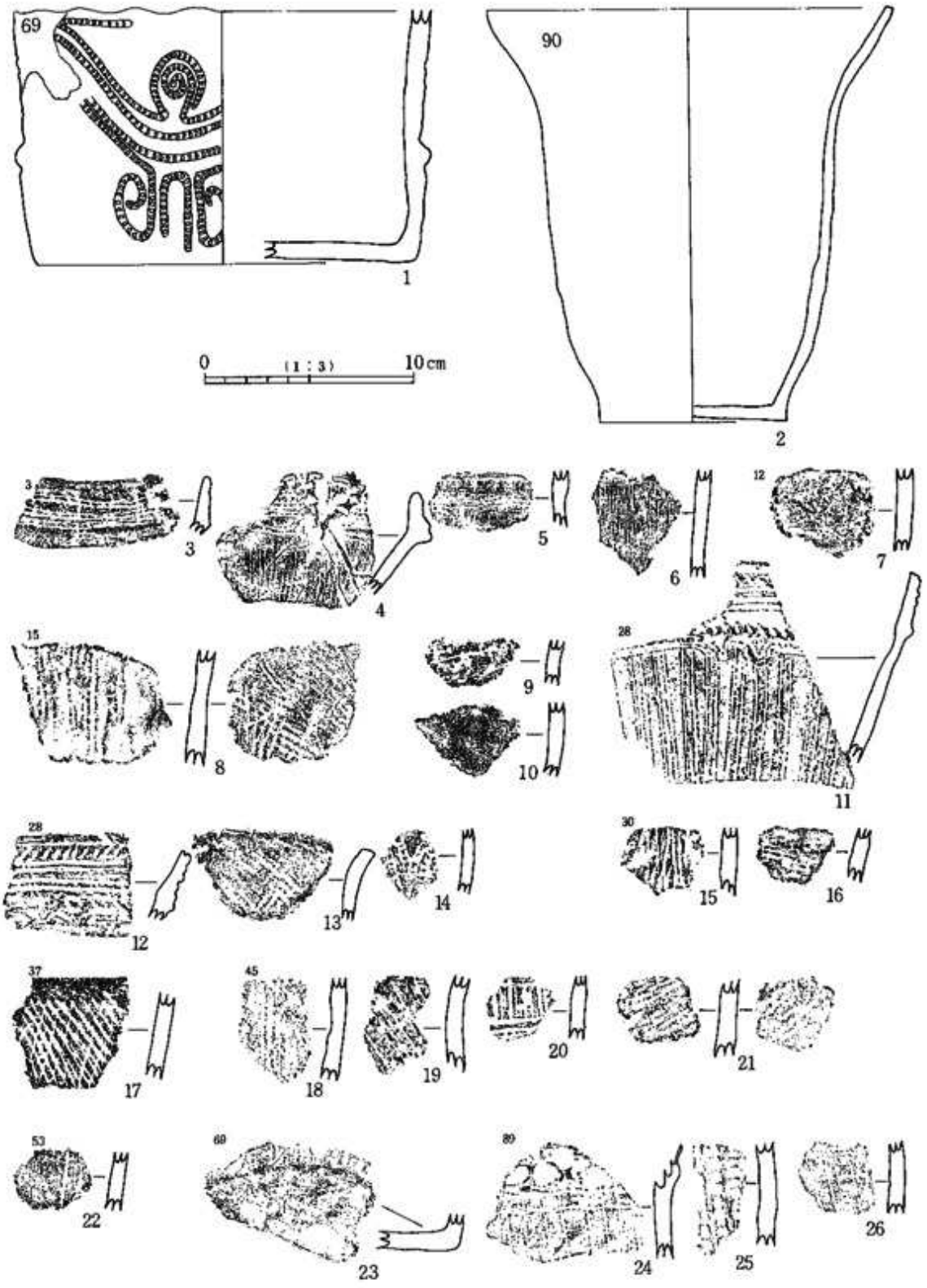
第85図　高森町主要遺跡の縄文時代早期土器



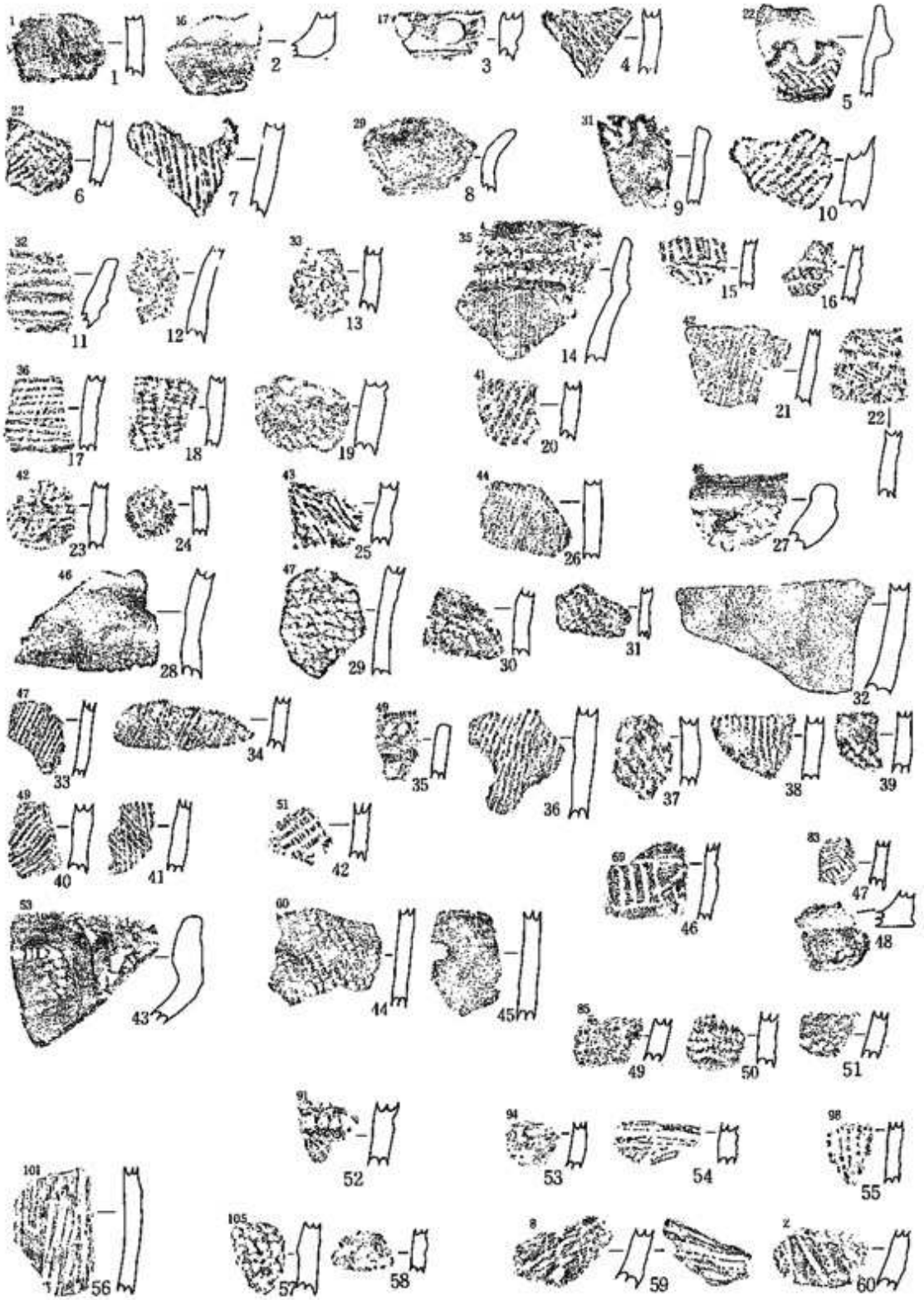
第86図　大宿遺跡出土丸磨石 (1)



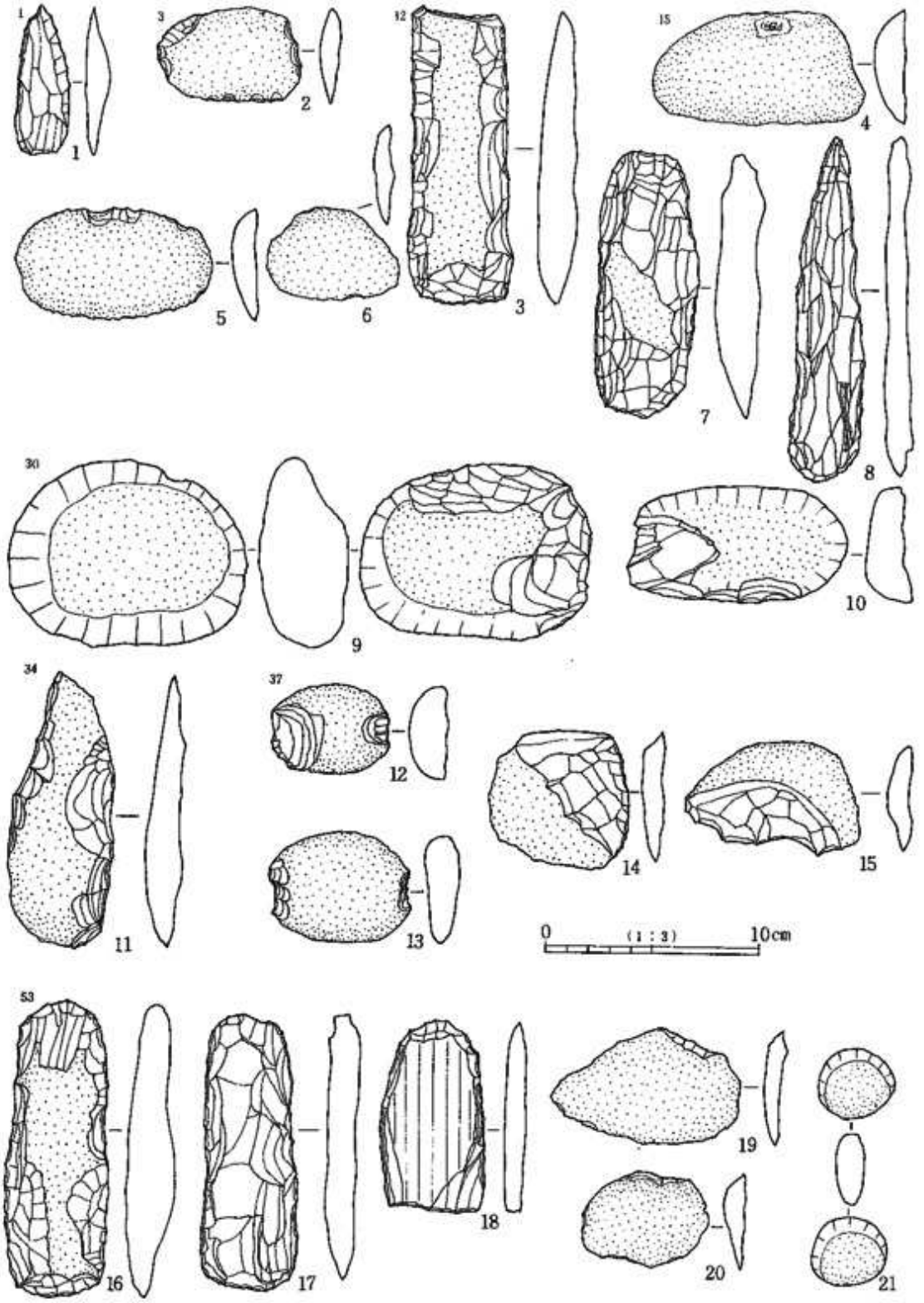
第87図　大宿遺跡出土丸磨石 (2)



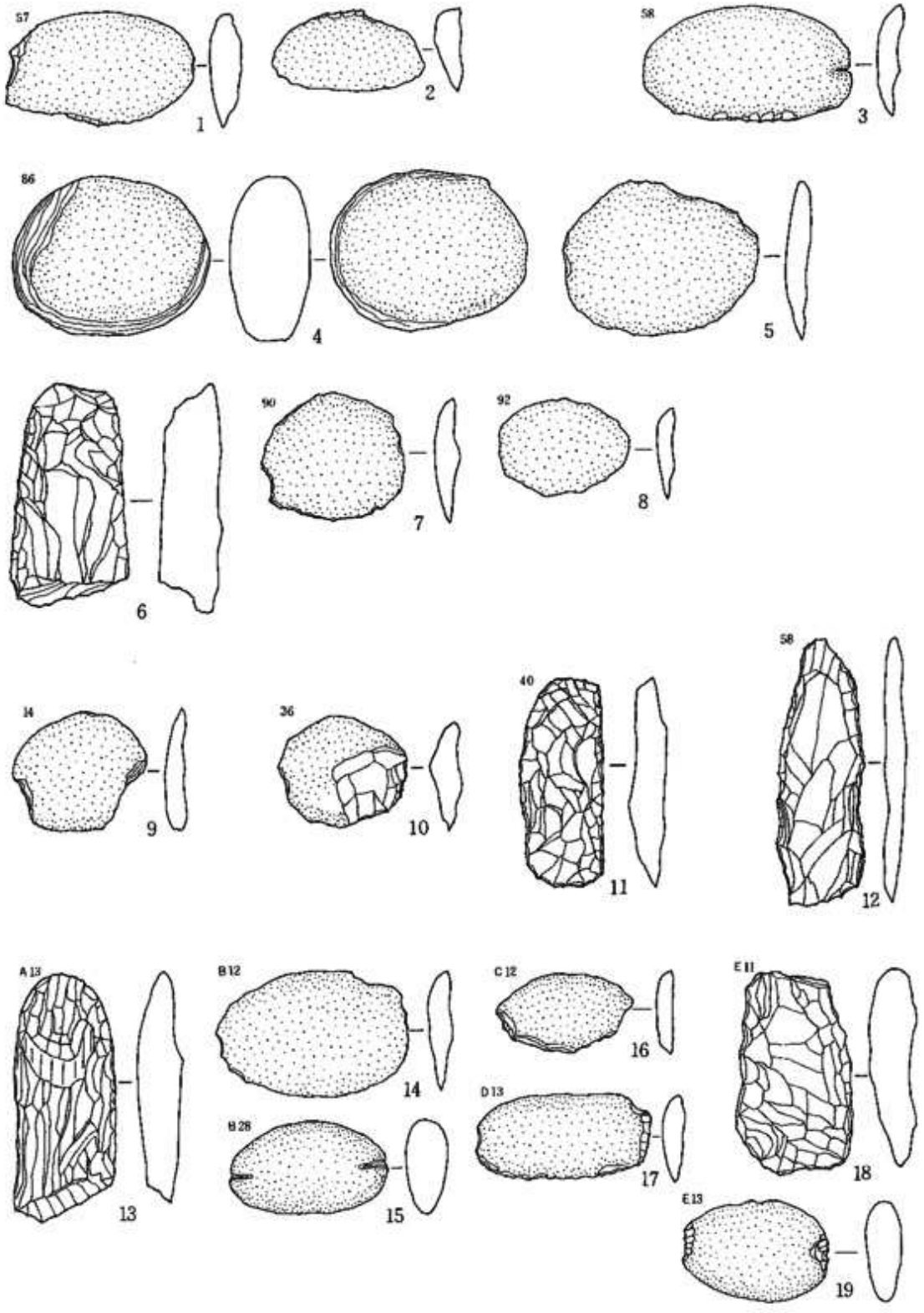
第88図　大宿遺跡C地区土壙69・90、3～89出土土器



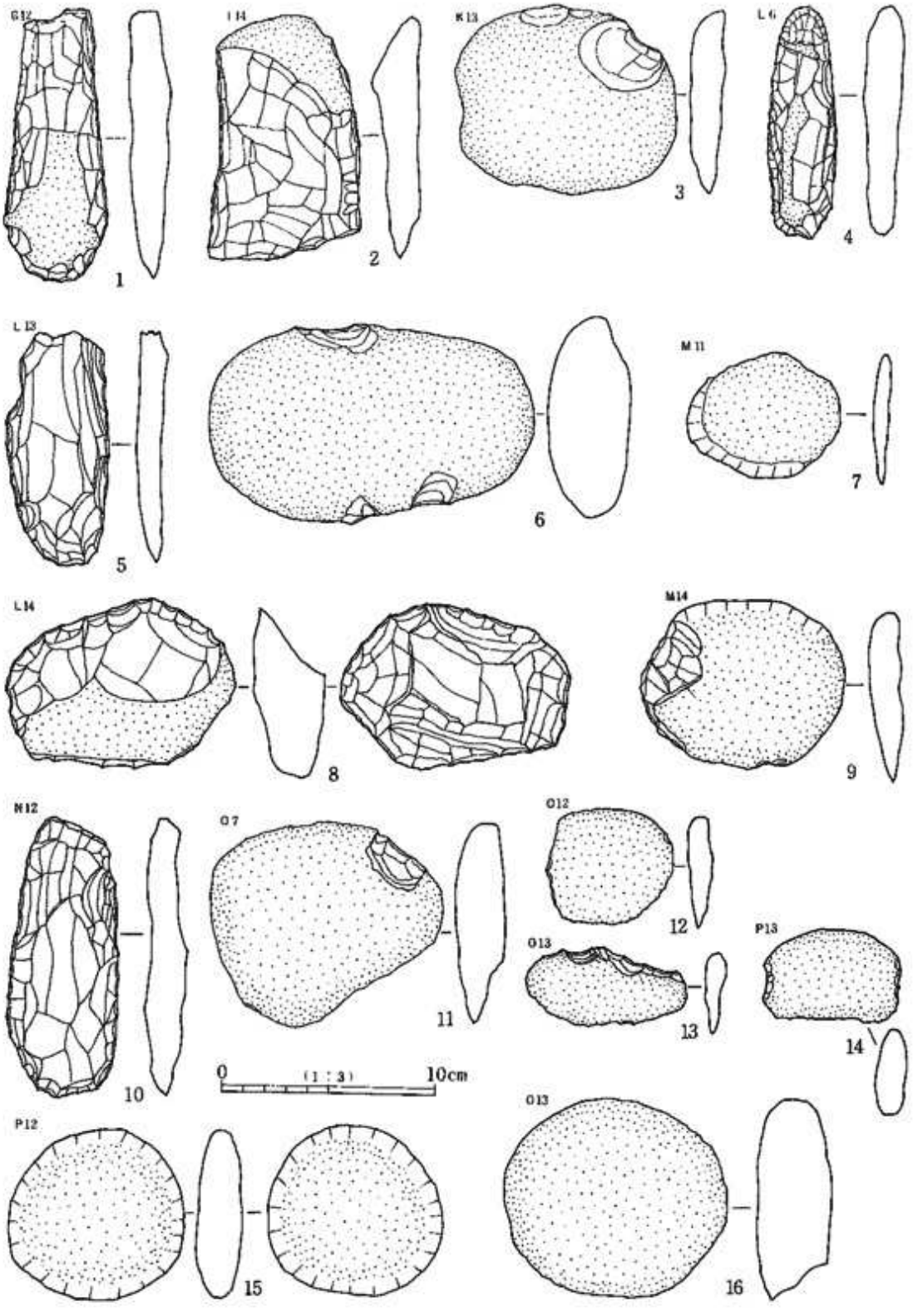
第89図　大宿遺跡C地区土壙1～105出土土器



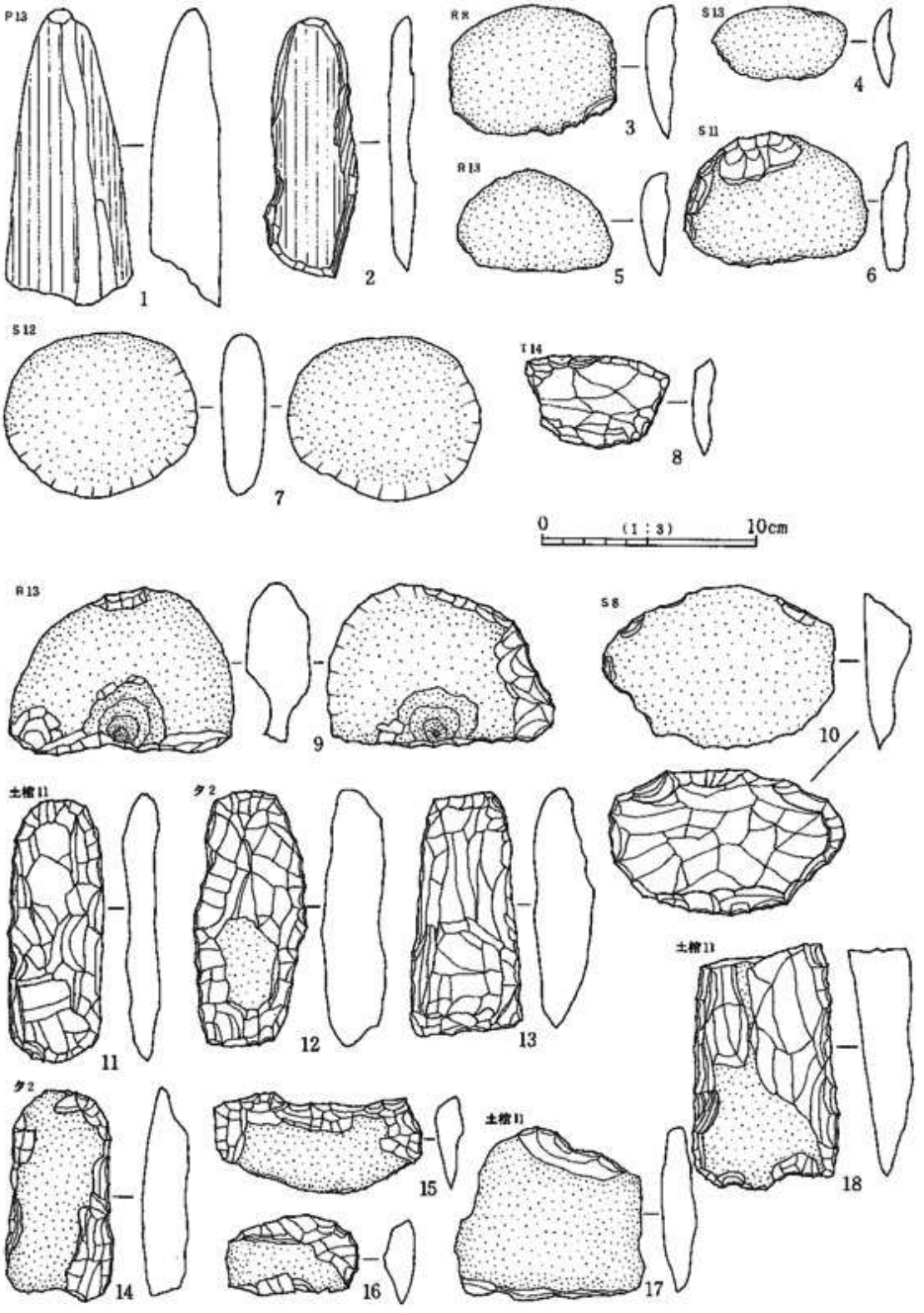
第90図　大宿遺跡C地区土壙出土石器 (1)



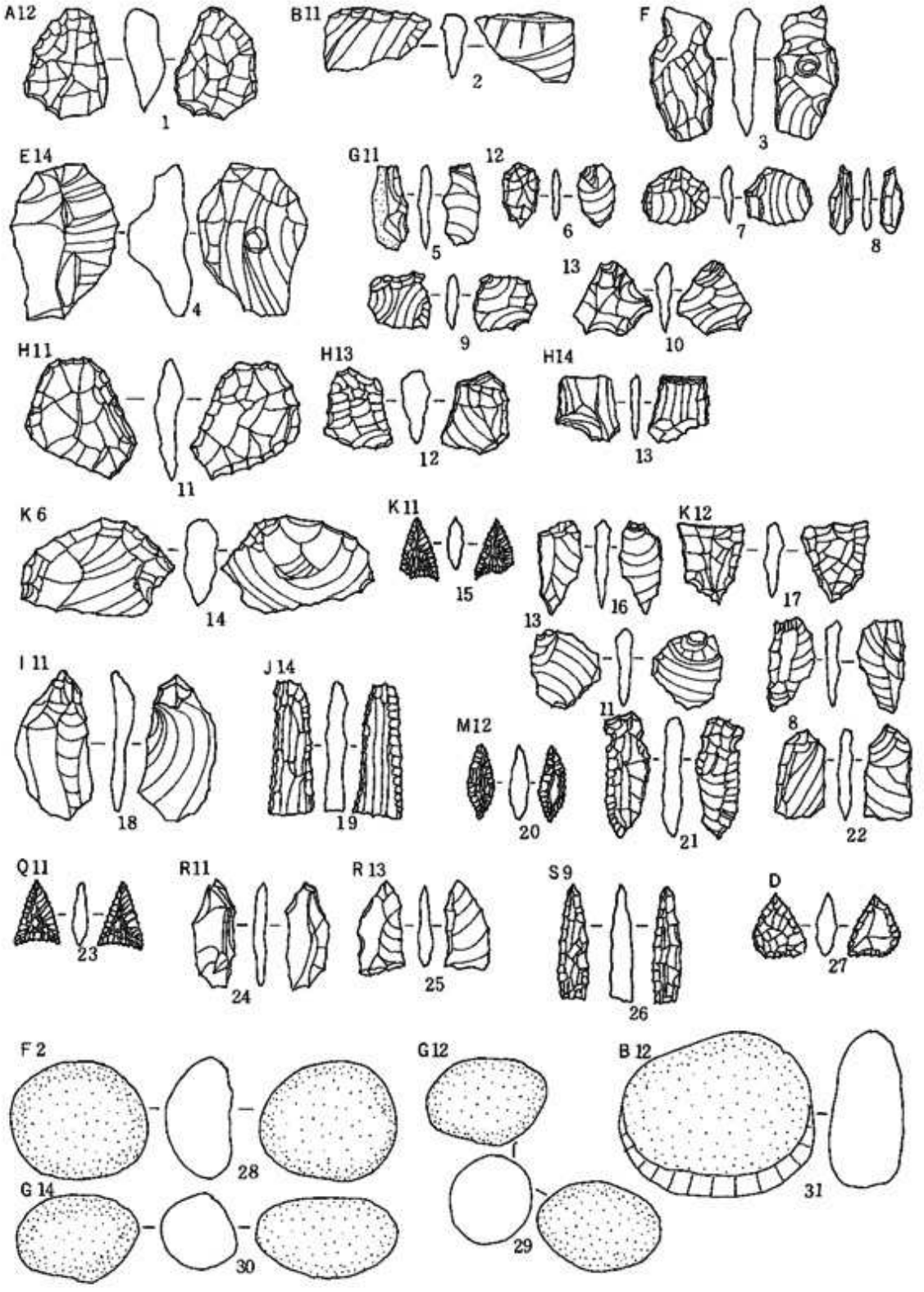
第91図　大宿遺跡C地区土壙出土石器(2)、グリット出土石器(1)



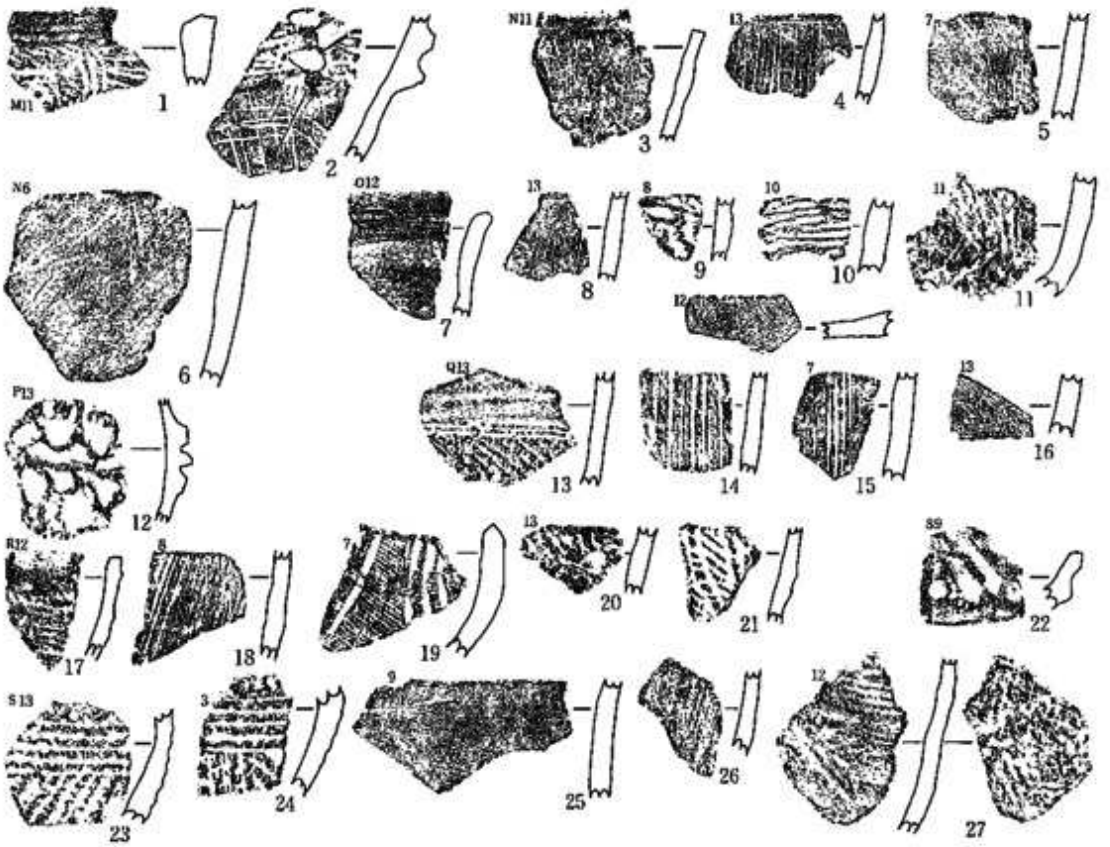
第92図　大宿遺跡C地区グリット出土石器 (2)



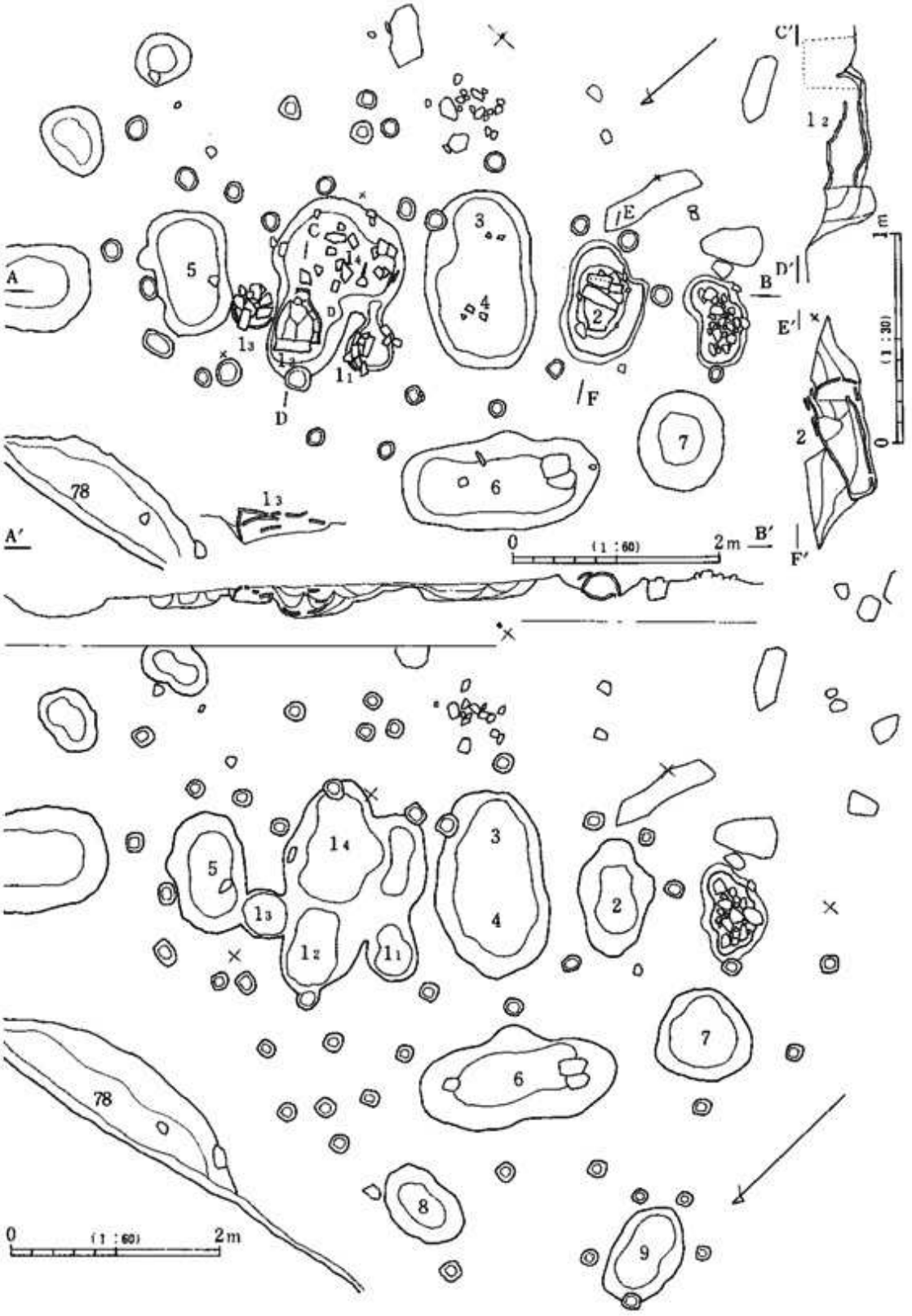
第93図　大宿遺跡C地区グリット出土石器 (3)



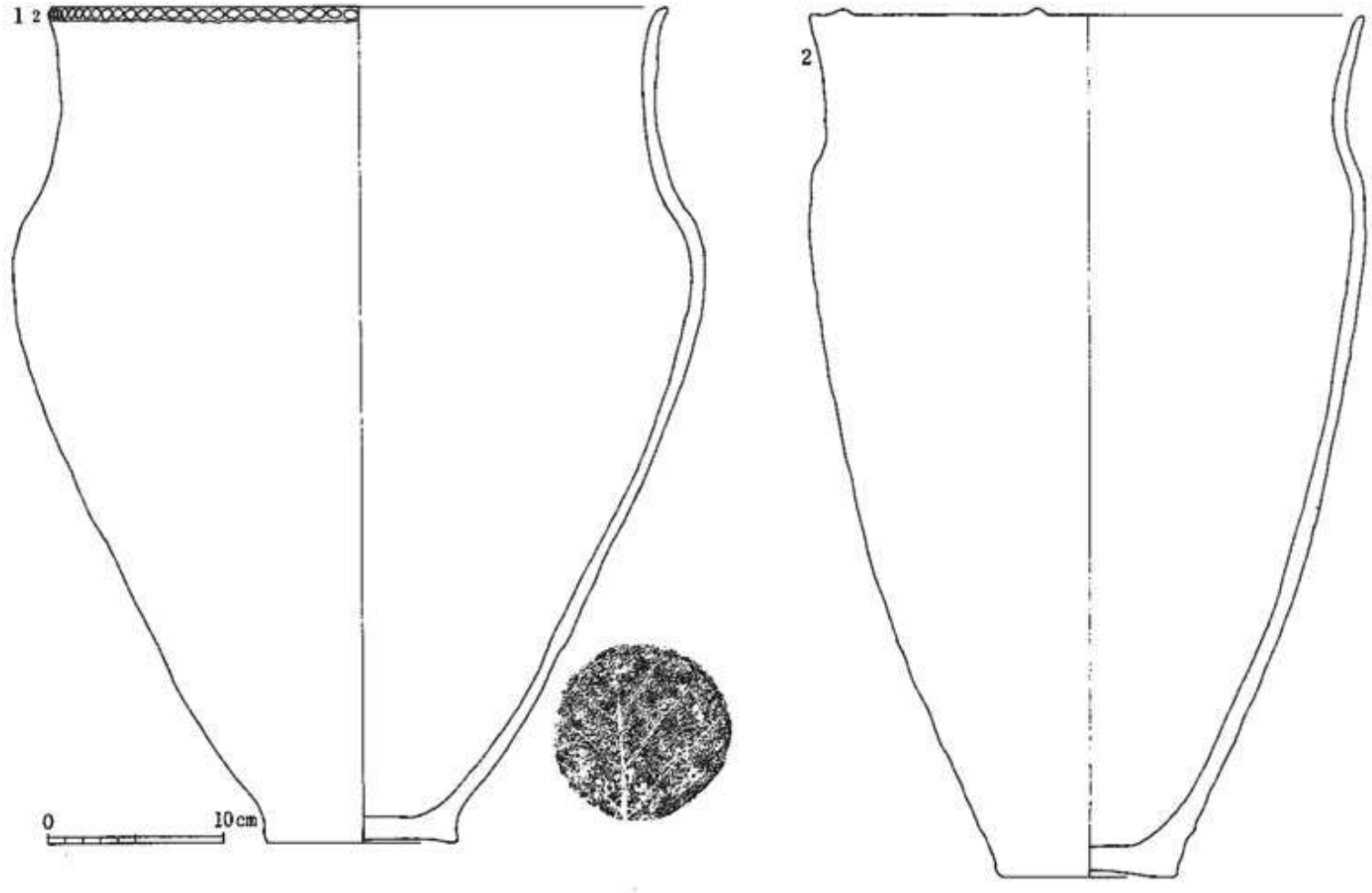
第94図　大宿遺跡C地区グリット出土石器 (4)



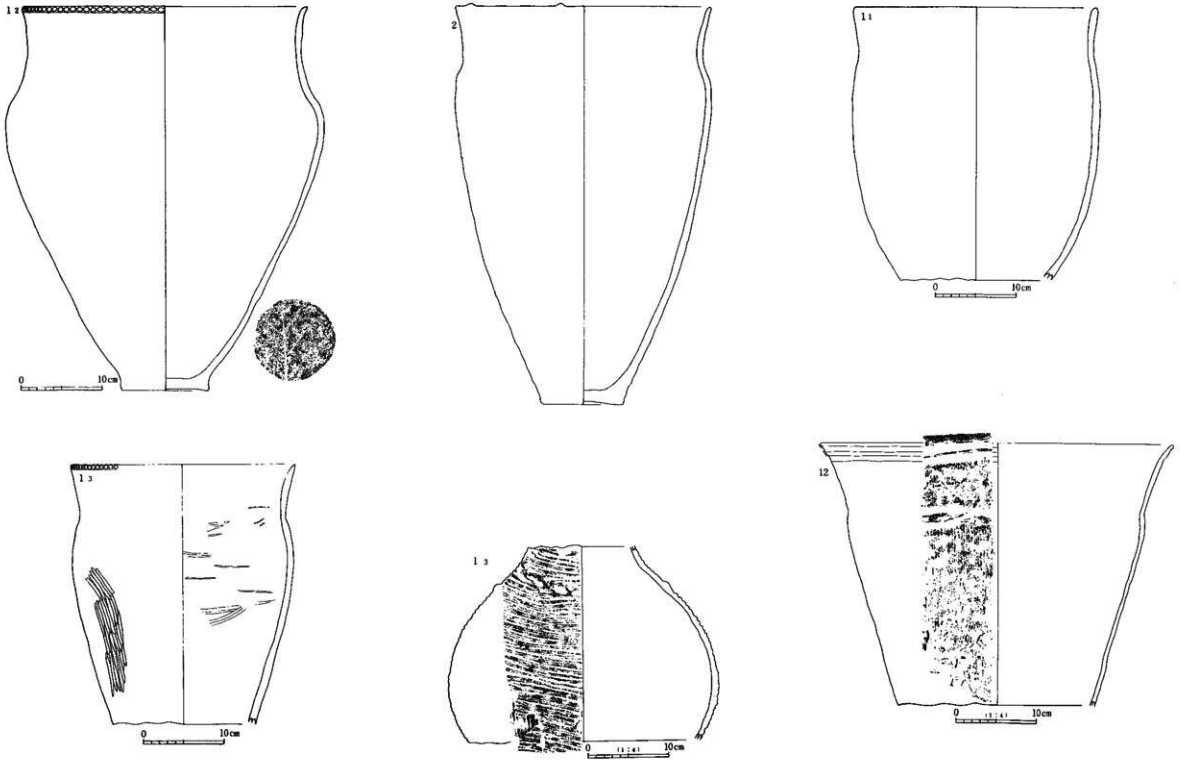
第95図　大宿遺跡Ｃ地区グリット出土土器



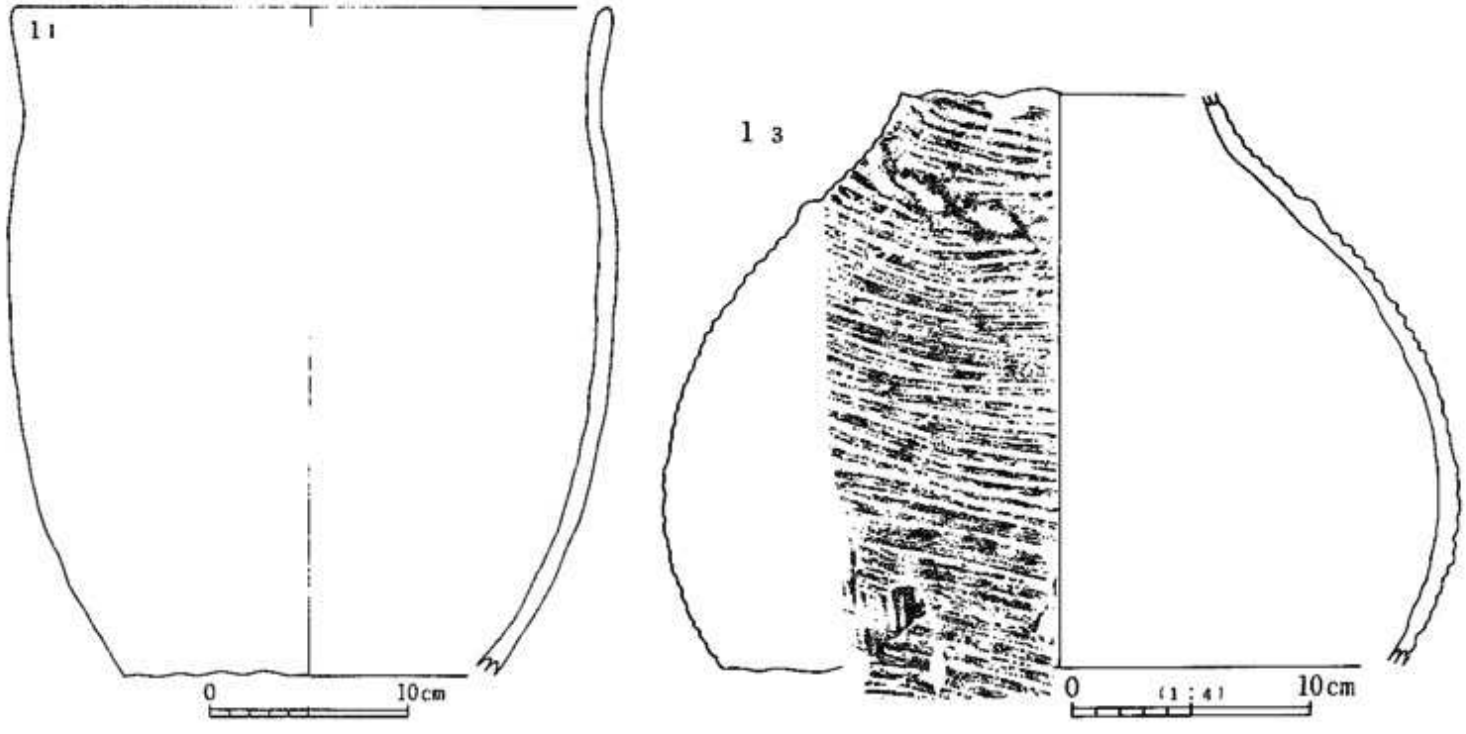
第96図　大宿遺跡土器棺墓1～9



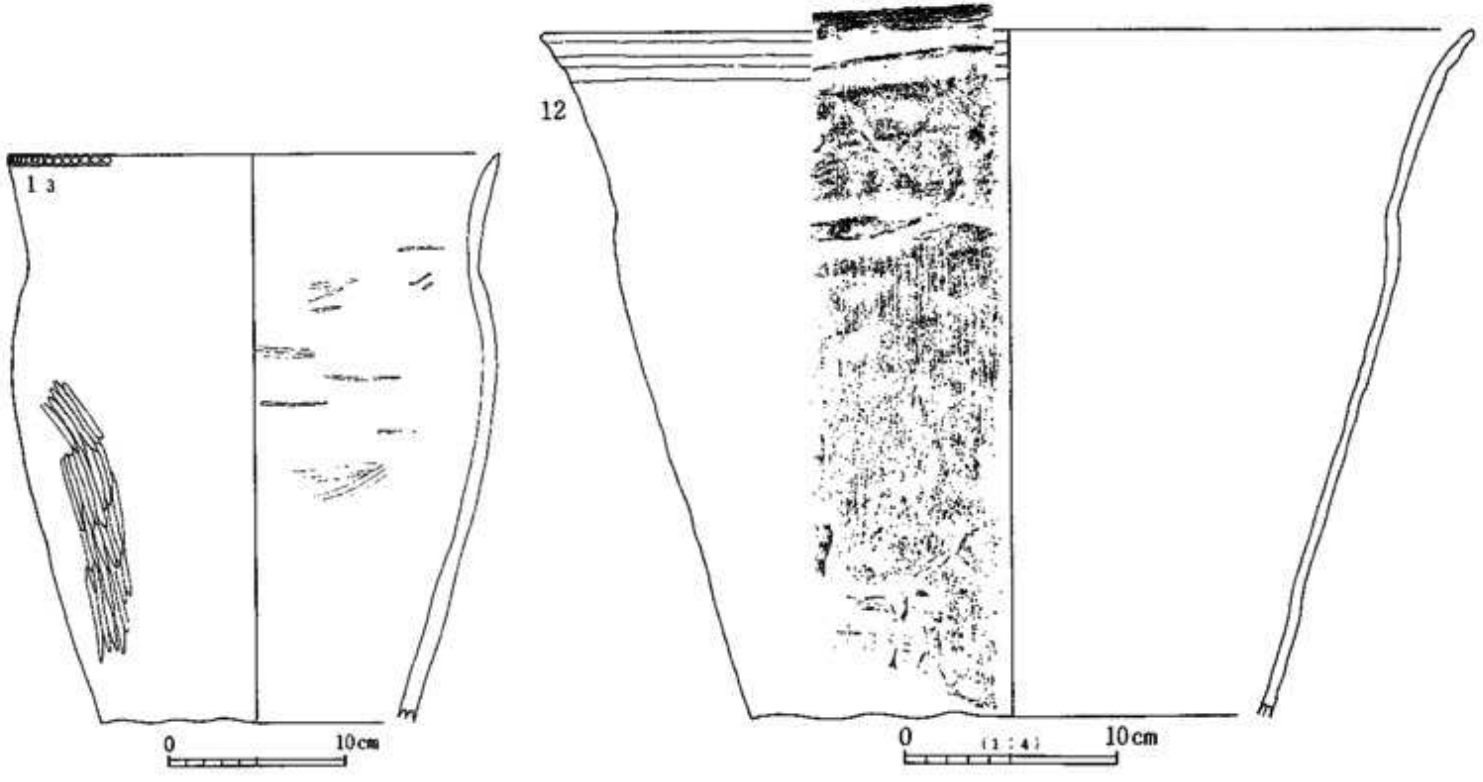
第98図　大宿遺跡土器棺墓1の2・2出土土器



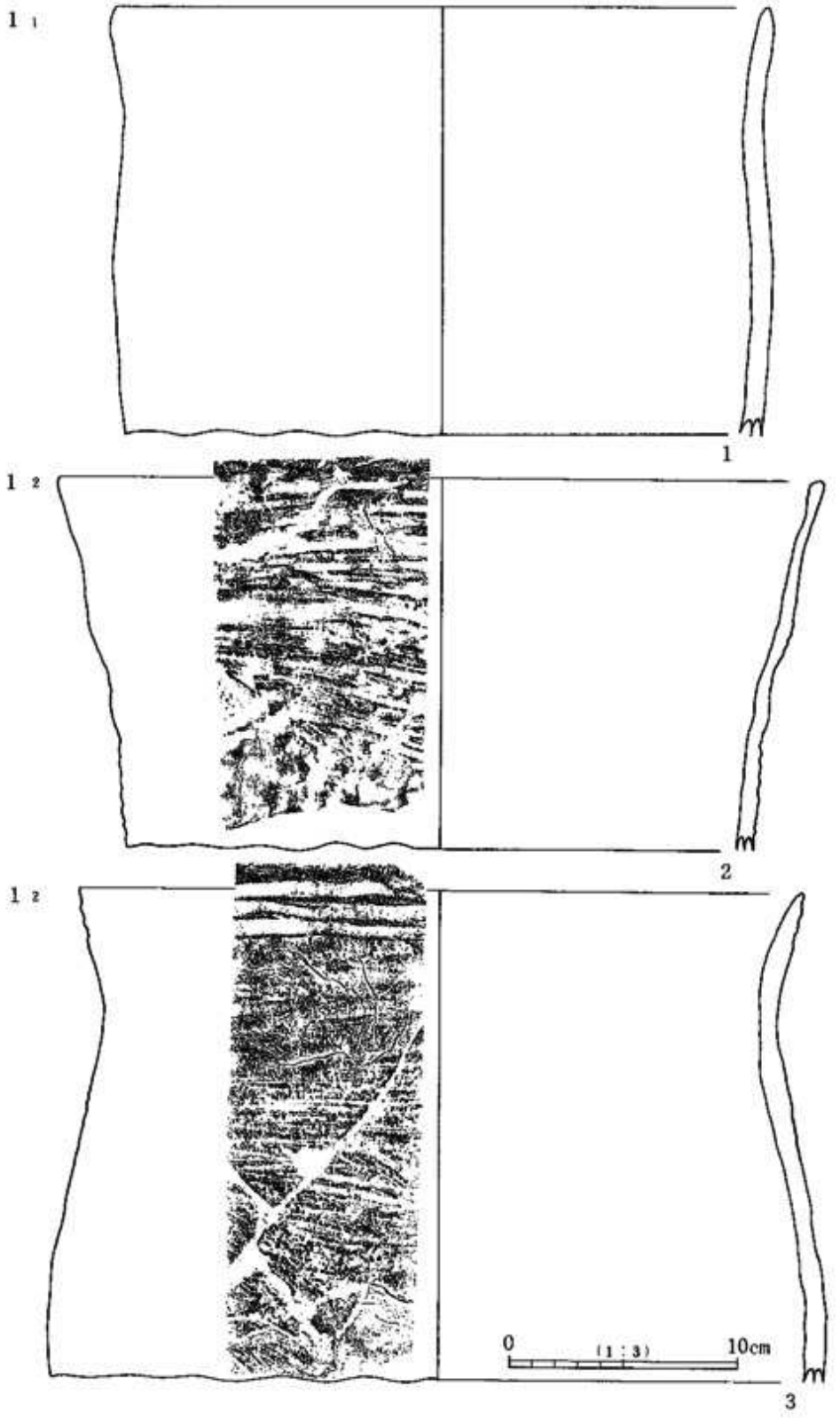
第97図　大宿遺跡土器棺墓1～12出土主要土器



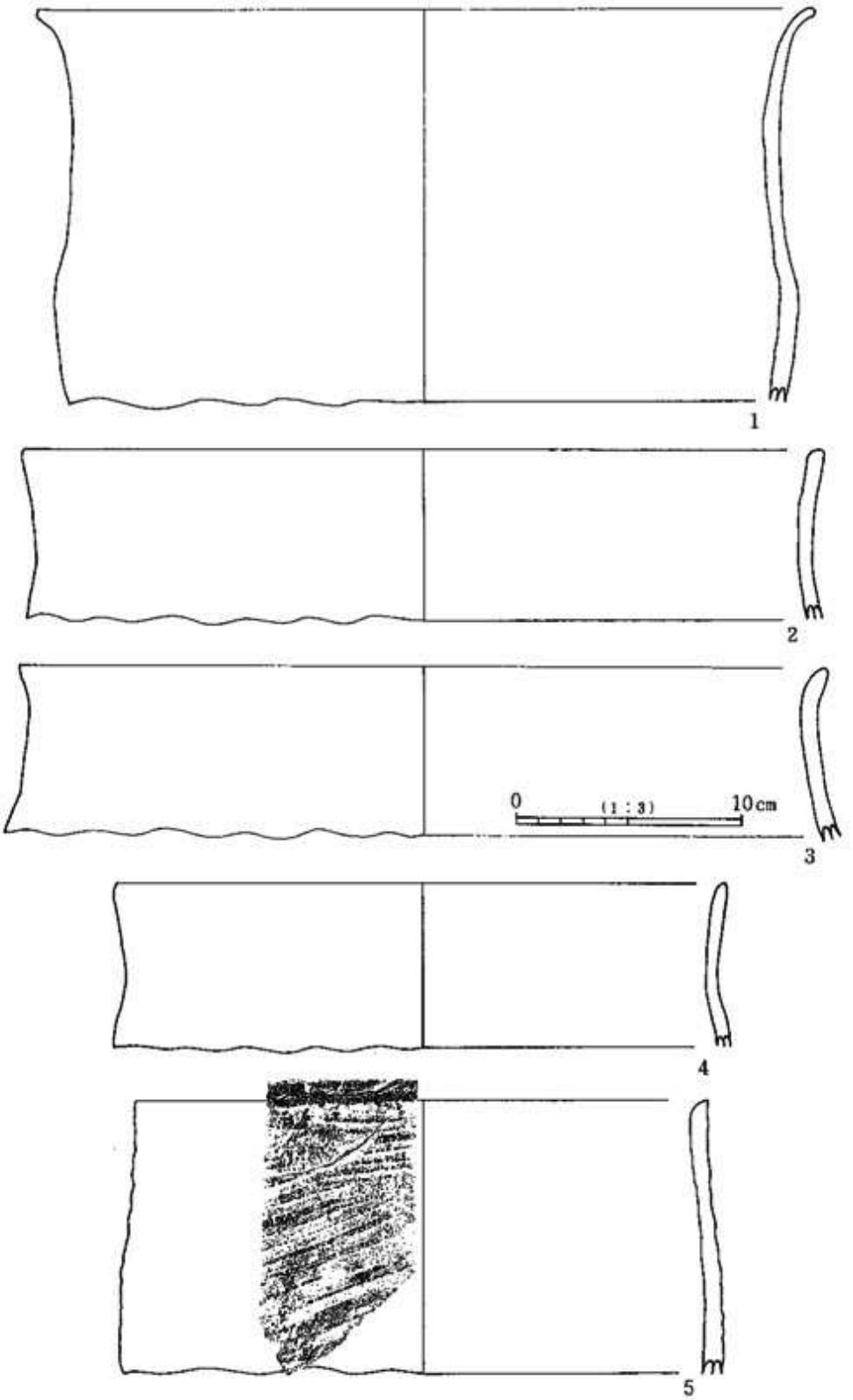
第99図　大宿遺跡土器棺墓1の1・1の3出土土器



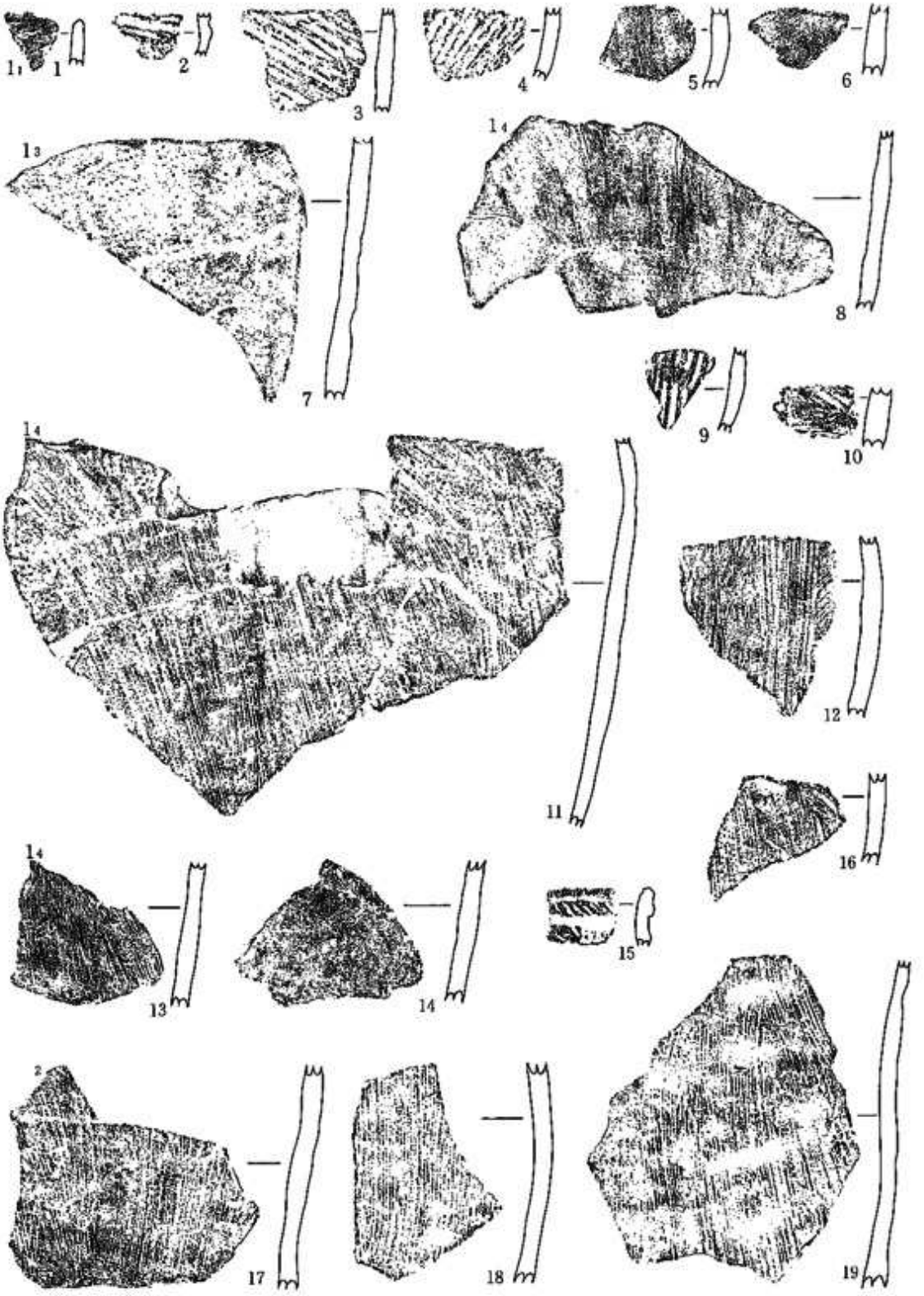
第100図　大宿遺跡土器棺墓1の3・12出土土器



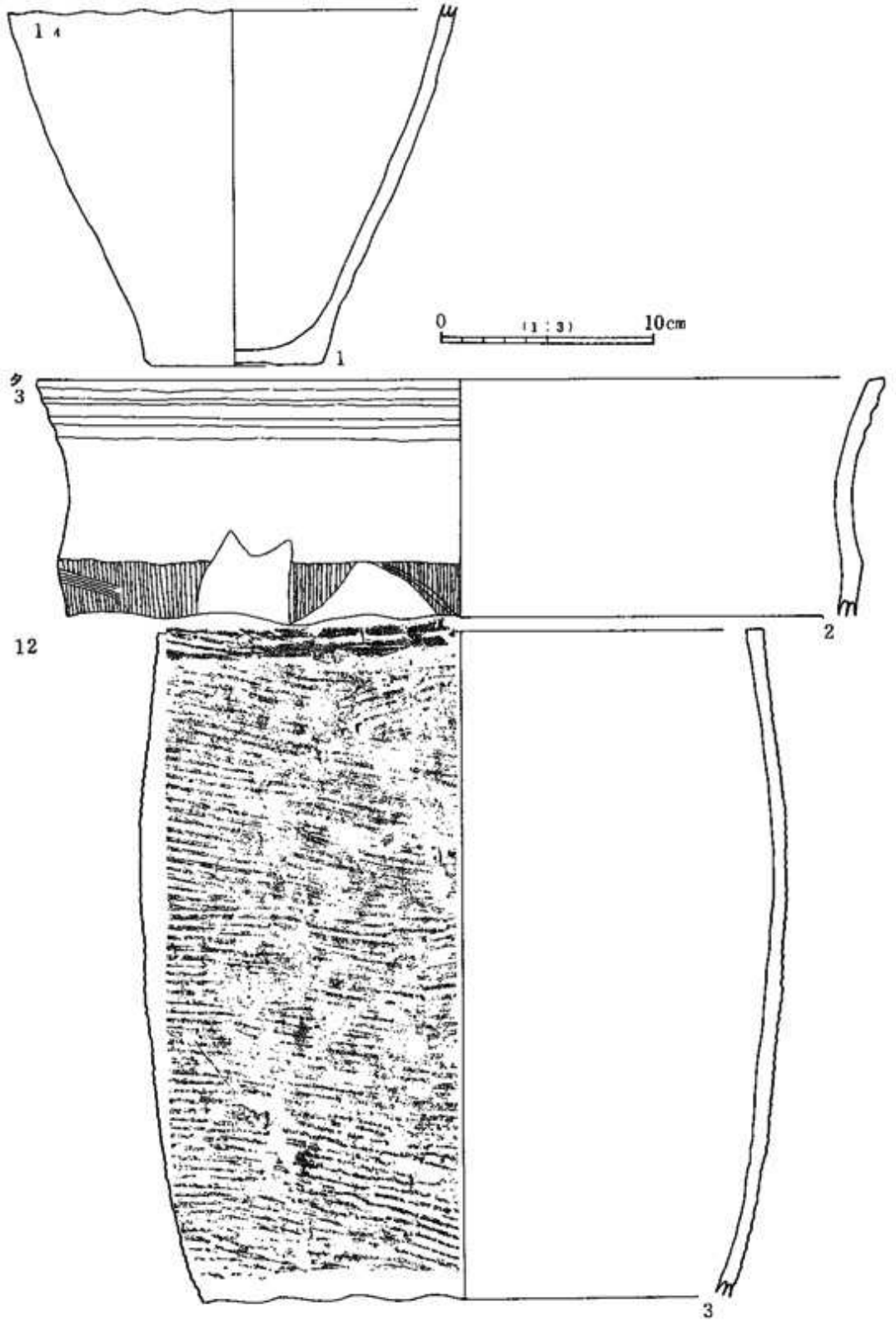
第101図　大宿遺跡土器棺墓1の1・1の2出土土器



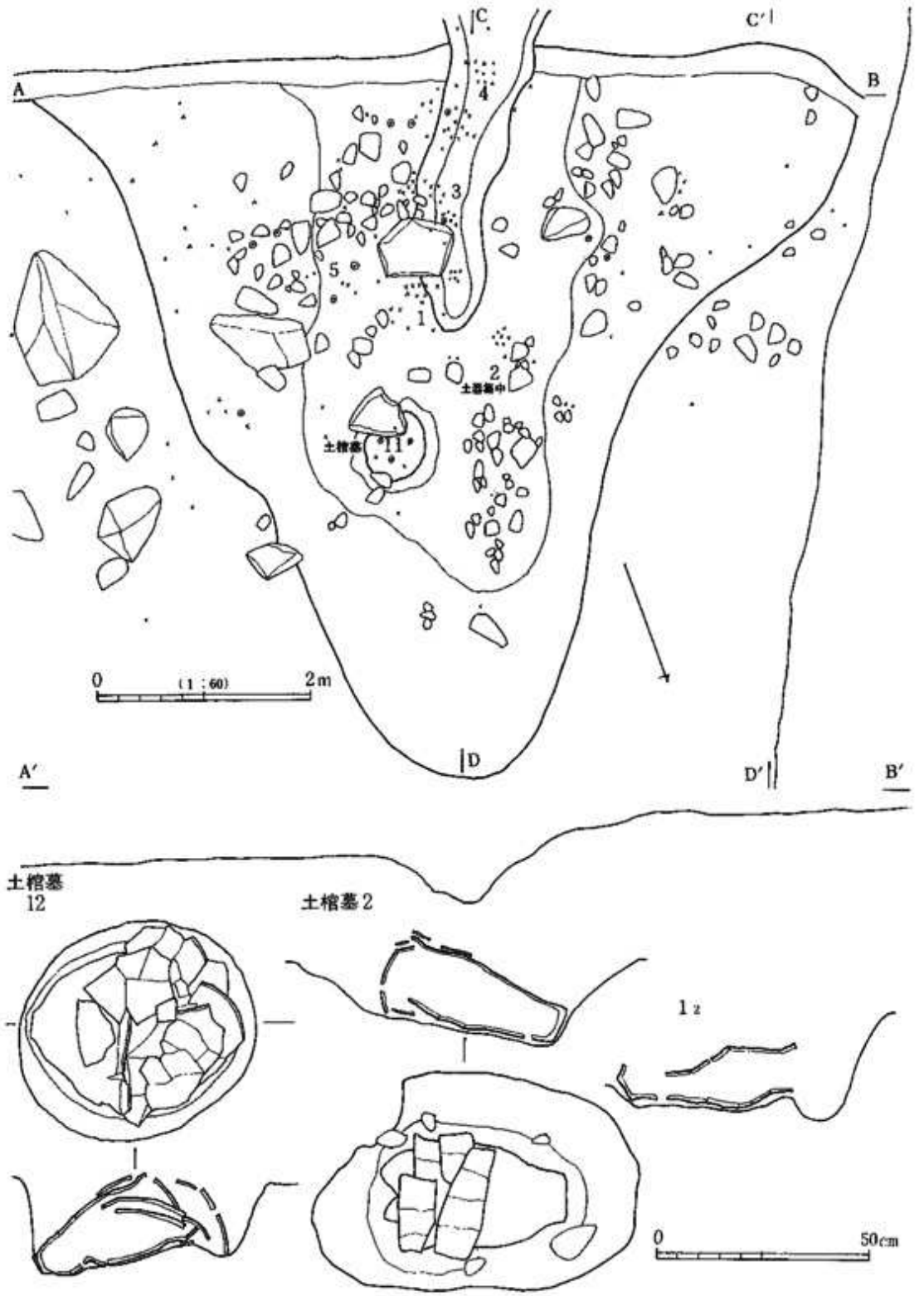
第102図　大宿遺跡土器棺墓1の4出土土器



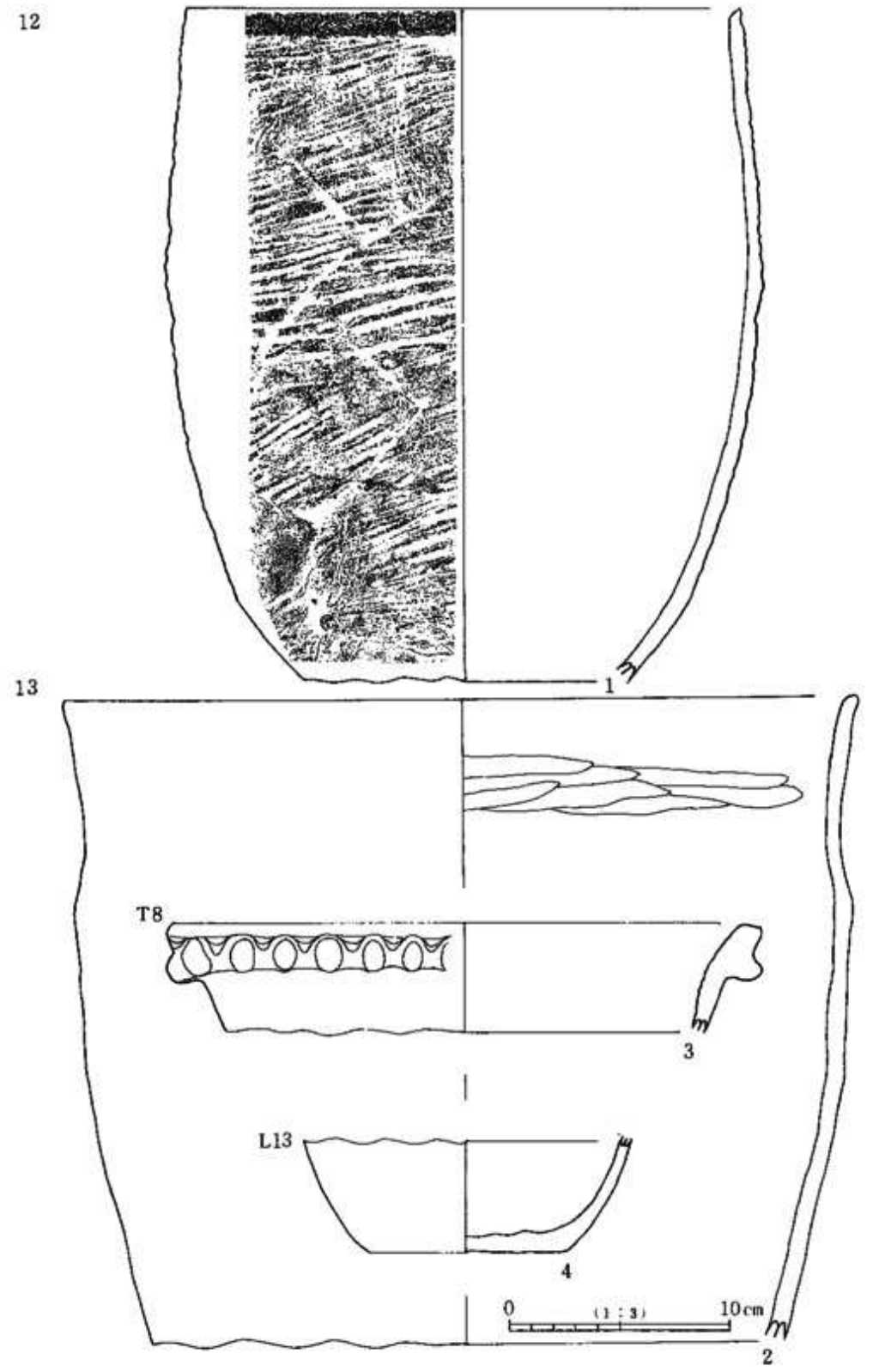
第103図　大宿遺跡土器棺墓1の1～1の4出土土器



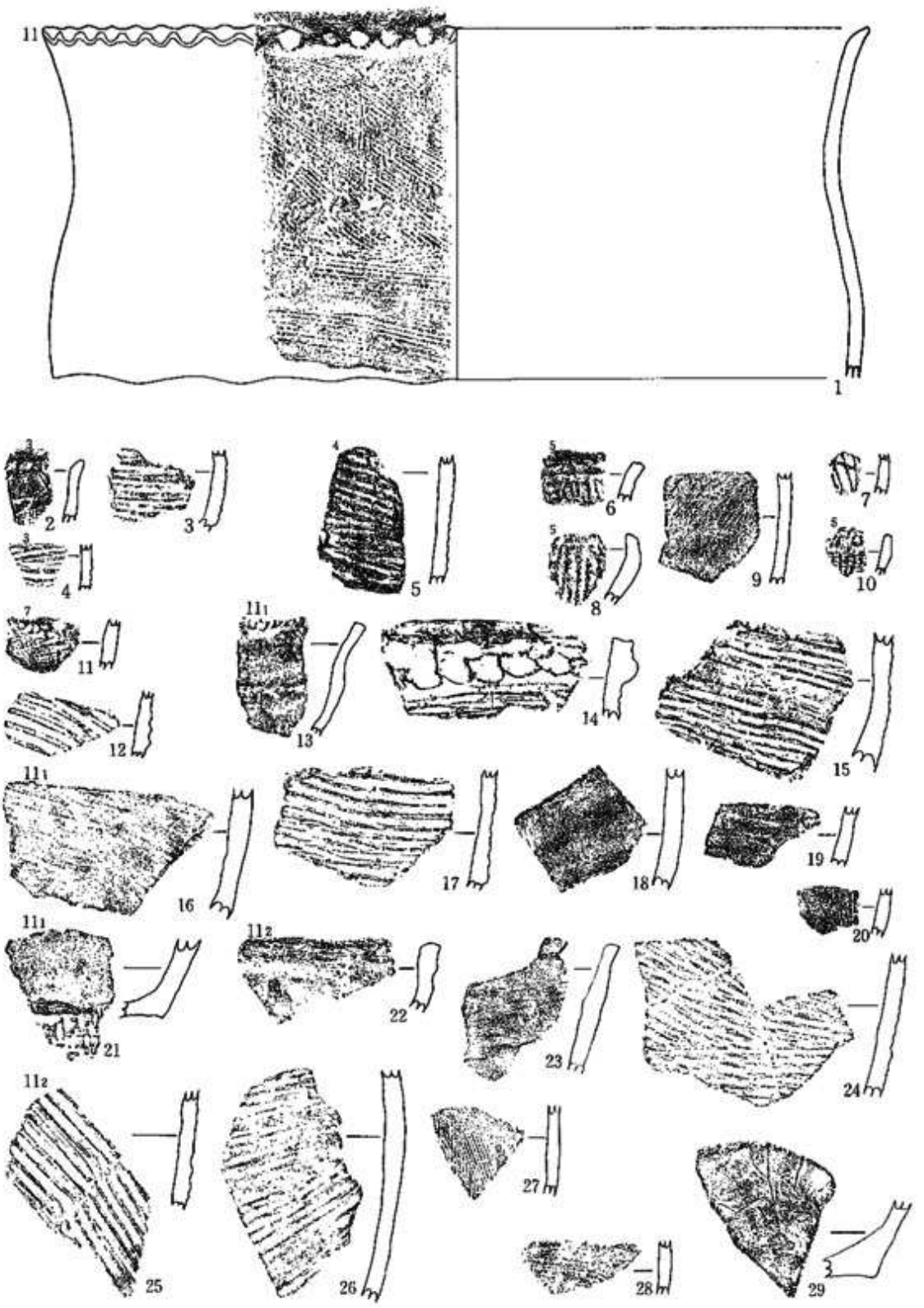
第104図　大宿遺跡土器棺墓1の4・12、竪穴3出土土器



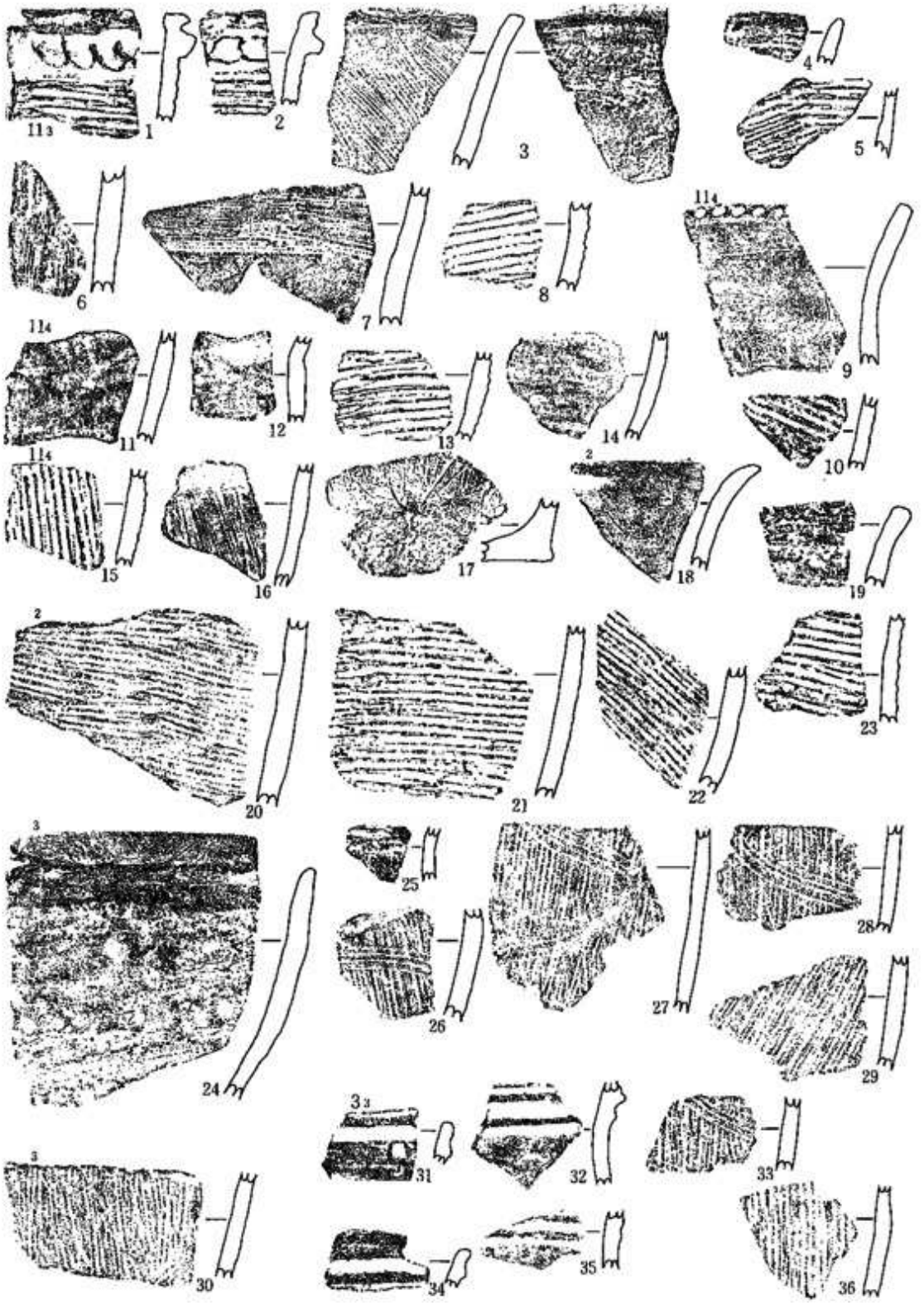
第105図　大宿遺跡土器棺墓11とその周辺、土器棺墓12・2・2の1の土器出土状況



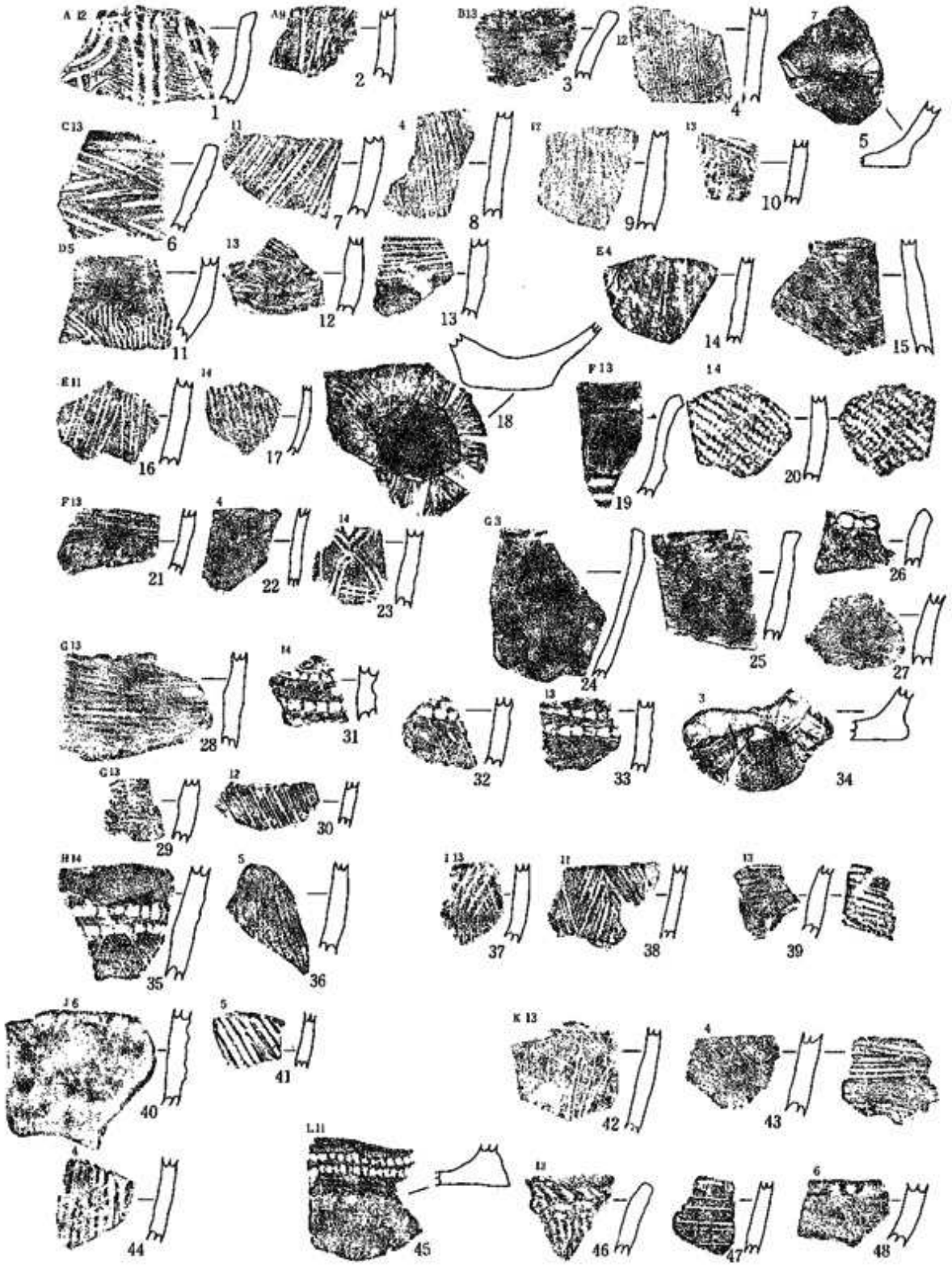
第106図　大宿遺跡土器棺墓12・13ほか出土土器



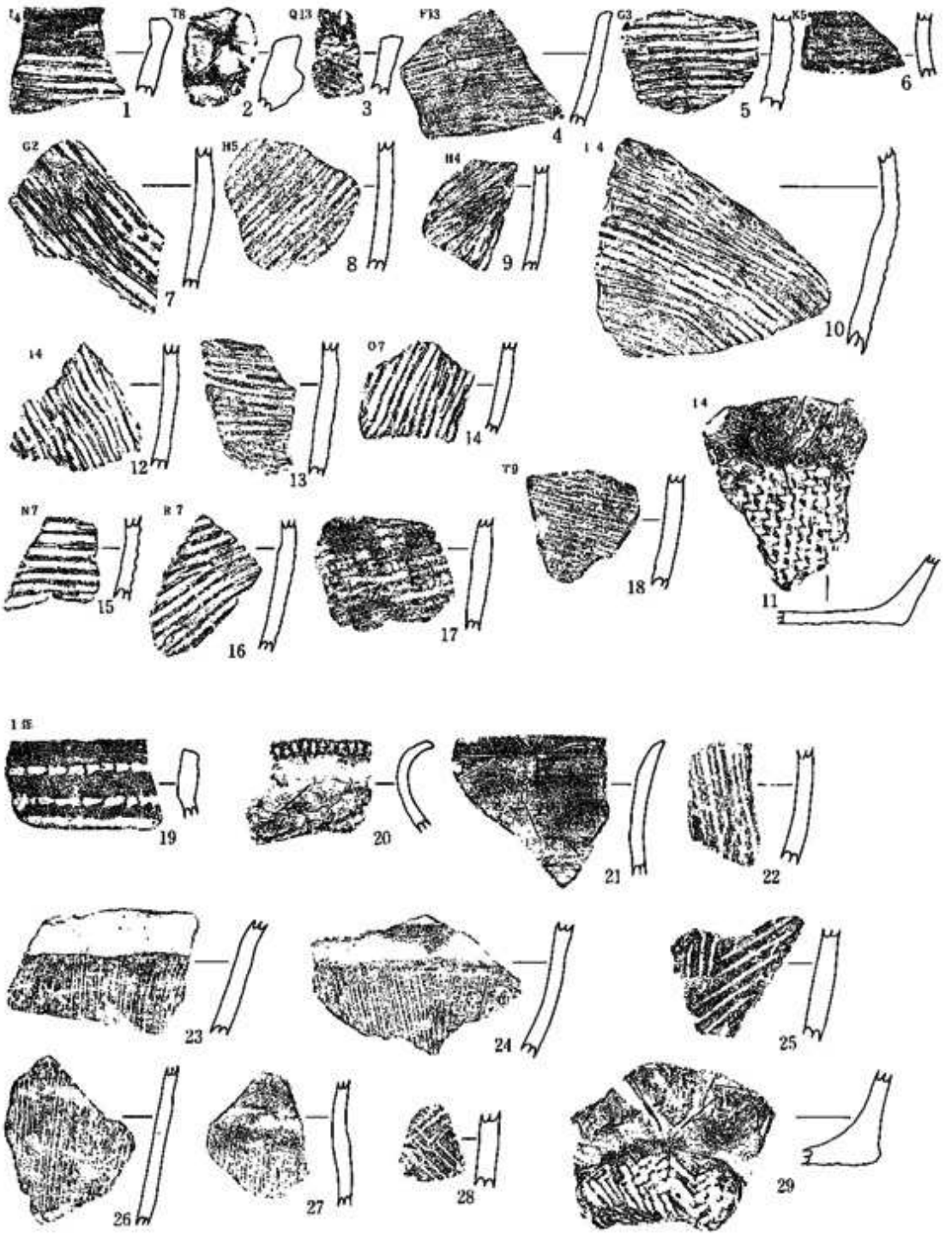
第107図　大宿遺跡土器棺墓11・3～7出土土器



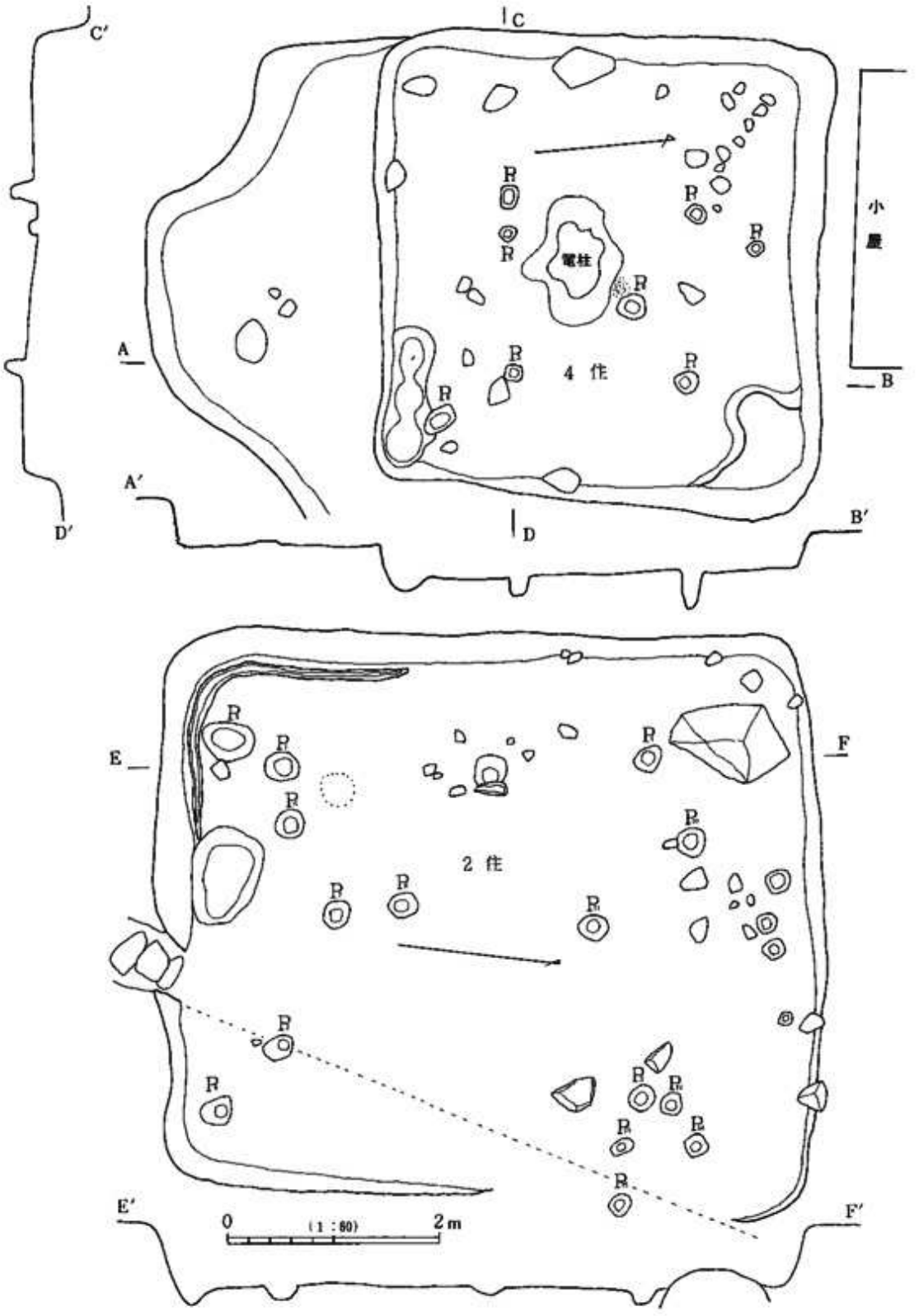
第108図　大宿遺跡土器棺墓11周辺出土土器



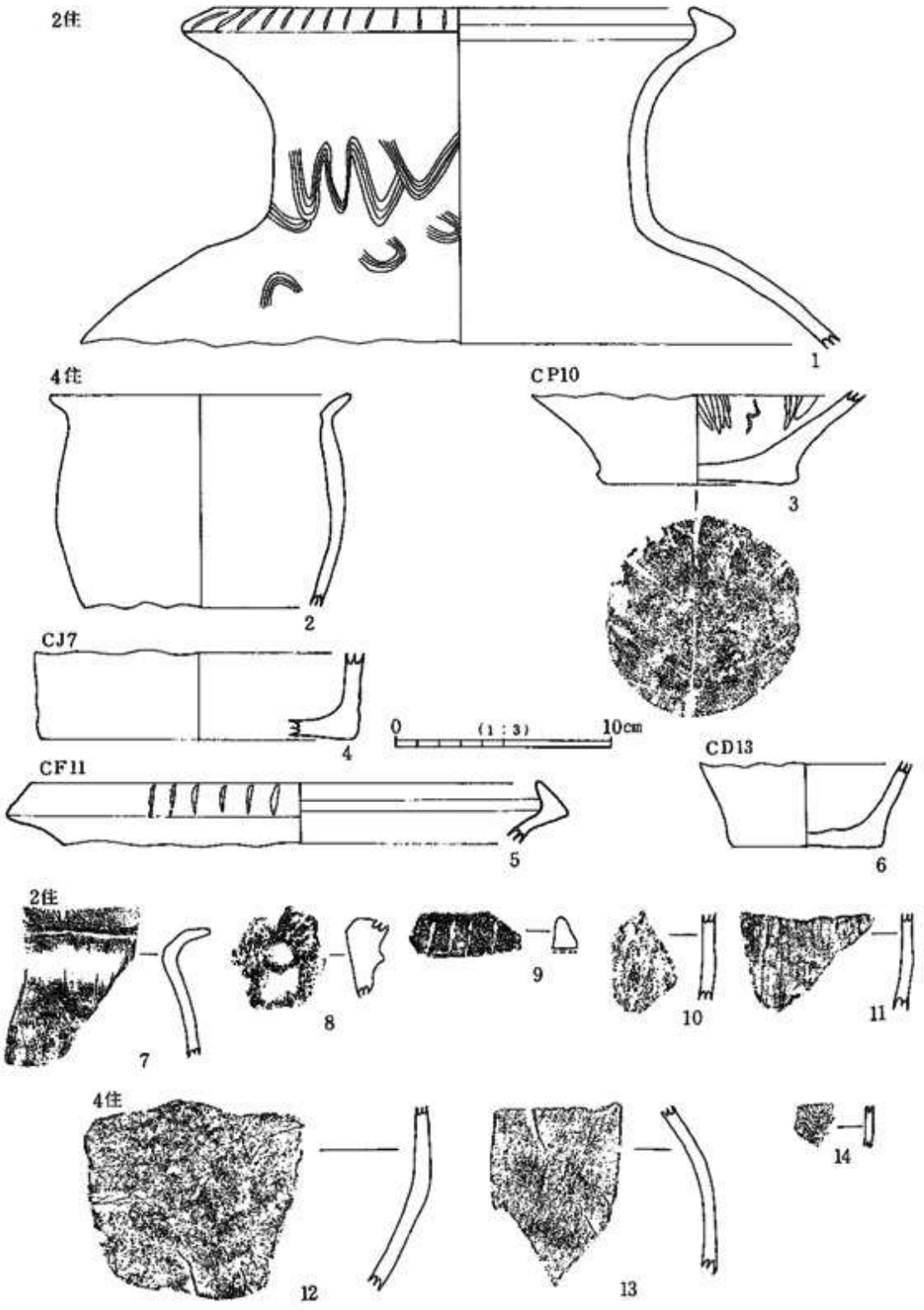
第109図　大宿遺跡C地区グリット出土土器 (1)



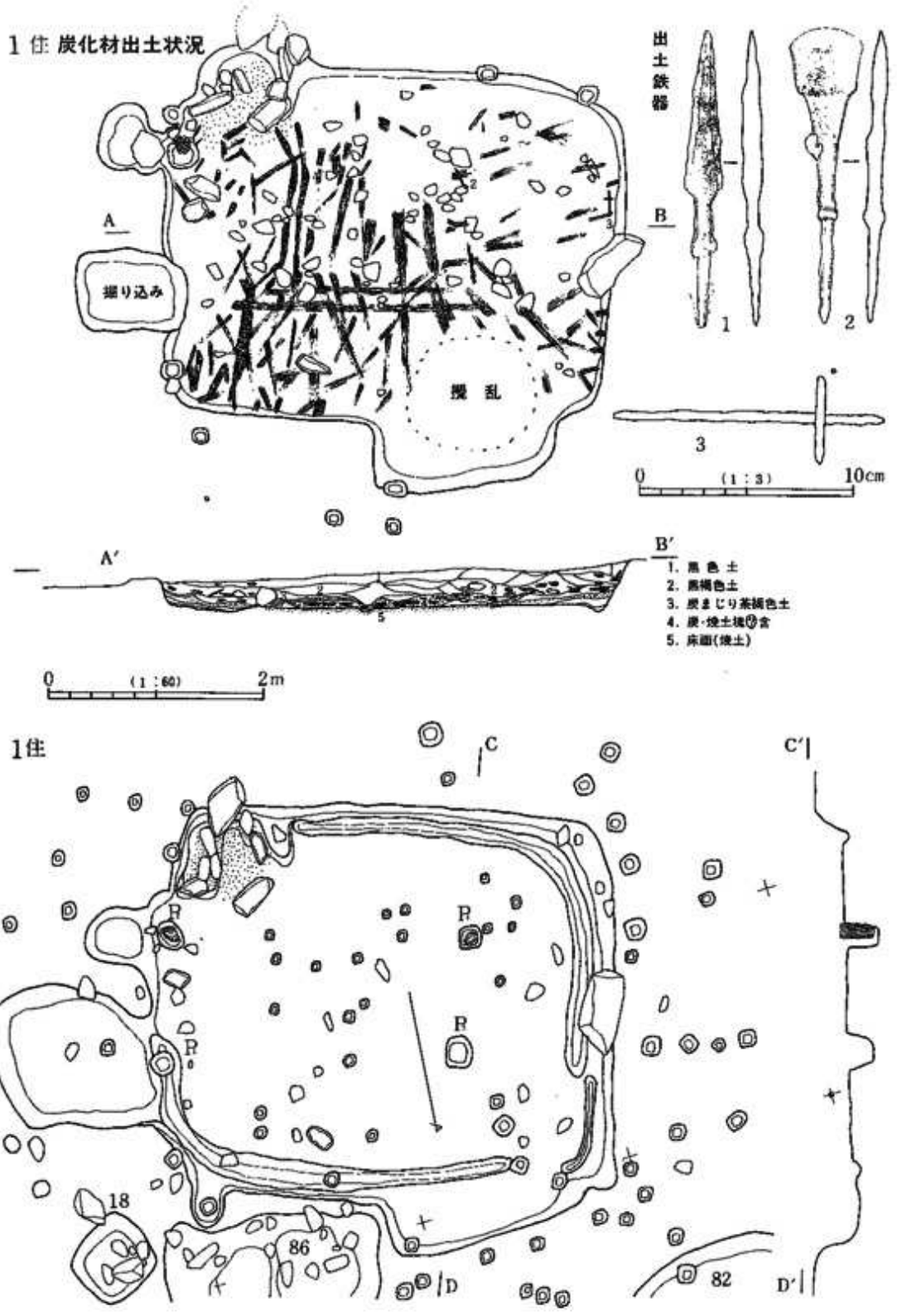
第110図　大宿遺跡C地区グリット出土土器 (2)



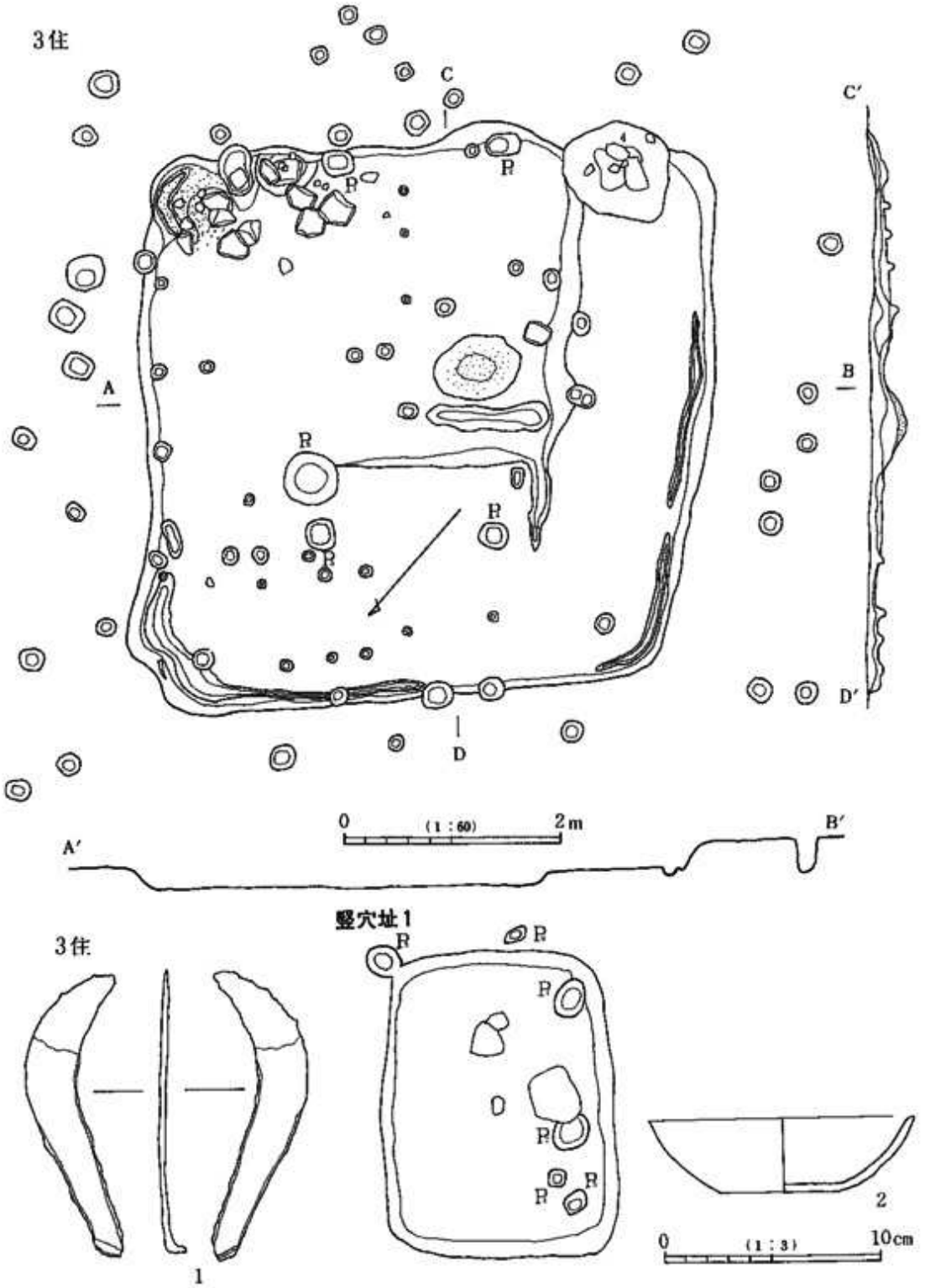
第111図　大宿遺跡2・4号住居址



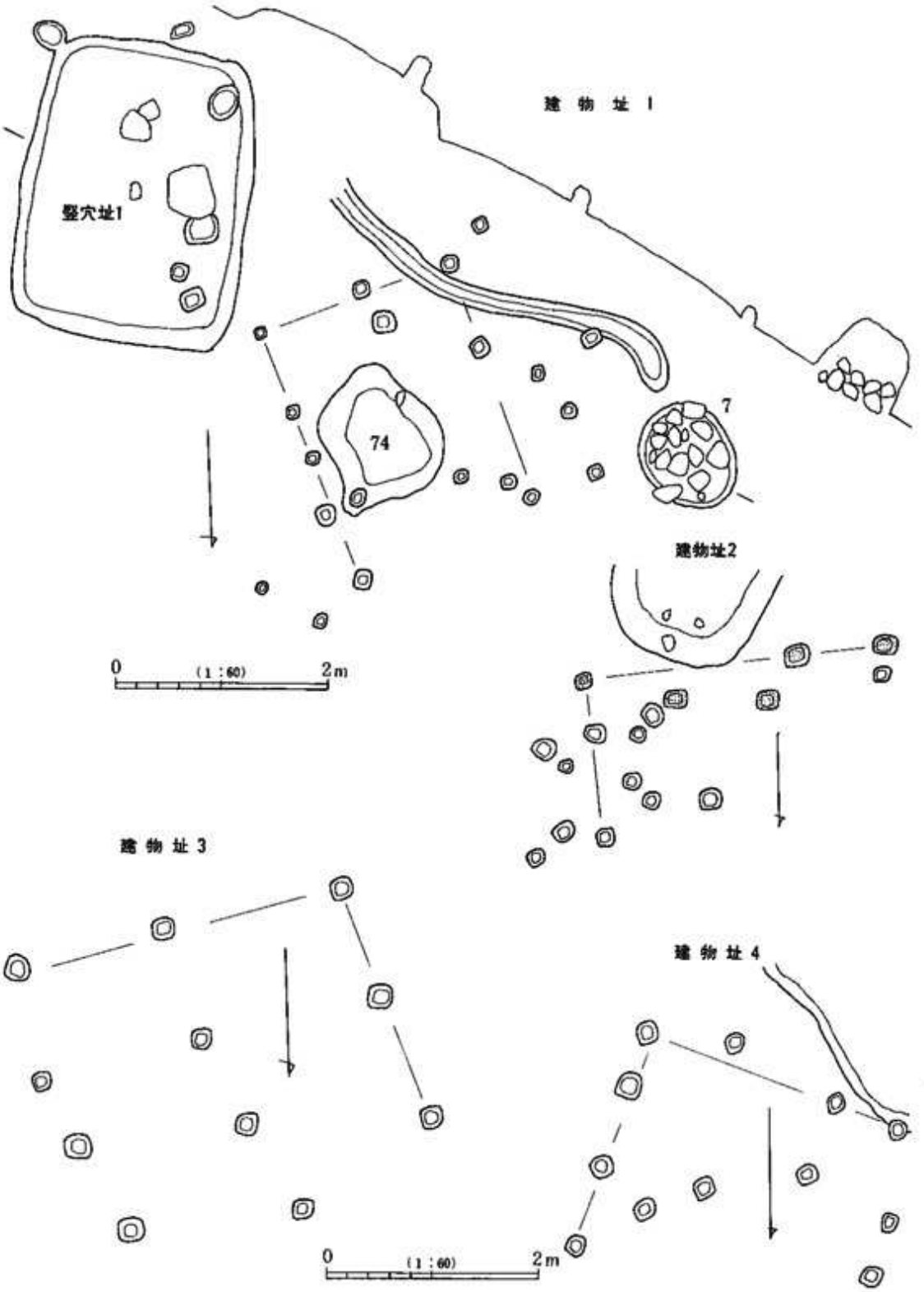
第112図　大宿遺跡2・4号住居址ほか出土土器



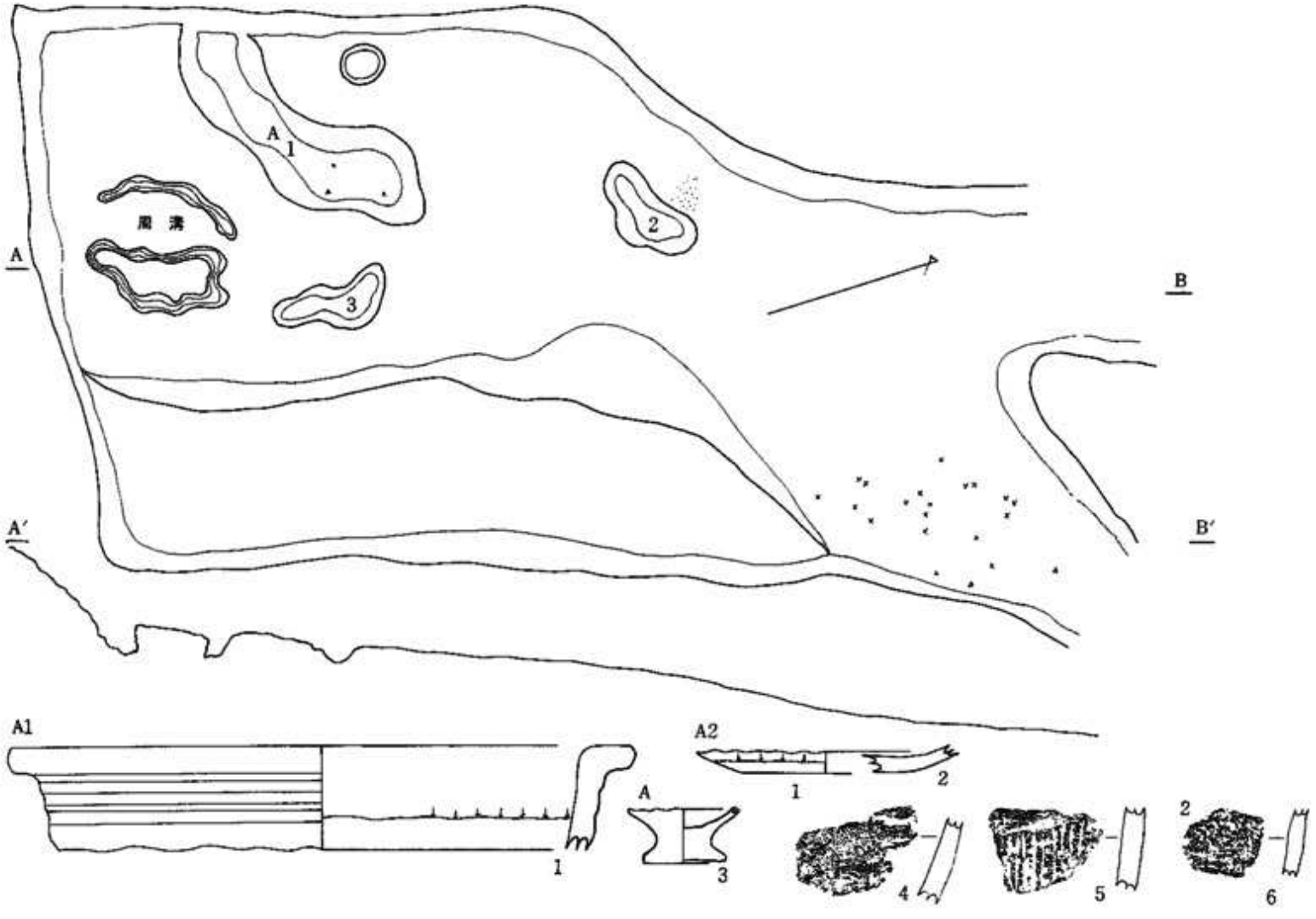
第113図　大宿遺跡1号住居址と出土鉄器



第114図　大宿遺跡3号住居址、竪穴址1と出土遺物



第115図　大宿遺跡竪穴址1、建物址1～4



第116図　大宿遺跡A地区の土壙と周溝

写図1　調査前の深山田遺跡

1．C，D地区（東から）

2．E地区のグリット掘り

写図2　深山田遺跡縄文時代早期の土壙

1．土壙 14・9

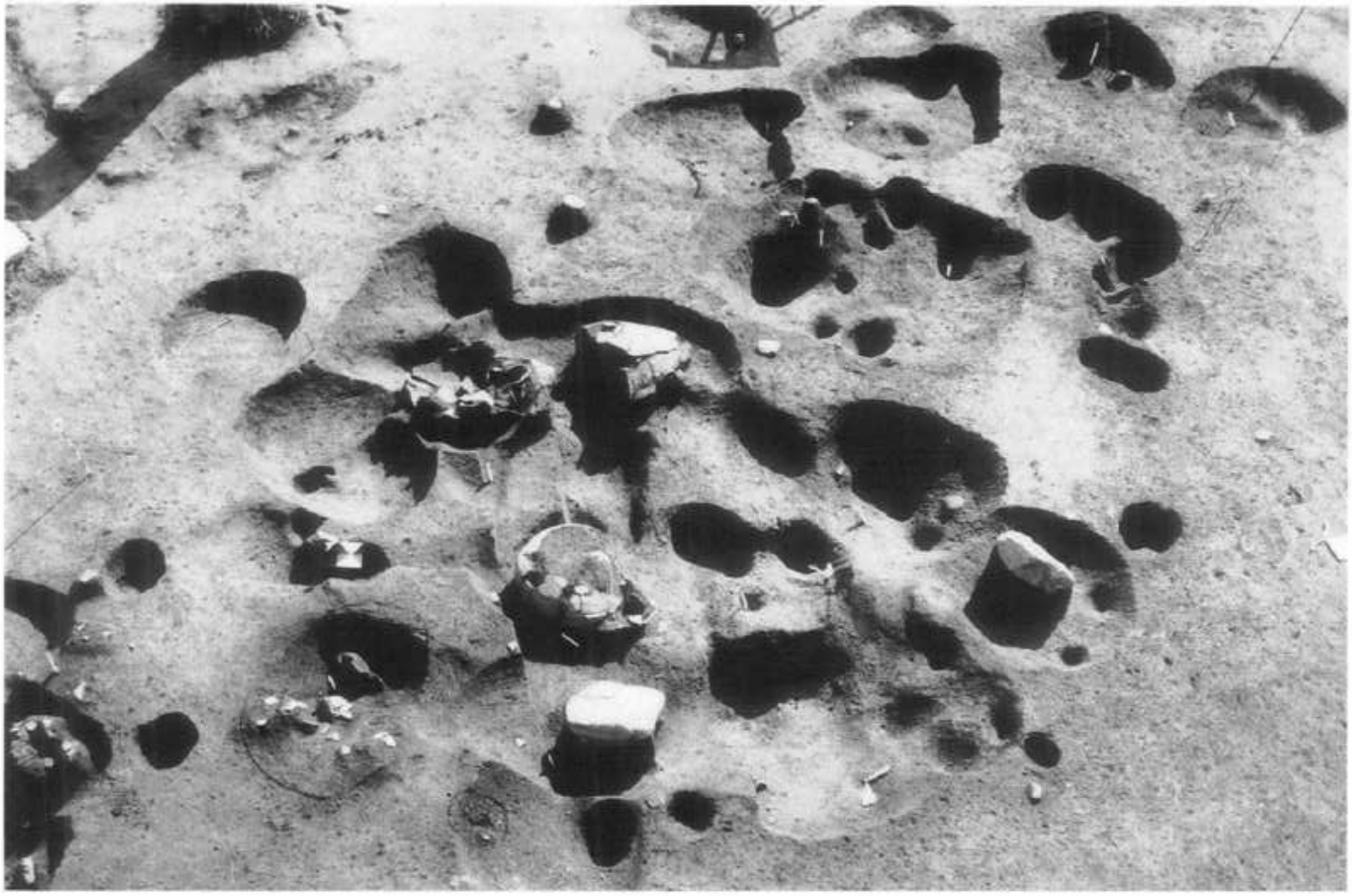
2．土壙 1の土層

写図3　深山田遺跡C・D地区の土壙

土壙 14. 13. 9. 7. 3

写図4　深山田遺跡C地区の土壙群

手前は土器棺墓群



写図５　深山田遺跡土器棺墓群(1)

土器棺　4　2
　　1　3

写図６　深山田遺跡土器墓群(2)

写図7　深山田遺跡土器棺1・3出土状況

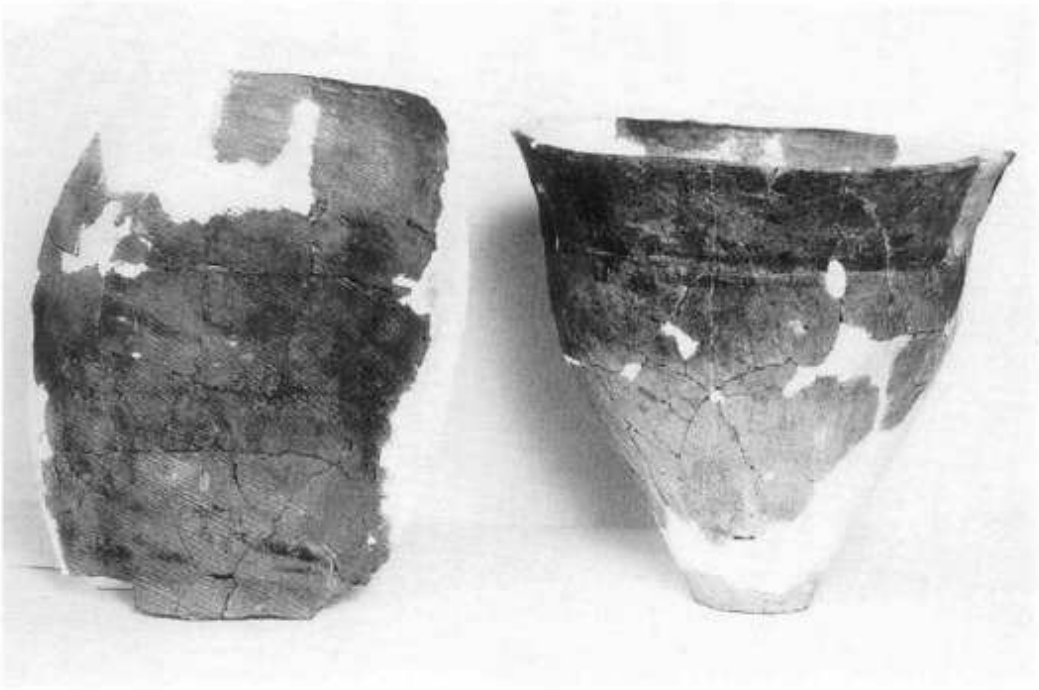
1．合わせの上の状況

2．下の甕形土器

3の1　　3の2

写図8　深山田遺跡合わせ口甕棺の土器

写図9　深山田遺跡合わせ甕棺の土器



1の2　　1の1

3の2

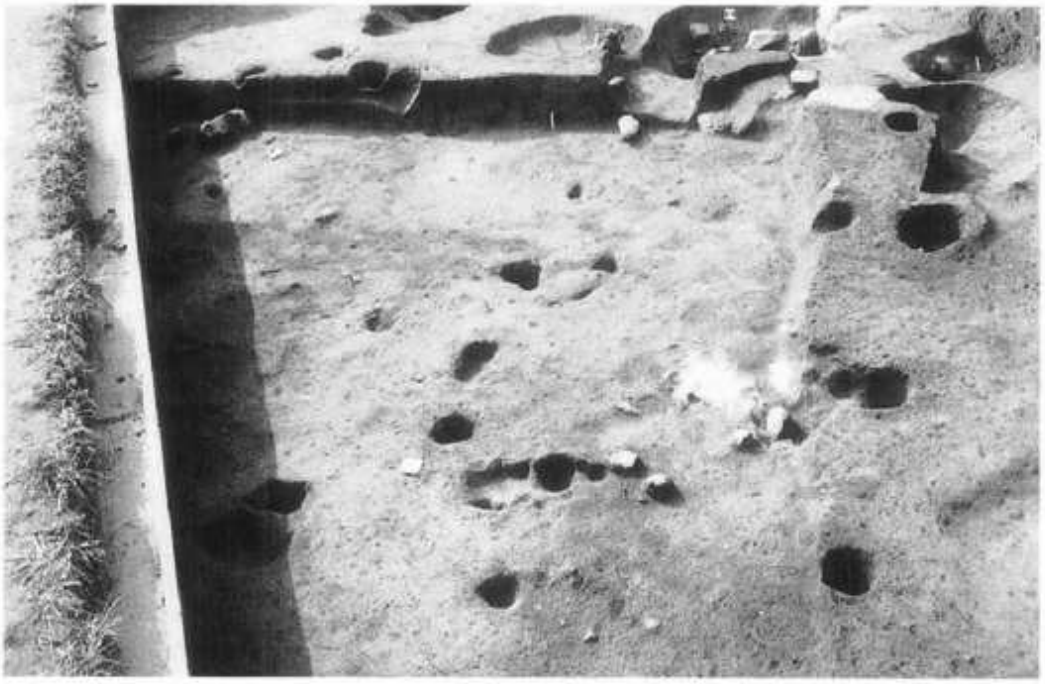
写図10　深山田遺跡E地区4号住居址・周溝状遺構

1．4号住居址

2．周溝状遺構

写図11　深山田遺跡3号住居址

1．炭化材出土状況



2．西側の床面

写図12　深山田遺跡３号住居址出土土器(1)

写図13　深山田遺跡3号住居址出土土器(2)

1. 広口壺

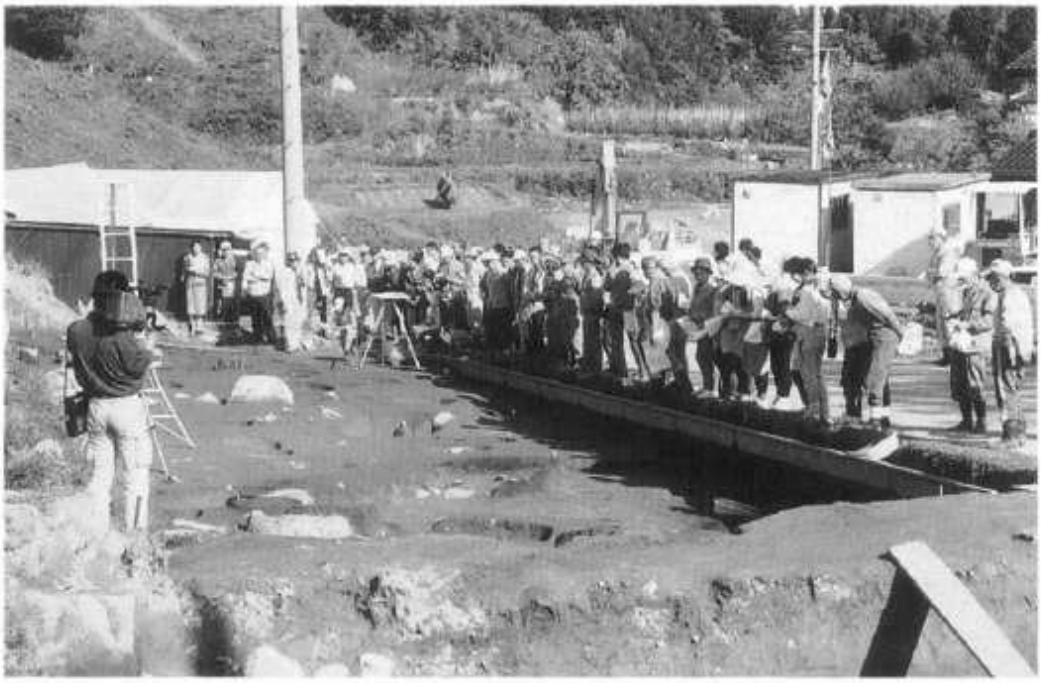
2. 小口壺

写図14　深山田遺跡建物址

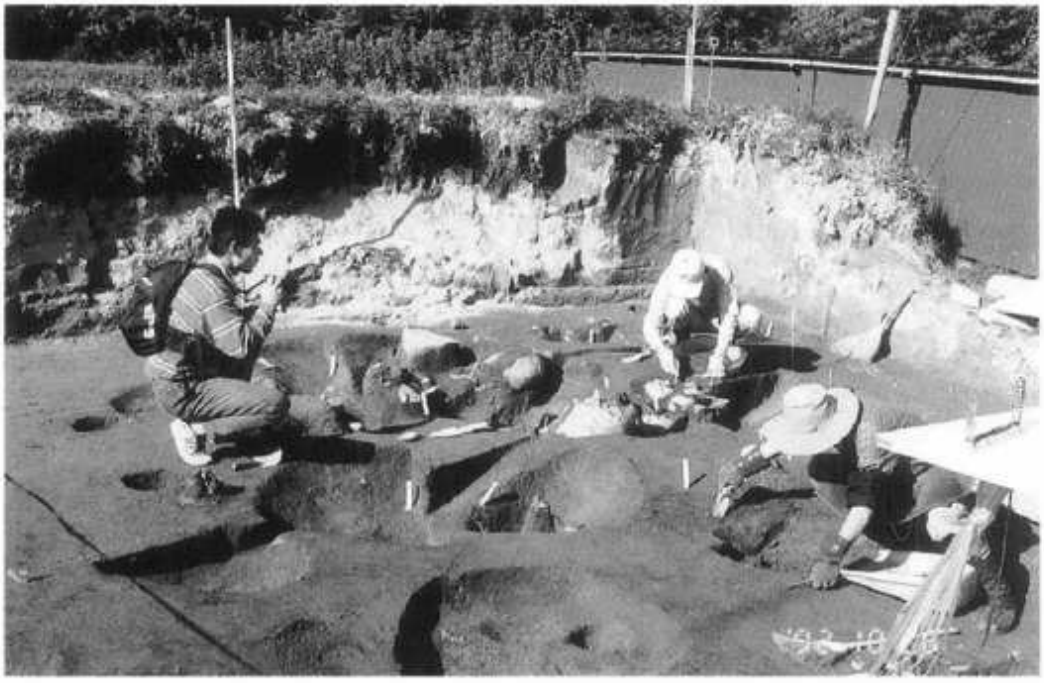
1．東から

1．北から

写図15　深山田遺跡調査風景



1．現地見学会



2．土器棺墓の調査

写図16　発掘調査前の広庭遺跡

1．B地区（北から）

2．C・D地区（南、西から）

写図17　広庭遺跡B地区全景

1．西から

2．北から